

一人旅より二人旅

一撃で瀕死になる人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃にイレイナと一緒に旅をしようと約束をしたカイは、イレイナ程魔法の才能があるわけではないので別の方法で強くなる。そして十五歳になった二人は、約束通り一緒に旅を始める。

二人ならば、楽しいことも二倍になるだろう。

二人ならば、辛いことがあっても支え合うことができるだろう。

そんな二人の物語。

目次

番外編

旅を始める前に：一	1
旅を始める前に：二	16
旅を始める前に：三	28
灰の魔女の誕生日	44

本編

始まり（前編）	56
始まり（後編）	67
魔法使いの国と小さな炎（前編）	86
魔法使いの国と小さな炎（後編）	99
花の国の兄妹	109
それぞれの資金調達と占い	116
幸せを収める器	127
民なき国の王女と正しいこと	141
王立セレステリアと灰と黒の二人組（前編）	153
王立セレステリアと灰と黒の二人組（後編）	163
喧嘩	175
魔法使いのための国と反乱軍（前編）	185
魔法使いのための国と反乱軍（後編）	197
とある男の日記	208
獣人の姉妹（前編）	224
獣人の姉妹（後編）	238
正直者の国と執事長（前編）	252
正直者の国と執事長（後編）	263

サボタージユ調査局とお悩み相談	278
グールが怖いわけじゃない	293
ネコ神さまと怪盗ネコキヤット (前編)	308
ネコ神さまと怪盗ネコキヤット (後編)	317
手紙	328
泣き鬼 (前編)	334
泣き鬼 (後編)	343
お酒を飲むペースには注意しよう	354
物々語：物だらけの国と幸せ物 (前編)	365
物々語：物だらけの国と幸せ物 (後編)	374
時計郷ロストルフにて (前編)	391
時計郷ロストルフにて (後編)	402
切り裂き魔と怪盗ネコキヤット (前編)	416
切り裂き魔と怪盗ネコキヤット (後編)	429
遙かな国の五十三番 (前編)	441
遙かな国の五十三番 (後編)	456
願いが叶う三日間 (一日目)	470
願いが叶う三日間 (二日目)	483
願いが叶う三日間 (三日目)	504
幼馴染のマネキンとひと時を	524

番外編

旅を始める前に：一

『両親と料理』

「ねえねえ、どうして父さんも母さんも料理しないの？」

俺がまだゴウザン師匠と出会う前のことだったか。

我が家の食事は既に出来上がった料理を買ってきて食べるというものだった。

他の子の家に遊びに行くと母親が料理の準備をしている光景を何度か見てきた。

だから俺は一度も料理しているところを見たことがない両親にそう尋ねていた。

「それはね、僕たちが料理できないからだよ」

「どうしてできないの？」

「どうしてって言われても困るわね……頑張って作っても美味しくできないのよ」

変な薬品を入れてるだとか、見た目の時点でヤバイものだと分かるといったものではなく、ただただ美味しくないらしい。

その後、一度だけ頼んで手料理を食べさせてほしいとわがままを言ったことがある。

「お待たせー。母さん特製よー」

出てきたのは見た目は何の変哲もない普通に美味しそうな料理。

俺は躊躇なく口に運んだ。

「……………」

食べられないわけじゃないが、美味しいわけでもなかった。匂いも良かった筈だ。口当たりも問題ない。なのに美味しくない。

「やっぱり美味しくなかったかしら……？」

「！」

悲しそうな顔をする母さんを見て、俺は首をブンブンと横に振っ

た。

「無理しなくても大丈夫よ。ごめんなさいね、あなたに私たちが作った美味しい料理を食べさせてあげられなくて……」

そう言う母さんに俺は何も言えなかった。

それから数年後。

俺はゴウザン師匠の弟子になり、平和国ロベツタにあるいろんな店でアルバイトをするようになった。

その店の中には飲食店もあり、その店主から料理の仕方を教えてもらった。

数日かかったが店主から合格を貰えた俺は早速両親に手料理を振舞った。

「はいどうぞ」

そう言って俺が出したのは野菜や肉が入っているシンプルなシチュー。

二人はゆつくりと食べ始めた。

「……どう？」

店主から認めてもらったとはいえ俺は不安になっていた。

二人はゆつくりと味わった後、ゆつくりとこつちを向いて同時に口を開いた。

「美味い！」

その言葉が聞けてすごく嬉しくなったのは今でも憶えている。

笑顔でシチューを食べ続けている二人を見続けた。

俺の作ったシチューを完食した二人は突然泣き始めた。

「うう……まさか息子の料理を食べれることがこんなに嬉しかったなんて……」

「ぐすつ、今まで食べたどの料理よりも美味しかったわ……。将来は高級レストランのコック長ね……」

「そんな大げさな……」

しばらくしてようやく泣き止んだ両親に俺は聞きたいことがあつ

た。

「二人は昔一緒に旅をしていたと言ってたと思うんだけどその間の食事はどうしてたの？」

「基本的には訪れた国の店で食べたりパンを買ったりしてたね」

「二度材料を買って自分で作れば安く済むんじゃないかと思って試したけど結果は分かるわよね？」

「う、うん……。ところで旅の中で一番美味しいと思ったものは何？」
今度二人の思い出の料理を作ってあげよう。なんて思いながらの質問だ。

しかしその質問に二人は微妙そうな顔をしていた。

「……………僕たちは一度だけお金がすっからかんになったことがあったね。何も買うことができなかつたんだよ」

もしやその時に親切な人が作ってくれたシチューだったとかだろ
うか？シチューなら今回作ったから二番目に美味しかったものを聞
かなければならないな…………。

感動的な話になるはずだよな？

「……………私の魔法でね、二人の味覚を操作して地面に生えていた雑
草を食べたわ」

おや？サラダの比喻表現かな？地面のような色の皿に乗っていた
のかな？

「その時涙を流しながら二人で食べた雑草が一番美味しかったかな
…………」

そのサラダのあまりの美味しさに泣いていたのかな？

これからは夕食だけでも俺が作るようにしようかな…………。

『フランさんと料理(?)』

イレイナと戦い、お互い目標に向かって頑張ろうと再び誓った日の後。

今までイレイナと関わらなすぎたことを反省した俺は、たまに出立でのパンやおやつを持って森の奥の家に訪れるようにしていた。今回はパンである。

「すみませーん」

「はい。あら、カイじゃないですか。丁度良いところに来ましたね」
何が丁度良いのか分からないけど俺はフランさんに案内された。

案内された先、食卓のテーブルを見た俺は絶句した。

椅子に座る顔が真っ青なイレイナ。その目の前、テーブルの上にはいくつかの皿。その上には、黒い、ナニカ。

「フランさん、これは、何ですか？」

「カ、カイですか……来てしまったんですね……」

「イレイナ、駄目じゃないですか。そんな言い方は。カイ、これはですね……」

私の作った料理です。なんて戯言を言ってきたフランさん。

「これが……料理……？」

「はい、イレイナに食べてもらおうと思った矢先にあなたが来たのですよ」

「これを食べさせる……？」

「ええ。ついでにあなたにも食べていただくこうかと」

そう言いながらイレイナが座っている隣の椅子の前のテーブルに黒い物体を置くフラン先生。実は呪いの儀式の準備をしているのかもしれない。

「これを拒否したらどうなりますか……？」

「イレイナが全部食べます」

「ちよつと先生!？」

もしかして夢? いや、現実だ。

俺が何か悪いことでもしたか? そうだったら謝るので許していた

だきたい。

この目の前の闇から逃げ出したい。

だが、俺が食べないとイレイナが二人分食べることになってしま
う。

ならば俺が取る選択肢は一つしかない。

「フランさん、料理（ではないナニカ）はこれで全部ですか？」

「はい。そうですよ」

「……食べます」

「カイ、無理しなくても……」

俺はイレイナにパンを渡してから椅子に座り、一度深呼吸をしてか
ら全ての料理（？）を口の中に流し込み始めた。

「ちよ、ちよつとカイ！何してるんですか!?!死にますよ!」

「酷くありません?」

俺の耳には今、何も聞こえない。集中してるからとかではなくその
ままの意味で何も聞こえないのだ。

目がチカチカするし、喉が熱いし、体全体が震えている。意識も朦
朧としてきた。

だが、止まるわけにはいかない。俺が食べきらなければ次はイレイ
ナの番だ。

こんな危険物、この灰色の髪をした少女に食べさせるなんて俺には
できない。

無形流は誰かを守るための流派、ここで俺が体を張らないでどうす
る。

俺は自分に掛けている過重力の魔法を解いて更に加速する。

イレイナが止めようとするが俺は止まらない。

地獄のような時間は続き、ようやく俺はテーブルの上のモノを全て
食べ切った。

「……ごちそう……さま……でした」

「まさか全部食べ切るとは。私も予想していませんでしたね」

「カイ……大丈夫ですか?」

「気絶してますね」

「カイ!？」

●
俺が目を覚ました時、窓の外には夕日が出ていた。
ベッドから立ち上がった俺は周囲を見回す。

「俺は何を……?」

「カイ、起きたんですね。心配しましたよ……」

「イレイナ?……あれ、なんで俺はここにいるんだ?」

「もしかして記憶が……」

パンを作ったことは憶えているがそれ以降の記憶が無い。

「……?俺は記憶を消す魔法を掛けられた……?イレイナ、もし何か知ってたら教えてほしいんだけど」

「……あなたはフラン先生の魔法で気絶してたんですよ。だから記憶がないのでしょうか」

「なるほど。そのフランさんはどこに?」

「それは」

イレイナが言い終わる前にフランさんが帰ってきた。

「イレイナ、ただいま戻りました。おや、目が覚めたんですね。あなたの師匠に今日の修行は中止になったことを伝えておきましたよ」

「ありがとうございます……?とところでフラン先生、俺に記憶を失う魔法を」

「先生、カイは記憶が混濁しているようですので私がロベツタまで送りますね」

何か慌てた様子 of イレイナが俺の背中を押してくる。

「ちよつ、押さなくても自分で歩けるから」

「いいから早く行ってください」

「あらあら」

イレイナに押されるまま家を出てロベツタまでの道を歩き始めた。
「なんだか釈然としないな……」

なんでフランさんから魔法を貰うことになった理由がよく分からず、俺は声を漏らしていた。

「今日はありがとうございます。助かりました」

「何が？」

「……パンを届けに来てくれたことです」

「確かにパンを作った記憶があるな」

となるとパンを届けに来た俺が何かしたのだろうか。

怪しい人物が来たと勘違いしたフランさんが魔法を掛けたってわけか。

「俺そんなに怪しい感じだった？」

「何がですか？」

「いや、何でもない」

聞いた後に聞く必要なかったなと思った。怪しかったからこんな結果になっているのだろう。

それに気付かない振りをしてくれたイレイナに感謝だな。

それからは他愛ない話をしながら歩いた。

「ここまでですね」

「ありがとうな。楽しかったよ」

「どういたしまして。こちらこそ楽しかったですよ」

イレイナに手を振ってから俺は家に帰った。

○

カイが手を振ってくれたので私も振り返っておきました。

カイの姿が見えなくなったのを確認してからほうきを取り出して今来た道に戻ります。

森の奥にある家まで暇だったので今日のことを思い出しました。

フラン先生の暗黒物質を食べなければならぬところにカイがやってきて私の分まで食べてくれました。

その代償として彼は気絶してしまい、私は付きつきりで彼の看病をしました。

目が覚めた時は安心しました。直近の記憶を失っていたようすが。

フラン先生には反省してもらわなければなりませんね。

後遺症があつて途中で倒れたりしないように彼をロベツタまで送り届けることにしました。

「俺そんなに怪しかった？」と途中で彼は聞いてきましたが、どこから怪しかったかどうかの話が出てくるか分かりません。

私が思つたことは一つ。

「かつこよかつたですよ」

身を挺して私を守ってくれて嬉しかったです。しかし、このことを直接彼に言うことはないでしょう。

私はほうきの速度を上げました。



次の日、山の頂上の家にて。

いつもはすぐに修業を始める俺と師匠だが、今日は師匠からスープを出された。

「濃の手作りじゃ。食うが良い」

「珍しいですね。いただきます」

少しの野菜が入ったスープはすぐに飲み切ることができた。

「ふふふ、飲みおつたな馬鹿弟子が！それには毒が入っていてな、別に死ぬわけではないが吐き気や眩暈、痛みに苦しめられるものじゃ」

「何飲ませてくれてるんですか」

「お主の体調が悪かつたとしても敵は待つてくれぬ！どんな時でも戦えるようにするのが今回の修行内容じゃ！さあ隣へ行くぞ」

「はいはい」

そう言つて俺は立ち上がる。

「……待て。お主、何故普通に立ち上がれる？この毒はそんな生易しいものではないはずじゃが」

「そう言われましても……」

結局この日はいつもの修行と変わりなかった。

師匠は間違いなく毒を入れたと言っていたが何故効かなかったのかは分からなかった。

師匠に「以前に超強力な毒を口にしたりはしなかったか？」と聞かれたが、そんな記憶はないので「ないですよ」と答えた。

二人して首を傾げていた。

『師匠と本』

いきなりだが、俺の師匠は変人である。

一人で山に住んでいるというのもあるが、孫がいてもおかしくない年齢なのにエロ本を読んだりロベツタで若い女性をナンパしているのだ。ナンパが成功しているところは見たことないが。

俺が師匠に初めて会ったときに渡した包み。感触からして本が入っているのは分かっていたが、なんとそれはエロ本だったのだ。

それが判明したのは師匠に弟子入りしてから数年後。まだ師匠がエロ本を読むことを知らなかった十歳くらいの話だ。

修行を付けてもらおうとしたら、山の頂上にある家の中で師匠はお茶を飲んでいた。

師匠がお茶を飲み終わるまで暇だから質問することにしたのだ。

「師匠。ずっと気になっていたんですけど、俺が最初に渡した包みの中には何が入っていたんですか？」

「む。そうか、あれが気になっておったか。お主も興味を持つ年頃じゃ。特別に見せてやろう」

そう言っただけで渡してきたのは表紙に二人の男女が描かれた薄い本。

読み進めていくと、黒髪の男性が同じく黒髪の女性に救われ、最終的に二人は夫婦となるというものだった。どうやって仲良くなったかは簡単にしか書かれておらず、半分くらいのページは二人が裸で愛し合っているというものだ。これ以上の詳細は省く。

「なっ、何ですかこれは！」

「良いじやろー。これは儂の宝物じゃからな。上げんぞ」

「いりません！」

顔を赤くした俺はその本を待つ二つに引き裂いた。

「なんてことをするこの馬鹿弟子がー！！」

「知りません！」

「隣へ行くぞーその性根を叩き直してくれるわー！」

その日はいつもの四割増しでボコボコにされた。

本は師匠の時間逆転の魔法で直されていた。

師匠の家の中にはテーブルやベッドなど、最低限の家具しかない。

そんな家に、一つだけ異色を放っている物が本棚だった。

武術の指南書が半数を占めていたが、それ以外はエロ本だった。

無形流は指南書に書かれているような構えや型というものはないが、参考になる部分もあるのでできる限り読むようにしていた。

指南書を本棚から取り出す際に、一緒に置いてあるエロ本に目が行ってしまうのは男故仕方ないだろう。

ほんの少し、そちらに手を伸ばし、取ってみてしまうのも仕方ないだろう。

いくつか読んでみたところであることに気付く。

「全部作者が同じ？」

本棚に入っている全てのエロ本を取り出して確認してみたところ、師匠が持っていたエロ本は全部同じ人が書いたものだった。きつと師匠はこの作者の熱狂的なファンなのだろう。

「……あれ？まだ奥に何かが……」

本棚の奥にまだ何かが入っていた。

取り出してみると、何かが入った箱。開けると書かれてからもう何十年も経っているであろう本が出てきた。

何度も読まれたからだろうか。表紙も中身もまともに読むことができなくなっていた。

辛うじて読める部分も、文字の一部分だけとかのレベルである。

「カイよ、何をして——それから手を離さんか！」
「わっ」

師匠は俺の手からボロボロの本を取り上げた。

「いきなり何をするんですか」

「これは俺の本当に大切な宝物じゃ。そこに入れていた俺にも責任があるがこればかりはお主が触れることを許さん」

この本は若い頃の師匠が目標にすべきことが書かれていた本で、長年持ち歩いてきたせいで読めなくなってしまう、箱に入れて保管していたということだ。

自分の過去を語ろうとしない師匠の昔の姿に興味があったが、この本の存在だけで他は何も教えてくれなかった。

「では修行を開始する。今日こそ俺に一撃でも入れることができるかのう?」

「行きます」

俺が強くなったら、師匠は過去を語ってくれるだろうか。

そんなことを考えながら、俺は今日も師匠と戦うのだった。

『イカサマと頼み事』

今日も今日とてイレイナとフラン先生に出来立てのパンを届けに行く俺。

記憶はないけど俺は怪しいことをしたっぽいからそのお詫びのパンである。

「すみませーん」

「はい。あら、カイじゃないですか。丁度良いところに来ましたね」

聞いたことがあるような会話だったが、気にしないことにした。

俺はフランさんに案内されるがままにテーブルに座った。隣にはイレイナがいた。

「今日は何しに来たんですか?」

「昨日のお詫びとしてパンを持ってきたんだ」

「お詫び……？寧ろこちらがすべきものでは……」

何か不思議そうにするイレイナにパンが入ったバスケットを渡しておいた。

バスケットの中を見たイレイナは、パンを一つ手に取って食べ始めた。

「イレイナ、私の分も残しておいてくださいね」

そう言いながらフランさんは俺の前の席に座った。

「カイ、今から私と賭けをしてみませんか？」

「賭け……」

「今からカイにはこのトランプの中から一枚引てもらいます。そこに書かれている数字を覚えたら、山の中に戻してください。私が見たカードを当てて差し上げましょう」

「なるほど、俺が負けたら何をすれば？」

「皿洗いをしていただきます」

「皿洗い……？」

キツチンの方を見ると、大量の食器が積み重なっていた。

「俺が勝ったら何かくれるんですかね？」

「賞賛ですかね」

「……」

どうやら星屑の魔女様の賞賛は皿洗いと同じ価値のようだ。どれくらいすごいかはよく分からない。

隣のイレイナがフランさんに向ける視線は冷ややかなものだ。

「まあ別に良いですけど」

「決まりですね。ふふふ……イレイナには負けましたが、今度こそ勝って皿洗いを変わってもらいます……」

「あ、イカサマとかはありますか？」

「え……気付かれなければイカサマではないですね」

私、イカサマしますと宣言してきたな……。

フランさんはトランプをシャッフルし、それを広げようとしたところで、「トランプはまとめたまま、そこに置いてください」と言っておいた。

フランさんがトランプをテーブルの上に置いたので、俺は右手で一番上のカードを引いた。ジョーカーだ。

フランさんに見られないようにテーブルの下で確認した俺は、カードを左手で一番下に戻した。

「それでは、今からカイが引いたカードを一番上に持つてきてみせましょう。……えいやー」

「……………」

トランプに手をかざして謎の掛け声を出したフランさんに対しどう反応すれば良いか分からなかった。この人本当に俺より年上なのだろうか。

一番上のカードを一枚取つてめくる。ジョーカーだった。

「カイが引いたのはこのジョーカーですね？」

勝ちを確信した顔をするフランさん。

「俺が見たのはそのカードではないですね」

「……………はい？何故イレイナと同じようなことを言うのですか？」

「俺が引いて、見たジョーカーはそれではないですよ。全部見せてもらいますよ」

俺は素早くトランプをひっくり返した。

全てのトランプがジョーカーだった。

「あ……………」

「これってイカサマじゃないですか？あなたの負けですよ」

「……………イレイナにもバレましたが、どうして分かったのですか」

「イレイナがどうして分かったのかは知りませんが、俺は単純に見たカードを戻してないだけですよ」

「でも確かにカードを戻してましたよね」

俺はテーブルの下に隠していた右手を見せた。そこにはカードが一枚握られていた。

「俺が一番上にあった二枚を引いて、上から二番目にあったカードを見て、一番上にあったカードを戻しました。だから俺が見たカードはこの右手のジョーカーだけです」

「それはイカサマではないでしょうか。私は一枚引いてと言いました

し」

「フランさん。バレなければイカサマではないのでしょうか？」

「……………うう、あの量のお皿を一人で洗わなければならないのですか……………」

崩れ落ちるフランさん。

「……………別に俺が勝ったからって皿洗いをやらないとは言ってませんよ」

「……………え？」

「え？」

今までずっとパンを食べていたイレイナにまで驚かれた。

「本当に……………本当に皿洗いを変わってくれますか」

「いえ、手伝うだけです。フランさんも一緒にやってくださいよ」

「うう……………カイ、すみませんでした……………いろいろと……………」

早速俺たちは皿を洗うことにし、少し時間かかったが全ての皿が綺麗になった。

良い時間になったので俺は帰ろうとしたらイレイナが話しかけてきた。

「フラン先生をあんまり甘やかさないで下さい。さらにダメ人間になつてしまいますよ」

「別に甘やかしたつもりはないんだけどなあ……………」

「それでも、です。次からは何か頼まれても断るようになってください。分かりましたか」

「善処します」

「それは分かってない人の言葉ですよ」

「イレイナも何か困ったことがあれば相談してくれよー」

「あ、ちよつと……………」

これ以上ここにいたら言い負かされるので俺は強引に会話を切り上げて走って帰った。

俺は知り合いから頼られたら基本的に断ることはしない。

そうすることで、一人で抱え込むことが多い人でも、「この人なら自

分の我が儘も受け入れてくれるのでは」と相談や頼み事をしやすいだろうか？

旅を始める前に：二

『両親とお金の話』

「二人はいつも家にいるけどどんな仕事をしてるの？」

俺が学校に通い始めたくらいだったか。俺はゴウザン師匠にバイトをするように言われ、父さんが俺を受け入れてくれる店を探してくれたおかげで俺は学校が終わったら夕方までバイトに勤しんでいた。働いている最中、俺は両親がどんな仕事をしているか知らないことにふと気が付いた。

バイトの後の師匠との修行が終わって帰宅した後、俺は両親に仕事について聞いてみたことがある。

二人は少しだけ見つめ合った後、俺の方を向いて言った。

「実は僕たち、働いてないんだよ」

「けど大丈夫。お金については問題ないわ」

「どうして？」

俺の疑問は尤もである。働かないとお金を貰うことは出来ないというのは常識として俺の中にあった。労働しなくてもお金が手に入る不労所得なるものも存在するのだが、当時の俺はその存在を知らなかったのでここでは考えないことにする。

「それはカイが大きくなったら教えてあげる。はい、もう眠いでしょ
うし早く寝なさい」

母さんのその一言でこの話は終わってしまった。ごねても答えを知りたい気持ちはあったのだが、母さんの言う通り俺は眠かったので一先ず寝ることにした。翌日にまた聞けば良いと思っていたが、寝てる間にそんなことは忘れてしまっていた。

●
「カイ、ついておいで」

ついに俺とイレイナが旅に出る前日の夜、俺は父さんと母さんに大

事な話があると云われた。

「どこに行くの？」

「昔あなたにお金のことは心配ないって言ったわよね。その理由を教えてあげるわ」

二人に案内されたのは父さんの部屋。いつもはそこに敷かれていたカーペットが取り払われており、地下に続く階段が姿を見せていた。

「地下室？」

一体何があるんだろう。もしや何か危険なものを隠しているのだろうか。それが犯罪に関わるものだったらどうしよう……。

不安になりながら二人の後ろを歩く。その先にあったのは俺の身長よりも圧倒的に大きい金属でできた箱。箱には扉を開けるための鍵穴とダイヤルがついていた。

つまり――

「金庫？」

「そう。そしてこの中には――」

父さんと母さんが分担して鍵を開け、金庫の扉を開く。

「ええ……」

金庫の中には金貨がぎっしりと詰まっていた。これだけあれば一生遊んで暮らしても大丈夫だろう。

二人が働いていなかった理由、それは働かなくても暮らしていけるくらいのお金を持っていたということだ。

「あ、ちゃんと税金は払ってるわよ。だから犯罪の心配もないわ」

「それは良かった。二人が悪いことしてたら俺もショックだからね……」

しかし何故こんなにも大量の金貨を二人は持っているのだろうか。

「何故って顔をしてるね。これはね、僕たちが昔旅をしていた時に頑張って集めたんだ」

「でもどうやってこんなに……？」

「少し危険な依頼を受けたり、賭けをしたりして稼いだのよ」

二人は実力のある旅人として各地で頼られることが多かったそう

だ。報酬が高い分危険なものが多かったらしいが、今こうして五体満足でいることから二人は本当に強かったのだろう。

「最初はお金を貯めようなんて思ってたんだけど将来のことを考えてお金を貯めた方が良く、ある人から助言されてね。それから旅先で使うお金と貯めるお金を分けていたんだ」

「そして私たちが旅を終えた時にはもう働かなくても大丈夫なくらいのお金が貯まっていたわ」

「ほほーう」

二人が旅を終えて最低でも十五年は経ってるわけだけど、それでもまだこんなに残ってるのか。普段から贅沢とかしないから分らなかったけどどうやって大金持ちだったんだな。すごい。……あまりの大金を目の前にして思考力が落ちてきてる気がする。

けど今更それを明かしてどうする気なんだろうか。もしかして旅の資金としてこのお金を少し分けてくれるのかな？

「このお金は僕たちのだからカイには渡さないよ。僕たちが言いたいのはね、カイも出来る限り無駄遣いとかはせずにお金を貯めるようにした方が良くってことだよ」

「無駄にお金を使うつもりはないし、何かあった時のために貯めるようにするのは良いことかもしれないね」

「持ちきれなくなった分は私たちに送ってくればこつちで保管しておくわよー」

貯めたお金を何に使うかは今のところ決めてはいないが、それは旅が終わった後にでも考えるところかな。

何やら父さんと母さんが楽しそうに話し始めた。

「母さん、カイは一体何にお金を使うと思う？」

「そうねー。やっぱりイレイナちゃんにじやないかしら。それと子どもにも」

「それは良いね。孫の顔が楽しみだ」

「そういう話は俺のいないところでやってくれない!？」

——でも、それも悪くない。いや、そうしよう。それなら俺もお金

を貯めるのに全力を注げる。

旅が終わった時にイレイナが俺のことを好きでいてくれたなら、貯めたお金を見せて驚かせてあげよう。今まで君のために貯めてきましたって言うのは引かれるだろうから絶対に言わないが。

一人の女性のためにお金を貯める俺は少し重い男なのかもしれない。ならば重い男は重い男らしく、懐も重くしようか。

俺はそう決めたのだった。

『出会い』

俺は現在、森の中にあるフランさんの家でイレイナとフランさんと一緒にクツキーを食べていた。

ただクツキーを食べるだけは面白くないので雑談に花を咲かせていた。

途中でフランさんが何かを思い出したような顔をして次の話題を提供してきた。

「あなたたちの出会いがどんなものだったのか気になります」

「私とカイの出会いですか」

「良いですよ。イレイナ、俺が話しても良い？」

「……まあ良いですけど」

「以前から気になってあなたたちがそろった時に聞きたいと思っています」

「面白いかは分かりませんよー」

そうして俺はイレイナとの出会いを語り始めるのだった。



昔々、ある日の昼のことである。

「カイー、お腹が空いたよね？これから僕と母さんと一緒にバーベキューをしに行こうか」

「結構高いお肉と野菜を用意してるから美味しいわよー」

「本当？やったー」

当時の俺はバーベキューの存在は知っていたが、やったことがなかったのでも喜んで。

母さんが食材をカバンに入れて持ち、父さんがバーベキューのグリルや薪を持って外に出ていったので俺もついて行った。

俺はてつきり自分の家の庭や空き地でやるのかと思ったが、父さんがグリルを置いた場所は誰かの家の庭だった。

「父さん、どこどこ？」

「それは後で説明してあげるよ。今はバーベキューの準備が先だからね」

父さんがグリルに薪を入れてから網を乗せ、母さんがカバンから肉や野菜を取り出し始めた時、目の前の家から女性が出てきた。

「あなたたち何やってるのかしら？ここは私の家なんだけど」

「やあヴィクトリカさん、こんにちは。今からバーベキューをやりようと思っただけですよ」

「あらこんにちは——じゃなくてなんでうちの前でバーベキューをやりようとしてるのかしら？迷惑よ」

ヴィクトリカさんの怒りはもつともである。「警察でも呼ぼうかしら？」と呟いているヴィクトリカさんに母さんが近付いた。

「あなたたちもどう？食材はこちらで用意したものを使って良いし、これは庭の使用料よ」

「許可します」

そう言っただけ母さんはヴィクトリカさんに袋を渡していた。使用料と言っていたし恐らくお金だろう。

食材を使っても良いことに加えてお金を貰ったことで彼女の怒りはどこかへ消えてしまっていた。寧ろ上機嫌になっていた。

「焼くのお願いな。私たちが焼くと味がね……」

「任せなさい」

ヴィクトリカさんは一度家に家族を呼び出しに戻り、彼女の夫と一緒に再び出てきた。

「バーベキューか。久しぶりだな」

「しかもこっちは焼くだけで食べられるんだからお得よね」

二人は薪に火をつけてから肉や野菜を焼き始めた。

俺は初めて会う二人に話しかけることにした。

「あの、初めまして！俺はカイ！」

「あら、あなたがカイ君ね。あなたの両親から話は聞いてるわ。よろしくね」

「君がカイ君か。よろしく」

少し緊張しながら話す俺に二人は微笑んでくれた。

俺の身長では何も手伝うことが出来ないので両親のところへ戻ろうかと思った時にヴィクトリカさんが声を掛けてきた。

「そうだ。カイ君、あなたにお願いがあるの」

「何ー？」

「家を見て」

自分の家がある方向を見た。特に何もなかった。

「いや、あなたの家じゃなくて私たちの家の方よ」

「あ、そっちなー」

ヴィクトリカさんの家を見ると、玄関からこちらの様子を覗いている少女がいた。

「？」

「あの子は私たちの娘のイレイナよ。いつも家で本ばかり読んで友達がいらないの。カイ君が良ければただどあの子と友達になつてくれないかしら？」

「母さん!？」

「分かった！」

「カイ君!？」

俺は家の方まで行き、今とは違って短い灰色の髪に、今と変わらぬ綺麗な瑠璃色の瞳をした少女に話しかけた。

「俺はカイ！君は？」

何ということでしょう、幼い少年は目の前の少女の名前を聞いたばかりなのに忘れてしまっていたのである。少女と友達になるということだけが頭の中に残ってしまったようだ。

「わ、私はイレイナ……」

少女は家族以外の人とあまり喋ったことがないのか、先ほどのどこかの少年みたいに少し緊張していたようだった。けれど名前を聞かれてしつかり答えることは出来ていた。

「イレイナちゃんね！俺と友達になろう！」

「えつと……その……どうしたら友達になれるの？」

少女はいきなり友達になろうなどと言われて困惑していたが、これは仕方のないことだった。何故ならいつも家にばかりいる彼女には友達がおらず、どうしたら友達になれるかが分からなかったのだ。

「？友達になるのに何かいるの？」

「分からない……」

「じゃあ大丈夫でしょ！今から俺たち友達ね！」

「うん！えつと、カイ君……さん？」

「カイだけでいいよ！」

「なら私のこともイレイナって呼んでね、カイ！」

「分かった、イレイナ！」

多分だけど今の年齢で俺とイレイナが出会ったとしてもここまで早く呼び捨てで呼び合うことはないだろう。幼さって凄い。

「じゃあみんなのところに行こうか」

「うん」

俺が手を差し出してイレイナがその手を掴み、俺たちは走ってみんなるところに戻った。

「あらあら」

「おや、カイとイレイナちゃんは仲良くなれそうだね」

「うふふ」

「イレイナ!？」

俺たちの様子を父さんや母さん、ヴィクトリカさんはこちらを微笑ましそうに見ていたが、イレイナの父親はなんか凄い顔をしていた。

そのあたりで肉が焼けてる時の良い匂いがしてきた。その匂いに釣られてぐうう、と俺たちのお腹の音が鳴った。

俺にはイレイナの父親が、イレイナにはヴィクトリカさんが肉が乗った皿を渡してくれた。

俺は皿を受け取ろうとしたが、イレイナの父親がなかなか皿から手を放してくれなかった。

「カイ君、イレイナに手を出したら……分かってるね？」

「……？どゆこと？」

「ごめんなさいね、この人過保護だから……。カイ君は気にしなくても平気よ」

「うーん？分かった！」

その時は意味がよく分からなかったけどヴィクトリカさんが平気だと言ってくれたから俺はとりあえず返事をした。

母さんが魔法で椅子とテーブルを用意してくれており、その中に俺とイレイナに丁度良い高さのものもあったので俺たちはそこに座って食べることにした。

「美味い！」

俺たちは二人そろって同じ感想を述べていた。

美味しいのは高い肉を使っていたからだろうか、それとも友達と一緒に食べたからだろうか。

「カイ、友達と一緒に食べるご飯って美味しいね！」

「そうだね！」

どうやらイレイナ的には後者だったようだ。幸せそうな顔をして言う彼女に釣られて俺も嬉しくなった。

それから俺たちは普段何をして過ごしてるか話していた。

「イレイナはいつも何して遊んでるの？」

「本を読んです！面白いよー」

「本かー、俺はいつも外で遊んでるから全然読んだことないや」

「じゃあ今度うちに遊びに来て一緒に読もうよ！」

「うん！んでその次は一緒に外で遊ぼう！」

「うん！」

そのあたりで肉が無くなったのでお代わりを貰いに行くと、今度は肉だけでなく野菜も皿にのせられた。

俺は嫌いな食べ物はないから問題なかったが、イレイナは自分の皿にあるきのこを見て嫌そうな顔をしていた。

「きのこ……」

「きのこ嫌いななの？」

「うん……。きのこのこと嫌いな私を嫌いになったりする……?」

「全然！きのこが嫌いなら俺が食べるよ！」

「本当？ありがとう！」

今にして思えば何故かきのこが嫌いだと嫌われてしまうのではと不安に思っていたイレイナは面白かったな。ははは。

俺たちの食べる手が止まることはなく、満腹になった頃には持ってきた食材は全て無くなっていた。

「ふー、いっぱい食べたねー。もう食べれないや」

「私もお腹いっぱい……」

二人してお腹をさすっていた。美味しさからか、それとも友達と一緒に食べたからかは分からないが普段食べてる量よりもたくさん食べた気がする。

満腹感から特に喋るわけでもなくゆっくりしていると母さんが俺に声を掛けてきた。

「カイー、そろそろ帰るわよー」

「はーい。じゃあ俺もう帰るねー」

「あ、えつと……」

「ん？どうしたの？」

俺が帰ろうとしたときに向かい側に座るイレイナが何かを言いたそうにしていた。

「……また来てくれる？」

「うん！また遊びに来るよ！」

「待ってるからね！」

俺がまた来ると言うのと、イレイナは不安そうな顔から一変してとても嬉しそうな顔になった。

そんな彼女に手を振ってから今度こそ母さんたちのところに行つて一緒に帰宅した。

これが俺とイレイナが初めて出会った日のことである。

「どうでしたか?」

「そうですね、なかなか面白い話でした。あなたたち以外の登場人物にツツコミたいところがあります」

「父さんの気まぐれから始まった話ですからね」

急にバーベキューやると言つて知り合いとはいえ別の人の家の庭で始めるのはなかなかおかしいよな……。父さんたまに変なことするんだよね。この前なんて国中を走り回りながら母さんの良いところを叫んだ。最終的に母さんに吹っ飛ばされて説教をされていた。蛮行に及んだ理由は母さんへの愛故にということだった。その日、父さんは家に入れてもらえなかったけど母さんの顔は嬉しそうだったのを俺は見ている。

「……………」

イレイナは下を向いて押し黙っていた。

「どうかした?」

「……分かっていたとはいえ、昔のことをカイの口から語られるのはなかなか恥ずかしいですね」

「そうかい?俺は別にこの話をされても恥ずかしくないんだけどな」

「あなたの口から語られるから恥ずかしいんですけど……」

「なら次にこのことを話す機会があればイレイナが話してみてよ。それで俺が恥ずかしいと感じるか試してみよう」

「そういう問題でもないんですが」

「あらあら」

俺の主観での話だったから実際の会話とは少し違っていた可能性もあるけどおおよそ合ってるはずだ。俺にとってあの日は二番目に

大切な日だからこれからも忘れることはないだろう。

「それで、後日二人で遊んだりしたのですか？」

「翌日にイレイナの家に行って一緒に本を読みましたし外でも遊びましたよ」

「あんまり外で遊ばない私はくたくたになりましたけどね」

外で遊んだことで二人して服のいたるところに汚れがついて母さんやヴィクトリカさんに怒られてたっけかな。二人とも本気で怒ってるわけでもなく、むしろ嬉しそうにしてたのを憶えてる。

「けどあの時のイレイナは楽しそうだったよ」

「今までしたことのない遊びをたくさんしましたから。それに……」

「それに？」

「いえ、何でもありません」

「？」

「私にはイレイナの言いたいことが分かりましたよ」

おや、フランさんにはイレイナが今何言おうとしたのか分かったというのか。フランさんに分かって俺に分からないこと……魔法についてだろうか？俺も魔法についてはそれなりの知識はあると思うのだがイレイナやフランさんに比べると浅いと言わざるを得ない。でも今の話題に魔法は関係あっただろうか？

「先生、言ったらしばらくは雑草を食べてもらいます」

「ふふふ、私は何も言いませんよ。だから雑草は勘弁してください」

どうやらフランさんから教えてもらうことは無理そうだ。後でもう少し考えてみるか。

俺はテーブルに置いてある皿を見る。クッキーは既に無くなっていた。

時計を見てみると、ゴウザン師匠の所に行くのに丁度良い時間になっていた。

「さて、俺はもう行きますかね」

「これから修行ですか。頑張ってくださいね」

「ありがとうございます」

椅子から立ち上がり、出ていこうとする俺にイレイナが声を掛けて

きた。

「カイ」

「何？」

「私と友達になってくれてありがとうございます」

「こちらこそありがとうイレイナ。これからもよろしくね」

「はい、よろしくお願いします」



フランさんの家から師匠のいる山に行き、いつも通り修行という名の模擬戦を行うことになった。

師匠にも友達はあるのか、いるのならばどんな人物なのか気になったので聞いてみることにしよう。

「師匠、先に一つ聞いて良いですか」

「言ってみよ」

「師匠って友達いますか？」

「何じやお主！儂の性格が悪いとでも言う気か！この馬鹿弟子がああああー！」

俺は次の瞬間には早とちりした師匠の手によって吹き飛ばされていた。そういうことを言いたかったわけではないんだけどなあ……。事情をしつかり説明した後にもう一度聞いてみたところ、どうやら師匠に友達はいないらしい。

もしかして性格悪いのでは？

旅を始める前に：三

『師匠のナンパ術』

「ふんふんふーん」

平和国ロベツタの街道にて。学校が終わった俺は上機嫌に歩いていた。

「おや」

少し先に和服を着て頭には毛が一本も生えていない見覚えのあるお爺さんがいるではないですか。

「へいへいへーい、そこのお嬢さん。これから儂とお茶でもどうじや？」

もしかしたら別人かもしれないなーって願ったけれどあれはゴウザン師匠だ。二十歳くらいの女性にナンパしている。

「え……嫌だけど……」

当然の返答である。

「金ならたくさんあるぞ」

うわ……。お金で釣ろうとしている。下心の塊だなあ……。

「だから嫌だつて！衛兵呼ぶわよ！」

「え？喜んでお供させてくださいじゃって？照れるのお」

「耳腐ってんじゃないの!?!」

「腐ってたのはパン全体じゃ」

「何の話!?!」

「そりや耳の話じゃよ。おかげで高い薬を買う羽目になったのお」

「知らないわよ！ちよつとー！衛兵！衛兵！」

ウザい師匠に付き合いきれなくなったのか女性は大声で衛兵を呼んでいた。

「どうされましたか？」

「このお爺さん迷惑なんで連れて行っちゃってください！」

「は、はあ……。事情はよく分かりませんが承知いたしました」

「むっ！何をしてお主ら！儂を誰だと思っておる！あああああああー

」
すぐに駆け付けた衛兵に師匠は連れ去られていった。
こうして街に平和が戻ったのである。

●
「ふうー。酷い目に会ったわい」

「それはこっちのセリフですよ……」

結局俺が衛兵を説得して師匠を解放してもらった。こんなのも俺の師匠なので修行ができなくなるのは困る。

「最近は上手くいかんのう」

「いつもあんなナンパしてるんですか？」

「うむ」

「なんでそんなナンパを……？」

「以前読んだ本に書いてあったからのう」

「どんな本だそれは。」

「そんなので上手くいくとは思えませんがねー」

「いや、それなりに成功しておるぞ」

「あんなナンパの仕方で釣れる女性がいるのか……。世界は広い。」

「それでその女性たちとはどうなったんです？」

「簡単に会うことができない場所におるのう」

「それって……」

師匠が独り身なのって今まで付き合った女性が何かしらの不幸にあつてこの世から去ってしまったということなのは。世界が違かったか。

「これが儂の宿命というものなのかもしれん」

「師匠……」

「なんだか暗い雰囲気になってしまった気がする。これ以上この話題を続けるのは止しておこう。」

「師匠。後で美味しいパンを持って行きます。腐ってない出来立てはやほやのです。一緒に食べましょう」

「む？どうした急に。まあいいが」

「楽しみにしててくださいいねー」

俺は師匠に別れを告げ、小走りでバイト先に向かった。早く上がって美味しいパンを作るために。

その後俺は美味しいパンを作り、修行を始める前に師匠と一緒に食べたのであった。



「ということが今日あったんだ」

「なるほどねー」

俺は夕食を食べている時に今日の出来事を父さんと母さんに教えていた。

「師匠って本当に昔からあんな感じにナンパしてるの？」

あれ以上本人から聞き出す勇氣はなかったので昔からの付き合いの両親に聞くことにした。

「そうだね、師匠は昔から街で女性をナンパしてたよ。僕はそのナンパが成功してるのも見たことがあるねー」

「でもその女性はもうこの世には……」

師匠ほどの実力を持った人ならばどんな脅威からでも女性を守れそうなのだが、そんな彼でも誰かを守ることだできない事態とはどんなものなのか気になってしまった。

「ん？何を言ってるんだい？」

「え。だからその師匠のナンパに引っかけた人は事件か何かに巻き込まれて亡くなったんでしょ？」

「全員生きてるわよ」

「えええ……？」

「……どうして？」

「何故かは知らないけど師匠のナンパで釣れる女性って犯罪者なんだよねー」

「でも簡単に会うことができない場所にいるって……」

「そりゃ牢獄の中にいたんじや簡単に会うことなんてできないわよ」

ええ……。

「師匠はこれが儂のナンパ術じや、とか言ってたねー。声は震えてたけど」

「そのお陰で平和になった国もあるらしいわよ。この国は平和だからあの人のナンパが成功することはないでしょうね」

「……………」

あの師匠、ややこしい言い方してくれたな……。

●
「このクソ師匠が！元氣付けようと頑張つてパンを作つた俺の純真な気持ちを返せ！」

翌日の修行開始時。俺は師匠の顔面に向かって拳を振るう――

「誰がクソ師匠じゃ！それと儂は米派じやこの馬鹿弟子があああ！」

前に師匠の拳が俺の顔面に入って俺は吹き飛ばされたのだった。悔しい。

『魔道具の作り方：入門編』

「ユーがシンとエイラの息子のカイだなあ？」

「はい。今日からよろしくお願いします」

「ミーはヘイス。よろしくなんだなあ」

旅に出た時のためにいろんなバイトをして経験を積んでいる俺であるが、今回世話になるのは変わった道具を作る店らしい。店主のヘイスさんはガタイがよく、優しい口調の男性だ。

「ユーにはこれから『魔道具』の作り方を学んでもらうことになるんだ

なあ」

「魔道具？何ですかそれ」

「簡単に言うと魔法使いのための道具だなあ。使用者の魔力を使って特定の動作をするんだけど『魔道具』って名称はミーが勝手にそう呼んでるだけなんだなあ」

「なるほど」

初めて聞く単語だと思ったが納得した。

「その魔道具ってどんなものがあるんですか？」

「いい質問だなあ。これを持って魔力を流してみたいんだなあ」

「どれどれ……」

ヘイスさんから渡されたランタンのような物に魔力を軽く流してみよう。

するとランタンの中が光り、辺りを照らす。まだ昼なのでそこまで

恩恵は感じない。

「……………」

「あ、その微妙そうな顔はこれだったら普通に魔法を使った方がいいんじゃないかと思ってる顔だなあ」

「ええまあ……」

このランタンより杖を持った方が他の魔法も使うことができるからあまり意味がないように思える。

「それはユーがそう思えるだけの實力を持っているからなんだなあ」

「實力？」

「そう。まだ魔法に触れ始めたばかりの子なんかは光を出すのも精一杯。魔法は込める魔力とイメージが大事なんだなあ」

「なるほど」

ヘイスさんが言いたいことが分かってきた。確かに俺は魔法を習い始めた人より實力があると言えるだろう。魔女見習いや魔女なんかとは比べものにならないのだが……。

「これはそんな子たちのための道具なんだなあ。まあおしやれだから使おうって言う人もいるんだなあ」

「他にはどんな魔道具があるんですか？」

「そうだなあ。服だったりアクセサリーだったり武器だったり種類があるんだなあ」

「ほうほう」

店内に置かれている魔道具は一見小物に見えるものや持ち運びできないくらい大きなものもあった。

「魔力を込めると行う動作はある程度自由に決められるから形は自由でいいんだけど分かりやすくするとベストなんだなあ」

「何故？」

「どんな動作をするか一目で分かるると他の動作の魔道具と間違えることはなくなるし客にも売れやすいんだなあ」

「ふむふむ。例えば魔力を込めると足が速くなる魔道具だったら靴として作った方が分かりやすくいいとかですかね？」

「そんな感じだなあ。けど靴はすり減ってしまうから魔力を使ってすり減らないようにするかメンテナンスを欠かさないようにする必要があるんだなあ」

魔道具というものはなかなか面白そうだ。自分の発想次第でいろんなものを作れるし、頻繁に使う魔法と同じ効果の魔道具を作って身に着けてしまえばいちいち杖を取り出す手間もなくなって楽だろう。

「少し長話になっちゃったけど早速作っていくんだなあ」

「はい、よろしくお願いします！」

一際いい返事をしてから俺はヘイスさんに魔道具の作り方を教わり始めるのだった。



「形は自由と言ったけど、材料は自由じゃないんだなあ」

まずは魔道具の材料となるものについてだ。

ヘイスさんはテーブルに材料をいくつか置いた。木材や金属が大半なのだが瓶に入った液体なんかもある。

「これらは魔力を通しやすいから魔道具を作るにはピッタリなんだなあ。何がいい材料かはこれから憶えていくように」

ヘイスさんは金属の内の一つを手にとった。

「魔道具を作る時に大切なことは何だか分かるかなあ？」

「……魔力を通しやすいように加工することですかね？」

「違うんだなあ。答えは思い！ユーの熱い情熱が！最高の魔道具を作り上げていく！」

ヘイスさんは大袈裟に手を広げて叫ぶ。何かスイッチが入ったようだ。

「いくら技術が優れていようと！どんなにいい材料を使ったとしても！作り手の思いが籠ってない魔道具なんてものは！あつてないようなもの!!」

「あ、はい」

ヘイスさんの声はどんどん大きくなっていく。これどうすれば止まるのだろうか。

それからヘイスさんは何の言語を話しているか分からない声を上げた後、満足したのか普通の音量に戻っていた。

「じゃあ作ってもらうんだなあ」

「何を作ればいいんですか？」

「好きに作っていい……と言いたいところだけど今回は初日だしこの金属を叩いて延ばすところから始めてみるんだなあ。これが案外難しいんだなあ」

そう言つてヘイスさんは手に持っていた金属と鎚を渡してくれた。

それらを受け取った俺は金属を叩いて延ばすのだから鍛冶場にあるような炉で作業をするのだろうかと思つて辺りを見回したのだが、そんなものはなかった。

「どこでやればいいんですか？」

「ここなんだなあ」

ヘイスさんは魔法でテーブルの上にあつた材料を仕舞つてから答えた。

「ここで叩いても金属がへこんだり変形はしても綺麗な形にはなりませんよね？」

「ここは魔道具を作つて売る店なんだなあ。当然その鎚も魔道具なん

「だなあ」

俺は鎚に魔力を流してみるが見た目に変化はない。魔道具だと言うのだから、ついきり炎でも出てくるのかと思っただが違ったようだ。

試しに金属をテーブルの上に置き、鎚に魔力を軽く流しながら金属を叩いてみる。すると――

「おお」

大して力を入れてないのに金属が簡単に延びていくではありませんか。なんとびっくり。

「その鎚は魔力を流すと金属を簡単に加工できるようになってるんだなあ」

「これは……新しい世界の扉が開かれた感じがしますねー」

こういつた金属の加工って基本高温でやる必要があるのだが、魔力があればそれが簡単にできるのは凄いな……。

「それじゃあ次からは想いを込めて叩くんだなあ」

「えーつと、こうですか?」

先ほどよりも強めに金属を叩く。想いについてはいい魔道具を作るぞという意気込みを込めてるつもりだ。

「もつとー!」

「こうですか!」

「もつと!!」

「こう!ですか!!」

「もつと!!!」

「こう!!!」

「もつとおおお!!!」

「はあああああ!!!」

――バキン!

「あ」

思い切り鎚を振り下ろしたら金属を叩き延ばすことはできたのだが、その衝撃にテーブルが耐えることができなかつたようで真つ二つになってしまった。

物を作るのって難しい。

『物々語：賢しい少女と甘やかす幼馴染』

「今日はクロワッサン。外はカリっとしていて中はふわっとしていてる。完璧だ」

俺は平和国ロベッタでバイトが終わった後、パン屋の店主にお願いしてパンを作らせてもらっていた。今回作ったクロワッサンは今までの一番を争うんじゃないかという出来だ。美味しい。

時計を見してみると師匠との修行が始まる夕方まで、まだまだ時間があった。今日はバイトが早く終わったからイレイナやフランさんとゆっくり話ができそうだ。

俺はクロワッサンが入った紙袋を鞆に入れて彼女たちがいるロベッタの近くの森の奥にある家に向かった。

「もしもーし。いますかー」

「はいはい、今日はどうしましたか」

フランさんの家のドアをノックすると、イレイナが中からドアを開けてくれた。

「今日も遊びに来たよ」

「前は私の家に全く遊びに来なかったのにこの家にはよく来ますね。もしかしてフラン先生が目当てなんですか」

「いやいや、こうして遊びに来ないとイレイナがまた俺のこと信頼してくれなくなっちゃうんじゃない?」

俺がイレイナと一緒に魔法の練習をしなくなつてから、彼女は俺と一緒に旅をしようという約束を忘れてしまったと思ったようだから、たまに顔を出すようにしているのである。

「もうなりませんよ。というか結構な頻度で来てますよね。修行の方は大丈夫なんですか」

「大丈夫。ちゃんと毎日頑張ってるから。今回はクロワツサンを持ってきたよ。さ、中に入ってフランさんとも一緒に食べようか」

「あ、それがですね。フラン先生は今出かけてるんですよ」

「フランさんが出かけてる……?」

珍しいこともあるものだ。俺が訪れるときは大体フランさんは家の中でゆつくりしているのだが……。大事な用事なのかもしれないな。

とりあえず家の中に入らせてもらい、いつものように椅子に座る。

「本当は皆で一緒に食べたかったけど仕方ない。俺たちはパンが冷めきらないうちに食べちゃおうか」

「はい。ですが、恐らく先生の分はいらないと思いますよ」

「どゆこと?」

「それがですね——」

イレイナはフランさんが出かけてる理由について教えてくれた。

どうやらイレイナが作った『物に命を吹き込む薬』なるものをフランさんが持つて行ってしまったらしい。フランさんはその薬を使ってパンをたくさん貰ってくると言っていたのだが、あの人のことだから帰る途中でそのパンを食べてくるだろうから俺が作ったクロワツサンはいらないかもしれないということらしい。

イレイナのフランさんに対する信頼の無さというか逆に信頼しているというか。俺は信じてますよフランさん……。

「一応フランさんの分は残しておくからね。一応」

「もしも先生が帰り道の途中でパンを食べているようであれば先生の分は私が貰いますから」

「その時はフランさんの自業自得な気がするからいいけどそんなことするかな? それにしても『物に命を吹き込む薬』か。凄いものを作ったねー」

「まだ予備が残っているので使ってみますか?」

「いいね。面白そうだしやってみよう」

俺はイレイナから青色の液体が入った小瓶を受け取り、早速自分が座っている椅子にかけてみた。さて、どんなことを言われるかな。

「あのう……ちゃんと座ってもらえませんか……？これじゃあ椅子としての役割が果たせないんですけど……」

「……………俺が座ると壊れるんだけど」

「あつ、じゃあいいです……」

「なんかごめん……」

俺に掛かっている過重力の重さで壊れてしまいそうだからなあ……。椅子として作られたのに座ってもらえないのは不満だろうが、俺は強くなるためにやっていることだから仕方のないことだ。

気を取り直して別の物にもかけてみよう。うーん、何か面白そうな物は……あれにしよう。

「屈強な少年に怪しい液体をかけられ、汚されてしまった物とは一体誰でしょう？」

「……………」

「そう、たわしです」

やかましいわ。



俺がいろんな物に薬をかけて遊んでいる間に夕方になっており、そろそろ師匠のところに行こうかと思つた時に丁度フランさんが帰ってきた。食パン一斤だけを持って。

イレイナの話ではフランさんはたくさんのパンを貰ってくるはずだったのだが諸事情とやらでこれしか貰えなかつたらしい。しかも薬はほぼ使い切つたとか。これはもしましや……。

「まさか二人とも私を疑ってます？イレイナはともかくカイは私のことを信じてますよね？本当に本当に、パンはこれしか貰えなかつたんです」

「私はともかくってどういうことですか」

「俺としては信じたいのは山々なんです但其の諸事情とは一体？」

「それはちよつと諸事情で言えません」

「その小瓶に入っていた量はイレイナから聞いているんですけど、そ

れをほぼ使い切って食パン一斤ってどうなんですか？」

「それもちよつと諸事情で」

「口元にパンくずがついているような気がしますね」

「それまた諸事情で。なかなかしつこいですね」

「……………」

フランさんはパンくずをふき取りながらあっけらかんと言いのける。パン食べましたね？

イレイナは薬が入っている小瓶に聞いて、フランさんが帰り道の途中にパンを十個食べていた事実が判明した。フランさんは目を逸らして黙ってしまった。

「まあ先生が帰り道の途中でパンを食べたことについてこれ以上聞くのはやめてあげましょう」

「え、まじですか。いやあ優しい弟子を持てて私は幸せ者ですね」

イレイナの言葉にフランさんは気まずそうな雰囲気から一転して嬉しそうに手を叩く。

「その代わり、カイが作って来てくれたパンは全部私のものです」

「……………はい？」

「なに不思議そうな顔をしてるんですか。先生は既にパンを食べたんですよ。ならパンはもういらないでしょうし私が貰います」

「いえいえいえ。カイは私の分も作って来てくれたんですよ？なら私が食べるべきです。ですよね？」

慌てた様子のフランさんが俺に助けを求めてくる。

「それ全部イレイナのです。では俺はこれから師匠との修行があるので」

「あ、ちよつと——」

俺はそう言い残してフランさんの家を出ていった。フランさんが何か言いたそうだったが無視することにした。信じてただけだなあ……………。

イレイナが作った薬を見せてもらってから数日後、再び俺はフランさんの家を訪れていた。今回はドーナツを作って持ってきた。

現在は三人でドーナツを食べている最中であった。

「カイ、先生。この前作った『物と会話できる薬』ですけど、あれ、欠陥品でした。今はもつと凄いものを作ってます」

イレイナが言うには、あの薬にはいろいろと改善点があるらしい。今度は物が人間の姿を取るようになるつもりらしい。

「あの薬でも十分に凄いと思うんだけど。イレイナは凄いなあ」

「おや。お世辞ですか？」

「いや本心」

「もつと褒めてもいいんですよ」

「よっ、流石イレイナ！未来の魔女！素敵！」

「うふふふ。そんなことは……あるかもしれませんねー」

「……………」

『親愛なる師匠へ』

師匠。大変です。

カイがイレイナを褒めまくりです。そのせいでイレイナが調子乗りまくりです。火に油です。

正直私も褒められまくりたいです。

『親愛なる一番弟子へ』

カイ君には私の方から注意しておくわ。

あなた褒められるようなことしてるのかしら？彼はそのあたりしっかり見てくれるはずよ。

『親愛なる師匠へ』

してませんね。

『親愛なる一番弟子へ』

なら諦めなさい。

またまたフランさんの家を訪れていた。今回はイレイナから届いた手紙に『この前言っていたものが完成しましたので今度見に来てください』と書いてあったからである。

余談ではあるのだが、ヴィクトリカさんに「あんまりうちの娘を甘やかしちゃ駄目よ」などと言われてしまった。

甘やかしているつもりはないと返事したところ、「そ、そうなのね……。けどなるべく褒めたりしないようにして頂戴。あの子すぐ調子に乗るから」と微妙に顔が引き攣っていた気がする。

俺は凄いと思ったことは素直に言うようにしているから難しい気もするが、まあ気を付けるようにしておこう。

「すみませーん。誰かいますかー」

「はいはいカイですね。今日は一体どんな用件ですか」

扉をノックするとフランさんが出てきた。

「イレイナに呼ばれて来ました」

「なるほど。確かにあの子はあなたに自慢したがってましたからね。それではどうぞ」

「ありがとうございます」

フランさんに家の中に招き入れてもらうと、知らない誰かとイレイナの声が聞こえてきた。

「愛に性別は関係ないわー！」

「え、ちよっ——わあ！」

そこからの俺の行動は早かった。

イレイナの声が聞こえた場所まで行き、彼女の上に馬乗りになり、そのまま顔を近づけている女性を上に向けて飛ばした。天井にめり込んだ。

「イレイナ、大丈夫？」

「今のところは、なんとか……。ありがとうございます」

俺は倒れているイレイナを抱き起し、彼女を襲おうとしていた女性

がいる場所——天井を見るが、そこに女性の姿はなかった。

周囲を見回してみるが、イレイナの杖が落ちていること以外には異常は見られなかった。杖を手放してしまったイレイナは自分の身を守る事が出来なかったようだ。

「危ないところでしたね。色々」と

遅れてやってきたフランさんが俺たちのことを見て何かを察したらしい。

「さっきまで俺の知らない女性がいたと思うんですけど見ませんでしたか？」

「それならこちらですね」

フランさんはそう言っただけで床に落ちているイレイナの杖を拾い上げて俺に見せてきた。

「杖？」

「そうです。イレイナは『物を人に変える魔法』を完成させ、調子に乗っているような物にこの魔法を掛けてましたからね。今回は自分の杖を人の姿に変えたところ襲われたようです」

「……………」

フランさんはこうなった事情を俺に教えてくれた。イレイナは落ち込んでいるのか下を向いていた。

「人も物も同じです。何もかも思い通りになるわけではないのですよ。カイ、申し訳ありませんが今日のところは帰ってもらってもいいでしょうか？イレイナのことはそっとしておいてあげてください」

「……………」

「彼女のことを助けていただきありがとうございます」

「いえ…………。それじゃあイレイナ。えーっと、また来るから」

「はい…………」

イレイナに掛けてあげる上手い言葉を見つけないことが出来ないまま俺は家を出た。

自分の物に襲われるか…………。普段俺が使っている物はどんなことを思っているか怖いな。もしも恨まれているとかだったら、俺はその物に対してどう接すればいいんだろうか。なるべく穏便に済ませた

いところだ。

「という出来事がありましたね。師匠はどう思います？」

ロベッタの近くの山の頂上にある道場で修行を始める前に、俺は師匠に今回の話をしていた。

「どう思うかと聞かれても儂からすればどうでもよいことじゃ」

「自分の物にどう思われているかとか気になりませんか？」

「ならん。元々聞けない声の話なんぞに興味はない！考えるだけ無駄じゃ。お主は強くなることだけを考えておれ。この話は終わりじゃ」

まあそうかもしれないが、ここまできつぱりと言われるとなんとか俺の気にしすぎなのではないかと思わされる。少しだけ気が楽になった。

「ところで師匠がずっと大事にしているあのボロボロになった本は何を喋るんでしょうね？」

「この話は終わりだと言ったじゃろう！馬鹿弟子が！」

次の瞬間には俺は吹き飛ばされていた。俺もやり返そうとしたが、いつも通り師匠に一撃を与えることなくその日の修行を終えるのだった。

灰の魔女の誕生日

「誕生日おめでどうイレイナ」

平和国ロベツタにいた時の話。私の誕生日には決まって同じケーキがお母さんによって運ばれてきました。生クリームといちごがふんだんに使われたケーキは、甘いものに目がない女の子には輝いて見えました。

いつ頃からその習慣が始まったのかは憶えていませんがそのケーキが美味しいことだけは確かです。

「どうかしら?」

「美味しいですよ」

「もう少し具体的な感想が欲しいところね……」

何故かお母さんは毎回ケーキの感想を聞いてきました。

「具体的にと言われましても……。うーん、去年のよりも美味しいよ
うな気がしますね」

「ならよかったわ」

なんとなくで言った感想……。今思い返してみれば毎年言っていた
気がしますが、それを聞いたお母さんは嬉しそうに頷いていました。

「ううイレイナ……。そのケーキは……」

「はいはい。お父さんはこっちよ」

ケーキを食べていると何故か悲しそうな顔をするお父さんをお母
さんがどこかへ連れて行ってしまいます。これもまた恒例行事でし
た。

二人は私の誕生日はいろんなご馳走を用意してくれました。普段
は食べる機会のない料理なんかもありましたが、毎年私が一番楽し
みにしていたのはこのケーキでした。このケーキを食べないことには
誕生日を迎えたって気がしません。

魔女となつて旅に出た後もそれは変わっていません。

○

ほんの少しの寒さを感じながら、窓から入った日差しで目を覚ましました。時計を見てみると普段よりも早い目覚めです。

今日は旅に出てから初の誕生日ですが、あまりそんな気がしませんが。旅をしていると毎日が新鮮なことだらけなので今日だけが特別な日だと感じないのかも。

ベッドから起きて身だしなみを整え、カイが泊まっている部屋の扉をノックしました。

「おはようございます。カイ、起きてますかー？」

部屋の中から返事はありません。もしかしたらまだ寝ているのかと思いました。が彼は基本的に早起きなので、好きな時間まで寝ている私よりも遅く起きたことはありませんでした。ということはお出かけているのかも。

「……おや」

扉の下の隙間に紙が挟まっていたのを発見。手に取ってみるとそこには、『今日中には帰ってきます』とカイの字で書かれていました。やはりどこかへ出かけているみたいですね。ですが行き先は書かれていないので彼がどこへ行ったのかは分かりませ……あ、指輪があるので分かりますね。

「さて、一体どこに行っただんでしょね」

指輪に魔力を込めてみると彼のしている指輪に反応してその位置が分かるのですが、ここは宿屋の中ですので指輪が示している方向には壁しかありません。普段の聡明な私なら事前に気付いたのですがまだ寝惚けているのかもしれない。

今すぐここを出てカイが何をしているか見に行きたいですが、ぐう……とお腹が鳴ったので近くのパン屋で朝食を買うことにしましょう。

「これとこれとこれください」

「はいよ。銅貨三枚ね」

「実は今日私の誕生日なんですよ。知ってましたか？」

「そうなんだおめでとさん」

「……それだけですか？」

「それだけだよ。さ、早く払いな」

「……………はい」

店主に銅貨三枚を払ってパンを三つ買った私は広場のベンチで座りながら食べました。もしかしたら割引してくれるかと思いましたがどそんなに甘くはありませんでしたね。

「——料はどうでしょうか」

おや。聞き覚えのある声が聞こえてきましたね。木の裏に隠れて様子を見ることにしましょうか。

「あん？————でいいよ。ただし、アタシを満足させることが条件だな」

宿屋がある方角とは真逆の方からカイが歩いてきました。その隣には二十代後半くらいの女性がいます。

「ありがとうございます！」

「ま、それなりに楽しみにしておくかね」

楽しそうに話しながら二人は私が隠れている木の横を通り過ぎて行きました。

……やっぱり男性って胸が大きい女性の方が好きなんでしょうか。声が弾んでいる気がします。

なんとなく嫌な気持ちになりました。彼らがこれから何をするか気にはなりますが、もしものことを考えるとこれ以上カイのことを追う気にはなれませんでした。

○

「はあ……」

結局私は宿屋に戻ってすぐさまベッドに倒れ込みました。

「何やってんだろ。私」

カイは寝ている私を起こすのは忍びないからと一人で街に出かけるなんてことはこれまで何回もありました。日用品を買ったり、旅先で手に入れた高価な品を売ったりしていると彼から教えてもらいま

した。

次は私も一緒に行きたいので起こしてくれと頼んだことがあるのですが、翌日一時間くらい部屋の扉をノックしても私は起きなかつたらしく、ようやく目が覚めて扉を開けるととても疲れた様子の彼が目に入りました。

その時の私は「こんな朝早くからどうしたんですか。私はまだ眠いので寝かせてほしいのですが」と悪びれる様子もなく言いました。

起こさなければ起こしてと、起こせばまだ寝かせてくれと好き勝手言う我が儘な私に愛想を尽かして他の女性のところに行ってしまうのもおかしくないのかもしれない。

「この指輪を嵌める資格なんて私にあるんですかね……」

右手を伸ばしてその中指に嵌っている銀色の指輪を見つめながら疑問を口に出していました。誰かが答えてくれるわけでもないのに。

この指輪は私がカイと離れ離れになってもすぐに居場所が分かるように彼が作ってくれた魔道具で、いつもはこれを見るだけで元気が出てきますが今は逆に暗い気持ちになってしまいます。

本当は他の女性にこの指輪を渡したいと思っていたらどうしようと思えばかりが頭の中に浮かんでしまいます。

「……………」

先ほどの女性。カイと仲良さそうにしていましたけどどんな関係なんでしょうか。この国には昨日来たばかりなので過去にどこかで会ったことが女性なのかもしれません。

彼に直接聞けば分かる話なのですが聞く勇気が出てきません。そういう関係ではないとは思いますが。そうじゃなきゃ私と一緒に旅をしてくれるがありません。それでも怖いんです。彼が取られてしまうんじゃないかと……。

「別に彼は誰かの物でもないのに」

疲れているんでしょうね。らしくもない。少し眠ることにしましょう。

目が覚めたら実は全部夢だったということに期待しながら、私は瞼を閉じました。

○

「——イナ」

ん。なんですか。今新しい詐欺——じゃなくて商売で一儲けしているんです邪魔しないでください。

「おーい、イレイナ。起きてー」

「はっ！夢でしたか」

「おっ。やっど起きたね。おはよう」

目を開けると横向きのカイがこちらを覗き込んでいました。窓を見るともう日は落ちて外は暗くなっています。結構長い時間寝ていたみたいです。

「おはようございます。何か用ですか？ここは私の部屋ですよ」

「何ってそりゃ決まってるでしょ。今日は何の日か分かってる？」

何でしたっけ？まだ寝惚けているのか頭がぼんやりします。

「その顔は分かってなさそうだね……。大事な日なんだけども……。ちよつと待ってて」

カイは一度部屋から出てまたすぐ戻ってきました。その手にはケーキが……。え。

「カ、カイ……。そのケーキは」

間違いなく、毎年私が楽しみにしていたケーキです。そうだ、今日は——

「誕生日おめでとう。イレイナ」

ちやんと憶えていてくれたのですね。

「夢じゃ……。ないですよね」

「ん？現実だよ」

「そう……。ですよね。はは、ははははは！」

「えっ、何。急に笑い出してどうしたの」

「いえなんでもありませんはっははっは！」

「ええ……」

彼が忘れずにいてくれたことに嬉しかったのか、それとも安心した

のかは自分でも分かりませんが私は笑いを抑えることができませんでした。

少しの間笑い続け、涙まで出てきてしまいました。涙と共に、心に残っていた暗い気持ちが出ていくような気がします。

ようやく笑いも引っ込み、恐る恐ると言った感じではありませんがカイがハンカチを渡してくれました。

「大丈夫？」

「はい。心配いりません。これ返しますね」

「ならいいんだけど……。じゃあそろそろケーキ食べようか」

ナイフでケーキを切り分け、そのうちの一つを別のお皿に乗せて渡してくれました。

見れば見るほどこのケーキ、ロベツタで食べていたのと同じに見えますね。いろんな国に同じ店があるのででしょうか。

どれ一口。

「……美味しい」

見た目同様、味まで同じでした。いえ、正確には味の方向性は同じでしたがさらに美味しくなっていました。

「ならよかった。自信作だったんだ」

「え」

今何と？



平和国ロベツタのいろんな店でバイトするようになって料理を覚え始めた俺はお菓子作りにも挑戦するようになった。

クッキーやドーナツ、そしてケーキ。今はそれなりに自信があるが、当然最初は上手く作れなかった。

ケーキが作れるようになってからは毎年イレイナの誕生日にプレゼント代わりにケーキを送るようにした。……ヴィクトリカさん経由で。

「ヴィクトリカさん。これ皆で食べてください」

「あら。美味しそうなケーキね。もしかしてあなたが作ったのかしら？」

「はい。でもイレイナには内緒にしてください」

「どうして？」

「まあその何と言うか……サプライズ？毎年食べていたケーキが年々美味しくなっていったってしかもそれを作っていたのが俺だったんで驚かせてみたいんです」

「そうねえ……。私としてはタダでケーキを貰ってるわけだし断る理由はないわね。分かったわ。あの子には秘密にしておいてあげる」

「ありがとうございます」

「感謝するのはこっちの方よ。あとでなんて言ってたか教えてあげるわね」

「はいー」

不味いなんて言われたらショックだなあ、と考えていたがイレイナは美味しいと笑顔で食べてくれたようでホッとした。

次の年も俺はヴィクトリカさんにケーキを渡し、イレイナの感想を教えてもらった。その次の年も。

イレイナは隠そうとしてるけど毎年楽しみにしているのだと聞いた時はあまりの嬉しさに口元が緩みかけたが平然を装ったが、ヴィクトリカさんにはバレていたかもしれない。

旅に出てから初めてのイレイナの誕生日。俺の代わりにケーキを渡してくれる人はいない。今度こそ俺の手で渡す時が来た。

作るケーキは今までと変わらないが、去年よりも美味しいもの。妥協は許されない。俺は旅人だからケーキの材料が揃わなかったり作る場所が見つからなかったなんてことにするつもりはない。

だから数日前から質のいい材料を見つけたら購入して魔法で凍らせて時間が経っても悪くならないように保存していた。イレイナには当日まで秘密にしておきたったから大変だったが無事に材料を揃えることができた。

あとはケーキを作らせてくれる場所を見つけるだけだった。今い

る国は昨日着いたばかりでどこに何の店があるか把握しきれていなかった。

本当は夜のうちに宿を出て探しておきたかったが不自然なことをするとイレイナに怪しまれる可能性もあったので朝になるまで動かないことにした。

そして早朝。日が出始めた頃に起きた俺は素早く準備を済ませ、イレイナへのメモを残してから街に出かけた。

時間が時間なので大通りを歩いている人は少なかつたので、看板を見てそこにある店がどんな店なのか知ることができた。

八百屋、魚屋、肉屋。本屋に花屋に服屋。レストランやカフェなんかもあったが俺が探しているのはケーキ屋。やはり良いケーキを作るにはその専門の店のキッチンを借りるべきだ。

大通りを一通り見たが目的の店は見つからなかつたので、その時丁度向こうから歩いて来た人に聞くことにした。

「すみません。この街のケーキ屋ってどこにありますか？」

「何だいアンタ。こんな時間からケーキを買うつもりかい？」

俺が話しかけたのは長い茶色い髪を後ろで一括りにした女性だった。

「いえ。ケーキを作りたいのでキッチンを貸してほしいんです」

「それは何のために？」

「今日は一緒に旅をしている幼馴染の誕生日なので最高のケーキを作って食べさせたいんですよ」

「ふうん。素敵な話だねそりゃ。いいよ。うちに来な」

「はい？」

「だから、うちに来な。この国唯一のケーキ屋のキッチンを貸してやるって言うてんだよ」

話を聞くと目の前の女性は若いながらもケーキ屋の店主であり、今は日課である朝の散歩をしていたところなのだとか。

俺は感謝を伝え、彼女の店に案内してもらうことにした。

店まで雑談をしながら向かっていた。主な内容は俺とイレイナについてであり、店主が興味深々といった様子で聞いて来たのだ。一番

食いついたのは指輪についての話だった。こういったアクセサリーに興味があるのだろうか。

「アンタもそうだけどその幼馴染を幸せモンだねえ」

「ははは、その通りなのかもしれないね。……あ、そうだキッチンの使用料はどうしましょうか」

「あん？そんなのタダでいいよ。ただし、アタシを満足させることが条件だな」

「ありがとうございます！」

「ま、それなりに楽しみにしておくかね」

そんな会話をしながら広場を通り抜ける。イレイナはまだ寝ているだろうか。きっと俺が彼女への誕生日ケーキを用意しているとは考えてもいないだろう。驚く姿が今から楽しみだった。

店主に案内されて着いたのは大通りから少し外れたところにあるケーキ屋だった。店内はお金やケーキの受け渡したためのカウンタートとケーキが完成するのを待ったための椅子やテーブルが置いてあるだけの質素な店であったが、清掃が行き届いていて埃一つない綺麗な店であった。

「んじやこつちがキッチンだ。アタシは後ろで見ているから好きに使いな。今日は休業日ということにしておくよ」

俺は魔法で凍らせた材料を取り出して元に戻してからケーキ作りを始めた。

作業は滞りなく進み、生地を焼き終わって暫く冷ますところまで来た。

「ちよつと外に行ってください。やり残したことがあるので」

「はいよ。ケーキの方はアタシが見ておくから好きにいな」

「ありがとうございます」

店主には俺が何をしようとしているのか分かったのか特に理由を聞くことはなかった。

俺は一度店を出て再び大通りに向かい、用事を済ませてから再び店に戻って来た。

その後はケーキ作りに戻り、長い時間を掛けながら完成させるのだった。

「……よし。これで完成だ」

「お疲れさん。一時たりとも気を抜かずにケーキを作ってるアンタの横顔を見てるだけで時間が過ぎちまったよ。そのケーキも味見をしなくても美味しいって分かる。ケーキを作るときの心構えみたいなのを一から学ばせてもらったよ。ああ、文句なしの大満足だ」

「大袈裟ですね」

「そうでもないさ。そのケーキはアタシがこれまで見てきた中でも一番を争うくらいのもんだ。まったく、アタシにもアンタのような幼馴染が欲しかったね」

「いい出会いがありますよ」

「だいたいねえ」

完成したケーキを箱に入れ、店主にお礼を言ってから俺たちが泊まっている宿に戻った。

外は既に暗くなっており、これ以上遅くなるとイレイナに心配されてしまうので歩く速度を少し早めた。

一度自分が泊まっている部屋にケーキを置いてからイレイナがいる部屋の扉をノックするが返事がなかったので力づくで開け、部屋の中に入ってから扉を魔法で直しておいた。

部屋のベッドの上ではイレイナがローブを着たまま寝ていたので起こすことにした。

「イレイナ。起きてイレイナ。おい、イレイナ。起きてー」

何度か声を掛けることで、ようやくイレイナが起きたのだった。

・
○

「驚いてるねー。うんうん。その顔を見るためにずっと秘密にしていた甲斐があったというものだ。写真撮るね」

はいカシャリー、なんて言ってるカイを傍目に私は、毎年ひっそり

と楽しみにしていたケーキは暫く食べられないかなーなんて考えていたのにそれを作ってたのは彼だったという衝撃の事実に半ば放心状態でした。数日前から準備していたというのにも全く気付いていませんでしたし。

「そして、そしてだよ。今年はケーキだけじゃないのさ」

ポケットから袋を取り出して渡してきました。なんだろうと袋を開けてみると中には葉が入っていました。銀色の金属で作られたものですが軽く、上部に開けられた穴には紐が通されており、紐の先端には綺麗な瑠璃色の宝石がぶら下がっています。

「今年はプレゼントも渡したいなと思って空いている時間に探したんだ。そして見つけたのがその葉。イレイナは本を読むのが好きだし丁度良くなって思ってたんだ」

「なるほど」

そろそろ新しい葉が欲しいと考えていたので確かに丁度良かったですね。丈夫そうなので長く使えそうですし。

「改めて誕生日おめでとうイレイナ。今日はどうだったかな？」

「ありがとうございます。そうですね……」

感想を聞かれて少し考える素振りをします。そしてこれまでのことを振り返ってから答えました。

「まあまあ、ですかね」

「そっか。ならよかった」

数日前から準備してくれた幼馴染に対して失礼なことを言う私ですが、彼は私の顔を見て満足そうに微笑みました。

鏡で自分の顔を見たりはしませんとそういふことなんでしょう。それでいいんです。

さてここで問題です。口では誕生日の気分はしないとか言いながらもすっかり意識しており、幼馴染が自分以外の女性と話してるところを見ただけで落ち込んでしまう早とちり。だけど実は自分の為にケーキを作ってくれたことを知って喜びと安堵を覚えた今日の主役とは一体誰でしょう？

そう、私です。この日を忘れることはないだろう私なのでした。

本編

始まり（前編）

始まりは今でも憶えている。

俺がまだ小さかった頃、母さんに頼み、近くに住んでいたイレイナと一緒に平和国ロベッタから少し離れた場所にある丘の頂上に生えた一本の木の上から見た景色。

夕日によってオレンジ色に染められたロベッタの建物や木々、遠くの山々は、毎日見ていたはずなのに少し遠くから見ただけでまるで別物であるかのように感じた。そんな光景に、幼い俺たちは心を奪われた。

「うわあ、綺麗……」

「こんなの初めて見た……」

木の枝の上、並んで座っている俺たちは感動からか、揃って言葉を漏らしていた。

少しの間、その景色を楽しんだ後イレイナが笑顔でこっちの方に振り向いた。

「私ね、大きくなって魔女になったらニケみたいに冒険するの」

ニケ、それは『ニケの冒険譚』という小説の作者であり主人公である魔女の名前である。世界中を旅をして回ったニケが見た景色の数々は国から出たことのない者にとって魅力的なものであった。俺にとっても。

「旅かあ……俺も大きくなったら旅に出ようかなー」

「本当!?なら一緒に旅をしようよ」

「一緒に?……分かった、大きくなったら二人で一緒に旅をしよう」

「約束だからね」

「うん、約束」

旅をしたいと思ったのは本当だったけれど、その原因としては隣で楽しそうに笑うイレイナを見ていて俺も嬉しくなったからというの
が大きい。

だから旅に誘われたのはとても嬉しかった。

「カイ、イレイナちゃん、そろそろ降りて来なさい」

「はい」

この場所を教えてくれた母さんが下から俺たちの名前を呼んでくれたので戻ることにした。

イレイナはあまり外で遊ばないから木登りの仕方なんて知らず、ほうきにもまだ乗れないため、俺にしがみついて俺が木に登ることで無事に木の上までたどり着いた。

当然、降りるときも同様だ。

イレイナの重さを感じなかったのは母さんが魔法で補助してくれていたのだろう。

どうやらイレイナははしやぎすぎて疲れたみたいだったので俺が背負うことになった。この時は背中に重さを感じた。

どうして……と思いつながら前を歩く母さんの後ろ姿を見ていた。

母さんの髪は金色であるが俺の髪は黒色をしている。これは父さんの髪の色が黒だったからだ。

その代わりと言っては何だけど瞳の色は母さんと同じで金色をしている。

イレイナは母親似で彼女の母親と同じ灰色の髪に綺麗な瑠璃色の瞳をしている。

「カイ、今日は楽しかった？」

いつの間にか俺の背中で寝ていたイレイナを起こさないようあまり大きくない声で母さんが聞いてきた。

「すごく楽しかった」

「そう、それはよかったわ」

俺は笑顔で嘘偽りのない本心を答えた。母さんも嬉しそうな声で応えてくれた。

眠っているイレイナを家まで送り届けた後、俺たちは家に帰って父

さんが用意してくれていた夕食を食べることにした。

「カイ、今日はイレイナちゃんと国の外まで行ってきたようだけど楽しかったかい？」

「うん、すごく楽しかったよ」

「それはよかった」

食事中、父さんが母さんと同じようなことを聞いてきたのでこれまた同じように返した。

父さんと母さんは何の仕事をしているか分からないけど、普通に生活できているから金銭面については大丈夫なのだろう。

俺は深呼吸をしてから二人に旅をしたいことを伝えることにした。

「……俺、大きくなったら旅をしたいー」

「ほう、旅に？良いんじゃないかな」

「ええ、私も良いと思うわ」

思ったよりもあっさり許可が出て拍子抜けしたが、旅をしても良いと言われたのは嬉しかった。

「だけど、国の外は危険なことが一杯だから強くならなきゃ駄目だぞー」

「なるー強くなるー」

数日後、俺は母さんの勧めでイレイナの母親であるヴィクトリカさんにイレイナと合流する形で魔法を教えてもらうことになった。

しかし、俺の魔法の才能はそこまで高くないということは少ししたら嫌でも分かった。

イレイナが数回で成功していた魔法を、俺は何十回やってもようやく成功することがほとんどだった。

母さんやヴィクトリカさんは気にすることは無いと言ってくれていたが、開いていくイレイナとの差に俺は焦りが生まれるばかり。

魔法を習い始めて約三ヶ月が経った頃、家族全員で夕食を食べているときに母さんがある提案をしてきた。

「ねえカイ、もしよかったら別の方法で強くなってみない？」

「別の方法……？」

母さんの話を聞いていくと魔法ではなく体を鍛えることで強くないかということらしい。

「でもどうやって強くなればいいの？」

「そこは大丈夫。お父さんが良い人を知ってるの」

「そうだね、カイには僕の師匠の下で修業をしてもらおうかと思う。当然厳しいだろうけどどうする？」

俺の答えは決まっていた。

「それで強くなれるなら、俺やるよ！」

その時知ったのだが、父さんもその師匠の下で修業をして力をつけ、世界中を旅をしていたらしい。その途中で出会ったのが母さんだったのかなんとか。

そうして新しい道を歩むことに決めた俺は次の日の早朝、ヴィクトリカさんにそのことを伝え、お礼を言った。

ヴィクトリカさんはこうなるのが分かっていたのか、そこまで驚くことはなく、「頑張つてね」と応援してくれた。

朝早かったためカイレイナはまだ起きていないらしく、ヴィクトリカさんの方から伝えてくれるそうだった。

レイナの家から離れた俺は父さんが教えてくれた師匠がいるという場所に向かった。

そこはロベッタのすぐそばにある大きな山だった。木々が生い茂り、頂上まで行くための道らしい道は見当たらない、人が住めるか分からないような山だった。

この山の頂上に師匠がいるのかと思い、山に入ろうとしたが後ろから声をかけられた。

「お主がカイか」

振り返つてみるとそこには六十代前半くらいの和服を着た人物がいた。年齢からか髪の毛のない頭と顔に刻まれた皺と、年齢を感じさせないほどに綺麗な姿勢が印象に残る、厳しそうな男性がいた。

「はい、俺がカイです」

「そうか、お主の父から話は聞いておる。弟子になりたいそうじゃな。

ならば最初に弟子入りのための試練を与えよう」

弟子になるための試練なんて聞いてなかった。

いきなり儂と戦えなんて言われたらどうしようなんて不安になった。

「今儂が欲しいものをもって来るのじゃ。もし持ってこれたのならばお主を弟子にしてやろう」

それはただのパシリでは……その言葉に戸惑いながら母さんの言葉を思い出していた。

「これはお師匠様と会ったら渡すのよ」

「なにこれ」

「秘密よ。絶対に開いちゃだめよ。弟子になれなくても知らないわよー」

などと言われながら渡されたのは触った感じ薄い本のようなものが入った包み。

すぐく気になったが我慢して開けずに持ってきていたのだ。

「これをどうぞ」

「ぬ、既に持ってきておったか。どれどれ……こつ、これは！」

渡した包みを受け取った師匠（予定）は俺に背中を向けてから包みを開けて中に入っている本を読み始めた。

何を読んでいるのかはこちらからは見えなかったが反応を見るにお眼鏡にかなったのだろう。

「うむ、よくぞ儂の求めるものを持ってきた。お主を弟子にしよう」

「ありがとうございます」

少しした後こちらに向き直った師匠は俺の弟子入りを認めてくれた。

「では早速修業に入る。ついてくるのじゃ」

そう言つて師匠は山の中に入っていったので、俺もすぐ後を追つた。

山の中は日差しがあまり入らないからか薄暗く、不気味さを感じたがそれ以上に道が険しいため体力が凄い勢いで奪われていった。

「はあ……はあ……師匠、まだですか」

「どうした、もう限界か？その程度で儂の弟子が務まると思わんことじゃ」

師匠は弱音を吐いた俺のことなど気にせずどんどん前へ進んでいく。

こんなところに一人残されたら無事に帰れるか分からない俺は疲れた体を無理やり動かすしかなかった。

登り始めて二時間程経っただろうか。ようやく山の頂上にたどり着くことができた。

そこには木造の家とその隣に道場があるだけだった。

「さて、自己紹介がまだじゃったな。儂の名はゴウザン、ここに住んでいるしがない老人じゃ」

「はあ……はあ……カイです。これからよろしくお願いします」

こうして修行は始まった。

「カイよ、お主は魔法を扱えると聞いた。ならばまずは覚えてもらう魔法が二つある」

「魔法……ですか？」

魔法の才能がないから師匠に弟子入りしたのに最初から魔法の修行とは……なんて微妙な気持ちになったのは仕方のないことだろう。

「そうじゃ、これから行う修業に必要なと言えるほど重要な魔法じゃ」

「何の魔法ですか？」

「過重力と物をしまう魔法じゃ」

物をしまう魔法はヴィクトリカさんのところで習っていたおかげで手に持てるくらいの大きさのものならしまうことができるが、過重力という魔法については聞いたことがなかった。

「師匠、過重力とはどんな魔法でしょうか」

「過重力とは対象に普段受けているのよりも強い重力を掛ける主に拘束なんかに使われる魔法じゃな」

「何に使うんです？」

「この魔法を自分にかけて修業すれば普通に修業するより強くなれるじゃろ？」

「……………」

「この魔法を使えるようになるのが最初の修行じゃ。まずはそこらへんに落ちている小石に掛けられるようになることからかろう」

どや顔で語る師匠を見て不安しか感じないけれど俺は無事に強くなれるのだろうか。

結局その日は過重力を使えないまま日が落ちる時間になっていった。

「今日の修行はここまで。下山するぞ」

「えっ、ここで生活するのは……？」

「まだ年齢が二桁にもなっていないお子様をここに住まわせるわけないじゃろ。山を登ったり下りたりするのは修業にもなるしの」

結局俺は師匠に案内されて山を下り、帰宅することになった。

「ただいま……」

「あらおかえりなさい。先にお風呂に入っちゃいなさい」

帰宅した俺は母さんに言われたとおりにしてから夕食を食べるところにした。

「今日の修行はどうだった？」

「ひたすら過重力を使えるようにするだけだった」

結局その日だけでは使えるようにはならなかったけど……。

「過重力かー、僕は魔力がなかったからその分必死に頑張ったっけかな」

「過重力が使えれば強くなれるの？」

「絶対強くなれるね。だからカイが一番強かった時の僕より強くなるんじゃないかな」

「そっか。なら頑張る」

父さんの旅人時代の強さを知らないからどれくらい強くなれるのかイメージできないが父さんが言うのならばきつとそうなのだろう。

夕食を食べ終わった俺は、寝るまでの間過重力を使えるようになるために練習をすることにした。

俺が過重力を使えるようになったのは一週間後のことだった。

いつも通り小石に過重力を掛けようとしていた時、特別何か意識したわけではないけれど魔力が抜けていく感覚がしたから小石を持つとうとしたが重すぎて持つことができなかった。

つまり、成功だ。

「師匠！できました！」

俺は家の中で本を読んでいた師匠に駆け寄りながら報告した。

「む、ようやくできるようになったか。どれ、次は力加減の調整じゃな。今のお主にこの威力のまま掛けたならその重さで潰れてしまうからのう」

そう言いながら師匠は重くなった小石をひよいと軽々しく持ち上げていた。

「今度はもう少し力を抜いて掛けてみよ」

「……こうですか」

「儂にまで過重力がかかっておるではないか。もっと小石だけに意識を向けるのじゃ。……そう、そんな感じじゃ」

過重力がかかっているのに全く姿勢を崩すことのない師匠に驚きながら小石のみに過重力を掛ける。

力を調整しながら掛けるから先ほどよりも疲れた気がする。

「では自分自身に今と同じ威力で掛けてみよ」

「はい。……ぐっ」

自分自身に過重力を掛けた瞬間、体全体に重りを付けているのではないかと思うくらいの重さが俺を襲った。

「ほれほれどうした。動いてみせよ」

「くっ……」

「この一週間山を登り続けたお主なら動けるはずじゃぞ」

俺は必死に体を動かそうと全身に力を入れることでぎこちないが歩くことはできた。

「あとはその魔法を掛けたまま今まで通りの生活を送るのじゃ。風呂に入る時と寝る時以外は魔力が尽きるまで掛け続けるように」

最初は三十分も保つことができなかつたが、掛け続けているうちに効率的に掛けれるようになっていったのか徐々に過重力の使用可能時間は増えていった。

起きている時間のほとんどを過重力を掛けて過ごすことができるようになったら、今度は過重力の威力を強くしていくことになった。今掛けている重さに慣れたら強く、また慣れたのなら更に強くと繰り返しているうちに半年は過ぎていった。

「カイよ、一度過重力を解いて思いっきり跳ねてみよ、ただし外でな」
師匠の家で持ち込んだ魔導書を読んでいた俺に師匠は言ってきた。断る理由もないし師匠に言われた通りに外に出て過重力を解き、力いっぱいジャンプした。

「おお……」
次の瞬間、俺は約十メートルほど上に跳んでいた。必要最低限の家具しか置いていない木造の家が見え、師匠の眩しい頭も見えた。そして着地の瞬間その衝撃に備えたが、体やってきた衝撃は大きいものであったがどこかが痛むとかはなかった。

それを確認して満足そうに頷いた師匠は次の段階に入ると腕を組みながら言ってきた。

「これまではただ体を強くすることだけを目的としたものじゃった。だが体が強いだけでは意味がない。もし誰かに襲われた際に戦う術を持っていないならば、待つのは死のみじゃ」

「戦う術とは……？」
「お主には儂と同じ無形流むぎようりゅうを習得してもらおう」
「無形流……どのような流派なのですか」

「この流派は特定の構えを持たず、使う武器も特に指定はない。人によって形を変える流派じゃから無形流じゃ」

「それって流派と言えますか？」
「むっ……この馬鹿弟子がー!!」

俺は吹っ飛ばされて木にぶつかった。この時何をされたのか俺は

分ならず、辛うじて顔に何かを食らったのだけは左の頬の痛みが教えてくれた。

「えっ……」

「儂が流派と言えば流派じゃ。無形流が定めている掟は二つ。一つ、初動を悟らせるな。二つ、力は己の為ならず。儂の攻撃が見えなかったじゃろう。無形流はどんな態勢からでも動けることを重視している。そしてこの力は誰かを守るためのものでもある」

「だから見えなかったんですね。……でも態々俺を殴る必要ありませんか？」

師匠は何も答えてくれなかった。

それから俺は師匠から様々な種類の武器を見せてもらい、その中からいくつか選んで修行をすることになった。

修行と言っても軽く扱い方を教えてもらった後は山の頂上にある家の隣の道場で模擬戦を繰り返すというものであった。

武器は物をしまう魔法でしまっておくので、その練習も同時に行っていた。

時間が進み、俺が学校に通い始める年齢になった頃、その日の修行が終わった後師匠から一言。

「カイ、そろそろ学校に通い始める年齢じゃろ。学校が終わった後、お主の国の店でアルバイトをしてこい。話は既にお主の両親に通しておる。朝とバイトが終わった後は今まで通りここに来て修行じゃ」

家に帰った後両親から話を聞くと、どうやら旅に出た後に何もできないとなるとお金を稼ぐ手段が無かったり、何か困ったことがあったときに取れる選択肢が少なくなってしまう。だからこの平和国口ベツタにある店でバイトをして経験を積ませようということらしい。

俺みたいな子どもがバイトできるのか疑問に思ったが父さんが既にいくつかの店と話を付けてくれたようだ。

そうして学校に通い始めた俺は朝早くから山に行って修行、帰って

来てから学校に行き、学校が終わったらバイト、夕方までバイトをし
たらまた夜まで修行と忙しい日々を送ることになった。

学校がない日はこれまで通り一日中修行をしていた。

年齢が上がっていくにつれ、俺がバイトすることを許可してくれる
店も増え、様々な分野の知識や技術を習得することができた。

今思えばなかなかハードなスケジュールをしていたと自分でも思
う。辛いと思ったこともあったが、それ以上に強くなりたいという願
望が俺を突き動かしていた。

その成果もあり、俺は力を付け、戦う術も手に入れ、様々な経験を
積んでいったのだった。

始まり（後編）

時間は進み、俺たちは十四歳となっていた。

ヴィクトリカさんからイレイナがついに魔女見習いの試験を受けるのだと聞き、俺は師匠に今まで休んだことのなかった修行を休むことを伝えてからこっそりその様子を見に行った。

筆記試験の方はもう終わっているらしく、実技試験の会場では魔法使いたちが今か今かと試験の開始を待ちわびていた。

魔女見習いになりたいという魔法使いは辺境と言われる平和国口ベツタにも多くおり、その中でも最年少であるイレイナは少々目立っていた。もし彼女が試験に合格したらロベツタにおいて史上最年少で魔女見習いになるのである。

周りの魔法使いにとつてイレイナの存在は面白くないらしく、試験が始まった直後はそれぞれの標的は目の前にいるライバルであったが時間が経つにつれ、最年少である彼女に攻撃が集中し始めていた。流石にこれはまずいかと思つたが、イレイナは攻撃を避けたり防いだりするだけでなく、逆に魔法使いたちを撃ち落としていった。

魔女見習いになれるのは基本的に最後まで残った一人のみ。

今回、最後までほうきで空に浮かんでいた魔法使いは灰色の髪に溜璃色の瞳をした最年少の少女だった。

試験を最後まで見届けた俺は、帰り道の途中を歩く魔女見習いの証である桔梗のコサージュを付けたイレイナに話しかけていた。

「イレイナ、魔女見習いの試験に合格したんだってな。おめでとう」
俺は試験をこっそり見ていたことを少しの恥ずかしさから隠していた。

「ああ、カイですか……。ありがとうございます」

少し考え事をしていたのかこちらに気付いていなかったイレイナはあまり嬉しくなさそうな表情をしながら言ってきた。

「どうした？せつかく最年少で魔女見習いになったのに」

「いえ、何でもありません……」

魔女見習いになつたら普通は嬉しがると思つたけど何かあったの

だろうかと思議に思ったが、本人が何でもないとやっている以上無理にこちらから追及することもないだろう。

「これから魔女の弟子になって修行していくんだろ？」

「そうなりますね……」

魔女見習いが魔女になるには師匠となる魔女に認めてもらう必要があり、それがどれくらいの期間なのかは当人たち次第だから分からない。

だが、試験で見たイレイナの実力ならすぐにでも魔女になれるのではないかと思うほどのものであった。

「イレイナならすぐなれると信じてるよ。頑張つてな。何か困ったことがあったら相談するんだぞ」

「……はい」

応援する俺に対しイレイナは少し俯いた後返事をした。

少し妙な反応で不思議に思ったが俺たちはその場を別れたのだった。

イレイナと別れて少し後、俺はこっそりと彼女の後をつけていた。

この国のいろんな店でバイトをしている俺は人と関わることも多く、その中にはこれからイレイナが弟子入りを頼みに行く魔女たちもいた。

彼女たちは悪人ではないので問題なく弟子入りを引き受けてくれるだろうと思っていたが現実はそう甘くなく、イレイナは次々この国の魔女たちから弟子入りを断られていた。

イレイナが立ち去った後、俺は魔女たちに頭を下げて回っていた。

「お願いします。どうかイレイナを弟子にしてあげてください。彼女は小さいころから魔女になるのを目標にして努力してきました。最年少で試験に合格したことについて思うところはあるかもしれませんが。それでも、どうか彼女を弟子にしてあげてください」

必死に頭を下げる俺に魔女たちは頭を上げるように言い、彼女のことは悪く思っていない、弟子入りを断ったのは自分の実力不足だからだと申し訳なさそうに教えてくれた。

そんなことを繰り返し、ロベツタにいる魔女全員から話を聞き終わってすっかり日も暮れていたので家に帰ることにした。

帰り道の途中、俺を見つけたヴィクトリカさんが話しかけてきた。「魔女たちから聞いたわよ。イレイナのために頭を下げてくれたそうね、ありがとう。でも師匠のあてはあるから大丈夫よ」

ヴィクトリカさんはこの国の魔女ではない実力のある魔女にイレイナを弟子にしてくれるよう頼んでくれたらしい。

それを聞いた俺は安心していた。これでイレイナは無事に魔女になれるだろうと。

俺はヴィクトリカさんに礼を言い、今度こそ家に帰っていった。

●

それから俺は修業とバイトに勤しんでいた。

イレイナが魔女に弟子入りしてから約一週間後、バイト先である八百屋で店番をしていたら彼女がやってきた。

「いらつしやいイレイナ、調子はどうだい」

「……ええ、特に問題ないです」

「本当に？それならよかった。じゃあこれ、俺からのサービスの野菜ね」

「……ありがとうございます」

「頑張れよー」

少し元気が無さそうだったがきつと魔女になるための修行が大変で疲れているんだろうと考えていた。

数日後、薬草を取って来てほしいと頼まれていた俺はそれが生えている森の中に足を運んでいた。

目当ての薬草を手に入れたので森の出口に向かう道の途中で誰かが立っているのが見えた。

近づいてみると、黒い髪を伸ばし、三角帽子とローブを着たいかに

も魔法使いという姿をした女性が困っている様子で立っていた。

「何かお困りのようですがどうかしましたか」

「……あら？これはどうも。けれど私は特に困っていませんよ。魔女ですから」

「そうですね。確かに魔女のブローチを付けてますね。では俺はこれで」

「ああその前に少し待ってください。この森の出口はどちらですか」

「……ひよつとして迷ってます？」

「いえいえ、迷ってなどいません」

頑なに迷っていることを認めようとしない彼女を連れてとりあえず森を出ることにした。

「ところで貴女はロベッタの魔女ではないようですけどもしかしてイレイナの師匠ですか」

「ええそうですよ。あなたはイレイナのお友達ですか？」

「まあ幼馴染ってやつですね」

それから俺は目の前の魔女、星屑の魔女フランさんといろんな話をしながら歩いていった。

彼女自身の話や俺の話。交互に話す形になっていた。

その中でフランさんが特に興味を持ったのがイレイナと旅に出る約束をした話、魔法の才能が高くなかった俺はゴウザン師匠の弟子になったことについてであった。

「あのゴウザンさんの弟子だったんですね。ということはやはり強いのですか」

「俺自身強いかどうかは分かりません……師匠に勝ったことないですし」

「それでも長い間あの人の下にいるのなら確実に強くなっていますよ」

「ははは、それはお世辞でも嬉しいですね。ありがとうございます」

そんな話をしながら森を抜けた後、また迷子になられても困るので彼女の住んでいる家まで着いていくことにした。

着いた先は先ほどまでいたのとは違う森の奥の木の上にある家

だった。

「今日はありがとうございました。まさか蝶々を追いかけていたら迷子になってしまっただなんて……」

「やっぱり迷子だったんですね」

「やっぱりって何ですか」と言うフランさんに俺はついつい笑ってしまった。

「こちらこそありがとうございました。楽しい話が聞けて良かったです。これからもイレイナのことよろしくお願いします」

俺は軽く会釈してからバイト先に戻った。

森の中で迷子になっても魔法使いならほうきで空を飛べるから態々俺と一緒にいる必要はなかったのではと気付いたのは後になってのことだった。

イレイナがフランさんのところに弟子入りして一ヶ月経った頃、いつものように師匠の所へ行ったら家の中でフランさんが師匠と話をしていた。

話の邪魔しないように静かに他の場所に移動しようとしたところで師匠が俺に気付いた。

「待てカイ。この星屑のはお主に用があつてここに来たのじゃ」

「俺にですか」

「ええ、私はあなたに頼みたいことがあつてここに来ました」

「はあ……俺にできることなら……」

俺なんかよりも実力のあるフランさんが俺に頼みたいことなど見当もつかなかった。

「それはですね、あなたにはイレイナと戦ってほしいのですよ」

「……それはお互いの実力を知っておこうというわけですか？」

「それもあります。イレイナはあなたの実力について全く知らないようでしたし」

そうしてフラン先生はここに来た理由を語り始めた。

イレイナの両親から天狗になっているイレイナにきつい試練を与えてほしいと頼まれたが、仮にきつい試練を与えたとしても彼女は努

力して達成してしまうのが容易く想像できる程の努力家であり、一人で耐えてしまうこと。だからこの一か月間はイレイナの我慢の限界を迎えさせるためにほとんど何も教えてないこと。

そして――

「イレイナは俺が約束を忘れてると思ってる……ですか」

「はい、どうやらイレイナは自分と一緒に魔法の練習をしていた男の子が練習に来なくなり、ロベッタにある店で働きだしたことであたがこの国から出ることはないと思ってしまったのでしよう」

確かに師匠との修行は山の奥で行われているから基本的には誰も来ないから誰も言わなければ俺が修行していることは分からないだろう。

「だけどバイトしてる理由は誰かに聞けば分かったと思いますけど」

「どうやら彼女、そういうことを聞ける友人や知り合いがいないみたいで……」

「ええ……」

俺に直接聞いてくれてもよかったのになあと思ったが、もし立場が逆で自分にとって大事な約束を忘れられているかもしれないとなったら怖くて聞けないよなとも考えた。

「そこであなたの実力を直接見せつけることであなたが約束を忘れていないことを教えてあげてほしいのです。先ほどは戦ってほしいと言いましたが正確には戦って勝ってほしい、ですね」

魔法使いとしては半端な俺がイレイナと戦って勝つことで我慢の限界を迎えさせることと魔法をうまく扱える者だけが強いわけではないことを教えたかったようだ。

「でも俺がイレイナに勝てるかどうかは分かりませんよ」

「そこについては心配していませんよ。彼女は魔法使いとしか戦ったことがないでしょうしゴウザンさんからあなたの話を聞いていますので」

「師匠が？」

「そうじゃ。俺が鍛え上げたお主が今のその小娘に負けるなどありえない話よ。もし負けたらお主の顔を変形するくらい叩くからの」

「……しかし無形流は誰かを守るための流派ですよ」

「確かにそう掟に定めておる。じゃが自分から攻撃してはいけないとは定めてはいないのじゃ。第一、儂と修行するときはお主から攻撃することが多いじゃろうに」

「それは修業だから気にしてなかったのですが……」

そう言つて俺は考え込んだ。

「あまり乗り気ではなさそうですね」

「まあ……はい」

せつかく魔女に弟子入りしたのに一ヶ月間まともに修業をつけてもらえず、突然戦わされて負かされるなんて、まるでいじめてるみたいだと思つた。

「あなたの考えていることは分かります。けれどこれはあなたとイレイナのためでもあるです。私が戦うでも良いのですがそれだと彼女はあなたに何も言わずに旅に出てしまうでしょう」

「そうじゃぞ、人生には辛いと分かつていても選択しなければならぬことがある。それがたまたま今回だったのじゃ」

師匠たちにそう言われ、長い間悩んだ俺はフランさんの頼みを聞くことにした。

・
○

フラン先生に弟子入りしてから一ヶ月が経ち、一人で魔法の練習をしている姿をフラン先生に見られた翌日の昼間、彼女は私の肩を叩いて言いました。

「今から試験をするので着いてきてください」

その言葉に私は嬉しさを感じていました。

この試験でフラン先生に認めてもらえれば魔法を教えてくださいと思つていたので。

フラン先生に連れられてやって来たのは草原でした。

そこには先客がいました。黒い髪に金色の瞳をした少年です。

「カイ……ですか？ なんでここに？」

なぜ彼がここにいるのか疑問に思っている私の隣にいるフラン先生は、いつもの笑みを崩さぬまま言いました。

「今からあなたには、彼と戦ってもらいます」

その言葉に私は困惑しました。

カイは私と一緒にお母さんから魔法を教えてもらっていましたが、ある日突然来なくなりました。

お母さんからは特に心配しなくても平気だと言っていました。今まで一緒に練習していた人がいなくなるのは寂しいものでした。

時間が進むにつれてその思いは薄れていきましたが、完全になくなることはありません。

彼が私の家に来なくなっただけでしばらく経った後、彼がアルバイトをしているのを見かけました。

毎日働いている彼を見てもう魔法の練習はしていないだろうと決めつけていました。

昔にした一緒に旅に出ようという約束も忘れてしまったのでないかと不安になり、彼に質問することはできませんでした。

それからも彼と会うことはありましたが魔法を使っている姿を見ることはありませんでした。

自然と不安は確信となり、私は約束を忘れた彼に失望しました。いつしか彼と話す機会も少なくなっただけでいき、彼への対応も冷たいものになっていきました。

何度か私に話しかけてくれましたが、それがどんな内容だったのか思い出せませんでした。

「……冗談ですか？」

「おやおや。私がかような真面目な場面で冗談を言うはずがないでしょう？」

魔女見習いに最年少でなった私と魔法の練習を途中で辞めた彼の實力の差は明白だというのに戦えと言うのです。

「フラン先生、いくらなんでもこれでは私が——」

「はい、始めです」

負けるわけがないじゃないですか。そう私が言い終わる前に私の

隣から離れた彼女は、ぱん、と手を叩きました。

その瞬間私とフラン先生の間を何かが通り過ぎました。

「なっ」

慌てて何かが飛んできた方向を見てみると、カイの左手にはいつの間にか弓が握られています。弓が握られていたということは私たちの間を通ったのは矢だったのでしょうか。

一瞬考えてそう判断した次の瞬間、カイが目の前まで迫っていました。先ほど見た弓の姿はなく、右手に持った木刀を振り下ろす瞬間でした。

急いで私は魔法で防御しましたが、衝撃までは殺せず少し後ずさりしました。

「何か言ったらどうですか。ぶっ飛ばしますよ」

ここまで一言も喋らないカイに少し苛ついていた私は距離を取ってから大きめの魔力の塊を撃ちました。

撃ちだされた魔力の塊は彼に当たる瞬間、左手に持っていた盾で受け流していました。

一発では駄目ならと魔力の塊のほかにも熱線や風の刃や岩石などで攻撃しましたがどれも防がれるか避けられてしまいました。

私の攻撃と攻撃の間にカイは少しずつこちらに近づいて来ました。

「嘘……でしょ……」

「どうしたのです？ 魔術試験で他を圧倒したあなたの實力はその程度ですか？ 大したことないですね」

驚く私にフラン先生はいつもの笑みを浮かべたまま穏やかに告げてきました。

その言葉に私が反応する前に、再びカイが目の前に迫っていました。

私は逃げるように瞬時にほうきを取り出し、全力で上空に飛びました。

空中にいればカイはこちらに攻撃してくる手段は限られるので、その間に冷静になって作戦を考えようとした瞬間のことです。

私の体を影が覆いました。今日の天気は晴れ。雲一つない良い空

だというのに。

気付いた瞬間上を見上げれば、カイが彼の身長よりも長い、木でできた棒を私に振り下ろすのが見えました。

もう一度魔法で防御しますがほうきを浮かせようとしてもどんどん下に落ちていきます。

「痛っ！」

ついに地面に激突しました。体全体を魔法で防御していましたがその衝撃で一瞬動けなくなりました。

その一瞬が命取りで、カイは私の右手から杖を取り上げ、剣を私に突き付けることで勝敗は決まりました。

初めて本物の剣を突き付けられた私は恐怖からか腰を抜かしてしまい、動くことができなくなつたのです。

無表情で剣を突き付けてくるカイの顔を見て、私は自分の愚かさを自覚しました。

カイは彼なりのやり方で強くなっていたのに私は強くなることを諦めたのだと勝手に失望し、自分に勝てるはずないと高を括つた結果完敗という結果。

そして、「何か困つたことがあつたらすぐに相談するんだぞ」と彼はいつも私を心配してくれていたことを思い出しました。

そんな大事なことを忘れた私のカイへの普段の態度が、彼の怒りを買ってしまつたのだと今更ながら気付きました。

フラン先生が私たちに近づいて、「あらあら。もうおしまい？」と嘲笑したことで、私の中で様々な感情が暴れ出し、抑えられなくなりました。

信じていた人に裏切られた絶望。カイに全く手も足も出なかつた悔しさ。私だつて頑張つていたのに、若いからという理由で疎まれ、避けられ、認めてもらえなかつた悲しみ。信じてくれていた人を裏切ってしまった後悔。

様々な感情が入り乱れ、どうすれば良いか分からなくなつた結果。

「う、ぐ……うえええええええ……」

私は泣き出しました。

●
フランさんに頼まれた通り、イレイナと戦って勝つことはできた。イレイナに考えさせる時間を与えないようにしたから勝ったが、冷静に対処されていたらどうなっていたか分からない。

ほうきで空に逃げられた時は危なかった。一回のジャンプじゃ届かないから咄嗟に魔法で足場を作ることでも上を取ることができた。

そして、目の前で泣く彼女の姿を見て俺の頭の中が真っ白になり放心していた。

無形流は誰かを守るための流派。師匠から聞いた時から誰のために力を使うか決めていた。

話を聞いた時から良い予感はしなかったが、守ると決めた人を泣かせてしまったことへの後悔が俺を襲い、ただ立ち尽くすことしかできなかった。

どれくらい時間が経っただろうか、正気に戻った頃にはフラン先生がイレイナを抱きしめていた。

「やめてくださいって言っているでしょう……！またそうやって私を騙す気ですか」

「——いえ、もう騙すのはやめます。全てを話しましょう。私自身も限界ですからね」

俺は二人に近付いて。

「すまなかった……」

正座をし、手のひらを地面につけて力いっぱい頭を振り下ろした。つまるところ土下座をした。

「えっ……」

頭を下げた状態だから顔は見えないがイレイナの驚いた声が聞こえてきた。

俺は頼まれたことだったとは言え、イレイナに危害を加えてしまったこと、辛い思いをさせてしまったことを謝罪した。

まだ謝りたいことはあったが、続きはフランさんの家に戻ってから話をする事になった。

俺のせいでイレイナは身動きが取れないらしかったので背負っていくことにした。

その重みは体の成長に伴い昔と比べて重くなったはずであるが、それが苦にならなかった。

それは強くなった証なのだろうか。

フランさんの家に戻り、フランさんはこれまでの経緯をイレイナに話していた。

「我慢ばかりしては駄目ですよ。気に食わないことがあるのなら戦いなさい。嫌なものは嫌だとはつきり言えるようになってしまいなさい。適度にガス抜きをして、自分自身を守りなさい。そして、もっと周りを頼りなさい。あなたには、助けてくれる人がいるのですから。そうですね」

最後にそう言ってフランさんはこつちを見てきた。急にこつちに振られてギョツとしたが、まだ言えてないこともたくさんあったから俺はイレイナの方に向き直った。

「イレイナ、俺は君との約束を叶えるために必死に修業した。旅に役立ちそうなのは何でも行ってきた。まだ師匠には勝ったこともないいろいろなバイトで習ったことが本当に役に立ちか分からない。それでも……それでも君が良ければ、一緒に旅をさせてはもらえませんか」

言いたいことを言いきった俺はイレイナからの返事を待った。

その間は一瞬であったはずなのに俺には何時間も経っているのではないかと感じられた。

「はい……こちらこそ、よろしくお願いします」

イレイナは涙を流しながらそう言ってきた。

何か悪いことでも言ったのかと焦ったがそうではないらしかった。

イレイナは俺がヴィクトリカさんに魔法を教わらなくなった後、約

束を忘れてしまったのではないかと思っていたこと、そしてそんな俺に失望してしまい、失礼な態度を取ってしまったと謝ってきた。

当然そんなことに気にしていないし、むしろ俺が彼女に誤解させたことを謝るべきだろう。

「いやいや、俺も勘違いさせてたのがいけなかったって」

「いいえ、私が悪かったです」

「いやいや、俺が」

「私が」

「俺が」

何度も同じことを繰り返していたが、だんだんそれが面白くなり、二人で笑いあっていた。

「あのー、そろそろよろしいですか」

俺たちの会話に混ざることのできなかつたフランさんが尋ねてくる。

「あら先生、いたんですか。気付きませんでした」

「いつの間にかいなくなっていたと思っていました」

冗談を言う俺たちにフランさんは涙目になっていた。一ヶ月イレイナに何も教えていなかったしこれくらいは許されるだろう。

三人で暫く談笑し、帰ることにした俺は家を出ようとした時、イレイナが声をかけてきた。

「カイ、今日はありがとうございました。おかげで大事なことが分かりました。必ず一緒に旅をしましょうね。約束ですよ」

「ああ、約束だ。必ず一緒に旅に出よう」

そう言うイレイナの顔は、昔と同じ笑顔だった。

イレイナが弟子入りしてから一年になる頃。

相変わらず俺は師匠と山の頂上の道場で模擬戦を繰り返していた。

「そこだー！」

「甘いー！」

俺が全力で木刀を振るが師匠は読んでいたのか、躲してから蹴りを

放ち、俺は吹っ飛ばされて壁に激突した。

「どうしたカイ！それで終わりか！」

「まだ……まだ！」

木刀をしまい、取り出した弓を使って一瞬で矢を放ち、追撃すべく再び木刀を右手に取り出し、接近して左から右に薙ぎ払うように振る。

「そんな攻撃儂には通用せん！そんなことお主も分かっているじやろうに！再び吹き飛ばされたいか！」

矢を撃つてから武器を使った攻撃をする。この連携は何度も師匠に試し、毎回防がれていたことだ。

ならば今回も防がれて終わってしまうのか？

「何!？」

今までは矢で牽制してから木刀での攻撃をするというものだった。だが今回は違う。

「無形流はあらゆる武器を使う！ならばこれを使うのだからって不思議ではない！」

師匠は矢を弾き、木刀による攻撃を当たらないギリギリまで後ろに下がって反撃を試みる。

そこで木刀を振ると見せかけていた俺は木刀をしまい、左手に隠して持っていた杖を師匠に突き付ける。

杖から放たれた魔力の塊は師匠の顔に直撃。態勢を崩した師匠の顔を右手で思いつき殴った。

「ぐっ……」

今度は師匠が吹き飛ばされ壁にぶつかる。

師匠が態勢を立て直す前に詰め寄り、剣を突き付けた。

「俺の勝ちです」

「……見事じゃ」

俺は師匠に初めて勝つことができた。

「カイよ、よくぞ儂に勝つことができた」

「はい」

「これでもう儂が教えることはない。あとはお主なりの無形流を極め

るのじや」

「はい」

その後、師匠は自分のことを語ってくれた。

「師匠は旅人であったが、父さんが必死に頼み込んで俺の師匠となるようにしてくれたらしい。」

「長い間滞在することになったが特に不満はないらしいが、用が済んだ以上旅に戻ると言っていた。」

「師匠は何故旅をしてるんですか」

「ぬ、儂は儂の守る者を探しておるのじやよ。無形流は誰かを守るための流派じゃからの」

「……何年間旅をしてるんですか」

「三十年以上じやのう」

「……………」

「きつと師匠の性格に着いていける人がいなかったのだろう。結構騒がしい人だしこっそりエロ本持つてるし昼間にロベツタでスケベ心丸出しなナンパしてたし……。」

「そうじや。お主のためにこんなものを用意した」

「そう言いながら師匠は俺に包みを二つ渡してきた。」

「片方を開けてみると白いシャツやネクタイ、黒いジャケット、同じく黒いズボンとそれらに合うような革靴が入っていた。」

「師匠、これは？」

「見たままじや。これを着ればどこかで働いている社員のようじや」

「……………」

「気を取り直して俺はもう一つの包みを開けた。」

「先ほどの服とほとんど同じものが入っていた。違いはこちらの方が少し立派に見える気がした。」

「あの……………これは？」

「見たままじや。これを着ればどこかの家に仕えている執事みたいじやのう」

「どうやら師匠はスーツと執事服をくれるようだった。」

「ありがたいんですぞなんでこの二つ……………」

「秘密じゃ」

「もしかして最近こんな格好をした男性が登場するエロ本とか読みました？」

「……………この馬鹿弟子がー！！儂がそのようなもの読むわけないじゃろ！貴様に相応しい服を用意してやったんじゃ」

「随分と間が長かったですね……」

凶星らしかった。

一応師匠がただの服をくれるとは思わなかったから聞くことにした。

「この服って特別製だったりしますか？」

「その服は儂の知り合いに頼んで作ってもらったものでの。簡単には破けないし経年劣化もしないのじゃ。さらに受ける魔法を軽減する効果もある優れモノじゃ」

「それはすごいですね」

「それを作ってもらうには大金が必要での。今までのお主のバイト代の結構な量を使ったのう」

「バイト代って出てたんですか!?!」

バイト代が出たのはこの時初めて知った。

何年間も働き続けたわけだから大量のお金だったはずだ。

「そりゃ出るじゃろ。店の方もタダで働かせるわけにはいかないじゃろ」

「バイト代ってどれくらい残ってるんですか」

「このくらいじゃの」

そう言って師匠が出した袋にはまだまだ金貨が入っていた。

「思っていたより結構ありますね」

「そこはお主の頑張った成果じゃの。本来はもっと多かつたのじゃぞ」

俺はそのお金を師匠から受け取った。

「残りは修業を付けた代金としていただくー」とか言われるかと思つてたが師匠は普通に渡してきて少し驚いたのは内緒だ。

「儂からはお主にやれるものは以上じゃ。あとは精々頑張ることじゃ

な」

「はい！旅の途中で出会うことがあつたらまた手合わせをお願いします！今までありがとうございました！」

こうして師匠は旅に出ていった。

山の頂上には誰もいなくなった家と道場が残されていた。

元々この山は父さんの所有物であり、父さんはたまにここに一人で来て体が鈍らないようにしていたらしい。師匠がいる間はこの場所を貸していたということだ。

俺は師匠に認められたことをまずは両親に報告しに行った。

父さんと母さんからは今までよく頑張ってきたねと褒められた。

次にイレイナに報告しにフランさんの家に行ったら、そこには魔女のブローチを付けているイレイナがいた。

話を聞いたところイレイナもフランさんに認められ、魔女になったらしい。

お互い師匠に認められたことを喜び、数日後に旅に出ることになった。

数日後の朝。

家を荷物をまとめ、師匠から貰ったスーツを着て準備を済ませた俺は両親に呼ばれ、二人の前に立っていた。

「カイ、ついにこの日がやってきたわね」

「うん」

「カイ、準備はできたかい」

「うん」

母さんと父さんの言葉に俺は頷いた。

毎日一緒に過ごしていた家族と離れるのは寂しいけど、また会うことができるから悲しくはない。

「これを持っていきなさい」

そう言って母さんが渡してきたのは一台のカメラ。

「これであなたの撮りたいものを撮ってきなさい。そしてその写真を私たちにも見せてね」

「ありがとう。絶対に良い写真を撮るよ」

「手紙も送ってね」

「絶対に送る」

母さんは俺を抱きしめた。

「カイ、これから危険なことがあるかもしれないけど、無理したら駄目だよ」

「無事に帰ってくるよ」

「そして大事な人のこともしっかり守ってあげなさい」

「当然」

父さんも俺を抱きしめた。

「いってらっしゃーい、元気でねー」

「元気でなー」

「そっちこそ元気でなー」

手を振って見送ってくれる両親に俺も手を振り返して平和国口ベッタの門まで歩いた。

門に行くまでの途中、見知った顔の人たちに門出を祝ってもらった。

俺も感謝を述べてから手を振った。

門の前で待っているとローブを着て三角帽子をかぶったイレイナがやってきた。

「お待たせしました。スーツですか、似合ってますよ」

「ありがとう、イレイナも似合ってるよ」

「ありがとうございます。それでは行きましょうか」

「その前に一枚写真を撮らせてほしい。門出の記念として」

「良いですけど、少し恥ずかしいですね……」

俺は門兵に頼んで二人並んで立っている写真を撮ってもらった。

「よし、それじゃあ行こうか」

旅の途中、楽しいことや嬉しいことに会おうだろう。悲しいことや辛いことにも会おうだろう。

二人ならば、楽しいことも二倍になるだろう。二人ならば、辛いことがあっても支え合うことができるだろう。

期待に胸を膨らませ、俺たちは一緒に門をくぐり、旅に出た。
これが、俺たちの長い旅の始まりである。

魔法使いの国と小さな炎（前編）

旅に出て二年は経っていた。

殺伐とした山岳地帯を、俺たちは飛んでいた。

俺の場合は飛んでいたというよりも跳んでいたが。

前へ跳んだら途中で空中に足場を作り、もう一度跳ぶことの繰り返しをしていた。

当然魔力を使うので普通の道が続いているからしないのだが今回は地形の関係上仕方なかった。

「……もうすぐですね。ちゃんとほうきの練習はしましたか？」

「大丈夫大丈夫、昔乗ったことあるんだから乗れるって」

「昨日の内に確認するようお願いした筈ですが？」

「いやー、昨日は新しい魔道具を完成させたくて……」

「……………」

何やってるんですか……と言いたそうな瑠璃色の瞳がこちらを見ってくるが気にしない気にしない。

ほうきにはヴィクトリカさんの所で教わっていた時に乗れてたしこれから訪れる国の入国審査は問題ないはず。

「素敵などころだと良いな、魔法使いの国」

「そうですね。魔女である私はちやほやされること間違いなしです」

「偉大なる灰の魔女様、どうかこの店のパンを全部持って行ってくださいーとか言われるかもな」

「それは良いですね。そしたら少し分けてあげますよ」

「ははは、ありがとうございます魔女様」

魔法使いの国。

そこは魔法使いでないと入れない国らしく、入国するためには魔法使いであることを証明しないといけないらしい。

父さんと母さんも訪れたことがあるらしいが魔法を使えない父さんは中に入ることができず、門の前で野宿したらしい。

母さんは国を満喫したとか。父さん……。

そんなことを思い出している内に目的の国が見えてきた。

高い壁がまず目に入り、その下に見つけた門に俺たちは向かった。

「ようこそ、魔法使いの国へ。どうぞ中へお入りください、魔女様」

「魔法使いかどうかの審査はしないんですか？」

「あなたが飛んでくるのを見ていましたから。それにそのブローチは紛うことなく魔女のもの。どうぞお入りください」

なるほど、魔法使いの最高峰である魔女の証であるブローチを付けているイレイナは審査するまでもなく優秀な魔法使いだとわかるな。

門をくぐるイレイナに俺も続いて行こうとしたところ門兵に止められた。

「あつ、あなたは別ですよ」

「俺も彼女と一緒に来てたのが見えてたと思いますけど」

「確かに見てましたがどうやらほうきを使っていなかったようでしたのであなたには審査を受けていただきます」

「魔女と一緒に旅をしているのが証明とかになったりは……？」

「しません」

「ですよー」

まあそりやそうだ。魔女と一緒にいるからと言ってその人も魔法を使えるとは限らないわけだから。

分かっているながらこんな会話をするのは単純に俺が会話を楽しみたいからだ。

少し時間がかかるだろうから俺はイレイナに声を掛けた。

「イレイナ、先に行ってくれ。後で合流しよう」

「分かりました。宿は私の方で探しておきます」

そう言っつてイレイナは国の中に入っていった。

彼女のことだから、「魔女である私は高いホテルに泊まるのは当然のことです。ふふん」とか言っつて立派なホテルを取るのだろう。

そんなことを考えながら門兵に向き直った。

「では入国審査をお願いします」

「はい、ではまず……」

俺は門兵の質問に答えたり、簡単な魔法を見せた。

「ありがとうございます。では最後にほうきで空を飛んでみてください」

い」

「了解です」

俺はほうきを取り出した。

俺のほうきはイレイナのと比べると人が乗るための木の部分が太めに作られている。

このほうきを作ったのは師匠に弟子入りした後だったと思うけど理由は思い出せない。

今は審査を通過することの方が重要なため、ほうきに跨り、飛ぶように魔力を込めた。

「ん？うおっ!？」

少しだけ上に浮くつもりがすごい勢いで上に飛んでいき、高度を下げようとしたところ、これまたすごい勢いで落ちていき俺は地面と激突した。

「……………これでは我が国に入国することはできませんね」

「ちよつとだけ待ってください！久しぶりに乗ったから感覚が思い出せてないだけでちゃんと乗れますので」

「はあ……わかりました。ではしっかり乗れるようになったらまた来てください。一応ここから見えますけど」

「ありがとうございます」

父さんと同じで野宿はしたくなかった俺はほうきの練習をすることにした。

しかし、数時間練習したところで動きが改善されることはなかった。

既に夕方になったいた。

「どうしてだ……どうして上手くできないんだ」

俺は頭を抱えていた。

魔法使いにとってほうきで空を飛ぶのは基礎だと言える。イレイナ程魔力を持っているわけではないが、それでもほうきに乗れないほど魔力がないわけでもない。

「もうすぐ日が落ちてしまいますよ。しかしあなたのほうきは少し太いですね。まるで跨いだり座ったりするのを考えてないような作り

です」

俺たち以外の入国者がいないため、ずっと見ていてくれた門兵がそう言ってきた。

その言葉に俺はハツとした。

「そうだ、その通りですよ！これは座ったり跨いだりするためのものじゃなかったんです」

俺は門兵にそう言っつてこのほうきの正しい使い方を見せる。

「ほうきの上に立つ……ですか。初めて見ましたよ」

そう。このほうきは空中で戦う場合を想定して作られたもので、手足を自由に使えるようにと少し太めとすることでほうきの上に立てるようになっている。

今度こそ自由にほうきを乗りこなして見せる俺に門兵は満足そうに頷いた。

「ほうきでの飛行を確認しました。どうぞ中へお入りください」

「ありがとうございます」

笑顔で門兵が迎えてくれ、俺も少し嬉しくなって手を振って進んでいった。

門を越えたところで目の前に二つの看板が並んでいた。

この意味はほうきの練習をしている最中に門兵が教えてくれたので意味は分かっていた。

空を飛ぶことを推奨するということらしいが、俺は歩くことにした。

もうすぐ夜になってしまうので俺は急いで宝石屋に入った。

俺は店主に宝石を渡していくらになるか見てもらった。

「これはここいらでは珍しい宝石だねえ。そうだね、金貨五枚でどうだい？」

「もう一つあるので合わせて十五枚でどうですか？」

「お兄さんなかなか強欲だねえ。十三枚でどうだい？」

「ならそれで手を打ちましょう」

この宝石は以前訪れた国で原石の状態で買ったものを俺が加工したものだ。

この交渉も俺が旅人として見つけた娯楽の一つである。お金を稼げるし楽しめる。一石二鳥だ。

店主からお金を受け取った後、店を出ると既に真っ暗だった。思っていたよりも時間を掛けすぎていたようだ。

とりあえずイレイナに合流しようと右手の中指につけてある銀色の指輪に魔力を込める。

この指輪は俺が作ったもので、魔力を込めれば同じ指輪をした人の位置が分かるというものだ。

旅を始めた頃、待ち合わせ場所をせずに別行動をしていたらお互い会えないまま深夜になっていたことがある。

それを解決するために作ったのがこの指輪だ。

この指輪を渡した時イレイナがよく分からない反応をしていたが、理由を説明すると、「そういうことでしたか……」と言って受け取って俺と同じく右手の中指につけていた。

指輪を頼りに進んでいくとイレイナの姿が見えた。

彼女もこつちの方に向かおうとしていたらしかつたが、何やら元気がない。

「どうしたイレイナ？何かあったか？」

「はい……実はブローチを失くしてしまいました」

イレイナが語ってくれたのは国に入った後の話。

ほうきで空を飛んでいたら魔導士と衝突したこと、立派な宿屋には門前払いされたこと、安宿でその魔導士と再会したこと、その時にブローチがないことに気付いたことについてだった。

「そしてこの時間まで探していたんですけど……」

「見つからなかったってわけね。怪我はしなかったか？」

「私の方は大丈夫でしたし相手の方の怪我は治しておきました」

「まあそれなら大丈夫か……？あんまり好ましくないけど。んでブローチを探すのは俺に任せてくれ。丁度いい機会だ」

「何をするんですか？」

「ふふん、これよ」

俺が鞆から取り出したのは二本の途中で曲がっている金属の棒である。

「これは俺が昨日完成させた魔道具でな。この棒を平行に持って歩いていると探し物が近いときに反応して外側に開くんのだ」

「ほうきの練習せずに作成してたやつですね。ではお願いします」

「おうよ」

そうして俺は魔道具を持ってイレイナが通った道を歩き出した。

少ししてある建物の前に来た時に魔道具が反応した。

「おっと。どうやらこの建物にあるらしいぞ」

「……………ここは今日泊まる予定の宿ですけど。私の荷物に反応してませんか？」

「あれおかしいな……………ちゃんと作れたと思ったんだけど……………」

「はあ……………今日はここまでにして休みましょう」

「……………そうだな」

シヨックを受けているイレイナを助けられなくて悔しい思いをしながら俺たちは安宿に入った。

「いらつしやま……………ってイレイナさんでしたか。遅かったじゃないですか心配しましたよって隣の方は？」

カウンターにいたのは黒髪の少女。歳は俺たちより下って感じかな。

「私と一緒に旅をしているカイですよ、サヤさん」

「どうも。君がイレイナとぶつかったサヤちゃんだね。怪我は大丈夫かい？」

「イレイナさんに治してもらったので平気です！」

「大丈夫そうだね。んじゃ俺の部屋を案内してくれないかな」

「はい、こちらです」

俺は彼女に連れられて宿泊する部屋にたどり着いた。イレイナが二人分受付してくれていたので彼女の隣の部屋だった。

荷物を部屋に置いて浴衣に着替えた俺は大浴場を使用することにしました。

部屋を出たら丁度イレイナも大浴場に行くみたいだったから一緒に行くことにした。

男女別に分けられている入口の前で別れて俺は誰もいない大浴場を満喫した。

……流石に混浴だったり分けられているか分からない大浴場には行かないぞ？

少し風呂に浸かりすぎたかと思ったが、まだイレイナは出てきてないみたいだった。

なので俺はカウンターにいた店主に頼んで水を二杯用意してもらい、大浴場の前でイレイナを待った。

ようやく出てきたイレイナに水を渡した。

「ありがとうございます」

まだ少し元気がないな。何とかして元気付けられないだろうか。

何か面白い話題でも出すか？何かあげるか？何か笑わせるようなことをするか？

その答えが出ないまま俺たちは自分の部屋の前に戻った。

「あーイレイナ、元気出してな。俺も手伝うからさ」

「ありがとうございます。それではおやすみなさい」

「おやすみ」

そうやって俺は自分の部屋のドアを開けて中に入ろうとしたが、自分の部屋のドアを開けたイレイナが何故か中に入らないでドアを閉めていた。

「どうした？」

「いえ……幻覚かもしれません。代わりにドアを開けてもらってもいいですか」

意味が分からなかったが俺は彼女の部屋のドアを開けた。

「あ、どもー。カイさんの部屋はこちらではなく隣ですよー」

「あっはい」

部屋の中にはサヤちゃんの姿。

鍵は掛かっていたはずだし、ここはイレイナ一人だけの部屋だった

筈だが。

「もしかして彼女と相部屋だった？」

「違います」

「僕はこの部屋で働いているんですよ？予備の鍵くらい持ってて当然です」

「……………」

レイナは黙ったまま、鍵束をこちらに見せつけていたサヤちゃん
の頬をつまんで弄りまわしていた。

彼女が将来犯罪者にならないか不安だ。

端的にまとめると、サヤちゃんは妹と一緒にこの国に来ていたが妹
は先に魔女見習いになっていなくなり、焦りからか魔女である（自称）
レイナ（魔女のブローチなし）に魔女見習いになるための極意を教
えてほしいということらしい。

この時サヤちゃんは土下座をして頼み込んでいたが、それを見るイ
レイナの目が少し怪しかった。

俺も昔レイナにやったことがあるけどもしかしてこんな目で見
られてたのか…………？

少し怖い。

結果的にレイナは彼女の頼みを聞くことにした。

当然そうなると魔女のブローチを探す時間が減るのである。イレ
イナはそのことを少し気にしていた。

「俺もブローチ探すの手伝うからレイナは気兼ねなくサヤちゃんに
魔法を教えてあげてくれ」

「良いんですか？それだとあなたの時間を奪うことになりますけど」

「この国の観光や情報収集のついでに行うだけだから心配無用。その
代わりと言っては何だけどたまにそっちの様子を見に行かせてもら
うかな」

「それくらいは構いませんけど。ではそれでよろしくお願いします」

それからレイナによる魔法の特訓が始まった。

俺は魔法について教えることはないので国を見て回ることにした。

特に考えもなく道を歩いている最中、路地裏の方から声が聞こえた。

気になった俺はその場所に向かった。

そこには四人の十歳くらいの子どもたちがいたが、蹲る赤い髪をした少年をほうきに乗った少年三人が囲んでいる状況だった。

この国特有の遊びなのかと思ったが、そういった雰囲気ではなさそうだ。

「どうしたく魔導士見習い。何かやり返してみろよ。できるもんならなく」

「お前みたいなやつじゃ俺たちに何年かかっても勝てっこないんだからな」

「だからお前は魔導士見習いなんだよ！」

「……………」

どうやらいじめだ。

魔法使いは上から魔女、魔女見習い、魔道士と分類される。

だが彼らが言う魔道士見習いというものは初めて聞いたが恐らくは蔑称だろう。

見た以上無視することはできない俺は彼らの前に立った。

「君たち、そこで何をやっている？」

「ゲ、大人だ逃げろ！」

一人がそう言った後三人はほうきで空に逃げていった。

俺は残された一人の傍によってからしやがんで声をかけた。

「君、大丈夫かい？」

「……………」

「もしかしてどこか怪我してるのかい？」

「……………」

特に怪我もなさそうだが、彼からの反応はない。

「魔導士見習いって何か教えてくれないかい？お兄さんはこの国に来たばかりだね。分からないことが多いんだ」

「……………お兄さんも、僕のこと魔導士見習いって言うんだ」

「いやいやそうじゃない。さっきの子たちの話を聞いててね。意味が

分からなかったから知りたいだけなんだよ」

「魔導士見習いってのは僕のように魔法を上手に扱えない魔法使いのことを言うんだよ。魔導士よりも下だから魔導士見習い」

「なるほど、ね。ところで君はどこまで魔法を使えるんだい？」

「ほうきは乗れる。魔法もいくつか使える。けれど同年代の子たちに比べたらほうきの速度は遅いし使える魔法の数も少ない」

そう言っただけはほうきに乗って空を飛び、目の前でいくつかの魔法を実践して見せた。

確かに同年代の子と比べたら彼の魔法は貧弱なのかもしれない。

「君の実力はおおよそ分かった。だけどね、別に魔法だけが全てってわけじゃないのさ。お兄さんだって昨日までほうきの乗り方が分からなくなっただけこの国に入るのに苦労したんだよ？」

「え、本当？」

「本当の本当さ。なんなら俺が君くらいの年齢だった頃なんて扱える魔法の種類なんて君より少なかったくらいさ」

これは師匠から練習する魔法を決められていた結果、その時は使える魔法が少なかったというだけで、今は人並みにはいろんな魔法が使えるのだが。

それを言うのは酷というもので黙っているのが吉。この子も時間を掛ければいろんな魔法が使えるだろうしな。

「当時、小さい俺と一緒に魔法を教わってた子がいるんだけど、その子は俺よりも格段に優秀でね。俺はその子と並び立つことができるように魔法以外の修行をしたものだよ」

「お兄さんって強いなの？」

「強いよ強い。魔女と近い距離で戦ったら大体勝てるくらいには強いよ」

「遠い距離だと？」

「その魔女次第かなー。魔女の中でも戦闘に長けた魔女や薬を作るのに長けた魔女など様々だからね」

ちなみに離れた距離からイレイナと戦ったら俺は負けるのだ。遠距離だけだと俺は決め手に欠けるからな。

「僕もお兄さんみたいに強くなれるかな……?」

「それは君の努力次第だね。俺だって数日で強くなれたわけじゃないからね」

俺が思い出すのは修業の日々。

突然師匠が思いついたことを取り入れたりして大変なことも多かったが、今振り返ると良い思い出だ。

「お兄さん、僕を強くしてください」

「顔を上げなさい」

彼は俺に頭を下げた頼み込んできた。

顔を上げた彼の眼には先ほどまで蹲っていた少年と同一人物だとは思えない程意志の強さを感じさせた。

「まず君に言うておくことがある。俺は旅人でいつこの国を離れるかわからない。そして俺はたくさん魔法を教えることができない」

「はい」

「だから君に教えられることは簡単な体の使い方と特訓方法だけ。それでも良いかい?」

「はい!」

「それでは今から特訓を始めよう。君の名前は?」

「エイデンです」

「俺はカイ。よろしく、エイデン」

「これからよろしくお願いします、先生!」

イレイナに続き俺まで誰かに教えることになるとはな。

だが先生と言われるのは悪い気分じゃない。

俺たちは誰もいない広場に行き、エイデンと向かい合った。

「ではエイデン、君にとって力とはなんだい?」

「えーっと、敵を倒すことができるものですかね」

「まあ外れてはいないな。けど正解でもない」

「なら何ですか?」

「正直言ってしまうところの問題には正解がないんだ。だけどこれが重要なんだ」

「重要……ですか?」

「その人が力をどういったものと捉えているかによって、力の振るわれ方というものが変わってくるんだ。例えば力とは他者から欲しいものを奪うためのものだと考えている人の場合、力は何の罪もない人々に向けられ、多くの悲しみを生むだろう。君の考えている敵を倒すものだという考えも、敵という対象の定義によってはこれと同じ結果を生むことになるかもしれない」

「そんな……」

絶望したような顔をするエイデン。

「もちろん君がそんなことをする人間だとは思ってないよ。そうやってしまうという可能性の話さ」

「では、どうすれば良いんですか？」

「さつきも言った通り正解はない。一国の王の場合、例えの考え方も必ず間違いだとは言いつれぬ。暴君という存在もいるしね。けど俺たちは王じゃない。できることは限られるし何かをしなくてはいけない義務もない。だから俺たちは自分の手が届く範囲の大切な人たちを守るためのものという考え方で良いんだよ」

「なるほど」

「君には大切な人がいるかな？今はまだいなくても良い。けれど大切な人ができた時、その人たちを守るだけの力がないと後悔することになる。これだけは間違いない。分かってくれたかな？」

「はいー」

良い返事をする彼の顔は最初に会った時よりも良いものとなっていく。

「よし、それじゃあまずは俺が強くなった方法を教えよう。過重力という魔法があつてね。それを一日中自分に掛け続けて生活するんだ」

「えっ」

その日は夜になるまでエイデンに過重力を使えるように指導した。最後の最後で使えるようになった辺り、俺より才能があるのかも少しない。

明日の待ち合わせ場所と時間を決めてから俺たちは別れた。

俺も負けられないな。なんて考えながら宿に戻った。
「私のブローチ探してくれましたか？」
あつ。

魔法使いの国と小さな炎（後編）

すっかりブローチを探すことを忘れてた俺はイレイナに謝った後、宿屋の店主に頼んで厨房を借りてパンを作ることと彼女の機嫌を取っていた。

明日はエイデンと会う前にすっかりブローチを探しておこう。

明日は何を教えようかと考えながら俺は眠りについた。

次の日、エイデンとの約束の時間の前にイレイナのブローチを探すことにした。

だがどこを探してもブローチを見つけられないまま、約束の時間になった。

「先生、今日は何を教えてくださいですか？」

「今日は体の動かし方について教えようと思う。エイデンは普段から体を動かす運動とかしてるかな？」

「いえ、特には」

「なら今日は体を動かしてみようか。鬼ごっこでいこう」

「鬼ごっこですか」

「俺が逃げるからエイデンは全力で俺を追いかけろ。俺は今のエイデンが全力で出せる速さと同じ速さで逃げるから頭も使わないと捕まえることができない。質問はあるかい？」

「ないです」

「それと過重力は自分に常に掛けておくこと」

「今できました」

「なんだい？」

「僕はまだ一日中過重力を掛け続けられるほど使い慣れていません」

「あーそうだったね。なら過重力の魔法が切れたら一度休憩にしよう」

「分かりました」

「よし、それでは始め！」

その合図と共に俺はエイデンから逃げ始めた。

エイデンは必死に俺を追いかけたが普段からあまり運動しないせいかすぐに息切れを起こしていた。

それでも諦めずに追いかけてくる彼は良い眼をしていた。

俺は逃げながらカメラを取り出し、シャッターを切っていた。

何回かエイデンの過重力が切れ、その度に休憩を取って少ししたら再会と繰り返している内に夕方になっていた。

「よし、今日はここまで」

「はあ……はあ……ありがとうございました」

「今日はたくさん動いて明日は体が動かないかもしれないから明日は休みだな」

「分かり……ました……」

自分の体ももう動かず、明日に響くことが分かっているのかエイデンは特に反対することはなかった。

俺は動けないエイデンを背負って彼に案内してもらいながら彼の家に行った。

彼の家はこの国では珍しくもない建物であり、一般的な家って感じだ。

家の前に辿り着いて、彼を下ろして宿屋に戻ろうとしたら、家のドアが開いて赤い髪をした女性が出てきた。

「あら、エイデンじゃない。おかえりなさい」

「ただいま母さん」

「えつと……こちらの方は？」

「カイ先生！俺の先生なんだ！」

「あなたがカイ先生なのね。ありがとうございます。いつもは暗いこの子が昨日から元気になってどうしたのかと聞いたら貴方の名前が出たの。親として子どもの悩みを解決することができなくて残念ですけれど貴方にはとても感謝しています」

「気にしないでください。俺はただ彼に切っ掛けを与えたにすぎません。あなたが育てた息子のエイデンは強い子ですよ」

「先生……」

エイデンが感動した目で見てくる。少し恥ずかしい。

「彼はこれからも悩み事にぶつかるとしよう。その時こそ家族であるあなたの力が必要でしょう」

「はい。エイデンは私の宝物です」

「では俺はもう行きます。今日の彼は少し張り切り過ぎたので明日は動けないかもしれません。肉料理でも食べさせて力を付けてあげてください」

「先生、じゃあねー」

手を振るエイデンに俺も手を振り、彼の母親に会釈してから今度こそ俺は宿に戻った。

イレイナにブローチが見つからなかったことを報告してから俺は自分の部屋に戻った。

時間があるのでゆっくり寝る支度を済ませ、魔道具の調整や作業を行ってから寝ることにした。

滞在四日目である。

今日はエイデンとの特訓は休みだから、相変わらず見つからないブローチ探しの後イレイナ達の様子を見ることにした。

屋根の上で風魔法の特訓を行っているようだ。

二人並んでいる姿をカメラに収めておいた。

声を掛けようと近付いた瞬間のことである。

イレイナはサヤちゃんの後方に回り込み、両手首を掴んで何か耳元に囁いていた。

俺は咄嗟に隠れた。なぜ隠れたのかは分からないけど隠れてしまったのだ。

ちらりと彼女たちを見るとサヤちゃんの顔は耳まで真っ赤だった。

もしやイレイナは魔法を教えるという立場を利用してサヤちゃんを誘惑してるのか……？

確かにイレイナは旅先で男性より女性に優しくしている姿をよく

見るけどそういうことだったのか……？

男性より女性の方が好きということなのか……？

それは、なんだか、シヨック、だな。

・
○

サヤさんに特訓を付け始めて三日目のことです。

サヤさんに風魔法を教えてお昼時になった頃、特訓を終えて一緒にお昼でも食べようかと話していた私たちの前にカイが現れました。

「もう特訓は終わったので見るものはないですよ」

「ははは、そうか……。それは残念だったな……」

カイは何だか元気が無さそうでした。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ。ちよつとこの世の真実を知っただけだから。そのうち元に戻ると思うから」

意味が分かりません。

「カイさんも一緒に昼はどうですか？」

「ありがとうサヤちゃん。ならお言葉に甘えさせてもらおうかな……。俺のことは置物だと思ってくれて良いから……」

「どうしたんですかね？」

「私が聞きたいです」

変になっているカイを連れて店に入った私たちはそれぞれ頼みたいものを頼みました。

私は安い日替わりランチを、サヤさんはカルボナーラです。

カイは「なんでも良いです。俺は置物なので、あなたたちの邪魔をしないので。……なんで着いてきてしまったのだろう」なんて言っていたので私と同じ日替わりランチを頼んでおきました。

少しした後、料理が運ばれてきました。

今日の日替わりランチは以前食べたものと同じきのこクリームパスタでしたか。

前回はサヤさんにきのこを押し付ける……。じゃなくてあげてましたが、今回はカイの皿にきのこを全部移しました。

「イレイナさん、きのご嫌いなんですか？」

「イレイナはきのご嫌いでその師匠のフランさんも嫌いだし母親のヴィクトリカさんも嫌いだよ」

「へえー」

なんでフラン先生やお母さんにまで飛び火してるんですか。

「ならイレイナさんが頼んだ料理にきのが入っていた時はいつもカ伊さんが食べてるんですか？」

「そうなるね」

「イレイナさん、この前ぼくに偉そうに語っていたことは何だったんですかー。もー」

膨れっ面になるサヤさんに私は、「魔女になっても好き嫌いしちやいけないなんて言いましたっけ？」とくすりと笑いながら応えました。

「イレイナは魔女見習いの時もきのこを食べないようにしてたよ」

「何言ってくれてるんですか!？」

「イレイナさん……」

そんな感じで私たちはお昼を食べ、それぞれやることがあるので店の前で別れました。

「と、言うことがあったんだよ」

「はあ……先生の言いたいことがよく分かりません。正直どうでも良いんですけど」

イレイナ達と別れた俺はエイデンの家に遊びに来てた。

エイデンは筋肉痛のせいでベッドからなるべく下りないようにして、ベッドの上で魔導書を読んでいた。

「酷いことを言うなあエイデン君。君は幼馴染が実は女の子好きだったなんて経験はないからそう言えるんだ」

「君付けはやめてください。面倒くさい先生です……。僕からすると、それは先生の勘違いなんじゃないかと思えますよ」

「何を根拠にそんなことを」

「その状況からすると先生の幼馴染は魔法を撃つ感覚を体で憶えてほしかっただけなんじゃないですかね。俺も母さんにやってももらったことがありますよ」

「でもサヤちゃん顔は赤くしてたし……」

「先生の幼馴染は美人なんでしょう？なので同性でも密着されて顔を赤くするかもしれませんが。それかそのサヤちゃんって人の方が同性が好きなのかもしれませんよ」

「そうかなあ……」

「きつとそうですよ」

「そうか……そうか！よし、なんだが元気が出てきた。今日はありがとうエイデン。お礼として俺が作ったパンを置いて行こう！家族皆で食べてくれ！」

「ありがとうございます。明日は普通のテンションでお願いしますよ」

答えを得た俺はエイデンの家を出ていった。

その日の残りの時間はこの国に許可を取り、露店を開いて俺が作った魔道具やアクセサリを売ることにした。

商品を売る間、客にイレイナのブローチについて聞くが特に有益な情報はなかった。

滞在五日目

今日はエイデンと特訓なのでブローチを探した後、待ち合わせ場所に向かった。

エイデンは先に到着しており、既に準備万端らしい。

「じゃあ今日も一昨日と同じことをやるぞ」

「はい！よろしくお願いしますー！」

一昨日と同じく俺は国の中を逃げ回り、エイデンがそれを追う。

同じ速度で走るわけだが、体の動かし方が分かってきたのかその速度は前回よりも速くなっていた。過重力の持続時間も伸びている。

「良い速度だ！だがそれだけでは俺を捕まえられんぞ」

「いいえ、あなたはここで俺に捕まります！」

「むっ」

俺が角を曲がった先は行き止まりだった。

俺はここに来て日が浅いから地の利は向こうにある。

「だが、こんな壁！乗り越えれば何の問題もない！」

俺は壁を乗り越えようとした。

「させませんよ！」

もう少しで壁を登りきるところで向こう側からほうきが現れた。

そしてほうきは俺目掛けて突撃してきた。

「ぐっ」

当然横に避けようとしたが、俺を挟むように左右から魔力の塊が飛んできた。

魔力の塊に当たった俺はほうきによって地面に押し戻された。

そしてエイデンが俺に近付き、「捕まえました」と言っただけで俺に触れた。

「見事だエイデン。君の成長は俺の予想を超えていた」

「ありがとうございます」

「君は力の使い方、体の使い方、頭の使い方、魔法の使い方を学んだ。これ以上俺から教えることはない」

「そんな……僕はまだまだです」

「今の君ならもう大丈夫だ。それでもまだ俺から教わりたいのなら今より強くなってみせろ。そしていつか俺と再会した時、また教えることにしよう」

「先生……はい！今までありがとうございます！」

「こちらこそありがとう。俺も学ぶことが多かった」

記念として写真を俺とエイデンで写真を撮り、その一枚をエイデンに渡した。

笑顔で写真を受け取ったエイデンは手を振りながら帰っていった。少しだけ気になった俺は彼の後をバレないように着いて行った。

「おい魔道士見習い、最近何やら元気そうじゃないか」

「根暗なお前がどうしたんだ」

「何か言ってみたらどうだ？」

俺がエイデンと出会った初日、彼をいじめていた三人だ。

彼がどう出るか見させてもらおう。

「僕は……魔道士見習いなんかじゃない！僕はカイ先生の弟子エイデンだ！」

「なんだこいつ……今までとは違うぞ！ちつ、今日はここまでにしといてやろう！」

そう一人が言った後三人は去っていった。

今まで言い返せなかった三人に立派に言い返したエイデンに俺は満足していた。

俺が気にするまでもなかったようだ。

弟子とは一言も言わなかったんだが、まあいいかと思いつながら俺は炎のように赤い髪に背を向けて歩き出した。

きつとあの三人もエイデンのことを心配していたのかもしれない。

言い方や方法は悪かったがエイデンに怪我をさせたりはしていなかったし、言葉の端々に言い返させようとしていた部分があった。

彼らも根は良いやつなのだろう。それを表現する方法を探している最中なだけで。

近い将来彼らが本音を言い合えたのなら、良き友人になるかもしれない。

ただそれは旅人である俺は知りようのない未来である。

あの小さな炎のこれからに幸あれ。

宿屋に戻った俺にイレイナが「ブローチの行方は分かりましたので明日にはこの国を出ます」と言ってきた。

細かい経緯を聞いた俺は了承し自分の部屋に戻って支度を済ませた。

支度を済ませた俺は少し暇になり、カウンターにいた店主と飲み物

を飲みながら話すことにした。

「あの子はね、妹がいなくなつてからいつも寂しそうだったけどあんな達が来てからは笑顔が増えたよ」

「そうですか、まあ俺よりイレイナのお陰ですね」

「あの子が楽しそうに話してくれることの中に、あんたもいたよ」

「それは嬉しいですねー」

俺たちがそんな話をしていると大きな泣き声が聞こえてきた。

この泣き声に含まれている感情は後悔だろうか。それとも嬉しさだろうか。またはそのどちらもか。

どれであつても彼女はこれから前を向いて歩いていけるだろう。頑張ることができるだろう。

「あんな達の宿泊代はタダにしておいてやるよ」

「おやおや、それはありがたいですね」

「これくらい、安いもんさ」

「彼女のこと、よろしくお願いしますよ」

「当然のことさ。と言つても、後一年もここにはいないだろうさ」

「彼女のこれから乾杯、ですね」

そう言つて俺はコップに入った水を飲んだ。

●
魔法使いの国を出てから半年が経つただろうか。

俺とイレイナは相変わらず旅を続けている。

次はどこに行こうかと考えながらイレイナと入った書店で、サヤちゃんの名前が載った新聞を見つけた。

その新聞を買った俺たちは宿に戻り、飲み物を飲みながら新聞を読んでいた。

そこには彼女のコメントが綴られていた。

彼女のこれまでの経緯や苦悩、旅人に救われた話など、感動的な話である。

そして最後にはこう書かれていた。

『故郷に帰って一人前になったら、大好きな旅人さんと置物さんに会いに行きます』

隣の灰色はプルプル震えている。

いやはや、感動的な話だったな。

俺はコップに入った水を飲んだ。

花の国の兄妹

春と夏の間の中途半端な時期のこと。

俺たちは広葉樹の森の中を通っていた。

この森は特に木が多く、空の色を見ることは叶わなかった。

ほうきで飛んでいるイレイナは木にぶつからないよう左右に動くが、枝に三角帽子が引っ掛かってしまった。

後ろから走っていた俺はその帽子を取ってイレイナに被せた。

「ほらよ」

「ありがとうございます」

それから俺たちは森を進み続けた。

少し経った後、道が開けたと思ったらそこには広い花畑があった。

その花畑には様々な種類の花が咲いており、どれも見た目は綺麗なもののばかりだ。

「うわあ……」

「……こんなに大きな花畑は初めて見たな」

隣を飛んでいるイレイナはこの光景に心を奪われているようだ。

俺たちは花畑の上を進み続けた。

少しの違和感を俺は感じながら。

「あら……」

俺たちは広大な花畑の中に人がいるのを見つけた。

イレイナはその人物の下に向かい、声を掛けていた。

俺も彼女の後を追いつつ、話を聞くことにした。

そこにいたのは俺たちと同じくらいの年齢の女の子。

彼女はこの花畑を管理するためではなく、花が好きだからここに訪れたのだと言う。

この花畑は誰にも管理されることなくたくさんの花を咲かせているらしい。

近くにある国、言い換えれば俺たちが向かっている国の周りでは花畑には絶対に千切れない恋結びの花が咲いているという怪しい言い伝えもあるのだとか。

「あなたもここでその花を？」

「いいえ」

そう答える彼女の一瞬見えたその表情は、人間性を感じさせない、形だけの笑顔だった。

「……………え？」

「はっ……………違うの。この花を……………あなた達がこれから向かう国に届けてほしいの」

そう言いながら彼女はイレイナに花束を渡そうとする。

その花束はたくさん白い花の中と一輪の黄色い花が入っていた。そこで俺は彼女たちの間に入り、その花束を遠くに投げ飛ばした。

「あら……………酷いことをしますわね。悲しいわ」

「ちよつとカイ、何するんですか」

「イレイナ、少しずつ後ろに下がりながら彼女に全力で時間逆転の魔法を掛けるんだ」

「いったい何を言ってる——」

「早く！」

俺の言葉に驚きながらもイレイナは魔法を使いながら花畑の外に歩いて行った。

俺たちが向かっている国の名前は花の国。

花屋でバイトしたこともあり、国の名前になるくらいだからその国の花を調べておくべきだと思って前に滞在していた国で調べたのだ。

当然、花の意味についても。

彼女が渡してきた花束。その中に入っていた白い花の意味は『私の愛は生きています』だ。そして一輪だけ入っていた、多分紛れ込ませた黄色い花の意味は拒絶を意味するものである。

ここで花畑を見た時から感じていた違和感の正体にも気付いた。

この花畑に咲いている花は、魔力を持つていない人間に対してのみ作用する魔力を放っているのだろう。

その魔力に毒された人はこの花畑まで誘い込まれ、最終的にこの花畑の栄養となってしまう。

俺はそう結論付けた。

魔力を持っている俺が何故違和感を感じたのか。それは俺が着ているスーツのお陰だろう。

師匠から貰ったこのスーツには受ける魔法を軽減する効果がある。もちろん、花は魔法を撃っているわけではない。だがそれでも害のある魔力にスーツが反応したのだ。

だからいつもとは違う違和感を感じていたのだろう。

「何をする……やメロオー！」

時間逆転の魔法を掛けられた彼女の口から出るのは彼女のものではない言葉。

意思を持った花によって操られた彼女の周りから蔦のようなものが生えてきてイレイナに襲い掛かる。

「させるわけないだろう！」

俺は右手に持った剣で蔦を切っていく。

蔦の数は増えていき攻撃は激しくなるばかり。

「イレイナ、まだか！」

「もう少しです！」

剣だけでは対応できなくなってきたので左手に盾を出し、右手で切り、左手で受け流したり押し返した。

イレイナの方に行きそうな蔦だけは確実に対処し、俺に向かってくる蔦は致命傷になるもの以外は余裕のある時だけ防ぐようにしていた。

俺の体に傷が増えていくが弱音を吐くことはできない。集中を乱してはならない。

どのくらい経ったか分からないが、ようやく蔦による猛攻が収まった。

俺は花束の中で倒れている彼女に近付いて急いで背負い、イレイナの下に戻った。

「大丈夫ですか？」

「こっちは大丈夫だ。イレイナの方は？」

「カイが守ってくれたので怪我はありませんが魔力が残り少ないです

ね」

「歩けるか？」

「なんとかか……」

「危険な目に会わせて済まなかったな……」

「今回は良いですけどこんな無茶はもうしたくないですね……」

「……ありがとう。イレイナがいなかったら彼女を助けることはできなかった」

「……こちらこそありがとうございます。私だけでは彼女の容態に気付かずに花束を受け取って誰かに渡していたことでしょう。カイがいなければ私は間接的に誰かを死なせていたかもしれない……」

「そっか……とりあえず移動しよう。ここに長居するのは危険だ」

そう言っただけで俺たちは花の国に向かって歩き出した。俺の背中であぐらをかいている彼女の感触が、人の命を救うことができたことを実感させてくれた。

数時間歩き続けてようやく花の国に到着した。

俺たちが門を通ろうとした時、若い門兵が声を上げた。

「アルテミシア！アルテミシアじゃないか！お前、アルテミシアに何をした」

アルテミシアと呼ばれた彼女の兄だろうか。

妹に危害を加えたんじゃないかと睨みつけてくる。

「この子はこの国の近くにある花畑で捕まっています。そこに偶然通りがかった俺たちが救出しました」

「そう……か……」

「この子を家まで送ってあげたいのですが、案内していただけますか？」

「分かった、俺が案内しよう」

彼は詰所に行ってから、「こっちだ」と言っただけで彼らの家まで案内してくれた。

アルテミシアさんをベッドに寝せてから俺たちはテーブルに着き、

詳しい話をすることにした。

「妹を助けてくれて感謝する。そして先ほどは無礼な真似をした」

「特に気にしてません。えーっと」

「ソロルだ」

「ソロルさんが妹を大事にしているのは分かりましたから。ただ彼女は何故あの花畑に？」

「それは……」

ソロルさんが語ってくれたのは彼が妹を愛しすぎた結果、彼女に窮屈な思いをさせてしまい、それにうんざりした彼女が家を飛び出したのではないかということだった。

「俺はどうすれば良かったんだ……妹を、たった一人の家族を他の連中に取りられたくなかった。俺を置いて行ってほしくなかった……」

項垂れるソロルさんになんて声を掛けようか考えていた時、隣に座っていたイレイナが立ち上がった。

「馬鹿馬鹿しいですね。そんなの、考える必要もありません」

「なら一体どうすれば！」

「アルテミシアさんを信じてあげれば良いんですよ」

「アルテミシアを……信じる？」

「そうです。あなたと彼女はこの世でたった一人だけの兄妹です。あの花畑で話した彼女はとても優しそうな女性でした。そんな彼女が、例え誰かを好きになったとしても、あなたを置いていくことなんてありえないでしょう。今のあなたは彼女を信じていません。そんなあなたと一緒にいては、この先どう頑張っても彼女が幸せになることはありません」

一呼吸置き、イレイナは「だから、信じてあげましょう。彼女のことを」と優しい顔で言っていた。

「そうか……そうだよな……俺が信じてあげなきゃいけなかったんだ……済まなかったアルテミシア」

彼は立ち上がり、妹が寝ているベッドまで歩き、静かに泣き始めた。

それを見た俺たちは音を立てないように家から出ていった。

・
○

次の日。

思っていたより早くこの国を観終わった私たちはその日のうちに国を出ることにしました。

「おや、あれは」

「ん？ああ」

私たちが見つけたもの。それは幸せそうに笑いながら歩いているソロールさんとアルテミシアさんでした。

アルテミシアさんを見つけたこの国の住民である男性が彼女に声をかけていた。

彼女は笑顔でそれに応え、ソロールさんも嫉妬したり怒ることもなく笑顔のままでした。

その様子をカイはカメラで撮影してました。盗撮では？

「もう大丈夫そうですね」

「ああ。イレイナのお陰だね」

「あの花畑はどうするつもりですか？」

「あそこへの道を封鎖し、魔法統括協会に依頼を出すように言っておいたよ」

どうやら昨日宿屋の中で別れた後、門兵さんたちの詰所に行っていたようです。

「しかし昨日のイレイナの言葉はすごかったな。信じてあげろ、か。熱弁だったな、俺も使おうかな」

「恥ずかしいのでやめてください」

昨日のソロールさんは私に似ていました。

信じるべき人を信じていなかった昔の私。

だからこそ馬鹿馬鹿しいと言ったのです。

人を信じることができれば、一緒に笑うことができます。一緒に悩むことができます。支え合うことができます。

それを教えてくれた人がいました。

「イレイナは誰を一番信じてるの？やっぱりフランさん？それとも

ヴィクトリカさん？」

少し自己評価の低い彼に向かって私は答えます。
「秘密です」

それぞれの資金調達と占い

今回訪れた国の門の前で入国料を払っている、短く黒い髪に金色の瞳をした黒いスーツを着ていて、年齢は十代後半の青年は誰でしょう？

そう、俺です。

……この前少しだけ見せてもらったイレイナの日記を真似してみただけである。流石に自分の容姿を褒めることは真似できなかつたな……。

今回訪れた国の入国料は銀貨三枚。これは他国に比べて高いと言えるだろう。

俺は使えるお金にまだ余裕があるから問題はなかつた。

「……………」

先ほどから無言で隣を歩くイレイナが気になって仕方ない。

いつもの元気はなく、何度か財布の中を見ていた。

「イレイナ、もしかしてお金がないとか？」

「……………魔女である私が金欠になるとでも？」

「い、いや……違うなら別に良いんだ……。気に障ったのなら済まなかつた」

質問に質問で返された。しかも語気を強くされて。

俺とイレイナは、自分が使うお金は自分で稼ぐことに決めている。

俺は共有するでも良かつたのだがイレイナが、「別々にしましょう。

魔女である私は各地で大金と共に依頼を受けることになりましたが、お金を共有したらカイのためになりませんからね。本当ですよ？」と言われたのだ。

俺のことも考えてくれてるなんて、って感動したな。

魔女に依頼をする人は依頼料として大金を持つてくることがほとんどだ。

イレイナは全ての依頼を受けているわけではないが、それでも多くのお金を貰っているだろう。

そんなイレイナに金欠か聞くのは彼女のプライドを傷つけてしま

うことだったのかもしれない。反省反省。

歩きながら、宿屋でも探そうかと思っていた時何やら可愛らしい音が聞こえた。それは隣の人物のお腹からだった。

「……………」

立ち止まる俺のことは気にせず、イレイナは早足で大通りにあるパンが置いてある屋台に向かった。

彼女はパン屋の店員と何か言い合った後、何も買わずに大通りの奥に進んでいった。

まさか突然置いて行かれるとは思わなかった俺は一瞬呆けてからイレイナを追いかけた。

大通りの奥には広場、その真ん中には大きな噴水があった。

その噴水の前にいるイレイナを見つけた俺は写真でも撮ろうかと思っただが、なんと彼女は噴水の水を飲もうとしていた。

「待って待ってイレイナ何をしているんだ！」

俺はイレイナの腕を掴むことで水を飲ませないようにした。

「一体どうしたんだ？」

「…………パンをかうお金がないので水で空腹感を紛らわせようとしてしまった……………」

俺は鞆から水筒と前の日に作ったパンを彼女に渡した。

「これは…………？」

「見ての通り、飲料用の水とパンだよ。パンは少し固くなってるだろうけど」

「…………ありがとうございます……………」

イレイナは涙目になりながら食事をしていた。俺も泣きたくなるよ。

「とりあえず今日泊まる宿屋を探そうか」

「…………はい」

イレイナが食べ終わるのを待ってから、俺たちは歩き始めた。

「ねえ見てダーリン、あの魔女、さっき噴水の水を飲もうとしていたわ」

「僕も見ていたよ。なんてみすばらしいんだ！はははははは！」

イレイナが近くにいたカップルが座っていたベンチを壊した。

それから俺たちはこの国にある宿屋を回ったが、どの宿屋も通常の三倍は高いのである。

宿屋の店主に聞くとどうやらこの国では偽の硬貨が流通し、そのせいで物価が上がっているらしい。

しかもその硬貨の流通元は国王であるため、偽物であっても問題ないと国民は使っているのだとか。

その話を聞いた俺たちは宿屋を後にした。

「イレイナ、これからどうする？今日の宿泊代は俺が払うでも良いけど」

「いえ、今日の夜までにはそれくらい余裕で稼いできます」

「……危険なことはしないでよ」

「当然です」

そこで俺はイレイナと別れ、まだ余裕があるが俺もお金を稼ぐことにした。

俺は先ほどの広場に行き、噴水の前に途中で買った腰くらいの高さのテーブル（通常の三倍の値段）を置いた。

「腕相撲に挑む方はいませんかー！見事勝利した方には賞金として金貨十枚！さらに！こちらが勝利する度に賞金が増え続けますよー！」

そう、腕試しの腕相撲である。

これまで訪れた国では同じように腕相撲や試合を行うことで日銭を稼いでいる筋肉自慢や武闘家、魔法使いなどに出会ったことがある。俺もそれを真似してみようと思った。

物珍しさからか、すぐに人が集まり始めた。

「さーさー！誰か挑戦してみる方はいませんかー参加料は金貨一枚でーすー！」

「僕が挑戦しようかな」

「キヤー！ダーリン頑張ってー！」

最初の挑戦者はさっきのカップルの男性だ。

「では金貨一枚お願いします」

「どうぞ。君みたいな年下に僕が負けるわけないけどね！ははははは

！」

「ダーリン素敵！」

「勝負は腕相撲。手の甲がこの台に着いた方が負け、どちらの腕で挑戦するかは自由です。始まりの合図はえーっと、そちらが力を込めて押し始めたらで大丈夫です」

お金を受け取った俺は簡単なルール説明を行ってから台の前に立つ。

「おいおい、あの坊主自分に不利な条件ばかりだぜ」

「余程の自信家か馬鹿のどちらかだな」

周りの人たちがそんなことを言うのが問題ない。

挑戦者である彼が右腕を出してきたので俺も右腕を出す。

「ではいつでもどうぞ」

「それじゃあ行くよ。これで金貨十枚は僕のもの。これでハニーにプレゼントを買ってあげるんだ！」

そう言い終わった後、彼は右腕に力を込めて俺の右腕を押そうとする。

「あ、あれ……？」

周りがざわつく。理由は単純、俺たちの腕は全く動いてないからだ。

「どうしたんだ？」

「まだ始まらないのか？」

向こう側から掛けられる力が強くなるが、それでも動かない。

「おい、これってまさか」

「全力でやってるのに微塵も動かないというのか!?!」

「どうしたのダーリン! さっさと決めちゃって!」

観衆も事態に気付き始めた。気付いていないのはあのハニーさんだけだろう。

そろそろ終わらせるか。

「では終わらせますか」

「えっ」

少しだけ力を込めて彼の手の甲を台に叩きつける。ダアン! と良

い音がしたな。

これでイレイナを馬鹿にしたことを許すでしょう。

「おい、今動き始める瞬間を見えたやつはいるか？」

「いや、気付いた時にはもう終わっていたぞ」

無形流は初動を悟らせないのだ。それは腕相撲でも変わらない。

「ダ、ダーリン……」

「ごめんよハニー……」

「ううん、良いの。ダーリンが私のために頑張ってくれたんだもの」

「ハニー」

「ダーリン」

うっとおしい。もう少し強くやっても良かったかもしれない。

「終わった方は早くあつちに行ってください。再挑戦は可能ですからね。次の挑戦者はいませんかー！ 次の賞金は金貨十一枚ですよー！」

今の一戦は良いデモンストレーションになっただろう。

その証拠に挑戦者が次から次へと現れるようになった。

「次は俺だー！」

「俺にやらせてくれー！」

「賞金は俺のものだー！」

「はいはい、一列に並んで順番をお願いしますー。あ、そうだ。両腕を使って挑戦を希望したい方は金貨三枚で良いですよー！」

こうして俺は次々と挑戦者を破っていった。

普段から過重力で鍛えている俺が負けるなんてことはないのだ。

師匠レベルが来ると負けるが。

参加者がいなくなつたのは夜になる頃だった。

「えーっと、稼いだ金貨は……結構稼げたなあ。しばらくは何もしなくても暮らしていけそうだな」

ざっと百枚はある金貨を見て俺は呟く。これ良いな。次もこの方法を使おうかな。

そろそろイレイナと合流して宿を取ろうかと思った時、壊れたベンチの前には何故か腕に古びた紐を巻き付けた男性と何かを期待している女性が立っていた。

新手の宗教か何かかと思っただが、俺には関係ないことなのでその場を後にした。

「イレイナ、大丈夫だった？」

「ちよろいですね」

イレイナと合流した俺は彼女に何も危険なこととはしてないかという意味を込めて尋ねたのだが、返ってきたのはよく分からない言葉。いや、ちよろいという言葉の意味自体は分かるけどなんでその言葉が返ってきたのかが分からなかった。

「……まあいいか。お金は稼げた？」

「当然稼げましたよ。私を誰だと思ってるんですか」

「灰の魔女イレイナ様ですね。噴水の水を飲もうとしていた」

「それは忘れてください」

ぷいと顔を逸らすイレイナ。

「パンと水のお礼に今日の宿泊費は払ってあげてもいいですよ」

「おや、それは嬉しいね。この国は物価が高いけどそれでも魔女様は問題ないと言うんですかね？」

「その分お金を稼ぐ方法を考えましたからね。余裕です。魔女ですから」

どんな方法でお金を稼いだのかは知らないけどすごい自信だ。

お言葉に甘えることにした俺はイレイナの後を着いていく。今の俺に宿の選択権はない。

「ここにしましょう」

「うーん？」

「何ですか、文句ですか？」

「やっぱり俺も自分の分は払うからもう少し良いところにしなない？」

そこはこの国で一番安いぼろ宿だった。

稼げたと言うからもう少し良い宿に泊まっても罰は当たらないんじゃないか？

「いいえ、ここにします」

イレイナの決意は固いらしく、宿屋の中に入ってフロントで手続き

を済ませた。

この国の飲食店で食事をするに安い料理でも高級レストラン並みの金額を取られるため、俺は昼と同じパンをイレイナ渡した。

「ありがとうございます。私は明日もお金を稼いできます。あなたは？」

「俺はこの国を見て回るかな」

「この物価が高い国でそんな余裕な態度を見せて大丈夫ですか？国を出る頃には財布の中身が無くなっちゃいますよ」

「平気平気」

「カイが良いなら別に良いんですけどね。後でお金を貸してくれと言われても貸しませんからね」

そうして俺たちは各自の部屋に入って休んだ。

それから数日間、俺は腕相撲で稼いだお金を宿泊費を除いて使いまくっていた。

この国で稼いだ金貨はほとんどが偽物だった。この硬貨を他の国に持っていったら俺は指名手配になってしまう。だから金貨を別の価値ある物に変える必要がある。

他の国でも換金できるような宝石や、魔道具の材料になりそうな金属、その日食べる料理の材料などを買っていた。

稼いだお金が残り少なくなってきた頃。

大通りを歩いていると向かい側から歩いてくる二人の男性が面白い話をしていた。

「最近出没する旅の占い師と出会ったやつは皆幸せになるらしい」

「俺も聞いたぞ。運命の相手を見つけてくれたり幸運になるアイテムを売ってくれるらしいな」

「黒いフードを深くかぶっているせいで顔を見たやつはいないが、女の声だったらしい」

皆を幸せにしてくれる旅の占い師か……興味深いな。俺には何をしてくれるんだろうか。

残りのお金の使い道を決めた俺は占い師を探し始めた。

これは骨が折れるかもなと思っていたが、そんなことはなかったよ
うだ。

イレイナがパンを買うことができなかつた屋台。そこに目的の人
物はいた。

黒いフードを深くかぶつた人物は店主に看板を売り渡していた。

俺はカメラで写真を撮ってから占い師に声をかけた。

「噂の旅の占い師ですね？俺のことを占って欲しいんですけど良いで
すか？」

「なつ、カ——ごほん、良いでしょう。まず初めに料金に関してです
が」

「これをお願いします。ところで無理に声を出してませんか？」

「いえ、そんなことないですよ」

俺は残っていたお金が全て入った袋を彼女に渡す。

「わ、こんなに。では何について占いましょうか」

占い師に会って占ってもらいたいとは思つたが内容については考
えていなかったな。

「えーっと、なら運命の相手についてで」

「運命の相手について!?!」

聞いたことがある声が聞こえてきた。

念のため俺は周囲を見回すが、知り合いはいない。

「……………」

「……………」

俺は右手を前に持ち上げ、中指につけている指輪に魔力を込めた。

もう一つの指輪は目の前にあるらしい。

「イレイナ」

「……………」

「イレイナ」

「……………」

反応がない。

どうしたものかと思っていたらイレイナの後ろから数人の兵士が

やってきた。

「ちよつと君、君が旅の占い師だね？」

「いえ、人違いです」

「嘘はいけない。先ほどの屋台の店主とのやり取りや、その青年とのやり取りを見ていたぞ」

「……………」

「ご同行願おうか。国王が君に会いたがっている」

イレイナが兵士たちに連れていかれそうになっていた。

「すみませーん。俺も着いて行つて良いですか？」

一人で行かせるのは不安なので俺は手を挙げた。

「君は客では？」

「俺はこの占い師と一緒に旅をしています」

「本当かね？」

「……………はい」

「そうか、では一応君のことも連れて行こう」

俺たちを囲うように兵士が歩き、連れて来られた場所は王宮。

その玉座の間にはこの国の王が座っていた。

「君が旅の占い師か。随分と若いな。隣の男性はなんだ？」

「私の助手です」

国王の疑問に対し、イレイナが答えてくれた。

助け舟を出してくれたようだ。ありがたい。

国王は納得した表情をし、兵士たちの方を見て「君たちはもういい。下がれ。占い師の助手もだ。彼には空いている部屋を与えてやってくれ」と手で払って兵士と俺を追い出した。

与えられた部屋の中でしばらく待っているとドアがノックされた。

「どなたですかー」

「私です」

「はいはい」

俺はドアを開けてイレイナを中に招き入れる。

「国王様はなんだって？」

「実はですね……」

彼女は国王自身が偽の硬貨を流したわけではないこと、この国を未来を占って欲しいと頼まれたこと、自分は側近が怪しいと考えていることを教えてくれた。

「それで、イレイナはどうする？」

「その側近さんを探ってみます」

それからイレイナと一緒に作戦を考え、作戦決行の時間まで各自の部屋でゆつくりすることにした。

時間は夜。俺は指輪でネズミに変身して屋根裏を移動するイレイナの場所を探知し、追いかける形で王宮の中を誰にも見つからないように歩いていた。

ある部屋の真上でイレイナの動きが止まった。例の側近の部屋である。

俺は気付かれないように少しだけドアを開けて中を覗いた。

中には二人の男性、親子だろうか。片方はイレイナに声をかけた兵士だった。もう片方はこの部屋の持ち主だろう。

そこで行われた会話は王に忠誠を誓っている者がするものではなかった。つまり黒だ。

会話が終わって兵士がこちらに向かってきたので立ち去ろうと思った瞬間、部屋の天井が破れてイレイナが落ちてきた。

「何者だー」

側近が銃を構えていた。

イレイナが笑顔で「どうも初めまして」と言い、俺はドアを蹴破って右手に出した剣で銃を切った。

「お前たちはー」

ドアの近くで側近の息子が走って襲い掛かってくるが、俺はその勢いを利用して側近の方へ投げ飛ばす。

「ぐっ」

「はいおしまいです」

イレイナが魔法で二人を拘束した。

騒ぎを聞きつけてやってきた兵士に二人を引き渡し、国王の前で事実を洗いざらい吐かさせた。

尋問は俺たちの仕事ではないから部屋に戻って休ませてもらった。

翌日。

イレイナは王に呼び出されていたので俺は先に王宮を出て、この国の門の前で待つことにした。

少ししてイレイナがほうきで飛んできた。

「お待たせしました。これどうぞ」

イレイナが俺に差し出してきたのはお金が入った袋。

俺が昨日イレイナに占い料として渡した額と同じだ。

「これは？」

「国王様に頼んで偽の硬貨を本物にしてもらいました。これはカイの分です」

「そんなお金知らないよ。俺は旅の占い師にお金を払っただけさ」

「後悔しても知りませんよ」

「しないさ。ただ、占いの結果を教えてもらえなかったのは心残りかな」

そう言っただけ俺は歩き始めた。

偽の硬貨が流通したことで物価が上がった国。特に観光名所があるわけではなかったが、楽しかったと言えるだろう。

この国で買った宝石を次の国で換金するのが楽しみだ。

俺たちの旅は続く。次に訪れる国の景色は綺麗だろうか。国民は笑っているだろうか。楽しい出来事が俺たちを待っているだろうか。占いができない俺にはその答えは分からない。

「そう、私です。……なんちゃって」

幸せを収める器

気持ちいい風を全身に浴びながら、緑一杯の草原を走る俺とほうきで空を飛ぶイレイナ。ふと上を向いてみれば、風に流される雲。俺たちと同じ方向に移動する雲を見て、旅の同行者が増えた気分になんか少しかける。

次の目的地に向かう途中、故郷の中に見えるだけでは見ることのできない景色を今日も楽しんでいる俺たちであった。

しばらく進んでいると、俺たちを呼ぶ声が聞こえてきた。

声が出た方へ振り向くと、一人の少年がこちらに手を振っていた。

何か用事でもあるのかと思い、少年の方へ近付いた。

「うわーい！来たー！」

「こんにちは」

「こんにちは、何か用かい」

「こんにちはー。特に用はないけど声をかけただけなんだー。お姉さん、魔女なんだー。凄いね。お兄さんも凄い速さで走ってたね」

笑顔で話す目の前少年。どうやら悪人ではなさそうだ。

「どこで何を？」

「幸せ探しをしてるんだー」

「お、中々面白いことを言うね。幸せはどこにでもあるけど見つけるのは難しい……的な感じかな？」

「いや……違うけど……。ところでお兄さんたち、今から暇？」

「俺たちは次の目的地に向かっている途中だけど時間に余裕があるし暇といえれば暇だね」

「なら僕の村においてよー」

そう言っただけで彼が指し示した方角には小さな村があった。

「あなたが村長なんですか。どうも初めまして。イレイナと申します。こちらはカイ。旅人です」

「あ、どうも初めまして、エミルです——って、そういうことじゃなくて！僕が住んでる村って意味だよ」

「知ってます。冗談ですよ。気を悪くしないで下さい」

不貞腐れた少年、エミル君は両手に瓶を抱えていた。

瓶の中には白いがもやが入っていた。

「エミル君、それは何だい」

俺がそう聞くとエミル君は得意げに瓶の中身を教えてくれた。人や動物が幸せを感じた瞬間を魔力に変えて瓶に集めているらしい。

面白い魔力の使い方だ。

「開けてみても?」

「だ、駄目に決まってるじゃん!これは僕が好きなの為にやっていることなんだから!お姉さんたちには触らせてあげないよ!」

「ほうほう」

「へえ」

「もしかして怒った?」

「いえ、ちよつと感心しました」

「俺もだね」

好きな子の為に……か。誰かの為に何かをできる人には好感が持てる。

気になるな。

「それで、好きなことというのは誰のことかな?お兄さんに教えてよ」

俺はエミル君の方にすり寄りながら聞いた。あ、ちよつと後ろに下がった。

「……僕の家で働いている二ノつていう使用人さんだよ。いつも暗い顔してるから、僕が幸せにしてあげるんだ」

まるでプロポーズの言葉のようなことを言うエミル君。その笑顔は瓶の中に入っている幸せと同じくらいの幸せが含まれているのではないかと感じさせた。

それから俺たちはエミル君の村に行くことにした。

エミル君は魔法使いでほうきに乗れるだろうが、せつかくなので俺が背負って運んであげることにした。

「うわー!速い!」

「ほうきで飛んできるときとは違う楽しさがあるでしょ?」

「うん!」

俺の背中を目を輝かせるエミル君に俺も嬉しくなった。

彼は人を幸せにできる人間なのだろう。

「お兄さんはどうやってここまで速く走れるようになったの?」

「普段から過重力の魔法を自分に掛けてるんだよ。エミル君もやってみるかい?」

「え……いや、結構です……。あ、あれだよ」

エミル君が指を向けた先には小さな村があった。民家の数は数十軒程度で、住民全員と顔なじみなんてこともありえそうさ。

門の代わりであろう二本の木の間を通り抜けて村に入った。エミル君に案内されるまま進んでいくと、そこにはこの村一番の大きさを誇る屋敷の前まで来ていた。

「ここはこの村の村長の家かな?」

「そうだよ。そして僕の家でもある」

「へえ」

「エミル君は村長の息子だったのか!ということは次期村長ってわけか。さっきの言葉も間違つてはないね」

「そうなんだよ!……お兄さんは良い反応してくれたけど、お姉さんは反応薄いね」

「驚いた方がいいですか?うわーすごい、お金持ちなんですわね」

「うん……なんかもう、いいや……」

「ごめんねエミル君……君を馬鹿にしたいわけではないと思うんだけど……」

棒読みなイレイナに暗くなるエミル君、謝る俺。

「ところでエミルさん、その瓶はいつ女の子にあげるんですか?」

流石に気まづかったのかイレイナが話題を変えてきた。

彼女の狙いは上手くいったようで、エミル君は元気になっていた。

「今日のお昼ご飯を食べた後に渡すんだー。そうさ、お兄さんたちもご飯食べていきなよ。ニノちゃんが作る料理はとっても美味しいんだよー」

「うーん、俺たちはさっきパンを食べたばかりなんだよね」

「じゃあニノちゃんに頼んで少なくとももらおうね!苦手な食べ物とか

ある?」

エミル君の中では俺たちが昼ご飯をいただくことは確定事項らしい。良い子ではあるけど人の話を聞かないところがあるな……。

イレイナは分からないけど俺はまだ食べれるし、断る理由もないからお言葉に甘えてしまおうか。

「俺は特にないけど、このお姉さんにはきのこを入れないように頼めるかな?」

「カイ?」

「お姉さんきのこ嫌いなんだー。うん、分かった。任せて!とつても美味しい料理を出すから!」

「楽しみにしとくよ」

本当に、良い笑顔で笑う少年だ。

というわけで俺たちは村長の家にお邪魔させていただいた。内装は特に派手というわけでもなく、庶民的といった感じだろうか。

ダイニングに案内された後、エミル君に椅子に座るように促された。

村長やエミル君の想い人の姿は見えないが、もうすぐ来るだろうとのことだった。

まあ少し待つくらいどうってことないなと考えていたら、後ろから物音が聞こえたので振り返ったところ、黒い髪をした小柄な女の子が立っていた。

「……あっ」

「こんにちは。君がニノちゃんかな?俺たちはエミル君の友達だよ」

「どうもこんにちは。——もしかして、東洋出身の方ですか?」

「えっ?あ、あの……」

突然二人から同時に質問されて困ったのか、エミル君に助けを求めするように彼を見た。

「そうだよー。彼女はニノちゃん。僕のお父さんがニノちゃんを東洋の国で拾ってきたんだ。そういえばお兄さんの髪もニノちゃんみた

いに黒いけど東洋出身なの？」

「俺の父さんが東洋出身で俺自身は違うよ」

「へー」

そう。俺の父さんは東洋の出身らしいが、国を出てから母さんと出会い、ロベツタに住むようになったらしい。あまり思い出したくないのか、子どもの頃の話は滅多にしてくれなかった。

「それで、この家の使用人として働いてもらっている、と」

「は、はい……、村長様には大変優しくしてもらっております」

大変優しくしてもらってる、か。本気でそう思っているとは思えない。

「この村の村長、エミル君のお父さんは今どこにいるのかな？」

「えつと……今は書斎で、お仕事を……」

「ん。ありがとう」

「あの、何か、ご用でしょうか」

「ちよつと気になったただけだよ。仕事なら邪魔するわけにはいかな
いね」

そんなやり取りをした後、二ノちゃんは目を伏せた。人と話すことが得意な子ではないらしい。

エミル君にとつてはいつものことなのか、軽やかな足取りで二ノちゃんに近付いて昼ご飯について聞いていた。どうやら魚の塩焼きらしい。そして、追加で俺たちの分も作ってもらうように頼んでくれた。

彼と話している間も、二ノちゃんの表情は暗いままだった。確かにエミル君が心配になるわけだ。

エミル君はプレゼントを渡したいと嬉しそうに言うが、二ノちゃんはそのを拒否しようとしていた。

何としてもプレゼントを渡したいエミル君は、「じゃあ、これは僕からの命令。これならどう？」と言って従わせていた。二ノちゃんも、「命令、なら……」と微妙に笑っていた。

二人が料理をしている最中、俺たちは軽く雑談をしていた。

「夕食はどうしようか」

「今から料理が来るのにもう夕食の話をお願いしますか……。いつも通り、どこかのお店で食べるかパンを買って宿で食べるかじゃないですか」「そうなるか……。俺が作ったパンは？」

「それがあるなら最初から答えは決まっています」

なんて数分話していたら、「客人とは珍しい」と少しお腹が出ている男性が俺たちの向かい側に座った。四十歳前後であろう男性はきつとエミル君のお父さんである村長だ。

「こんにちは。イレイナといます」

「こんにちは。カイです。エミル君のお父さんですか？」

「これはどうも。いかにも私が父です」

やはりそうだったか。まあ分かりきってはいたが。

この村について知りたかった俺たちは、一番詳しいだろうこの人と話すことにした。

俺やイレイナがこの村について質問し、村長がそれに答えていったが、この村はあまり特徴がない村のようだった。

得るものはほとんどなかったが、時間をつぶすには丁度良かった。

ようやくエミル君と二ノちゃんが料理を運んで来てくれた。

テーブルの上に並べられていく料理を見て、おいをかいで、エミル君の言っていたことは本当のようだなと思った。問題があるとなれば、少なめにしてもらった筈なのに結構な量があったことだろう。

エミル君が言うには、使われている魚が小さかったり、サラダの量も少ないらしい。それは他のと比べての話であって、一人前よりは少ないといったものである。

どうやら彼は少しズレているのかもしれないな……。

二ノちゃんが多かったら残してくれても良いと言っていたが、その隣でエミル君が俺たちを睨んでいた。僕の大好きな二ノちゃんが作った料理を残すなんてふざけたことはしないよなあ？ って感じ。少し怖いよ

俺がさつき食べた量は多くなかったからこれくらいは食べれるが、イレイナはキツそうだった。俺は他の三人にバレないようにイレイナの皿から料理を取って食べた。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったですよ」

「でしょ！ニノちゃんの料理は世界一美味しいんだ！」

「あ、ありがとうございます……ごさいます」

少し恥ずかしそうにニノちゃんはお辞儀をした。

そして食器を片付け始めたニノちゃんとエミル君を手伝おうかと思っただが、「お兄さんたちは座ってて」と言われてしまった。好きな子との二人きりの時間だからな、邪魔したら悪いだろうから大人しくしておこう。

イレイナは気になることがあるのか、村長にニノちゃんとどこで出会ったのかを聞いていた。

村長から語られたのは妻が家を出て行って家事が回らなくなった時に東洋の方で買ったということ。つまり、ニノちゃんは奴隷である。

ニノちゃんが奴隷であることを考えると、今までの態度についても理解できる。売り物として出され、故郷から離れた場所で働かされてるのだ。暗くもなるだろう。

問題なのは時折見せた何かに怯えるような態度。恐らく誰かに何度も怒鳴られたり叩かれたりした恐怖からくるものだ。その誰かとは考えなくても目の前の男だと分かる。

エミル君はニノちゃんは拾われたと言っていた。だが、目の前の男は奴隷であることは言っているらしい。これもエミル君の勘違いなのか、それとも奴隷の意味を理解していないのかは分からない。

「ねえニノちゃん、大きいお皿ってどこに仕舞えば良いんだっけ？」

「ひっ……！」

ぱりん、と音がした。

急に顔を出したエミル君にニノちゃんはぶつかってしまい、グラスを落としてしまった。

「——何をやっているんだお前は！」

怒鳴り声をあげた村長は、ニノちゃんの胸倉を掴んで心無い言葉を彼女に浴びせていた。

エミル君が庇うが、「お前は黙っているろ！」と怒鳴られて俯いてしま

う。

ようやく気が済んだのか、二ノちゃんから手を離し、「掃除しろ」と顎をしゃくつた。二ノちゃんは何度も、何度も全員に頭を頭を下げてくる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

人権を尊重している地域では奴隷を禁止している場合があるが、この辺りでは奴隷は認められているのだろう。

ここで怒りのまま目の前の男を殴ってみろ。そんなことしたら俺は傷害で捕まるか指名手配になって旅どころではなくなるだろう。ここではこの男が正しいのだ。なにもおかしくないのだ。冷静になれ。

俺は怒りと何もできない悔しさから強く手を握り締める。爪が食い込み、血が出る。

隣に座っていたイレイナが立ち上がり、割れたグラスの傍にしゃがんで時間逆転の魔法を掛けて元の形に直していた。

「今度は落とさないように気を付けてくださいね」と言っ二ノちゃんにグラスを渡していた。

先ほどまでの怒りなどまるで無かったかのように穏やかな口調で村長が礼を言ってきた。

「ほら、お前もちゃんと礼を言え」

「…………ごめんなさい」

「ごめんなさいではなく、ありがとうございますよ。二ノさん」

顔を上げた二ノちゃんは泣き出しそうな顔で、「ありがとうございます、ございます」

こちらの方に戻ってきたイレイナが俺の手にも魔法を掛けて怪我を直してくれた。

…………己の無力さを恨むよ。

村長が書斎に戻りエミル君とイレイナは何か話をしていたので俺は皿洗いをしている二ノちゃんの方に足を運んだ。

「二ノちゃん。少しだけ聞きたいことがあるけど良いかな？」

俺が二ノちゃんに話しかけると、彼女は一度手を止めて困った顔でこちらを見てきた。

「えっと、あの、今はお皿を洗っている最中なので……ごめんなさい……」

「ああ大丈夫大丈夫。手は止めなくてもいいよ。なんなら手伝おうか？」

「い、いえ……」

まあ俺みたいな今日初めて出会ったやつを隣に立たせたくないよな。とりあえず聞きたいことを聞くことにする。

「じゃあ聞きたいことなんだけど、誰か好きな人はいる？」

「え、い、いないです……」

哀れ、エミル君。

「エミル君のことはどう思ってる？」

「え、えっと……使用人の私にも優しくしてくれるお方だと……」

マイナスなイメージはないようだ。よかったよかった。

「二ノちゃんは何かしたいことは何かあるかい？例えばどこか遠くへ旅をしてみたい、誰かと一緒に遊びたいとか。何でもいいよ」

「い、いえ……特には……」

「将来の夢とかは？」

「あ、あの、先ほどから何を……」

そろそろ本題に入ろう。

「幸せって何だと思う？」

「………分かりません。私はただの使用人ですから……」

やはり、か。

彼女は幼い頃に奴隷として売られ、あの男の家で過ごしてきたのだ。人としての幸せなんて分かるわけがない。

エミル君は頑張って彼女を笑顔にしようとしているようだが、今のままでは叶うことはないだろう。

彼女は俺たちに何度か笑みを見せていたが、嬉しかったり楽しかったからしたのではなく、相手を不快にさせないようにするために自然

と身に着いてしまった偽物の笑みだったのだろう。

今の彼女の中身は空っぽだ。しかも、入れることができる量が少ない、栓が閉まったままの器である。この器に少しづつ中身を入れていくことで、栓を開けて中身を抜くことや許容量が増えていき、大きな夢や幸せを詰めることができるようになる。

言い方はおかしいが、栓が閉まったままの小さな器に一度にたくさんの中身を入れようものなら、中身を外に放出することができない器は内側から壊れてしまう。

少々ややこしい言い方をしたが、つまるところ今の二ノちゃんだとエミル君が集めた幸せを見てしまったら、人としての幸せは自分には手に入らないものだど絶望してしまう可能性がある。

だから少しづつ、彼女に幸せを教えるってあげるのが良いだろう。

「うん、決まった。二ノちゃん、ありがとうね」

「は、はあ……？」

そうと決めた俺はまだ話し合っているイレイナとエミル君の所に向かった。

「プレゼントをあげるには絶好の機会じゃないですか？」

「！お姉さん、もしかして天才……？」

「ふっふっふ。もつと褒めてもいいですよ。あ、カイも褒めてくれてもいいですよ？」

「盛り上がっているところ悪いけど、それは駄目だ。一番やっちゃいけないことだ」

「え……」

「いきなり何を言い出すんですか？エミルさんが必死に頑張ってる集めたものなんですよ」

二人を部屋の隅の方に呼び、俺は先ほどの二ノちゃんとの会話と俺の考えを二人に教えた。

「そんな……この瓶のせいで二ノちゃんが絶望しちゃうだなんて……」

「……………」

エミル君は絶望したような表情をし、イレイナはあと少しで自分の発言が招くところだったことを想像したのかショックを受けていた。「じゃ、じゃあお兄さん。僕はどうすれば良いのさ……教えてよ!」
「……正直俺にも何をすれば良いのか具体的には分からない。だから少しずつ彼女を奴隷から人にしていってあげてほしい」
「ど、どうやって?」

「そうだな……例えば二人でどこかに出かけてみるとか、一緒に遊ぶとかかな。後は何かプレゼントをあげてみるのはどうかな」
「プレゼント……」

プレゼントという言葉聞いて、自分が持っている瓶を見つめるエミル君。

「この瓶は君とニノちゃんでたくさんの思い出を作って、幸せが一杯になった時にあげたら良いと思う。この後渡すプレゼントは、これとかどうかな」

そう言っただけは鞆の中から青い宝石がついたイヤリングを取り出してエミル君に渡す。

「これは?」

「見ての通りただのイヤリングだよ。彼女に似合いそうじゃないかな?」

「うん!……でもこれ貰っちゃって良いの?高いんじゃない?」

「良いの良いの。料理を作ってもらったお礼だと思って受け取ってほしい」

「お兄さん……ありがとう!」

その時丁度ニノちゃんが戻ってきた。

「さ、行っておいで男の子。彼女を守ってあげるんだぞ」

「う、うん!」

エミル君は小走りでニノちゃんの前まで行った。

「はい、ニノちゃん!さっき言ってたプレゼントだよ」

「え、えっと……」

「さあ、早くつけてみてよ!」

「は、はい……」

困りながらもイヤリングを耳につける二ノちゃん。うん、やはり似合っている。

「似合ってるよ二ノちゃん！今度一緒にどこかへ出かけようよ！」

「あ、え……村長様になんて言われるか……」

「大丈夫！父さんには僕からちゃんと言うから。もし何かされても今度こそ二ノちゃんを守ってみせるよ！」

「いえ、でも……」

「これは僕からのお願い。命令じゃないよ」

「……………はい」

そう言う二ノちゃんの笑顔は、ぎこちなさこそあれど、今度こそ本物のように感じられた。俺はカメラを取り出し、シャツターを切った。

「もっとゆっくりしていけば良いのに」

この村に入ってきた時に通った二つの木の前で見送りに来てくれたエミル君と、二ノちゃん。その耳には青い宝石がついたイヤリングがあった。

「ごめんね、でも俺たちは旅人だから。次の目的地まで行かなきゃならないんだ」

「……………また会えるかな？」

「それは君次第かな。もしかしたら、君たちが旅行に行った先で偶然出会うことがあるかもしれない」

「！」

「二ノちゃんも元気にやっていくんだよ。困ったことがあったら、この小さなナイト君に相談してあげてね。喜ぶよ」

「は、はい……」

「よし、それじゃあね。あ、二ノちゃんを守るのは良いけど魔法を使って誰かを傷付けたりするのは駄目だよ」

「……………ありがとうございます」

こうして俺たちはこの村を離れたのだった。

少しだけ寄り道をしたが、良い出会いだったのではないだろうか。将来彼らに会える確率はとてつもなく低いだろうが、不思議とまた会える気がする。その時が楽しみだ。

幸せというものは人それぞれ。幸せはどこにでもあるけどその人に合った幸せを見つけるのは難しいことだ。

身に合わぬ幸せは、時として身を滅ぼす。そうならないために、まずは小さな幸せから見つけていこう。

あの二人と次会う時は、いったいどのくらいの大きさの幸せを抱えているだろうか。

今はまだ分からない。

「おっと、危ないよ」

俺の後ろを飛んでいたイレイナが急に俺の背中に飛び乗ってきた。慌てて彼女が落ちないようにする。

「……………私は駄目な魔女です。昔読んだ本の結末を忘れ、ニノさんの状態に気付かず、逆にエミルさんに瓶を渡させようと思いました。カイがいなければ最悪の結末になっていたかもしれない」

「そんなことないさ」

「いえ、そんなことあります。この前だってカイが気付かなければアルテミアさんを助けることはできませんでした。私は、一人じゃ誰も助けることができない駄目な魔女なんです……………」

彼女は、俺の背中の上で泣いていた。

「俺が気付けたのは運がよかつただけ。花の国の時だってイレイナがいなければ彼女を助けることはできなかつたさ」

「しかし——」

「これ以上自分を卑下するのはやめてくれないか。怒るぞ」
「……………」

「俺は今までイレイナが駄目な魔女だなんて一度も思ったことはない。あの村長がニノちゃんの胸倉を掴んだ時、俺は自分の感情を抑えるのに必死だった。何もしなかつた。だけどイレイナは割れたグラ

スを直し、俺が自分で付けた傷も治してくれた。ありがとう」
「……………」

「今の俺がいるのは君がいてくれたお陰さ。君がいなければ俺は旅に出なかったかもしれない。君がいなければこの旅の楽しさが分からなかったかもしれない。君と一緒にだから俺はここまで来れたんだ。だからもう一度言うよ。ありがとう」

「……………」

「それでもまだ自分が駄目な魔女だと言うかい？」

「……………いえ、もう大丈夫です。私らしくありませんでしたね。忘れてください」

「ははは」

イレイナは、何笑ってるんですかーと言いながら何度も頭を叩いてくる。痛くない痛くない。少しは元気が戻ったようで良かった良かった。それからも俺はイレイナを背負いながら次の国へと向かっていた。

どれくらい経った頃だろうか。

「……………すぴー」

「あれ？イレイナ？……………寝てる……………」

彼女は寝ているようだった。

「むにやむにや……………ありがとうございます……………カイ……………」

こちらこそ、本音を教えてくれてありがとう。これからも一緒に楽しく旅をしよう。

民なき国の王女と正しいこと

突然だが、正しいこととは一体何だろうか。

ある人はその国の法に従うことだと言い、別の人は自らの信念に従うことだと言う。また別の人は他人に危害を加えないことだと言う。人の数だけ正しいことが存在し、正しくないことも存在する。当然俺にもそれらは存在する。深く考えたことはないのだが。

先日泊まった村の村長が教えてくれた国に向かうこと半日が過ぎた頃、ようやく到着したと思ったが、国は滅んでいた。

見渡す限りボロボロの建物や瓦礫。俺たち以外の生き物の姿は一つも見えない。

戦争でもあったのだろうかと考えたが、それにしても必要以上に建物が壊されている。

一見してまともな外観をしているのが王宮のみであった。

俺とイレイナは王宮へ近付いたところで、俺は目に見えない壁のようなものに押し返された。

「何やってるんですか」

「進もうとしたら何かに押し返されたんだけど……。フーン！ 良し」

「本当に何やってるんですか」

押し返されるのを無視して気合で見えない壁のようなものを通り抜けることに成功した俺はイレイナの後を追った。

王宮に入るための木の門は力を込めても開かない。

「困ったな……。ここが開かないんじゃないかと泊まれそうところは無いなあ。来た道に戻ると言っても半日かかってしまうな……」

「……。こうなったら手段は一つです。ここをぶち破りましょう」

「仕方ない、か」

俺は剣を取り出し、門に人が通れるくらいの大きさの切り込みを入れ、その部分を蹴った。門から切り取られた木の板が倒れ、王宮の中に入れるようになった。

中に入った後、念のため時間逆転の魔法を使って元に戻しておいた。

こういった王宮で寝るための部屋——寝室があるのは上の階だろうから、俺たちは階段を探して上に行くことにした。

無事に階段を見つけ、上り始めた時、「あなたたち、誰？」と声がした。階段の上の方から。

そっちの方を見てみると、一人の女性が立っていた。どうやらまだ人がいるようだ。

女性に案内されたのは寝室だった。机とベッドしか家具がなかったがとても広い部屋であり、きつと王族が使っていた部屋なのだろう。

とりあえずお互い自己紹介することにした。

「俺はカイ。旅人をしてます」

「イレイナです。同じく旅人です」

「私はミラロゼよ。よろしく」

ぼさぼさになった赤い髪に、ぼろぼろのドレスを着ているミラロゼさんは自分の状況について教えてくれた。

記憶がないこと。目が覚めた時に机の引き出しに入っていた手紙には自分がこの国の女王であることや、ジャバリエという夜にだけ現れる化け物がこの国を滅ぼしたこと、王宮の中は安全だということ、魔女であることが書かれていたことについてだ。

夜にはジャバリエを見ることができた。

建物と同じくらいあるジャバリエの姿は、翼が無い黒いドラゴンと言えば分かりやすいだろう。

火を吐きながら建物を壊す姿は、まさに破壊の申し子と言える。こんな化け物に暴れられたら国の一つや二つは簡単に滅びてしまうのも理解できる。

「どうかミラロゼさん、魔女だったんですか」

「どうかイレイナさん、魔女だったのね。もしかしてカイさんも？」

「いや、私が魔女なのは見た目で分かりでしょう」

「いやいや、俺は魔道士ですよ。男ですから」

ミラロゼさんは俺たちの反応を見てくすりと笑い、「冗談よ」と言った。

なかなかユーモアを持った人のようだ。

話題は手紙についてになっていく。

ジャバリエについて、ミラロゼさんについて、この二つの関連性について事実のみが書かれており、経緯については全く書かれていないのだ。

こんな手紙に従うことはないのだ。だというのにミラロゼさんは明日の夜にジャバリエと戦う気だと言う。

勝算はあるらしく、一週間かけて魔法の使い方を思い出したのだとか。

「頑張ってください。私たちは安全な所から応援していますから」

「あ、手伝ってはくれないのね」

「すみませんが、あまりにも危険すぎます。手伝いたいという気持ちはあります。俺たちが三人で戦えば勝てるかもしれません。しかし、下手をしたら死ぬかもしれないことに首を突っ込むほど俺たちは死に急いでません」

イレイナとミラロゼさん、どちらを選ぶかと言われたら俺は迷うことなくイレイナを取る。今更な気もするが、彼女を危険な目に会わせたくない。

「その正直なところ、嫌いじゃないわよ」

「……どうも」

それから俺は未だに暴れているジャバリエを観察し、ミラロゼさんが貸してくれた部屋で魔道具の調整をしてから寝ることにした。

翌日の早朝。日が昇り始める前。

いつもより早めに起きた俺は王宮の中庭に出た。

誰も手入れをしていないからか、雑草がそこら中に生い茂っていた。

俺はあまり雑草が生えていない場所を見つけ、そこに座って目を閉

じる。

頭の中に思い浮かべるのは昨日見たジャバリエ。

右の前足で薙ぎ払ってくるのを俺はジャンプで躲す。こちらの方に顔を向けたジャバリエは火を吐いてくる。

俺は足元に魔法で足場を作ってもう一度跳ぶことで対処する。その勢いのままジャバリエの頭部に剣を全力で突き刺す。

しかしジャバリエを殺すには至らず、ジャバリエは叫び声をあげながら俺に噛みついてくる。ジャバリエという不安定な足場の上にいる俺は自由に動くことができず、食べられてしまった。

「はあ……ダメか……」

昨日見たジャバリエの動きを基にして頭の中で何度か戦ってみたが、一度攻撃することはできてもジャバリエの反撃で俺は殺されてしまう。

俺たちは戦わないと言ったが、それでも戦うことを想定しておいた方が良いだろう。

何かがあつて実際にジャバリエと戦うことになった場合、俺とイレイナとミラロゼさんの三人だからここまで酷い結果にはならないだろうけど。

昨日泊めてもらった恩もあるので朝食を作ろうかと思つてキッチンに行ったら、そこには既にミラロゼさんがいた。

「あら、おはよう」

「おはようございます。何してるんですか？」

「これから料理をしようとしていたの」

「昨日泊めていただいたのでそれくらい俺がやりますよ」

「結構よ」

「えっと……でも何もしないというのは……」

「結構よ」

「……はい」

ここは譲らないと確固たる意志を見せられ、俺は広間の椅子に座ることにした。

その後すぐに隣のキッチンから謎の音が聞こえてきた。

ドカン。ドーン。ズドン。メリメリ。ガリガリ。い、言われた通りやっただぞ、だから俺のことは——ぐちゃり。びりびり。ガチャン。

……隣で何をしているんだ……？俺の知っている料理の音とは全然違う、見に行きたい思ったが、見に行きたくないとも思った。

俺が震えていると、イレイナがやってきた。

またあの轟音が聞こえてきた。

「…………おはようございませす」

「…………おはよう」

「なんで料理であんな音がするんですか」

「俺に聞かれても…………」

そんな会話をしていたら、ミラロゼさんが料理を持ってきた。どんな料理か気になったが、赤いジャムが塗ってあるパンと目玉焼きが乗ったパンだった。これを作るのにどこからあの音が…………。

「いただきます」

「…………いただきます」

味は普通に美味しいんだけどその過程が気になりすぎて素直に喜べない。

朝食を食べながらミラロゼさんは俺たちにジャバリエを倒すための準備を手伝って欲しいと頼んできた。

まだ何も返せてないので当然俺たちは引き受けた。

「じゃあジャバリエを倒すのは？」と聞かれたが、冗談らしく、自分の国のことは自分で決着をつけると言っていた。

手紙を書いた人もそう望んでいると言う彼女に、俺は本当にそうなのかと思った。

それが顔に出ていたのか、「あなたたちの思っていることはもつともよ。あの手紙を全て信じ込んでしまうなんて、馬鹿な話よね」と言ってきた。イレイナは食べ物をのどに詰まらせていた。

同じタイミングでイレイナに水を渡した俺とミラロゼさんは静かに笑った。

そんな彼女には危険な目に会って欲しくないなと思い、思いとどまることはできないかそれとなく話したが彼女の意志は固かった。

ミラロゼさんの計画の準備は俺とイレイナで進めることになった。ミラロゼさんにはできるだけ魔力を残してもらいたいからだ。

俺は魔法で大きくしたシャベルで、イレイナは魔法を使って穴を掘っていた。この穴にジャバリエを落として魔法を浴びせる計画だ。

最初は三人で雑談をしながらの作業だったが、次第に口数が減っていった。

「……あとどれくらい掘れば良いですか」

「そうね、あともう少し掘ったらかしら」

「イレイナ、頑張ろう」

「……はい」

ミラロゼさんが少しだけ手伝ってくれたのもあり、落とし穴が完成したのは午後三時くらい。つまりおやつを食べるのに丁度良い時間だ。

「一度王宮に戻りませんか？俺の鞆の中にクッキーが入っていたはずなので三人でそれを食べましょう」

「カイのクッキー……ミラロゼさん、ここは一度戻って態勢を整えましょう」

「あら、そんなに美味しいのかしら。それは楽しみね」

俺たちは落とし穴の前で写真を撮り、落とし穴を魔法で隠してから一度王宮に戻ってクッキーを食べた。

「ミラロゼさん、これ使ってください」

俺はミラロゼさんに手のひらに収まるほどの小さな剣を渡した。

「これは？」

「俺が作った魔道具で、今は小さいですが魔力を流すと大きくなります。あとは魔法で操作しやすいように調整しておきました」

「ありがたく使わせて貰うわね」

「勝ってくださいね」

「当然よ」

クッキーを乗せていた皿をキッチンで洗い、ミラロゼさんが出発するまでの間に王宮の探索をすることにした。

俺は魔法使いの国でも使っていた探し物を見つけてくれる金属の棒の魔法道具を取り出した。あの時は名前を付けていなかったが、今は『探すくん』という名前がある。

探すくんを持って進んだ先は王宮の地下。少しだけ探すくんに反応があった。

「さてさて、何があるかなと」

今回探すくんを探しているものは、今回の事態を引き起こした原因についての証拠である。

地下室を探し始めてそれなりに時間が経った。そろそろ戻ろうかと思った瞬間、探すくんが今までで一番の反応を起こした。

周囲を見渡し、俺が今立っている横の壁の一部が外れることに気付いた。

一目では外れることに気付けないだろう壁の一部を外してみると、そこには四つ折りになった紙が隠されていた。

何が書かれているか恐る恐る開いてみると、そこに書かれていたのは赤い文字——血だ。

『王女、使用人、交際——王、拷問、処刑——お腹、子ども——王女、王、化け物』

余裕がなかったのかまともな文章は書かれておらず、単語の羅列だった。

だが、なんとなく意味は分かり、なぜこの国が減んだのかも予想できた。だが、その予想は外れていて欲しい。

俺は急いで地下室から出て外を見た。夜。

慌てて指輪に魔力を込める。イレイナの位置は王宮の外、落とし穴の近くだ。

全速力で駆け出した。

「あは、あははははははは——はははははははははは——」

落とし穴の場所まで来た時に見たものは、俺が渡した剣を魔法で

操ってジャバリエの首を切り、頭が無くなった体を魔法で細切れにして大声で笑っていたミラロゼさんだった。

ああ、何がいけなかったのだろうか。

王宮に戻り、ミラロゼさんから事のあらましを教えてもらった。

俺の予想は当たっていたようで、彼女は使用人と恋をして子どもを授かったが、それを許さなかった国王が使用人を拷問にかけた上で処刑、お腹の中にいた罪のない新しい命も殺された。

最も大切な二人を奪われた彼女は絶望し、全て殺すことを誓った。最初に城にいた国王以外の全員を地下室に閉じ込めてから、城に強い魔力を持つ者以外を弾く結界を張った。俺が王宮に入るときに感じた見えない壁のようなものの正体だ。魔法の威力を減衰してくれるスーツのお陰でギリギリ通ることができたということだ。

次に、地下室から一人連れだして自分宛ての手紙を書かせた。きつとこの手紙を書いた人物が地下室の壁に紙を忍ばせたのだろう。地下室には誰もいなかったから恐らくその後……。

その手紙を机の引き出しにしまってから国王をあの手紙を黒い化け物の姿に変えた。しかも本人の意思とは関係なく国民を殺戮するようにして。

いくら魔女とは言えあんな化け物を作る程の魔力は持つておらず、記憶と引き換えに大量の魔力を引き出していた。記憶を代償とした理由は国王に自分の絶望を見せつけるため。

大量の魔力を消費した彼女は深い眠りにつき、目が覚めた時には記憶を失っていたということだ。

「それで、あなたたちは国を滅ぼした私を糾弾でもするのかしら？」

「……分かりま……せん……何が正しくて……何が間違っているのか……分からない……」

「カイ……」

「そう。私はもう寝ることにするわ。明日の朝食も私が作ってあげるから楽しみにしてなさい」

○

私はかなり落ち込んだ様子のカイのことが気になり、彼がいる部屋に向かいました。

「カイ、私です。いますか」

「……どうぞ」

「失礼します」

ドアを開けて中に入るとカイは椅子に座って窓から外を眺めていました。

外にはもう誰もいません。昨日は暴れていたジャバリエすら。

「俺は、どうすれば良かったんだろうな……何かできることがあったんじゃないのか……」

「私たちがこの国を訪れた時点で結末は決まっていたのです。できることは何もありませんでした」

「俺の作った魔道具が、人を殺したんだ……」

「殺したのはミラロゼさんであって、魔道具ではありません。それに、あの魔道具がなくても彼女はジャバリエを殺すことはできたでしょう」

「それでも……それでも俺は！」

「ここでようやくカイはこちらを見ました。その顔には涙が流れていました。」

「これまでどんなことがあっても私に笑顔を見せていた彼が、初めて私に泣いている姿を見せました。」

「俺は……今まで正しくあろうと努めてきた。人を傷付けることに嫌悪していた。困っている人がいれば、可能な限り助けるようにしていた。俺は正しく生きていと付け上がっていた」

「……………」

「だけど、さっきのミラロゼさんの話を聞いて思ったんだ。思ってしまったんだ。彼女は悪くないのではと」

「……………」

「それでさ、何が正しくて何が悪いのか、何が正解で何が間違いなのか、全部分からなくなっただ。俺自身のことも」

「……………」

いつもは大きく見えるその姿は、道に迷っている子どものように見えませんでした。

「俺は誰かの為とか言いながら誰かを助けて、自分がいたから助けることが出来たのだと優越感に浸かっていただけなんじゃないのか？ 旅をしようと思ったのもそれが理由なんじゃないか？」

「…………それは違います」

「なら！俺は何故、旅に出ることにしたんだ！」

カイは本当に全てが分からなくなってしまうたようです。十年近く憶えていてくれたあのことも。

なので私は彼のもとまで歩き、その頭を抱きしめました。

「え…………」

「あなたが旅をすると決めた理由。それは、私と一緒に旅をするためです」

「あ…………」

「あなたが誰かを助けるのは、その人の笑顔が見たいからです」

「ああ…………」

「誰の目から見ても正しいことなんてありません。価値観は人それぞれです。あなたはあなたがやりたいと思うことをやれば良いのです」
「うん…………」

「カイ、これからも一緒に旅をしましょう。美しい景色を一緒に見て、一緒に美味しいものを食べて、嬉しいことや楽しいことを共有し、辛いことや悲しいことを一緒に乗り越えていきましょう。これからもよろしくお願いしますね」

「イレ…………イナ…………う…………う…………」

彼は私の腕の中で声を上げて泣き出しました。

私は一人でストレスや悩みを抱え込んでしまうことがあります、いつも頼りになる彼もそうだったというだけの話です。今までが上手く行き過ぎただけだったのです。

私は彼が泣き止むまで抱きしめ続けました。

●
イレイナには情けない姿を見せてしまったが、今までで一番と言つてもいいくらい心は晴れやかだ。

もう大丈夫。何が正しいかなんて考えなくても良い。俺はこれからもやりたいことをやるだけだ。

翌日。

ミラロゼさんが作ってくれた朝食を食べた後、すぐにこの国を去ることにした。

「もう行ってしまうのね」

「はい、俺たちは旅人です。一つの場所に留まり続けるわけにはいきません」

「あら、そう。残念ね。あなたたちと話すのは楽しかったのだけれど」
そう言う彼女の表情に変化はない。

「さつきは朝食を普通に食べていたけれど、私が毒でも仕込んで真相を知ったあなたたちを殺すとは考えなかったのかしら」

「考えていませんでした」

「私のことはどうするつもり？」

「どうもしません」

「そう」

昨日の夜。俺が泣き止んだ後、イレイナとミラロゼさんについて話し合っていた。

彼女をどうするべきか、朝食を作ると言っていたが食べても平気なのか、直接襲い掛かってくるのではないかなど、今の彼女を疑うものばかりだ。

しかし、そういえば俺が一枚の写真を取り出したことでこの話の結論が決まった。

落とし穴を掘り終わった後に三人で撮った写真。そこに映っているミラロゼさんの顔を見て思った。

確かにこの時とは比べ物にならないくらい冷たい雰囲気になってしまったが、ミラロゼさんであることに変わりはない。

少しだけ彼女を信じてみないかということになり、イレイナは自分の部屋に帰っていった。

そして今日。ミラロゼさんは俺たちに朝食を作ってくれた。昨日聞いた轟音は聞こえなかった。

朝食を食べ始める前に、彼女は使用人との馴れ初めや、彼が料理を教えてくれたことを思い出したから今日は静かであったのだということを見せてくれた。

その顔には少しだけ、昔のミラロゼさんが見えた気がしたのだ。

だから俺たちが言う言葉は決まっていた。

「ミラロゼさん」

「何かしらっ？」

「ありがとうございます、どうかお元気で」

俺たちはミラロゼさんに頭を下げて別れを告げた。

王立セレステリアと灰と黒の二人組（前編）

草原を抜けた先にその国はあった。

王立セレステリア。大きな壁に囲まれた大きな国だ。壁に囲まれている国を見ると赤い髪の少年と出会った国のことを思い出す。

彼は今何をしているんだろうな。あの国の近くを通ることがあれば再び訪れてみるのも悪くないかもしれない。

そんなことを考えながら俺たちは目の前の国に入るために門へ足を進める。

「ようこそいらつしやいました。失礼ですがお名前を聞いても？」

「イレイナです」

「カイです」

「滞在期間はどれほどでしょうか？」

「三日以内には出ていくと思います」

「魔女名は？」

お答えしよう。

「黒曜の魔女です」

「あなたには聞いておりませんが」

「まず魔女じゃないですよ。何言ってるんですか？」

こちらをジト目で見てくる門兵とイレイナ。やれやれ、手厳しい。

思っていたより冗談が通じなかった以上、俺から言うことは何もないので二人の問答の間はおとなしくすることにしよう。

「もう一度お聞きしますが、魔女名は？」

「灰の魔女です」

「……灰の魔女？」

「？何です？」

「あ、いえ。何でもありません。失礼しました。では入国料として銀貨一枚をお支払いください」

とある国と比べて良心的な値段だった。

俺たちは入国料を払い、門をくぐる。

「王立セレステリアにようこそ。灰の魔女様、黒曜の魔女様」

彼は思っていたより冗談が通じる人間だったようだ。

俺たちが国に入ってから少し経った。

イレイナと二人で歩いていた筈なのに、いつの間にか俺は一人になっっていた。

最初の内は「綺麗な街並みですねー」なんて言っていたのを聞いていたのだが、少しだけ目を離れた隙にいなくなっていたのだ。

悪意とかは感じなかったので誰かに攫われたとかではないだろうし指輪に魔力を込めてどこにいるのかも分かっているから問題は無いのだが。

きつと見たいところがあつたのだろう。別に必ず一緒にいる必要もないし、好きにさせておこう。

俺も少し気になったところがあるので、そこに足を進める。

「いらっしやいませー。お、お兄さん旅人かい？」

「はい」

「今お兄さんが手に取っているのはこの国で大人気の本でね、おすすめだよ」

「まあ、せっかくだし買いますか」

「全巻だね。まいどありー」

俺が気になった場所、それは本屋である。

本屋なんてどこの国にもあるが、店頭に置いてあつた本が『ニケの冒険譚』だったから少し気になったのである。

イレイナは旅を出る切っ掛けになつたこの本を鞆に入れていようだが、俺は家にはあるが持ち歩いてはいなかったなと思つて購入することにした。

ちなみに帯には『この国の偉大な魔女様が大絶賛！』と書いてあつた。イレイナと気が合いそう。

丁度良いと思ひ、俺は店主に質問を投げかけた。

「ところでこの国の建物の間には洗濯物がかけられていますね」「かけられてるね」

「魔力の消費を抑える為に低い場所を飛ばうとする魔法使いが文句を言ったりしないんですか？」

「しないねー」

この国では、魔法使いのほうきによる事故で建物に被害が出ないようにわざと低い場所を飛ばないようになっているらしい。

魔法使いは魔法使いでない人に配慮すべきだとこの国では考えられているようだ。

「この国には魔法学校があつてね。名前の通り魔法も教えているんだよ」

「それはそれは。珍しいですね」

「あ、でもあそこの先生や生徒じゃないお兄さんは入れないと思うよー」

「まあそうですねー」

予約とかしてないのに部外者が中に入れるわけないか。気にはなるが入れない以上仕方ない。

俺は店主に礼を言ってからこの国の観光に戻った。

それなりに歩いたと思うが、この国は大きいのでまだまだ見るところがあるだろう。

楽しみだなと考えていると俺の目の前に魔法使いの青年が降りてきた。俺と同じくらいの年齢だろうか？

「こんにちは。あなたが灰の魔女さんと一緒に旅をしている方ですよね」

「そうですが」

「僕は王立魔法学校の生徒です。あなたにお願いしたいことがあつて来ました」

「頼み事？」

「僕たちと協力して灰の魔女さんを捕まえてほしいのです」

ん？

「……あの、もしかして彼女が何か犯罪でもしたのですか？」

「いえ、そうではなく僕たちはある方から彼女を連れてきて欲しいと

「言われています」

「ああそういう……。そのある方というのはイレイナと会って何をす
る気ですか？」

「それは僕たちにも分かりません。ただ、事情を何も知らせずに彼女
を連れてくるか強引に連れてくるように言われただけです」

「それで彼女は逃げたと」

「はい。もし僕たちだけでは彼女を捕まえることはできないような
ら、あなたに協力を頼むようにも言われました」

「はあ……。俺に……。その人は信用できるんですか？イレイナに危害
を加えるような人物ではないと言えますか」

「はい。お願いします」

目の前の彼は俺を真っ直ぐに見つめて言ってきた。

何故イレイナに事情を知らせないで連れてくる必要があるのかは
分からないが、少しでも危険だと感じたら彼女を連れて全力で逃げよ
う。

「分かりました。俺も協力しましょう」

「ありがとうございます」

俺は現在の状況やこの国の地図を見せて貰い、どう動くか決めるこ
とにした。

・
○

理由は分かりませんが、私のことを捕まえようとしてくる生徒たち
から逃げ続けて暫く経ちました。

途中から何人かは見かけなくなったので諦めたのでしょうか。人
数が減った分、なおさら私を捕まえることなど不可能です。

そう油断している時でした。私の目の前に一人の魔法使いがほう
きに乗って私の前に現れました。

黒い髪、金色の瞳で黒いスーツを着ている男性。そう、カイです。
ほうきに乗るといいうか立ってました。

「やあイレイナ。良い天気だね」

「何ですか急に」

「ところで何も聞かずに俺たちと一緒にあるところに行かない？」

「行きません」

何故彼が生徒たちの方に加担しているかは分かりませんが、理由も聞かされないでついていくのは嫌だったので私は逃げました。

「やっぱりだめか。なら仕方ない」

後ろを見てみると、カイはほうきを操作してこちらに向かってきてました。

彼が相手だと私も全力を出さなくてはなりません。

私は杖を取り出していくつか魔法を放ちます。

「おおっと。危ない危ない」

しかしカイは苦も無く避けたり防ぎます。

「——君と君は——に、君たちは——に行つてくれ」

全部は聞こえませんでした。彼は一度停止して生徒たちに指示を出していたので今のうちに逃げることにしました。

「撒けたでしようか」

生徒たちの姿が見えなくなってからもほうきを飛ばし続けたので暫くは見つかることはないでしょう。

なので今のうちにどこかに隠れようかと路地裏に入った時、それは間違いであったことに気付きました。

「ここで終わりです」

目の前にはほうきで飛んでいる生徒がいました。後ろ見ると、そこにも生徒が。

上には誰もいなかったので勢いよく上空に飛び出しました。当然追ってくる生徒たち。

今度は前方からも生徒がやってきました。

ならば左右のどちらかにもと思いましたが、左右からも生徒が追いかけてきます。

今度は下かと考え、速度を上げて前方の生徒たちとぶつかりそうになる瞬間にほうきから飛び降り、ほうきを呼び戻す空中離脱をしよう

とした時でした。

「え——」

「捕まえた。あんまり危険なことはいしないで欲しいかな」

誰かに抱きかかえられる感触。突然のことに驚いていた私の耳にカイの声が聞こえました。

「どうやら私はカイに抱きかかえられているようです。」

周囲の生徒たちから拍手をされます。

このまま抱きかかえられたままでは嫌なので逃げ出そうと暴れますが、カイの腕はピクリとも動きません。

「ここから、暴れない暴れない」

「むーっー」

必死に動こうとしましたが、一人の魔女が目の前に現れたことで私の動きは止まりました。

「あ、先生……」

「皆さん、お疲れ様です。どうでしたか？実際に魔女を捕まえようとしても全く相手にならなかったでしょう？それに彼がいなかったら捕まえることなどできなかったのは理解してますよね。これが魔女や彼とあなたたちの実力の差です。年齢なんて関係ありません。ここにいる彼らは、あなたたちとは比べ物にならないくらいの実力者ですから」

彼女は微笑みながら私たちに言いました。

「お久しぶりです。イレイナ、カイ」

それは三年ぶりに会うフラン先生でした。



久しぶりに会うフランさんから学校で詳しい話をするからついてきて欲しいと言われた。

俺たちはフランさんの後に続いて王立魔法学校に向かった。

うーん。イレイナが魔女になる前もだったけど、この人のことを見るとたまに頭が痛くなるんだよな。なんでだ？

いくら考えても答えが出ないまま、目的地の学校についていた。学校の敷地内に着地した俺の胸元らへんから声が聞こえた。

「……………あの……………もう下ろしてください……………」

「……………」

どうやらイレイナを抱きかかえていることをすっかり忘れていたようだ。

「……………ごめん」

「いえ……………」

イレイナを下ろした俺はしばらく彼女の顔を見ることはできなかった。顔が熱い。

フランさんが生徒たちに課外授業の終了と宿題を告げてから俺たちの方に歩いてきた。

「あらあら。もつと続けてても良かったのですよ」

「先生、一度海底に沈んで下さい」

「……………」

そんな会話をしてからフランさんはずっと前にこの国の国王から誘われて先生をしていたことについて教えてくれた。

一年もの間、学校を休んでイレイナを魔女にしてくれたようだ。感謝してもしきれない。

その後はフランさんは学校を案内してくれた。

「私を捕まえようとしていた学生さんたちもここ……………生徒ですよね」

「ええ。課外授業の一環として、事情を知らせずに私のところまで連れてくる、もしくは強引に引きずってでも連れてくること、もし無理そうなら黒い髪に金色の青年に協力してもらおうように指示したのですよ」

「……………どうしてそんなことをしたんですか」

フランさんは俺たちの肩に手を置いて。「あなたたちに会いたかったからですよ」と小さな声で言った。

この人には敵わないな。

「どうして私たちがこの街に来ているって分かったんですか？」

「イレイナ。あなた、この学校に勝手に入ろうとしたでしょう」

「……あ」

「え？」

入ろうとしたのか、無断で。

後でイレイナと話し合った方が良さかもしれない。

「私が学校に来た時にその話を聞いて思ったのです。ああ、イレイナたちに違くないって。すぐに私は門兵のところまで行って、本当にあなたたちが入国したのかどうかを確認しました」

「げ、あの門兵のところですか」

フランさんに見られるなら変なこと言わない方が良かったか？

「？どの門兵か分かりませんが多分そうですよ。入国記録には確かにあなたたちの名前がありました。今朝、入国したのですよね？」

「ええ」

「はい」

あの門兵はユーモアがあつて仕事もできるパーフェクト人間かもしれないな。俺の戯言は書かないでくれたようだ。

俺たちが来ていることを知ったフランさんは成績優秀者の課外授業を利用することにしたらしい。理由は自分一人で探すのは難しいかららしい。

フランさんは扉を開けて俺たちを部屋に招き入れ、ソファに座るように促してきたので、俺とイレイナは彼女と対面になるように座った。

それから俺たちはいろんな話をした。

旅の途中で誰と出会い、何をして、どんな思いをしたか。どんな景色を観たか、どんな料理を食べたか、どんな文化があったか。

旅を初めてからの三年間の思い出は途切れることなく口から出ていった。

話の途中でフランさんが、「そういえば、あなたたちはいつ頃この国を出るつもりですか？」と聞いてきた。

「……明後日の朝に出国しようかなと考えています」

「明後日ですか」

「ええ」

出国の細かい日程は決めていなかった筈だ。それなのに明後日と言った理由、恐らくフランさんと長時間一緒にいると別れたくないという思いが強くなるからだろう。

「明日の予定は？何かやらなければならぬことはありませんか？」

「明日ですか。いえ、別に何も……」

「俺もないですね。何か用事でも？」

「はい。明日あなたたちに手伝って欲しいことがあるのですよ」

「家の片付けとかですか？」

「いえ、生徒の指導を手伝って欲しいのですよ」

「……………」

「……………」

「生徒の指導を手伝って欲しいのですよ」

二回も言われた。

イレイナはともかく俺もか。俺は魔法を使えるとはいえ、誰かに教えられるほどだとは思っていない。

まあ俺一人でやるわけではないし大丈夫かと考えた。

それから俺たちは話を続け、いつの間にか夜になっていた。

「あら。もうこんな時間。今日はこの辺にして帰りましょうか」

校舎から出た時にフランさんから自分の家に泊まらないかと誘われたがイレイナが断っていた。

俺としてはどちらでも構わなかったが彼女がそうするなら俺もそうしよう。

俺たちは宿を探しながら歩いていた。

空には綺麗な月が浮かんでおり、俺たちを照らしてくれている。俺はイレイナの顔を見た。

「どうしました？嬉しそうな顔をしていますけど」

「今日は楽しかったからね。それに、嬉しそうな顔をしているのは俺だけじゃないさ」

その顔は、良い表情をしていた。

「そうだ、学校に勝手に入ろうとしたことについて少し話し合おうか」

王立セレステリアと灰と黒の二人組（後編）

翌日の早朝である。

今日の俺は師匠から貰った執事服である。いつもとあまり変わらないが。

生徒たちの指導行うフランさんの手伝いということは、俺も先生ということである。ならばいつもより少しだけピシッと決めても良いだろう。

「今日はそちらを着てるんですか」

「まあね。先生っぽいでしょう？」

「いえ別に」

「……………」

俺たちはほうきに乗って空を飛んだ。

途中ですれ違う魔法使いに軽く挨拶をしながら王立魔法学校に向かうと、学校の敷地内には既にフランさんと生徒の姿があった。

時間は指定されてなかったから早めに行動していたが、丁度良かったようだ。

俺はイレイナとフランさんが話しているのを傍目に、生徒たちの練習している姿を見る。

地面に水が入った瓶を置き、魔法で水だけ进行操作するというもの。これなら俺もできそうだ。

フランさんは手を二回叩いて生徒たちを集めた。

「皆さん、こちらが灰の魔女イレイナさんと、彼女と一緒に旅をしているカイさんです。昨日も会っているから分かりますよね？」

「あ、どうも」

「よろしくお願ひします」

フランさんから紹介された俺たちはお辞儀をした。

「今日はこの二人に特別講師をしてもらいたいと思います。あなたたちとは年齢が近いとはいえ、立派な魔女と、一緒に旅をしている魔導師です。大丈夫だとは思いますが侮らないように」

生徒たちは昨日のことを思い出し、何度か頷いていた。

「皆さんから彼らに質問はありますか？」

「はいはい！イレイナ先生、彼氏は？彼氏はいますか？」
.....。

「いませんね。旅人ですし」

「魔法に関する質問だけにしなさい。他には？」

「あの.....、得意な魔法は、なんですか.....？」

「別に得意な魔法はないですね。何もかもそれなりにできるつもりです」

「俺は過重力の魔法です。小さい頃から毎日使い続けています」

それから様々な質問が飛んできた。

「カイ先生のほうきは一般的なほうきより太いけどどうしてですか？」

「これはほうきの上に立てるようになるためです」

「先生の実力はどれくらいですかー？」

「近距離戦でなら魔女にも勝てるかもってくらいですかね」

「どうしてイレイナさんと旅をしてるんですか？」

「彼女に誘われたからです。彼女のお陰でいつも楽しく旅をさせてもらっています」

「イレイナ先生と同じ指輪をしていますけど何か意味があるんですか？」

「この指輪は魔力を込めると相手の位置が分かる便利な魔道具です。俺が作りました」

これらが俺にきた質問の一部かな。

「はいはい！パンツは？パンツの色——」

イレイナに質問しようとしていた学生がフランさんによって吹き飛ばされていた。

そこで質問の時間は終わり、朝の課外授業は再スタートとなった。魔法の教え方は知らなかったが、フランさんやイレイナが教えている様子を見て俺もそれに倣うことにした。

生徒の近くを歩きながら上手くできなかつたり質問してきた生徒に教えるといった形だ。せっかくだしついでに写真も撮っておこう。

「すみません、分からないところがあるんですけど」

「はいはい。何が分かりませんか」

「瓶の中の水だけを持ち上げることができなくて……」

俺に質問してきた生徒は杖を振って水の入った瓶ごと持ち上げる。

「なるほど。恐らく水だけを持ち上げるイメージが出来てないのでしょう。まずは瓶の形を思い浮かべてみてください」

「はい」

「次にその瓶に水を入れる」

「……………」

「そしたら瓶を頭の中から消して、残った水だけをイメージします」

「……………はい」

「そのイメージのまま魔法を使ってください」

「！できました！ありがとうございます！」

「はい、よくできました。このイメージを徐々に素早くできるようにして、最終的にイメージしなくてもできることを目指してください」
それから俺は何度か生徒たちに教えながらあることを考えていた。

「フランさん、少しだけ良いですか？」

「構いませんよ」

「実はですね——」

俺はフランさんに考えていることを伝え、お願いできないか聞いていた。

「良いですよ。寧ろ私の方からお願いしたいくらいです」

「ありがとうございます」

それから少ししてフランさんが手を二回叩く。

「皆さん、今朝の課外授業はおしまいです。お疲れさまでした。なんと今日は夕方にも行います」

フランさんの言葉にざわつく生徒たち。生徒たちのうちの一人が手を挙げた。

「先生、今の課外授業で魔力を結構使ってしまったのですが大丈夫なんでしょうか？」

「はい。問題ありません。夕方の課外授業はこちらのカイさん主導で行ってもらいます」

「えーと、皆さんには身を守るための術を習得してもらおうと思えます。詳しいことはまた夕方に説明するののでしつかりと体を休ませておいてください」

そう。俺はこの学校の生徒たちに魔法だけでなく体を使ったことを教えたかったのである。

フランさんに頼んで夕方の分の課外授業を俺にやらせて貰うことになった。

俺の言葉でその場は解散となった。

フランさんは俺とイレイナをどこかに連れていきかけたようだが俺は準備があるので断り、イレイナに良い景色があったら撮って来てほしいとカメラを渡しておいた。

それから俺はこの国の武器屋に行つて必要なものを揃えた。

夕方になり、俺が学校に行くと既に生徒たちは揃っているようだった。

「それでは夕方の課外授業を始めます。今回の講師を務めさせていただきます旅人のカイです」

既に行っていた自己紹介もする。ただの気分である。

生徒たちも「よろしくお願いします」と頭を下げてくる。

俺は生徒たちの前にいくつか木箱と人形を置いた。木箱の中には様々な種類の木製の武器が入っている。

「皆さんにはこの箱に入っている武器の中から一つ選んでもらいます。自分が扱えそうなものを選んでください。今回は全部木でできたものですが危ないので振り回したりしないように。人形も持つていくように」

生徒たちは木箱の前に集まり、武器を手に持つて「これがしつくりくるなー」とか「これではないかな……」や「カッコいいだろー」と悩んでいる様子だった。

全員が武器を選び終わったのを確認してから一度咳払いをした。

「ごほん。皆さんは魔法使いですが、魔力が無くなったり杖がないと魔法を使うことができません。仮に誰かに襲われた時、魔法が使えないので許してくださいなんて通用しません。なのでこれから魔法ではなく武器を使った戦い方について学んでもらいます。まずは同じ武器を持つてる人同士でグループを作ってください」

言われた通りに集まる生徒たち。俺はグループ一つ一つにその武器の使い方を教えていく。

「では説明された通りに人形へ攻撃してみてください。朝みたいに歩いていくので何か聞きたいことがあれば遠慮なく聞いてください」

使い慣れてない武器を必死に振る生徒たちを見ながら俺は歩き始めた。

「カイ先生、この振り方で合ってますか？」

木の棒を持った男子生徒が質問してきた。

「ふむ、振り方は合ってますけど振った後の隙が大きすぎますね。実戦では一回振ったら終わりではないので次の行動を予測して振ってみましょう」

「あ、あの……ナイフが変な方向に飛んで行ってしまってます……、どうしたらいいですか？」

今度はおどおどとした女子生徒。その手には投げナイフを持っている。

「では一度見るので投げてください」

「は、はい……。てりやー」

人形に向かって投げられたナイフはあらぬ方向に飛んでいく。

「あー、なるほど。相手に武器を向けるのが怖いですか？」

「は、はい……」

「ナイフを投げる瞬間に目を瞑っています。最後の最後で相手に狙いを定められていないから変な方向にナイフが飛んで行ってるんですよ。あなたが優しい人であるのは分かりますが、もしあなたの後ろに大事な人がいた場合、次に狙われるのはその人です。難しいことを言

うかもしれません。が相手を倒す覚悟を決めて投げるようにしてみましよう」

「あ、ありがとうございます」

それから俺は生徒たちに質問されては答えていった。

途中でイレイナとフランさんが少し離れた場所から見ているのを見つけた。

「イレイナにフランさんじゃないですか」

「カイ、皆さんの調子はどうですか？」

「熱心にやってくれてますよ。俺の想像以上に上手く武器を扱えるようになってきてます」

「それは良かった。やはりあなたに任せて正解でした」

「お安い御用ですよ。ところでイレイナもやっていくかい？」

「いえ、私は結構です」

「良いのかい？ やっておくに越したことはないと思うけど」

「大丈夫です。だってカイが私のことを守ってくれますよね？」

「あら」

「……そ、そうだね。はっはっは、じゃあまた後で」

俺は二人に背を向け、生徒たちの方へ戻った。

「あれ？ 先生の顔真っ赤？ しかも歩くスピードも速いような……」

「はいはい！ カイ先生何があっただんですかー？ 教えてくださいよー！」

武器についての質問じゃなければ無視だ無視。

あんな信頼のされ方をされたら嬉しいけど恥ずかしいに決まってるじゃないか。

丁度良い時間になったところで俺は手を二回叩いて生徒たちを呼び寄せる。

「さて、今回は皆さんには武器の使い方について学んでもらいました。当然これだけでできても意味はありません。俺は明日にはこの国を出ていくのでこれ以上教えることができません。なのであなたたちが自分で本を読んだり考えたりする必要があります。こういった訓練

はやらなくて後悔することはあっても、やって後悔することはありません。これからのあなたたちの自主性に期待しています。これにて課外授業を終わります。ありがとうございます」

俺に倣って生徒たちも礼をする。

生徒たちは、人形や武器を片付けている俺に手を振って帰っていく。俺も手を振り返しておいた。

全員が帰った後、フランさんが俺に近付いてきた。

「今日はありがとうございました。私では投げナイフと弓しか教えられないから助かりましたよ」

「逆にその二つは使えるんですね。ところでイレイナはどこに？」

「彼女なら先に宿に帰りましたよ」

「そうですね。なら俺も帰りますかねー。今回使った人形や武器はまた使わせてあげてください」

そう言っただけ聞きたいことがある

「カイ、一つだけ聞きたいことがあります」

「何でしょうか？」

「朝の課外授業の時にも質問されましたが、あなたたちは付き合い合っていないのですか？」

「……いいいですね」

「何故？」

「……答えないと駄目ですかね」

「無理にとは言いません。ただ、あなたたちの仲の良さは傍から見てもよく分かります。だからこそ気になるのです」

なるほど。確かに俺も自分のことでは聞きたくなるかもしれない。

これについては俺自身が決めていることだからな。

「……俺たちは旅人です」

「はい」

「俺たちには帰る場所、故郷である平和国ロベッタがあります。旅が終わったら国外に出ることなんて滅多にないでしょう」

「そうですね」

「だから俺は、俺自身のせいでイレイナの旅を邪魔することはしたくない。彼女には目一杯旅を楽しんで欲しいんです」

「……………」

「イレイナと恋人の関係になりたくないわけではないです。寧ろなりたい。あんな魅力的な女性、なかなかいないですからね。彼女自身の気持ちは分かりませんが」

「ははは、と笑う俺をフランさんは真っ直ぐ見つめてくる。

「もしもイレイナも俺のことを好きでいてくれて、恋人になったら俺は自分を抑えることが出来なくなるかもしれないかもしれません。その場合、彼女は満足することないまま旅を途中で終えることになるのではないかと考えてしまいます。そうはなって欲しくないんですよ」

「あなたはそれで良いのですか？」

「俺はイレイナの笑顔が見ればそれで良いと思ってます。あの日、一緒に旅をする約束をした時から変わってません」

「旅の途中であなたではない男性を好きになってしまうかもしれないかもしれませんよ」

「その時はその時です。俺にそれだけの魅力はなかったということでしょう。悲しいですけど、最後には笑って送り出したいと思つてます」

「もしイレイナにそういった男性がいままま旅が終わって故郷に帰った時、あなたはどうしますか？」

「この想いを伝えます。嘘偽りなく」

「今度は俺がフランさんを真っ直ぐと見つめる。この想いは変えることはできない。俺の生き方だ。

「……やれやれ、器用なあなたにしては不器用な生き方をしていますね」

「満足のいく回答でしたか？」

「ギリギリ合格点と言ったところです。まあ、あなたたちならこれから先も大丈夫でしょう」

「そうですか」

「私からはもう何もありません。また明日会いましょう」

「明日……?」

「ふふふ、お楽しみにしてください」

「はあ……?」

フランさんに軽く会釈した後、俺は宿に帰った。

「お疲れ様です。これ返しますね」

宿に帰ってきてきて部屋で休んでいた俺にイレイナがカメラを渡してきた。

「お、どれどれ。ほー、良い感じに撮れてるなー」

魔法で写真を取り出してみると、この国の民家や魔法学校の校舎や雲が流れている青い空が写っていた。

「フラン先生に良い場所を教えてもらいました」

「なるほどなるほど。ところで他にはないのかい?」

「え」

「え」

「他の景色も必要でしたか?」

「いや、景色じゃなくて人だね。この景色を見たイレイナやフランさんの表情も見えたかったかなー」

「む、景色を取ってきて欲しいと言ってたじゃないですか」

「言ったねー。これは俺のミスだったかな。ごめんね」

「……いえ」

「良い写真ありがとう。危うくこの国の景色を見逃すところだった。助かったよ。そろそろ寝ないと明日の朝起きれないしもう寝ることにするかな。おやすみ」

「おやすみなさい」

俺が寝る支度を始めるとイレイナも自分の部屋に戻っていった。

ベッドに入り、寝る前にもう一度写真を見ることにした。

「本当に綺麗な景色だ。イレイナとフランさんがどんな表情をしているか簡単に想像できるさ」

並び合う師弟。その顔は綺麗な笑顔だっただろう。

翌日の早朝。

俺たちはこの国の門の前に来ていた。

「良いのかい？フランさんを待たなくて」

「……はい」

フランさんは俺たちに何かプレゼントでもあげようとしてくれたのかもしれない。

イレイナは少し悩んだ末、国の外へ足を進めようとしたところで上から何かが降ってきた。

「おや」

「……え？」

空から色とりどりの花びらが甘い香りを漂わせながら舞い降りてきた。

俺たちはこれをやった張本人がいる上空を見上げた。そこにいたのはフランさん。

「随分と早かったのですね——イレイナ、カイ。危うく私たちの準備が間に合わなくなるところでした」

フランさんの周りには見覚えがある生徒たちの姿。

手に抱えた籠から花びらを撒いていた。

「イレイナ先生ー、カイ先生ー。ありがとうございますー。お元気でー！」

笑顔でこちらに手を振ってくる彼らに、俺たちも釣られて手を振る。

「イレイナ、カイ。自ら望んで旅人となったあなたたちを引き止める権利は私たちにはありません。私たちにできることは、これくらいなものですよ」

「……先生」

「フランさん……」

「喜んでもらえましたか？」

「………はい、とっても」

「この光景は、二度と忘れることはありません」

俺はこの美しい光景を写真に残していた。まだ確認はしてないが、今まで撮ってきた写真の中でも一番を争うものとなるだろう。

皆に祝福されながら俺たちは歩き始めた。

「イレイナ、カイ。私と学校の生徒たちは、あなたたちを心から応援しています。どうか、そのことを忘れないで」

「……………私も忘れませんよ。皆さんのこと」

「……………ありがとう、皆さん。このことは一生の宝物にします」

門の目の前に立ち、門兵が一礼をしてから道を開けてくれた。

「ありがとうございます。灰の魔女様、黒曜の魔女様。我が国はいかがでしたか？」

「楽しかったですよ。とても」

「……………俺も楽しかったですよ。好きですよこの国。あなたも含め」

その答えに満足そうに門兵は頷いていた。

門の向こうに広がるのは、なだらかな平原地帯。

「イレイナ、カイ。最後にもう一つだけ——またいつか会いましょう。そのときまで、さようなら」

フランさんは笑っていた。俺たちも笑った。

「……………はい！」

平原地帯を二人組の旅人が走り回っていた。

「イレイナ、これからもよろしく」

一人は黒い髪に金色の瞳をした青年は、もう一人の女性に向けて言った。いつものように、その想いを秘めたまま。

「はい、これからも一緒に旅をしましょうね。カイ」

灰色の髪に瑠璃色の瞳をした女性は、にこりと笑う。いつものように、頼れる幼馴染へ。

二人の旅はこれからも続いて行く。

旅をしていたら楽しいことや嬉しいことに出会う。悲しいことや辛いことにも出会う。

二人ならば、楽しいことも二倍になる。二人ならば、支え合うことができる。

新しい出会いへの期待に胸を膨らませ、次の国へと進んでいく。そう、俺たちの旅はまだまだ続いていくのだ。

喧嘩

俺とイレイナ基本的に仲が良い。そうでなければ何年も一緒に旅をしていないだろう。

そんな俺たちだが、喧嘩だつてするのである。

「イレイナ、こればかりは俺も譲るつもりはないよ」

「だからそれでは駄目だと何度も言ってるじゃないですか。いい加減にしてください」

夜。とある国の宿屋の一室で俺たちは言い争っていた。

「別に良いじゃないか。イレイナが損するわけではないし」

「私の気が収まりません。私の言うとおりにしてください」

「嫌だ」

「嫌じゃないです」

「駄目だ！」

「駄目じゃないです！」

お互い強情なことである。旅先で自分の身を守るためにはこの強情さが役立つが、今はそれが原因で喧嘩が起こってしまった。

俺はイレイナのことを考えて言っているだけだ。少し強く言った方が良いのかもしれない。

「俺のことは気にしないでくれ！」

「なんでそんなこと言うんですか！カイなんて大嫌いです！」

「えっ——」

「あっ」

イレイナから放たれた一言。その言葉は俺の心に深く突き刺さった。

「……そっか。俺はちよつと外に出てくるよ」

「まっ、待ってください。今のは違くて——」

何か言おうとしているイレイナを置いて、俺は宿を出た。

やりました。やってしまいました。

あまりにも頑ななカイに私が放った心にもない一言が彼を傷付けてしまいました。

彼のことが嫌いだなんて嘘です。どうかして彼の考えを改めようとしたが故に出てしまった言葉です。

私との約束を守るためにずっと努力してくれて、しっかりと私のことを見てくれる彼を嫌いになるわけがありません。

私の失言を聞いた彼の悲しそうな顔が頭から離れません。軽く身支度を整えてからカイの後を追いました。

宿から出てカイの後を追いついた時。

「こんな時間にお嬢ちゃん一人？それならお兄さんと一緒に遊ばない？」

ナンパです。チャラチャラした感じの男性が私の前に立ちはだかりました。

「結構です」

「そんなこと言わずにさー、俺と楽しいことしようよ？」

「あなたに構っている時間はありません」

私は杖を取り出して男性を眠らせ、カイを追います。

「君可愛いね。これから暇？」

「暇じゃないです」

「良いところあんだけどう？」

「嫌です」

「持つてると金持ちになれる壺を買いませんか」

「いいません」

急いでいるときに限ってチャラチャラとした男性や、変な物売りつけようとしてくる怪しい人物に絡まれてしまいます。自分の美しさを少しだけ恨みながら先を急ぎます。



月明りが街を照らす。俺は広場にある背中合わせになったベンチ

の片方に座っていた。

「……はあ……」

つついっい溜息が出てしまう。分かっている。本当に悪いのは俺だっけが。

イレイナは優しいから俺が無理しないようにと気を遣ってくれてるのだろう。それなのに俺は彼女の優しさを拒んだ。

「シヨックだったなあ……。他の人に言われても笑って受け流すことが出来ると思うけど、イレイナに嫌いと言われるのキツイなあ……。しかも大嫌いだもんなあ……」

正直泣きそうだった。というか泣いた。ここに来るまでにすれ違った人に三度見されるくらいには泣いた。——ん？あの人泣いてるの？いや、凄い泣いてない？って感じだった。

今は少し落ち着いたけど、まだ彼女と会う勇気が出ない。戻ったら何と言おうか。やはり謝罪からだろうか。それとも嫌いにならないで下さいと懇願するところからだろうか。

まあイレイナが俺のことを本心から嫌ってるわけではないはずだ。衝動的に言ってしまっただけだろう。数年一緒に旅をしていればそれくらい分かる。

だからと言って不安にならないわけではないが……。もし本当に嫌われてしまったらどうしよう。俺生きていけるのかな……。その時はヴィクトリカさんに、あなたの娘に嫌われることをしてしまいました。俺は駄目な男ですとでも謝罪の手紙を送ろうか。

「これ以上悪い方向に思考が行くのは駄目だな……」

気持ちを切り替えるために魔法で仕舞っていた冊子を取り出した。中身はこれまで撮ってきた写真が入っている。簡単に言うアルバムだ。

このアルバムは俺の宝物なので失くさないように武器やカメラと一緒に魔法で仕舞っている。

「……………」

一ページずつアルバムをめくっていく。二人で一緒に平和国ロベツタから巣立った時。赤い髪の少年。黒い髪の少女が魔法を教

わっているところ。仲の良い兄妹。自称旅の占い師がパンを売っている屋台の店主に看板を渡しているところ。幸せを知らない少女に恋する少年がプレゼントを渡すところ。とある国で巨大な落とし穴を作った時。魔法の練習をする学生たち。——そして、色とりどりの美しい花びらに囲まれて笑っている灰色の髪的女性。

今までいろんな国に行き、いろんな人に出会った。楽しいこともあったし、悲しいこともあった。傍にはいつも彼女がいた。

やはり俺の旅には彼女が必要だ。彼女がいなければ俺は旅を楽しめない。

——だから謝りに行こう。嫌いじゃないと言われるまで何度だって頭を下げよう。お金を要求されたら有り金を全部渡しても良い。何を要求されても俺は不満を言うことなく応えよう。

そう決心した時のことだった。

「——良い写真ですね」

俺の反対側のベンチに座った女性が、こちらを見ることなく尋ねてくる。綺麗な声だ。

「ええ、宝物です」

俺も前を向いたまま答えた。

「その写真に写っている女の子はあなたにとってどんな人ですか」

「大切な女性ですよ。とても」

「その子のどこが良いと思ってるんですか」

「全部です。優しいところ。可愛いところ。努力家なところ。自分に自信を持っているところ。綺麗なところ。少し金に意地汚いところ。人に遠慮なくものを言えるところ。少し素直じゃないところ。一人で抱え込んでしまうところ。最後はそれをこちらに打ち明けてくれるところ。面倒見が良いところ。魔法を使っているところ。ほうきで空を飛んでいるところ。実は弓を使えるところ。笑った顔。困った顔。ムツとした顔。俺が作ったパンを美味しくそうに食べるところ。きのこが嫌いなところ。それを隠そうとするとところ——」

「もういいです」

「もう一度言いますが全部ですよ」

「そんなに大切な女の子なら何故今一緒にいないんですか」

「ちよつと喧嘩をしてみましたしてね。俺が意地を張りすぎたのが原因です。俺が悪かったんですよ」

「彼女の方が悪かったという可能性は？」

「ないですね。寧ろ彼女は俺のことを考えてくれていたんですよ。俺が馬鹿だったせいで大嫌いと言われてしまいました」

「あなたは怒っていたり、彼女のことを嫌いになったりしていますか」
その声は少し震えていた。

「怒ってませんし、嫌いになんてなりませんよ——だから、ごめんイレイナ。俺が悪かった」

「……私こそすみませんでした。あなたのことが大嫌いだなんて嘘です」

「そつか。じゃあ宿に戻ろうか」

「はい」

俺たちは同時に立ち上がり、並んで歩く。

宿に着くまでの途中、俺たちは一言も喋らなかった。言葉は十分に交わしたからこれ以上は必要ない。ただこの時間を大切にするだけだった。

俺たちは笑顔だった。空を見上げた時に見えた月も、笑っているかのように弧を描いていた。



さて、ここで今回何故喧嘩したかを説明することにしよう。

まずは俺たちが今日泊まる宿を探し続けて、ようやく空いている宿を見つけた時のことだ。

「え。空いている部屋が一つしかない？」

「はい。二人用の部屋なのでお客様たちでも問題はありません」

「いつもは別々の部屋を取るようになってるけどどうする？この国にある宿はここが最後だけ」

「まあ大丈夫じゃないですか。野宿は嫌ですよ」

「ならその部屋でお願いします」

そうして案内された部屋の中。二人部屋に相応しい広さの部屋で、人数分の椅子もあるしこれなら確かに問題ないと思った。ある一点を除いて。

「ベッドが一つしかないんですけど……」

「なんか大きいね……二人寝れそうなくらい」

ベッドが一つしかなかった。どうやらこの部屋は恋人や夫婦で来る部屋のようだ。

「イレイナはベッドで寝なよ」

「カイはどうするんですか？」

「俺は椅子か床で寝るよ」

女性であるイレイナにはベッドで寝てほしい。椅子や床はベッドに比べると硬いが、寝れないことはないはずだ。

「それだとカイは休めないのでは」

「俺は大丈夫だから」

「大丈夫なわけじゃないですね？私に気を遣う必要はありません。仕方ありませんが、二人で寝ることにしましょう」

確かにこの大きさのベッドなら二人が密着するわけではないからそこまで恥ずかしさというものはないのかもしれない。とは言っても一緒にベッドに入っていることには変わりないんだよなあ……。逆にイレイナは気にしないのかね？

「いやあ、俺のことは気にしなくていいから……」

「何言ってるんですか。いいから寝ますよ。もう寝たいんですから」

「なら先に寝てて良いよ。俺は魔道具でも作ろうかと思ってるから」

「そしたら絶対ベッドに入らないですよね？」

「……………」

「……………」

俺たちの間に剣呑な雰囲気の流れる。

「イレイナ、こればかりは俺も譲るつもりはないよ」

「だからそれでは駄目だと何度も言ってるじゃないですか。いい加減

にしてください」

そして次第にヒートアップしていったのである。

●
宿屋に戻ってきた俺たちは別々に寝る支度をしてから今度こそ一緒に寝ることにした。

「どうしたんですか？早く来てください」

ベッドに入るよう促してくるイレイナ。なんだか良くないことをしているような気持ちになる。いや、邪なことをするわけではないしするつもりもないのだが。

「……イレイナは俺と一緒に寝るのに抵抗はないのかい？俺がイレイナに手を出してしまうかもしれないよ」

「いまさら聞きますか。あなたはそんなことする人ではないのは分かっているから良いと言ってるんですよ」

「信頼が厚い……」

ここまで信頼されてるのは嬉しいが、男としては見られていないのではという悲しさもある。

これ以上は考えないようにし、ベッドに入った。

「あ、こっちの方は見ないでくださいね」

「……理由を聞いても良い？」

「駄目です」

「あつはい」

即答だった。まあ元々見るつもりはないのだが。

イレイナの方を見たら俺の顔が真っ赤になってしまうのは分かりきっている。そうなったら俺はドキドキで眠れなくなってしまう。彼女の寝顔を見たいと思うが、今は睡眠を取ることが重要だろう。だから俺はイレイナがいる方とは反対の方を見て寝るのだった。

○

「すう……」

私の目の前から寝息が聞こえてきました。カイは私の言った通りこちらを見ないまま寝始めたようです。

もし彼が振り返っていたら、見られていたことでしょうか。そう、この緩んだ口元を。

ベンチに座ってアルバムを見ていた彼が言ってくれた、私のどこが良いかと思っているのか。

数個くらいかと思っていたら、彼の口は止まることを知りませんでした。

恥ずかしさから途中で止めてしまいましたが、カイが私の外見だけでなく内面も、良いところだけでなく悪いところも好きでいてくれて嬉しくないはずがありません。

私をしつかり見てくれる彼だからこそ、つよくてかしい灰の魔女イレイナとしてではなく、ただのイレイナとして弱さを見せてしまうこともあります。そんな私を彼はいつも傍にいて励ましてくれます——その逆もあります。彼のいない旅など想像できません。

私はこれからも彼に甘えてしまうでしょう。甘えてばかりだと彼に迷惑を掛けてしまうかもしれないので程々にしておくべきだと思います。しかし、私はそれが心地良いとも感じています。安心するとも言えるでしょう。

こんな私は悪い魔女なのでしょうか？それならば私を甘えさせる彼もきつと悪い人ですね。二人そろって悪人です。

「……………」

カイを起こさないようにゆっくりと体を動かし、あと少しで触れてしまいそうになるまで近付きます。

ドクン、ドクンと聞こえてくる心臓の音は私のものでしょうか、それとも彼のものでしょうか。

「おやすみなさい」

目を閉じ、この音を楽しみながら眠ります。

——旅の途中、訪れた国で悪い魔女が悪事を働くかもしれません。

なのでこれからも私から目を離さないで下さいね？

「……すぴー」

「ん……？」

寝始めてからどれくらい経ったか分からないが、何か俺の体に触れたことで目が覚めた。

誰かの片腕が俺の体の上にあるし、誰かの片足が俺の足の上に置かれていて——つまり、抱きしめられているような状態である。

俺を抱き枕のようにしているのは一体誰か。……そう、イレイナだ。俺は今イレイナに抱きしめられている。その事実が俺の頭を無理やり起こしてくる。

今の彼女は薄着である。そんな彼女に密着されれば、背負った時とは段違いの柔らかさが伝わってくる。イレイナは自分の体つきを気にしている節がある。確かに大人の女性と比べると慎ましいものであるが、俺にとってはものすごい破壊力である。大ききなんて関係ないっす。ヤバいっす。心臓がバクバクっす。

「あ、あのイレイナさん。もし良かったら離れて頂ければ幸いですなーと思うんですけど。俺が死んでしまうのですが」

「すぴー」

「駄目ですかそうですか……」

俺が小声だったというのもあるが彼女は大変深い眠りに落ちていたようで、全く起きる心配がない。これは大変困った。

こうなったら頑張って寝るしかない。気にしない気にしない。背中に感じるイレイナの感触なんて気にしな——気にする！滅茶苦茶気になってしまう！

寝ようとして目を閉じるときさらに彼女の体温を感じる気がする。な、何か別のことを考えて気を紛らわせるんだ。

俺は頭の中でイマジナリーな知り合いを呼び出して助言を求めることにした。

『イマジナリーな皆さんはこの状況どう思います?』

『男ならやらなければならぬ時がある!今がその時じゃ!やれ!』

『あら、蝶々。うふふ……』

『孫の顔が楽しみね』

『先生の好きにすれば良いじゃないですか』

『今母さん新作を描いてる途中だから待っててね』

『カイ、ここは頑張っただけで待たされた僕のように』

比較的まともなイマジナリーな人はエイデン君と父さんだけか……。師匠は最低なことを言ってるし、フランさんは蝶々を追いかけてる。ヴィクトリカさんの言葉は聞かなかったことにしよう。母さんは何をやってるんだ?よく考えたらエイデン君はどうでも良いと思っただけか?』

結局俺はイマジナリーな父さんの助言に従い、イレイナを起こさないうように耐え忍ぶだけだった。

ドキドキで眠れなかった。

結局イレイナが俺から離れたのは、彼女が起きる十分くらい前のことだった。

イレイナが起きたのを確認してから、俺もたった今日覚めたという振りをして一緒に朝ご飯を食べて出発した。

つまるところ、一切眠れなかったのだ。眠い……。

魔法使いのための国と反乱軍（前編）

雨上がりのじめじめとした空気の中、俺は荷車を引いて走っていた。

馬車くらいの大きさの荷車には、前いた国で俺たちが次に行く国に届けてほしいと依頼された蓋がされた木箱がいくつも載せられている。ついでにイレイナも乗っている。

「イレイナー、乗り心地はどうだい」

「少し揺れますがほうきの操作に気を取られることなく景色を観れるのは最高ですね。カイが用意してくれたクッションのお陰で座り心地も問題ありません」

「それなら良かった」

たくさんの荷物と一人を乗せた荷車を引くのは大変じゃないかと思える人もいるだろうが問題はない。イレイナが魔法を使って軽くしてくれてるし、このくらいの重さなら苦にならない。鍛えてますから。

「しかしこの木箱の中には何が入ってるんでしょうか」

「依頼主によると食料らしい。開けないように言われてるからね？」

「……分かってますよ」

変な間があったけどもしかして開けようとしてたのだろうか。もし開けて受取先の機嫌を損ねたら報酬が減るかもしれないから言っただけで正解だったようだ。

今回の報酬は金貨十枚を受取先でもらうことになっている。食料を運ぶだけにしては大金だ。怪しい依頼だったが、誰かに取られる前に先に受けてしまうことにした。危険なことに巻き込まれそうになつたらすぐに逃げるようにすれば大丈夫だろう。

俺たちは旅人だ。その国で起きる問題ごとに関わる必要はない。冷たい言い方かもしれないが、自分たちの身の安全の方が大切なのだ。

「お、あれかな」

俺たちがこれから訪れる国——魔法使いのための国が見えてきた。

門の前に着いた俺たちの前に、この国の門兵が出てきた。門兵にしては珍しく、三角帽子とローブを身に着けた魔法使いの装いをしていった。

「ようこそわが国へ。そちらの方は魔女様のようにですけど、あなたは魔道士ですか？」

門兵は一度イレイナの方に顔を向けてから俺に質問してくる。魔女であるイレイナを見て本当に魔女かどうか確認されることは多いのだが、俺が魔道士かどうか聞かれるのは滅多にない。

魔法使いは基本的に自分が魔法を使えることを証明するためにローブや三角帽子を身に着けるのだが、俺はスーツを着ているだけだから

「はい。旅の魔道士と魔女です」

「はあ、そうですか。失礼ですがお名前は？」

「カイです」

「イレイナです」

「カイ様にイレイナ様。なるほど。失礼ですがお二人は付き合っているのですか？それとも他に恋人でもいらっしやいますか？」

「ん？」

「はい？」

こんなところで恋人がいるかどうか聞かれるとは……。これまた初めての経験だ。

俺たちが困惑しているのを感じ取った門兵は首を横に振った。

「失礼。邪な気持ちがあつて聞いたわけではありません。ただ、魔法が使えない人間を恋人に持つ方ですと、この国に滞在されると不愉快な思いをされるものですから。それとカイ様は魔法使いだと分かるような恰好をすることをおすすめします」

「は、はあ……」

「それで、どうでしょう？」

「まあ、俺には恋人はいませんね……」

「私もいませんけど」

イレイナの答えを聞いて少しほっとした俺がいる。今まで訪れた国でこつそりと恋人でも作っていたらどうしようかと思っていたがよかったよかった。

俺たちの答えを聞いた門兵は頷いた。

「ではそちらの木箱の中身を確認させていただきます」

「一応依頼主から開けないように言われてるんですけど」

「それでも見させていただきます。おや、これは……」

「うわ……」

蓋が開けられた木箱の中を見てみると、きのこが隙間なく詰められていた。それを見たイレイナは慌てて荷車から降りた。

他の木箱の中身もきのこばかりだった。受取先の人はずきのこ好きすぎでは？

「見たところ特に問題はなさそうなのであなた方の入国を許可いたします」

「本当に見ただけでしたね」

「……きのこが嫌いだからずっと見ていたくないとか触りたくないとかではないですよ？」

「……そうですか」

きのこ嫌いの門兵は門を開けてくれた。

「おほん。ではあなた方の入国を許可しましょう——ようこそ。魔法使いのための国へ」

そう言って深々と頭を下げていた。

●
国の中に入った俺は依頼を達成するためにイレイナと別れて受取先まで向かった。

道の途中、この国の様子に目を向ければ少々異様なことに気付くのに時間はかからなかった。

普通に道を歩き、買い物をしている三角帽子やローブを身に着けている魔法使いが多く見られる。しかし道の端の方では魔法使いではない人たちがぼろぼろの服を着て隠れるように——魔法使いと関わ

らないように歩いているように見えた。

なるほど、門兵が言っていたことの意味が分かった。この国では魔法使いではない人の立場は限りなく低いのだろう。理由もなく魔法使いに頭を下げている姿は見ていて気分が悪くなる。

だからといって俺にできることは何もない。きつとここではこれが普通なのだろう。

「魔法使いの姉貴！へっへっへ、靴舐めますよ」

「キモ……」

「まあそう言わずに靴出してくださいよー。杖でも良いっすよ。ひっひっひ」

「近寄らないで変態！」

「報酬は先払いつて感じすか！あぎーつす！」

「ええ……」

正しいのもいるんだな……。

「さて、ここが受取先か」

俺の目の前には年季を感じさせる酒場があった。木でできたドアを叩く。

「すみませーん。こちらに荷物を届けに来ましたー」

店の中から足音が聞こえ、ドアが開けられた。出てきたのはまさに酒場のマスターと言った風貌の五十代くらいの男性だ。

「……中に入れ」

「えっと、俺はただ荷物を届けに來ただけなので報酬さえもらえれば良いんですけど」

「さっさと中に入れ。お前らはブツを中に入れろ」

マスターがそう言うのと店の中からぞろぞろと男性たちが出てきて木箱を店の中へ持つていく。

とりあえず俺もついていくことにした。

俺はてつきり酒場のカウンターで一杯何か飲ませてくれると思っていたのだが、酒場の奥の部屋に隠されていた階段を下りさせられて

いる。

だから俺は前にいた木箱を運んでいる男性に行先を聞くことにした。

「あの一。俺はこれからどこに連れていかれるんすかね？」

「……どこってアンタ。俺たちのアジトに決まっているじゃないか」

「アジト……？」

一体何のことだろうか。なんで俺が知っていること前提みたいなことになってるんだ。

「おい、お前もしかして何も聞かされていないのか？」

俺の後ろを歩いていったマスターが聞いてくる。

「俺はただこの荷物を運ぶように依頼されただけですけど」

「……そうか。ここまで来てしまったら仕方ない。お前、名前は？」

「カイです」

「カイ、これから俺たちの言うことを誰にも喋らないと約束できるか？」

「……俺たちに危害を加えないと約束してくれるなら」

「ああ、約束しよう」

階段を下りた先にあったのは円形状の広い空間。中央には大きな円卓と椅子。壁にはいくつかドアがあるのでその先に部屋か通路がまだあるのだろう。

ざっと見ただけでも何十人もおり、全ての人がぼろぼろの服を着ていた。恐らく魔法を使えない人たちだろう。

先ほどの男性がアジトと言っていたが、ここでは何が行われているんだ？

マスターが円卓にあった一番立派な椅子の横に立った。

「お前ら、例のブツがたった今届いた。これより我々の計画は最終段階に入る」

「うおおおお！」

「ついにこの時が来たか！」

「これであの憎い魔法使いたちに一泡吹かせられる！」

この場にいた人たちの歓声を聞けば分かる。何か良くないことを

考えているのだろう。あまり関わりたくないことだ。

円卓の上に俺がこの国に運んできたきのこが入った木箱が置かれた。マスターは蓋を開けてきのこを取り出した。

「なっ——」

驚きのあまり声が出てしまった。何故なら、木箱にぎつしりと詰まっていたはずのきのこを少し取り出しただけで底が見えたからだ。

木箱の大きさからみても底が見えるのは早すぎる。つまりこれは

「二重底……！」

「そうだ。そして中身はこれらだ」

木箱から剣や銃といった武器や爆弾が取り出され、円卓に並べられた。

「お前ら。この男は俺たちの武器を届けてくれた旅人のカイだ。無礼な真似はするなよ！」

「へいっ！」

「あなたたちは一体何をしようとしてるんですか」

俺はとんでもないことに加担してしまったようだ。

「簡単に言うとは反乱だ。俺たちを見下してきた魔法使いたちに対するな。そしてここは反乱軍——」のマジトで俺がボスの——だ」

「反乱……」

「奴らは魔法を使えない俺らを人間未満と呼んで虐げてきた。その報いを受けてもらうのさ」

人間未満——本で見たことがある魔法を使えない人に対する差別用語だ。実際に使われているのを見るのは初めてだが。

「……銃や剣を持ったところで簡単に魔法使いには勝てるとは思いませんが」

「んだとテメエ！俺たちを馬鹿にしてんのか！」「若いからって調子乗るんじゃないぞ！」「今ここで試してやろうか！」

俺の疑問は彼らを怒らせてしまったようで、何人かが俺に怒鳴ってくる。

「やめろお前ら！カイの疑問はもつともだ。魔法を使えば銃や剣を別の物に変えて無力化するなんて容易いし、遠くから魔法を撃たれたら近付くのは難しいし、銃の狙いをつける暇もないだろう」

「何か策でもあるんですか？」

「当然だ。九割の確率で成功すると睨んでいる」

自信満々に頷くマスター。

「その策を聞いても？」

「駄目だ。もう一度聞くが、このことを口外しないと約束できるか？」

「……本当に俺たちに危害を加えないと約束してくれるなら、ですけど」

いつでもここから逃げられるように全身に力を込める。全力で走ればここを突っ切ってイレイナのところまで行くことは可能だろう。

「さつきも気になったのだが『俺たち』と言ったな。連れがいるのか？」

「……はい。俺と一緒に旅をしている魔女です」

俺のせいでイレイナに危害が及ぶのだけは避けたい。反乱軍の目的が魔法使い人以上、何も知らない反乱軍の手によって魔女である彼女に矛先が向く可能性がある。だからここで彼女の存在を隠すよりは公にして俺の関係者だと教えた方がまだマシだろう。

「なっ、魔女だと」「俺たちが憎む魔法使いたちの頂点じゃないか」

「やっぱりこのガキ、俺たちの敵なんじゃないか？」

想像は出来ていたが、俺の発言に反乱軍の部下たちがざわつく。

「ほう、魔女と一緒に旅をしているのか。魔女名と名前、特徴は？」

「灰の魔女イレイナ。長い灰色の髪に瑠璃色の瞳の女性です」

「分かった。お前とその魔女に危害を加えないと約束しよう。聞いたかお前ら！灰色の髪に瑠璃色の瞳の魔女には手を出すんじゃないぞ！」

マスターの一言によって騒がしくなっていたアジトが静かになった。

どうやらマスターは本当に俺たちに危害を加える気はないらしい。

「魔法使いは憎いんじゃないんですか？」

「ああ憎いさ。だがそれはこの国の、だ。国の外から来た魔法使いを理由もなく憎いと思うほど俺は視野が狭まったつもりはない」

「俺も魔法使いですが」

「そうか」

俺が彼らの憎む魔法使いだと明かしても、マスターの反応は淡白なものだった。マスターの言っていたことに嘘はなく、ちゃんとこの国の魔法使いとそうでない魔法使いの分別は出来ているようだ。

「……分かりました。あなたたちのことは誰にも言いません」

俺が黙っているだけでイレイナの安全が保障できるなら安いものだ。

「そう言ってもらえると助かる。俺たちも無実の人間は殺したくないからな」

「もう行っても良いですか」

正直な話、早くここから離れたい。俺たちがいる間はやらないとはいえ、反乱を起こすつもりの人たちと一緒にいるべきではないからだ。もしこの国の政府や魔法使いたちにバレたら俺も同罪になってしまう。それだけは避けたい。

「駄目だ。お前が俺たちのことをばらさないとは限らない。だからここにいてももう。もしこの場所が見つかったとしてもお前は何も知らないままここを訪れて俺たちに監禁されていたと言えば罪には問われないだろう」

「……俺が帰らないとなるとイレイナが探しに来ますよ。そうになると彼女は誰かにあなたたちのことを喋ってしまうかも」

しばらくしたらイレイナは俺のことを指輪を頼りに探しに来ることだろう。そうなると反乱軍のことを知ってしまい、無理やりにも俺のことを取り返そうとする可能性がある。そうなるとイレイナが誰かを傷付けることになるかもしれないし、傷付けられるかもしれない。俺は彼女には無理をしてほしくないのだ。

「何が言いたい?」

「朝から夜になる前まではここにいきましょう。しかし、夜になったら俺は宿に帰る。これならイレイナはここに来る確率は低くなるし、一

日のほとんどの時間俺を見張ることが出来ます」

この提案は反乱軍側からすればほとんどメリットがない。なんなら俺が彼らのことを誰かに喋ってからすぐにこの国を出る可能性もある。それが分からない人が反乱軍のボスなどやっていないだろう。

「ほう、面白い。気に入った」

「え、良いんですか」

意外にもあつさりところらの要求を呑んでくれたので、俺の方が声を上げてしまった。

「ああ。だが宿はこちらの方で用意したところで泊まってくれ。それとお前が外出している時は部下を一人つける。監視のためだ」

「なるほど」

「ついでに俺たちの計画を実行するのはお前たちがこの国を出ていった後にしておこう」

「そこまでしてくれるんですか」

「言っただろう。気に入ったってな」

このマスター、俺が思っていた以上に懐が広い。イレイナを危険なことに巻き込みたくない俺にとって、この国に滞在中に反乱が起こる可能性がないというのありがたい。

この人なら少し信用しても良いのではと考え始めている俺がいる。

「分かりました。ではイレイナに宿を取れたことを教えに行かないといけないので宿の場所を教えてください」

「いいだ」

マスターは俺に宿屋の位置に印をつけた地図を渡してくれた。

「お前が外にいる間はいいつがお前を見張る。こいつは有能だぞ」

「ふっふっふ。よろしやすー!」

「!？」

さつき見た魔法使いの女性の靴を舐めようとしていた男だった。罵倒されて嬉しそうにしてたこの人も反乱軍だったのか……。

ま、まあ気を取り直してイレイナと合流しようか。いや、その前にやるべきことがあったな。

「ここまで荷物を運んだ報酬を下さい」

「……ほらよ」

投げ渡された袋の中には金貨が十枚入っていた。よしよし。

●
反乱軍のアジトから出てから指輪に魔力を込め、イレイナの位置を探った。

少し離れた位置にいるけど問題はない。人がいない屋根の上を行けば時間短縮ができるだろう。

俺は屋根の上に跳んでイレイナの方に向かっ——

「待ってくださいよー。俺はそんなに高くジャンプできないし、それだどこの国の魔法使い様に会えないじゃないですかー。やだー」
「……………」

屋根から降りて普通に歩くことにした。

時間はかかったが、イレイナの近くまで来ることが出来た。問題なのは——

「魔法使い様ー。はっはっは、そのロープ俺が洗っておきやすよー」

「汚い手で触らないで!」

「俺の心はいつも綺麗ですよ?」

「今は手の話をしてるんだけど!?!」

「あ、そうっすねー。すいやせんでした!靴と杖舐めるんで許してくださいー!しゃすー!」

「ええ……」

俺の後ろで行われるこのやり取りだ。これで五回目。しかもギリギリで俺のことを監視できる距離でやるのだ。有能なのだろうけど俺の精神を削ってくるのはやめてほしい。

そろそろ六回目が来そうで怖かったが、無事にイレイナを見つけることが出来た。

「イレイナ」

「カイですか。なんか元気がないですね」

「変な物を見せつけられてね……」

「はあ……?」

首をかしげるイレイナ。あれは彼女には見せたくないな。早めに用件を言うとしよう。

「今日泊まる宿を取ったんだ。案内するからついてきて」

「早いですね」

「たまには早くても良いでしょ。さあこっちこっち」

俺は地図に付けてもらった印の場所に彼女を連れていく。その途中で俺はイレイナと雑談をすることにした。

「俺の方は荷物を届けて報酬を貰って来たよ。はいこれ半分」

俺はイレイナに報酬の半分——金貨五枚を渡す。

「良いんですか?」

「荷物を軽くしてもらったからね」

「あなたがそう言うなら仕方ないですが貰っておきましょう。ありがとうございます」

そう言っただけで金貨を仕舞うイレイナ。隠そうとしているが嬉しそうだ。

「ところでイレイナは今まで何してたの?」

俺が質問すると彼女の顔が曇る。

「列車に乗ってました」

「列車?」

「地面に敷かれた鉄の棒の上を走る大きな乗り物です。この国の魔女が作ったそうです。どのような仕組みで動いているかは全く理解できませんでしたが」

「へー、ちょっと興味あるなー」

乗ってみたいし仕組みも気になる。

「乗るのはおすすめしませんよ」

「え、そうなの?」

「はい。不愉快でした」

「うーん?」

凄く揺れて酔ったとか?イレイナがおすすめしないと云うのなら乗らない方が良いのかね。

「この国を出るまでの間、俺はやることがあるから朝と夜以外は宿にいないよ」

「何をするんですか？」

「バイトみたいなものかな。イレイナは？」

バイトみたいなものであってバイトではない。正直に話したところで余計な心配を掛けてしまうだけだ。

このことについて詳しく聞かれる前に、明日以降のイレイナの予定を聞いた。

「この感じだと雨が降りそうですし、宿の中で過ごすことになると思います」

「この国を出発するのはいつにしようか」

「雨が止んだらですかね」

「了解。そうだ、少しの間指輪を預かっておくよ」

「どうしてですか？」

「新しい機能でも追加してみようかなと思ってね。ちゃんと返すからさ」

「……分かりました」

イレイナは少しだけ不服そうな顔をしてから指輪を渡してくる。指輪に新しい機能をつけようとしているのは本当のことであり、前からいろいろ考えていたのだが、なかなか時間が取れてなかったの丁度良かった。これならイレイナが指輪を頼りに俺のところに来ることとはないだろう。

マスターが取ってくれた宿だが、これが結構立派で宿泊費も高いだろうなと思ったが、数日分マスターが既に払ってくれていたらしい。良い人すぎないだろうか。

魔法使いのための国と反乱軍（後編）

宿に必要な荷物を置いてから俺は反乱軍のアジトに行った。

マスターは表の顔である酒場の準備をしていた。客はあまり来ないそうだが反乱軍のアジトとしてはかえって都合らしく、ここを訪れる客というのは反乱軍に入りたい人や外から来た協力者がほとんどらしい。

少し話を聞きたかったので、俺はアジトで暇そうにしていた男性と話をすることにした。

「何故反乱軍に入ろうと思ったんですか？」

「旅人さんか。俺は人間扱いされないのに我慢ならなかったからだな。あいつら、魔法が使えるからって俺たちのことを人間未^ア満^ニと呼ぶんだぜ。俺たちだって同じ人間の筈^アだろ？」

「そうですね。人の価値って魔法だけで決まるものではありません」

「なんだ、話に分かるじゃないか。だから俺はあいつらに俺たちを認めさせるんだ。それが正しい方法じゃなくてもな」

「ここにいる全員がそうなんですか？」

「いいや、反乱軍に入った理由は人それぞれさ。ほら、あいつを見てみろ」

そう言っ指した先には優しそうな顔をした男性が銃の使い方を何度も確認していた。何故あんな人まで反乱軍に入って物騒な物を持っているのだろうか。

「あいつは見た目通り優しいやつでな。目の前で腹を空かせている子どもを見ると自分の分の食料を上げちまうお人よしなんだ。反乱軍に入ったのも、子どもたちには不自由なく暮らしてほしいからなんだってよ」

「……………」

「別に・全員があいつみたい立派な理由で入ったわけではないさ。おしやれがしたいから、魔法使いの顔が恐怖に歪むのを見たいから、自分の方が優位に立ちたいから等々。ま、人それぞれってわけだ」

「……大体分かりました。ありがとうございます」

「こつちも暇してたから丁度良かったぜ」

戦う理由は人それぞれで、自分の為だったり誰かの為だったり人の数だけある。しかし、その発端となったものはただ一つ——魔法使いとの境遇の差なのだろう。戦う理由は一つ一つ聞きたびに、魔法を使えない人たちの不自由さを理解させられた。

国から指名手配されない範囲で彼らに何かをしてあげたいと思った俺はアジトを出て階段を上がり、店の準備は終わって暇にしていたマスターに話しかけた。

「マスター、少し頼みたいことがあります」

「なんだ。言ってみろ」

「キッチンを貸してください」

「何をするんだ？」

「そりゃ料理ですよ。料理くらいならするって言いましたよね」

「そうだったな。下のやつらに良いもんを食わせてやってくれ。俺たちに料理ができるほど余裕があった奴はいない。俺も適当に焼いたり煮たものしか作れないしな」

「……ありがとうございます。もう行きますね」

「食器は下にもあるから持って行かなくても良いぞ」

幸いにも食料はそれなりにあった。反乱軍の正確な人数は知らないが、たくさん作った方が良いだろう。スープにしようかな。ついでにパンも焼こう。

俺は出来上がったパンとスープをまずはマスターに渡した。

「どうぞですっ」

「……ああ、こんなに美味^{うま}いものを食べたのは俺がガキの時以来だ」

「子どもの時？」

「ああ、母が俺の誕生日に作ってくれた料理だ。金に余裕がないはずなのに、自分たちの分の食費を削って作ってくれたんだ。それを知ったのは両親が死んだ後だったけどな」

「……下に持って行きますね」

マスターの昔話から逃げるように俺はアジトに料理を運んだ。

「皆さん、料理を持ってきました。食べてください」

「料理だつてよ」「毒が入ってるんじゃないか」「でも美味しそうな匂いだ」

料理を持ってきた俺に視線が集まる。料理に対する好奇心と毒を入れていたのではという懐疑心が半々といったところか。

「旅人さんがこれを作ってくれたのか？」

さつき俺と話をした男性だ。

「はい。マスターに許可を貰って作ったスープとパンです」

「一つ貰っても良いか？」

「そのために持ってきたんですよ」

男性にスープが入った皿とパンを渡す。彼はスープを一口飲んだ。

「おお、こいつはうめえ！パンもだ！こんなの初めてだ」

「聞いたか？」「俺も食べたい」「俺にもくれ！」

反乱軍の人たちが集まってくる。俺は一人一人順番に料理を渡していった。料理を受け取った人たちは黙々と食べていた。口に合ったように良かった。

その後は食べ終わった食器を回収したが、残している人は一人もない。作った人からすればこれほど嬉しいことはない。

客が全くないマスターの酒場のキッチンで食器を洗い終わった頃には外は暗くなっており、俺は宿に戻ることにした。

宿に戻った俺はイレイナの部屋のドアをノックする。

「イレイナー、いるー？」

ドアが開き、イレイナが出てきた。

「はいはい、いますよ。どうしましたか？」

「はいこれ、パン」

俺は今日焼いたパンが入った紙袋をイレイナに差し出す。

「カイのパンですか。最近食べれてなかったので嬉しいですね。ありがとうございます」

彼女は紙袋を受け取って中身を確認していた。

「この国にいる間は毎日持ってくるよ」

「マジですか」

「マジマジ。楽しみに待っててねー」

俺は自分の部屋に戻って反乱軍について考えながら眠りについた。

それから数日間、激しい雨が降り続けた。

俺はその間、朝から夜まで反乱軍のアジトで料理や指輪の改良、軽く体を動かしたりしていた。

指輪の改良自体はもう終わっている。今回追加したのは指輪に強く魔力を込めるともう一つの指輪に自分の位置を知らせる機能と、指輪に魔力を貯めておき一度だけその魔力を使って自動で攻撃を防いでくれる機能だ。

これなら不意打ちで一撃加えられたとしても防ぎ、自分が襲われていることを相手に知らせることが出来るということだ。魔女であるイレイナは正面からの戦いなら簡単に負けることはない。だから戦っている片手間に俺のことを呼べば俺がすぐに駆け付け、二人で敵を倒すことが出来るのだ。これによって俺がイレイナと離れていても彼女の身の安全はある程度守れるというものだろう。それに今は一度が限界だが、改良を続けて数回防げるようにしたい。

欠点があるとすれば自動で防御してくれるのは刃物や魔法による傷を付ける攻撃だったり、対象に掛けるタイプの魔法——例えば相手を眠らせたり操ったりするようなもの——のみで、縄を魔法で出して拘束されたり毒を空气中に撒かれたりした場合には発動しない。

まあ拘束されても指輪に魔力を込めればもう片方を呼べるし、空気中に毒が撒かれても魔法を使って防いだりその場から逃げれば良いだけなので問題はないだろう。

「カイさん、何やってるんですか？」

反乱軍の一人が俺に声を掛けてきた。

「新しい魔道具を作ってるんですよ」

「魔道具？」

「魔力を流すと予め設定していた動作をする道具のことです」

「俺たちじゃ使えないですね」

「すみません、あなたたちを馬鹿にする気とかはないんですよ。これは自分用に作ってるだけです」

「気にしてないですよ。カイさんは料理を作ってくれたり話したり相手になっってくれたり俺たちに良くしてくれますから。この国の魔法使い全員があなたみたいな人だったらどんなに良かったことか……」

反乱軍の人たちは俺に心を許してくれているようだ。もう俺にはこの国の魔法使いよりもこの人たちが正しいのではと思い始めている。俺も絆されているのだ。

「ちなみにどんなの作ってるんですか？」

「魔力を込めると鍵穴があるタイプならどんな鍵でも開けたり閉めることが出来る魔道具を作ってます。形も鍵そのものです」

「それって犯罪じゃないですか？」

「あなたたちがそれを言いますか？別に悪用しなければ良いだけなんです。ほとんど完成していて名前も決まっていますよ。基本的に鍵を開けることに使うでしょうから『開けるくん』って言うんですよ」

「ダサいですね」

「……………」

シンプルで良い名前だと思うんだけどなあ。最後に『くん』がついているところとか特に。後でレイナにも聞いてみるか？

そんなことを考えていると階段からマスターが下りてきた。

「お前ら、計画に変更がある」

不穏な気配を感じる。この数日間マスターと話す機会があったが、反乱を起こすという彼の決意はとても固いものだった。

「普段から魔法使いに対して変な行動をしている———がああの列車を作った魔女にいつものように近付いて殺すというものだった」

「———え？」

マスターの口から出た名前は毎日俺の後ろで魔法使いの靴や杖を舐めようとしていた男性のものだった。魔法使いに対する悪意と呼

べるものを見せなかった彼が、本当に魔女を殺すという重大な役目を担っていたのか……？

彼の方を見るとこちらにウインクしてきた。本当のようだ。ということはきつと普段の行動も演技だったのだろう。一体何が彼をそこまでさせるのだろうか。

「カイが来た翌日から列車が魔法使いだけしか乗れなくなったのは全員知っているだろう」

俺はずつと宿かアジトにいたから知らなかったが、イレイナが言っていた列車は魔法使いだけが乗れるようになり、その魔法使いたちは列車の中から雨に濡れる魔法を使えない人たちを嘲笑っているらしい。酷い話だ。

「つまりあの列車に乗るのは魔法使いしかいない。だから近日中に列車に爆弾を仕掛けて魔法使いたちを一気に潰す。列車の爆破が俺たちの反乱が始まる合図だ」

「「うおおおおおー！」」

反乱の成功率が上がったことで、反乱軍の士気が高まるのを感じる。

「以上だ。各自準備を整えておけよ」

そう言い残してマスターは酒場に戻っていく。やはり反乱は避けられないのだろう。

この数日間、料理を作ったり話をしたりと少しでも魔法使いへの憎しみを減らそうと努力してきたが、実は結ばなかったようだ。

「元気がないですね、カイさん」

「あなたは……」

外にいるときに魔法使いに絡みながら俺を見張っていた男性だ。その口調はいつものようなふざけたものではないが、いつものように笑みを浮かべていた。いつもは少し引いていた笑みだったが、今は不気味に感じてしまっている。

「ついにあいつらに復讐できると思うと嬉しくてたまりません。頭がどうにかなっつてしまっそうだ」

「……なんであなたはそこまでこの国の魔法使いを憎んでるんですか

？」

俺の問いに今まで笑っていた男性の顔が真顔になる。あまり踏み込んでダメだった質問かもしれない。だが、聞かずにはいられなかった。

「私にはとてもとても可愛い妹がいたんですよ。彼女のことを思い出すだけで私は魔法使いに何をされても平気だった、気にしなかった」「それって……」

——だった。過去形だ。この嫌な予感当たっているだろう。確実に。

「ええ、殺されました。私が話を聞いて急いで駆け付けた時には妹の体は既に冷たくなっていました。魔法をたくさんぶつけられたのでしよう。顔以外の体のいたるところに傷が出来ていました。何故だか分かりますか？」

「いえ……」

「妹はですね、魔法使いに靴の裏を舐めるように強要されたらしいんですよ。それを拒否した妹に魔法使いは怒り、魔法で顔以外を傷付けてもう一度靴の裏を舐めるように強要、拒否、魔法。その繰り返しというこもらしいです」

「……………」

靴の裏を舐める。それは彼が魔法使いたちにさせると言っていたことだ。妹が殺される際に強要されていたことを自分から要求することは、魔法使いへの憎しみを忘れさせないためのものであったのかもしれないし、自分の妹と同じような目に会う人が出ないようにするための策だったのかもしれない。

「私はこの国の政府に直談判しました。妹を殺した魔法使いに罪を与えてくれと。返ってきた答えは——」

『人を殺したわけでもない者を罪には問えない』

「だから私は誓ったんです。何の罪もない妹を殺した魔法使いたち、その魔法使いたちに何もしなかったこの国に復讐すると」

「……あなたの憎しみは理解しました」

「意外と冷静ですね」

「似たような人を見たことがありますから」

俺の脳裏によぎるのは、自分の愛する人とその人との子どもを身分が違うという理由だけで奪われたとある国の魔女であり王女である女性。その結末は今も忘れることは出来ない。その出来事が無ければ、きっと俺は冷静でいられなかったかもしれない。

「そうですか。ちなみにボスも似たような理由ですよ」

「マスターが？」

あの面倒見の良いマスターが憎しみで反乱軍を立ち上げたというのか。てつきりこの国を良いものとするためだと思っていたのだが。

「あの人は若い頃、婚約者と両親を殺されたそうですよ。それとなく殺された理由を聞いたら、幸せだったからだと言っていました」

「それだけで、ですか」

幸せだからという理由で人が殺されるというのかこの国は。……いや、この国にとって魔法を使えない人は人じゃないんだよな。つくづく嫌になる。

「ええ。それからどこからかお金を調達して反乱軍を作り、ようやく長年の夢が果たされるってところですね」

「……正直な話、俺はあなたたちに勝って欲しいと思っています」

どちらに勝って欲しいなど言うべきではないのだろう。だが、言わずにはいられなかった。

俺の答えを聞いた男性の顔にはいつものような笑みが戻っていた。「嬉しいことを言ってくれますね。私としてはあなたにも協力していただきたいところです」

「俺は旅人です。その国の争いごとに手を出すつもりはありません」
「分かっています、冗談ですよ。協力すると申し出てもこちらの方からお断りさせてもらいます。ですがこの反乱が終わった後に、またあなたの料理を食べたいですね」

目の前の彼は笑ってそう言う。生きて帰れる保証はないのにまた俺の料理を食べたいと言うのだ。しかし、目の前の彼は生きることに対する執着というものが無いような眼をしていた。俺だったらイレイナのところに必ず戻るために何をしてでも生き延びるという意思

があるのだが、目の前の彼には死んでも構わないと思っ
ているように見えた。

だから俺は首を横に振って答える。

「嫌です。恐らく俺はもうこの国を訪れることはないで
しょう」

「そうですか。残念です」

表情を全く変えず、微塵も残念だと思っ
てなさそうな男性に俺は言葉
を続ける。

「だから、あなたたちが自分で料理を作れるよ
うになってください。その自由を掴み取った後で」

俺ができることは、精々新しい目標を
与えるくらいだろうか。生きてい
れば、できることはたくさんある。
それを知って欲しかった。

どうかこの想いが伝わっていますよ
うに。



翌日。止まない雨にしびれを切らした
イレイナが出発すると言
出した。

俺はイレイナに門で待つてもら
うように頼み、マスターの
ところに向かった。

「今日は早いじゃないか。何か困
りごとか？」

いつもと変わらない口調のマス
ター。心の奥底にあるだろう憎
みを隠しながら俺を心配してく
る。

「いいえ。今日、この国を出てい
きます。なのでお別れを言いに来
ました」

「そうか、寂しくなるな。お前が
来てからあいつらの笑顔が増え
たよ。ありがとうよ」

「気にしないでください」

「……お前を見ているとあの二
人のことを思い出す」

「あの二人……?」

「いや、何でもない」

「……そうですか。俺はもう行
きます。どうか、お元気で」

「お前たちこそ元気にやっていくんだぞ」

俺はマスターに頭を下げてからこの国の門に向かって歩き出した。

——結局、俺はこの国で門兵以外の魔法使いと話すことはなかった。魔法使いの格好をしていない俺が道の真ん中を歩いていても絡まれることもなかった。

理由は分かっている。常に魔法使いの視線を集めてくれた男性がいたからだ。

それが指示によるものなのか、彼自身の判断によるもののかは分からない。彼らは俺を守ろうとしてくれた。しかしそれを口に出そうとは一切しなかった。だから俺も気付かないふりをしていた。

何かお返しをしたいと思ったが、彼らは料理以外を受け取ろうとしなかった。俺を巻き込もうとしないでくれた。優しい人たちだった。

これ以上彼らの顔を見ると俺は自分の感情を抑えられなくなるかもしれない。

……早くこの国を出ることにしよう。

「……お待ちせ」

門の前に着いた俺は、少し不機嫌なイレイナに声を掛けた。

「遅いですよ。早く行きましょう」

「ああ。はいこれ指輪。新しい機能については……また今度説明するよ」

国を出た後、俺たちは傘をさして無言で歩く。イレイナが国の感想を言ったりこちらに聞いてこないの、彼女の方でも何かがあったのだろう。俺の方からも言う気も聞く気も起きない。

今回、俺はカメラを一度も取り出さなかった。あまり思い出しには残したくないと思つてしまったからだ。

人間未^ア満^ニと呼^マばれている人々で結成された反乱軍と魔法使いの戦争がこれから起こる。

多くの人が死ぬだろう。たくさん悲しみが生まれるだろう。俺の料理を食べた人もその中にいるだろう。もちろん傷付いたり死ん

でほしいだなんて思わない。

だからと言って俺たちが何かをするわけではない。

俺たちは旅人だ。その国で起きる問題ごとに関わる必要はない。冷たい言い方かもしれないが、自分たちの身の安全の方が大切なのだ。それに魔法使いとそうでない人たちの間にある溝があまりにも深すぎて、俺にできることは何もなかった。

——遠くの方で爆発音や魔法を撃つ音、悲鳴が聞こえた気がした。振り返っても特に異常は見られない。

そう、気がするだけだ。気のせいだ。俺の頭の中で作られただけの音だ。現実では起こっていない。だけど、これからあの悲しみしか生まない国で聞こえるだろう音だ。

……いつまでもこの気持ちを引きずって旅をするわけにはいかない。

今回のことはすぐに忘れよう。

忘れるのが難しい人たちとの思い出を。

とある男の日記

魔法使いのための国で起きた魔法を使えない人々による反乱が発生。その調査に向かった魔法統括協会のエージェントが首謀者と思われる人物の日記を回収。

以下にその内容を記す。

・●

○月×日

俺の幼馴染から日記を貰ったので書くことにする。と書いてみたものの、どう書くか思い浮かばないので今日の出来事を最初から書いてみることにする。

朝早くから起きて、ほんの少しの朝食を食べてから働きに出る。俺のような魔法の使えない人間は、小さい頃に簡単な計算や文字の読み書きを窓ガラスが割れて風が入り放題の学校で短い期間教わったらすぐに働き始める。

魔法使いである幼馴染は俺が働き始めてから数年経った今でも、きれいな学校でいろんなことを教わっているらしく、俺はたまにある休みの日に彼女から学校の話の間かせてもらっていた。

どんな授業を受けたかやどんな魔法を使えるようになったかを楽しそうに語る彼女との会話は、労働で疲れていた俺の心を癒してくれた。

話が脱線してしまった。案外一度書き始めると止まらないものだ。昼も当然働き続ける。昼食なんでもものはない。俺たち人間未_マ満には最低限だけの食事で良いのだと、この国の魔法使いたちは言っているのを聞いたことがある。

幼馴染はこのことに不満があるらしいが、俺はずっとこの生活をしているので何が不満かは分からなかった。このことを彼女に伝えると、とても悲しそうな顔をしていた。

夜になるまで働いたら、その日の給料を貰って大通りから離れたと

ころにある家に帰る。

俺の家は魔法使いが住んでいる家と比べると小さいものであったが、俺には心地良い広さだ。いつもなら先に帰って来ている両親が明りを付けているのが窓の外から見えるはずなのだが、今日は家の中は真っ暗だった。

まだ誰も帰って来ていないのだろうかと思いつながら家の中に入ると、突然明りが点いて俺の両親と幼馴染が「誕生日おめでとう！」と言ってくれた。

そこで今日俺の十五歳の誕生日であることを思い出した。毎日生きるために働いている俺にとって今日が何日であるかなんて数えていなかった。

いつもより量が多く、豪華な食事を四人で食べ、幼馴染が家に帰る前に誕生日プレゼントとしてこの日記帳をくれた。

彼女は「あまり良い物じゃなくてごめんね……」などと謝っていたが、俺が普通に暮らしていたら一生手に入ることはなかっただろう代物なのでとても嬉しかった。そのことを彼女に伝えると「ちやんと書くんだよ」と笑顔で言ってきたので、今こうして書くことになった。

初めて日記を書いて疲れたので今日はここまでにする。

○月×日

初めて日記を書いてからだいぶ時間が経ってしまった。十五歳になったことで仕事の量が増えてしまったのが原因で、家に帰ってから日記を書く余力がなかった。

今日は久しぶりの休みなので幼馴染と初めて会った日について書いてみようと思う。

俺と幼馴染が出会ったのはまだ俺が学校にも行ってない頃、両親が働きに行つて俺は家に一人で留守番をしていたのだが、空腹に耐えきれず食べ物求めて外に出た。

どこかに食べ物落ちてないかと歩き回っていると、大通りにある

パン屋の前で俺と同じくらいの少女がパンを食べていた。

俺はそのパンを見つめていると、こちらの視線に気付いた少女がどうしたら良いのか分からずにおろおろとした後、恐る恐るといった感じでこちらに近付いてきてパンを半分がちぎり、「あげる」と言っただけで俺に渡してくれた。

欲しいとは思っていたが、まさか本当に貰えるとは思っていなかった。たので驚いた俺は何故か周囲を確認してから受け取った。パンを食べてみると、俺がいつも食べているものよりも何段階も美味かった。

俺が美味そうに食べている姿を少女は何故か嬉しそうに眺めていた。俺は疑問に思ったが、言葉を発するための口はパンで塞がっていたため理由は尋ねなかった。

俺がパンを食べ終わったタイミングで少女の両親らしき人物が来た。二人は俺の姿を見るなり少女に何か言っただけで彼女のことを連れてどこかへ行ってしまった。幼い俺にはよく分かっていなかったが、俺の着ているボロボロの服を見て人間未満の子ともだと気付いたから、一刻も早く娘を引き離したかったのだろう。

そのことを分らない腹が満たされた当時の俺は一度首を傾げてから家に帰った。

翌日。俺はまたパンが貰えないかと再びパン屋の前を訪れてみると、少女は昨日と同じようにパンを食べていた。

今度は俺の方から少女の方に近付くと、彼女は「また会ったね。今日はパパとママに見つからないようにあっちに行こ」と言っただけで俺の手を引く張って路地裏に入った。

誰もいない路地裏で俺たちは壁に寄りかかりながらパンを半分に分けて食べていたが、途中で少女が昨日急に帰ってしまったことを謝ってきた。どうして謝ったのか理解できなかった俺は「あ、うん」とだけ言ってパンを食べる手を止めることはなかった。

少女はそれで満足したのか今度は俺のことについて聞いてきた。しかしこれと言って何も知らない俺は適当に自分の生活のことについて話すだけだった。

俺の話を聞いた彼女は少し悲しそうな顔をした後、これからは毎日

この場所で話をしようと言いだした。俺としてはパンが貰えれば良かったのでその場で了承した。

これが俺と幼馴染の出会いだ。昔を思い出しながら書いているといつもよりも時間の流れが早く感じる。明日に備えてもう寝よう。

○月×日

日に日に仕事量が増えていくばかり。数ヶ月振りの休みだ。

今回は前回の続きを書くことにする。

俺たちは毎日路地裏で会ってパンを食べながら話をしてきた。基本的に少女が話し、俺が相槌を打ったりたまに質問するというものだったが、家で一人にいるよりは楽しい時間だった。その途中で俺たちは同い年であることも判明し、彼女は嬉しそうに笑っていた。また、彼女が魔法で玉を作ってそれを動かして見せてくれ、俺は初めて見る魔法に目を奪われた。いや、どちらかと言うと魔法を使う彼女に目を奪われたと言った方が正しいのかもしれない。

いつしか俺が路地裏に足を運ぶ目的はパンではなく彼女と会うことになっていった。

俺が一人で出かけていることに気付いた両親は何をしているのか聞いてきたので俺は正直に答えた。俺が楽しそうに語る姿を見て二人は危なくなったらすぐに逃げることを条件に、これからも路地裏に行くことを許してくれた。

しかし楽しい時間も長くは続かず、俺たちはそれぞれ学校に通うことになった。少女はもう会えないのではないかと泣きそうな顔をしていたが、会う機会が減るだけだと訂正してやると一変して笑顔になった。

それからもお互いの学校が休みの日に会って学校での出来事を教え合った。魔法使いは俺よりも偉い存在だと教えられたことを話すと、彼女はそんなことはないと言っていた。「魔法を使える人も魔

法を使えない人もお腹が空いたらパンを食べるし、一緒に楽しくお喋りができる。そこに違いはないよ」とのことらしい。

魔法使いである彼女と長い間話をしていた俺も同じ考えだった。この国の在り方には疑問を感じたりはするが、だからと言って不満かと言われればそんなことはない。こうして彼女と話をしていられれば十分だったからだ。

俺たちの関係は何年経っても変わることはなく、俺が学校を数年で卒業して働き始めてからも彼女と話をし続けた。彼女は友達がいないらしく、他に話をする奴がいまいのか聞いても「私と話が合うのは君くらいなのよ」と言って顔を逸らされた。普段笑わない俺だったが、そんな彼女の様子を見て珍しく声を上げて笑ってしまった。彼女は俺の肩を叩いてきたが俺が笑い止むことはなく、次第に諦めていった彼女は「幼馴染と言える人は君だけなんだ」と開き直ったのか笑顔で言っていた。

この時の俺は幼馴染というものがどんなものかイメージがついていなかったのだが、彼女から幼馴染という単語が出たことで俺たちのような関係を言うのだなと理解できた。そう、魔法を使える彼女と魔法を使えない俺は幼馴染なのだ。俺の中で少女から幼馴染に変わった瞬間だった。

ある日、俺は滅多にない両親が二人とも休みの日に彼女のことを家に招いて二人に紹介した。両親は魔法使いである幼馴染のことを見て膝について頭を下げようとしていたが、彼女はそれを止めて自己紹介をした。

幼馴染の自己紹介が終わった後は、両親も慌てて自己紹介をしてから四人で椅子に座って話をする事になった。

話の内容はいつどこでどのようなようにして出会ったのかや、これまでどんな話を二人でしていたのかを軽くするだけだった。最初は畏まった様子の両親だったが時間が経つにつれて素の二人になっていき、最終的には俺と話すときと同じような態度で幼馴染と喋っていた。

夕方になって幼馴染が帰った後、父が「良い娘だったな、またうち

に呼んであげな。しかし、彼女に迷惑かけないようにするんだぞ」と言ってくれた。

両親に幼馴染のことを認めてくれて嬉しかった。

彼女との思い出を書いてると分かる。俺はきつと――

○月×日

いつの間にか俺たちは十八歳になっていた。毎日働いていると時が過ぎるのが早く感じる。幼馴染と毎日話している間は一日が長く感じられたのだがな。

今日は幼馴染が魔女見習いになるための試験を受けると言っていたので俺は頑張って休みを取った。試験はもう少ししたら行われるらしいので今のうちに日記を書くことにした。

魔女というのは魔法を使えない俺たちよりも偉い魔法使いの中でも一番偉く、その魔女になるためには魔女見習いになる必要があるらしい。

魔女になると俺なんかじゃ辿り着くことが出来ないような地位に就くことが出来るらしいのだが、普段からそういったものに興味を示していなかった幼馴染が何故魔女になろうとしているのか聞いてみると、「私は魔女になってこの国の歪みを正したいの。時間は掛かるかもしれないけど、いつか君と一緒に堂々と街を歩きたいからね」と彼女は真剣な表情で――それでいて優しさを感じさせる顔で自身の夢を語ってくれた。

幼馴染が俺のために魔女になろうとしている。そう考えた時、俺は今までにないくらい嬉しかった。

もしも彼女が俺を好きでいてくれるのなら。もしも彼女が魔女見習いの試験に合格したのなら。俺は彼女に告白したいと思う。

今は表立って一緒にいることは出来ないかもしれないが彼女の夢が叶えられたその時は盛大に結婚式というものを挙げてみたい。

――少し気が早かったかもしれない。今はここまでにしておいて幼馴染の試験を隠れて見ることにしよう。

彼女は試験に受かった。いつもの路地裏で告白した。彼女は俺の婚約者になった。

(ここから先は線が大量に引かれていて解読不能)

○月×日

この前は嬉しさのあまりにいろんなことを書いてしまったが、恥ずかしかつたので消した。

俺が婚約者——当時はまだ幼馴染だったな——の魔女見習いになるための試験を見に行つた時、外で実技試験を行つていた。俺は魔法使いたちに見つからないように木の裏に隠れた。

既に何人かの魔法使いは脱落していたようで地面には悔しそうにしている魔法使いの姿があつた。幼馴染はどうなつたか空を見上げると、ほうきに乗つて他の魔法使いに魔法を撃っている幼馴染の姿が見えた。

まだ落ちずに残っていたようだが、他の魔法使いからの攻撃に対応するのに精一杯といった感じで見てるこつちを心配させる動きだつた。

このままでは落とされてしまうだろうと思つていた時、彼女と目が合った気がした。一瞬のことだったので気のせいかと思つたのだが、それからの彼女の動きは凄まじいの一言に尽きる。

まず目の前にいた魔法使いが放つた火の魔法を紙一重で避けてから風の魔法で反撃して逆に吹き飛ばしていた。次に後ろから突撃してきた魔法使いを見ることなく魔力の塊で叩き落としていた。

次々と他の魔法使いを落としていき、残っている魔法使いは彼女ともう一人の二人だけになった。

幼馴染が火の魔法を放つと氷の魔法で凍らされ、風の魔法を放たれたらほうきで回避をする。そんな攻守の入れ替わりが激しい戦いを

しばらく行っていた。

勝負が動いたのは彼女がほうきで高くまで飛び上がって太陽を背にした時だ。相手の魔法使いは彼女から目を離すまいと上を向いたが太陽の眩しさに目を薄めてしまい、その一瞬を見逃さなかった彼女が後ろに回り込み杖を突き付けたことで勝負は決した。

俺はいつもの裏路地で待っていると胸に桔梗のコサージュを付けた満面の笑みを浮かべた幼馴染が歩いてきた。

俺は片手を上げて挨拶をしてから合格おめでどうと言つてやると「ありがとう。君のお陰で私は夢に一步近づけたよ」と嬉しそうに答えた。

どうやら魔女見習いになった魔法使いは魔女の弟子となつて修行を積む必要があるらしい。俺は彼女に師匠にする弟子は決めたのか聞くと「ううん、まだ見つけてない。この国にいる魔女は私の考えに共感してくれる人はいないはずだから、私は国の外にいる魔女の弟子になるつもりだよ」と教えてくれた。

彼女の答えを聞いて俺はそうだなと納得すると同時に、彼女がこの国を出ていくことに対する寂しさを覚えていた。どうやら顔に出ているらしく「今はまだ出ていかないから安心して」と小さく笑っていた。

そんな彼女の笑顔を見て俺は今が告白するタイミングだと思い、これまでで一番の勇気を振り絞って告白をした。どんな言葉を言ったのかは書かない。

俺の告白を聞いた彼女は少し驚いた顔をした後、さつきと同じように小さく笑つて「うん、喜んで」と受け入れてくれた。俺は嬉しくて大声を上げそうになったが、彼女が俺の唇に人差し指を当てて「けど、今はまだ私たちの関係を公に出来ないから婚約者つてことにしているね」と呟いた。

まさかの恋人ではなく婚約者の関係になった俺たちだったが、彼女もそこまで俺のことを好きでいてくれたことがとても嬉しかった。

両親に報告しなければならぬと彼女は帰り、俺も家に戻つて両親が帰ってきたらこのことを伝えた。俺の両親は嬉しさから涙を流し

ながら俺たちのことを祝福してくれた。

両親がいて婚約者がいる——ああ、俺はなんて幸せなんだ。

○月×日

両親と婚約者が政府に連れていかれた。

婚約者が魔女見習いになってから半月ほど経った夜。家族全員が寝ている時にドアが強く叩かれ、父が開けるとそこには数人の魔法使いが立っており、国家反逆罪の疑いで連行すると言い出して俺の両親を連れ去った。

俺には意味が分からなかったから他の魔法使いに指示を出していた魔法使いの男に理由を聞いてみると「人間未満^{ニア}風情が俺たちに話しかけんじやねえ！」と蹴られてしまった。

その横暴な態度に対する怒りと両親を連れ去られたくないという思いから俺はその男に殴りかかったが、杖を一振りするだけで吹き飛ばされて気絶してしまった。

俺が目覚めた時は既に朝になっていて、家の中は荒らされており、俺以外には誰もいなかった。俺の目の前の床に紙が置いてあったので読んでみると、両親には取り調べをするから大人しく待っているという命令が書かれていただけだった。

その日の仕事のことなど頭から消えた俺は家を出て大通りに向かうと、何やら国中がざわついているのを感じた。

嫌な予感を感じながら足元に落ちていた『号外！』と書かれた新聞を拾って読んでみると、俺の両親と婚約者が裏でつながって国を転覆することを企んでいたと書かれていた。両親がこのことを自白し、婚約者も既に連行されているとされていた。

あの三人がそんなことを企むはずがないと思っっているのは俺だけだったようで、通行人たちからは「怖いわねえ」「人間未満^{ニア}が考えそうなことだ」「この子この前魔女見習いの試験に合格した子よね？調子に乗ってたろうし気味が良いわ」などという酷い内容の話声が聞こえ

た。

俺はこれから政府に乗り込む。この日記には俺の書きたいことを書いておいた。日記は俺の家に置いておくからもしも誰かがこれを読んだのであれば——どうか、俺のことはいいからあの三人を助けてあげてくれ。

(解読不能な文字や血、濡れた跡が十数ページにわたって続いている)

○月×日

両親と婚約者が殺された。

あの後政府のところに行ったら、「貴様もあの三人の仲間か!」とこちらの話を聞くことなく俺は牢屋に入れられた。始めのうちは何度も開けてくれたとか出してくれとか叫んでいたのだが、次第に疲れや諦めから声を出さなくなっていく。

牢屋の中には窓がないため、どれくらい時間が経ったか分からなかった。誰かが来ることもなく、何かが起こるわけでもなかった。俺はただ壁に寄りかかっているだけだった。

何十回目か忘れたが空腹であることを訴える音が腹の方から聞こえたところで、一人の魔法使いがやってきて牢屋の鍵を開けて「お前みたいな奴に金を払う奇特な奴もいるんだな。さっさと出る」と言つて俺のことを追い出した。

何が何だか分からないまま外に出た俺に、俺と同じくらいの年齢の二人組の旅人が話しかけてきた。一人は和服の上からローブを着ている黒の髪と瞳をした男性。もう一人は三角帽子とローブを身に着けている金の髪と瞳をした女性だった。男性の方はシン、女性の方はエイラと名乗った。

彼らは話したいことがあると言ってから俺の家まで移動した。家の中は俺が出ていった時と何も変わっておらず、人が住むには難しいくらいに荒らされたままだった。

女性が魔法でテーブルと椅子を用意し、俺はそこに座って二人から事情を説明してもらった。それは俺に絶望を与えさせるものだった。

まず俺の両親が連れていかれたのは両親が国の外から来た二人組の旅人に『息子とその婚約者を国の外に連れて行って欲しい』と事情を説明すると同時に依頼したところをこの国の魔法使いが遠目から見ており、怪しいと思つたのか政府に報告した結果、政府の上層部が国家転覆を目論んでいると勝手に結論付けたのが原因らしい。

当然両親は容疑を否認していたのだが、自分たちの間違いを認める気がない魔法使いたちは二人を痛めつけて無理やり事実とは異なる罪を認めさせられた上に、俺の婚約者は誰かも吐かせられた。人間未満アニマとこの前魔女見習いになったばかりの女性が付き合っていることを知った政府は、魔女見習い——俺の婚約者を早急に捕らえた。

政府は俺の両親や婚約者のことを悪人に仕立て上げて新聞社にこのことを広めるように仕向けた。俺が読んだ新聞がそれだっただろう。

俺が捕まっていた期間は一週間。その間に両親は取り調べ拷問を受け、普段からまともな食事を取ることが出来ていなかった二人は体が耐えきれず、連行されてから三日経つ前に亡くなった。遺体は損傷が酷く、顔は苦痛や恐怖に歪んだものだったらしい。

婚約者は俺が牢屋から出てくる前日に人間未満アニマと共謀して国家転覆を企んだ大罪人として公開処刑された。魔法使いたちに囲まれながら生きたまま火あぶりにされた彼女は、命乞いやこの世のへの恨み言を何一つ言うことなく祈るように空を見上げたまま絶命したらしい。

両親が依頼をした二人組の旅人というのが俺に事情を説明した彼らのことであり、依頼を受けた二人は俺たちのことを受け入れてくれる国や魔女を探して国外に出て行き、戻ってきた時には全てが終わっ

ていたそうだ。俺に会うためにこの家に訪れたところ、日記を見つけて俺のことを迎えに来たようだ。

話を聞き終わった俺はその話を信じる事が出来なかった。さつき知り合ったばかりの旅人いきなり俺の大事な人たちが死んだなどと言われて簡単に信じるなど……いや、信じたくないという思いから必死に否定した。

そんなの冗談だろ、俺を馬鹿にしてるんだろ、ふざけるのもいい加減にしてくれ、頼むから嘘だと言ってくれ。そんな俺の口から出てくる言葉に彼らはただ首を横に振るのみ。

彼らが婚約者が処刑されたことが書かれた新聞紙を取り出したことで俺は事実を認めざるを得なくなり、俺は地面に蹲って叫びながら頭を掻きむしった。俺が大声を出しそうになった時に止めた彼女はもうこの世にはいなかった。

どれくらいの間叫んでいたのかは憶えていないが、叫びすぎた影響で喉が傷付いて口の中は血の味がしたし頭を掻きむしりすぎて血が大量に流れていた。

俺のことを心配したエイラが駆け寄ってきて魔法で俺の体の内外に時間を掛けてできた傷を一瞬で治した。己の無力さや魔法という力の強大さを見せつけられた気がした。その瞬間俺は激昂して彼女を殴ろうとしたが、シンが間に入ったことで俺の拳が彼の顔に入った。彼は何か言おうとするエイラを止めて「僕たちがもっと上手く動かせていればこうはならなかった。謝って済む問題ではないのは分かっているが、それでも謝らせて欲しい。すまない……」と土下座をしていた。

俺はふざけるなと思った。お前たちがこの国に来なければこんなことにはならなかった、お前たちが早く帰って来ればこんなことにはならなかった、お前たちのどちらかがこの国に残っていればこんなことにはならなかった、俺の体を治したように彼らのことも治してくれ——そう言っただけでやめたかったが、俺の口からは何一つとして言葉は出なかった。ただ彼の姿を見ていることしかできなかった。

ようやく俺の口から出たのは「顔を上げてくれ」という言葉だけだった。二人が悪いわけではないのは分かっていたが、だからと言ってお前らは悪くないだとか許すだとか言えるほど心に余裕はなかった。俺は無言で椅子に座るように促して話の続きをしてもらった。

二人はテーブルの上に大きな袋を置いた。中を見てみると、百人の俺が一生働いても稼げないくらい大量の金貨が中に入っていた。シンは「君はこの国でも辛い思いをした。だからこの国から出て新しい幸せを見つけてほしい。どうか、お元気で」と言っておイラと一緒に家から出ていった。

俺はその金を見つめたまましばらく動かなかった。シンはこのお金を持って国外に行って幸せになって欲しいと言っていた。たしかにこの国にいたままだと俺は幸せになることは出来ないだろう。しかし、だからと言って他の国でなら幸せになれるとは思えなかった。俺の幸せは大切な人たちと一緒にいることだった。

彼らがいらない人生に意味はない。俺はこのまま自殺でもしようかと思つた。けれど、目の前の金を見て考えてしまう。

俺のような奴を出したくない。ならばこの金を使って俺が彼女に婚約者に代わつてこの国を変えるべきなのではないかと考えてしまふ。——いや違うな、これから俺が行おうとしているのは復讐だ。彼女の無垢な夢を言い訳にするわけにはいかない。

俺の恨みをこの国の魔法使いたちに晴らす。俺一人じゃ何も出来ないから仲間を集めよう。奴らを確実に殺せるような計画を練ろう。この国の魔道士、魔女見習い、魔女全てが敵だ。

だが忘れてはならない。俺の標的はあくまでもこの国の魔法使いであるということ。魔法使いというだけで憎むようなら、魔法を使えないというだけで人間未満と呼ぶ奴らと同類になってしまう。

——この国に、俺たちに優しくしてくれた魔法使いはもういない。

○月×日

もうこの日記に書き込むことはないだろうと思っていたが、なんだか懐かしい気分になってしまったので書くことにする。

あれから三十年近く経った。俺と同じようにこの国の魔法使いを倒したいという奴らを集めて反乱軍『人間宣言』を作った。最初はほんの数人だけだったが長い年月をかけて仲間を増やし、今ではこの国の大半の魔法を使えない奴らが俺たちの仲間だ。アジトもこの国のいたるところに作ってある。

俺はあの旅人が残してくれた金を使って酒場の店主として働く傍ら、この国を訪れた商人に武器や物資の調達を依頼していた。

今回は俺たちの計画の最終段階として武器を大量に注文していたのだが、それを届けてくれたのがあの時の二人を足して割ったような外見をした青年だった。名前はここに書くべきではないだろう。

その青年は俺たちのことを知らなかったらしく、反乱軍について説明してやると驚いた顔をしていた。あいつの話を聞いてみると女性と一緒に旅をしているらしく、ますますあの二人みたいだなと思ってしまうた。

あいつには俺たちのことを漏らされてしまったら困るので朝から夜までアジトにいてももらうことにした。最初は一日中俺のアジトに監禁しようかと思っていたのだが、あいつのことが気に入ってしまったのかもしれない。こちらにメリットがない条件を提示してきたからだろうか、それともあの二人の面影を見出してしまったからだろうか。なんとなく、こいつなら信じてみても良いだろうと思ってしまうた。

念のため、俺たちの中では一番を争うくらい有能なルビアに見張らせたが誰かに漏らすような素振りはない。その報告を聞いた俺は自分の眼に狂いはなかったことに安心した。ルビアからは「珍しく嬉しそうですね」などと言われてしまった。

数日間あいつと一緒にいた仲間からの評判は良く、仲間を引き入れたいと思っている奴は多かった。しかし、だからこそ俺たちの戦いに巻き込むわけにはいかないと本気で勧誘をする奴はいなかった。俺

だってあいつを仲間に入れるつもりはない。彼には幸せになって欲しかった。それだけのことだ。

ある日——今日のことなのだが——の早朝。いつもよりも早い時間にあいつが俺のところまでやってきた。どうやらこの国から出ていくようだ。その顔は暗かった。

あいつのことを見ていると昔のことを思い出してしまふので、あの二人に対する罪悪感からか少しだけ口を滑らせてしまった。俺の過去を聞かせるつもりはなかったので適当に誤魔化しておいた。

あいつが門の方に歩いて行くのを確認してから俺は仲間にも明日の朝——列車に一番魔法使いが乗る時間帯——に列車を爆破、俺たちの反乱を始めることを伝えた。

今度こそ、もうこの日記にペンを走らせることはないだろう。これは俺のアジトの奥に置いておく。結果がどうあれ俺はここに戻ってくる気はない。

もしも誰かがこの日記を見つけたのなら、この国の現状を多くの国に知らしめて欲しい。

最後に、今までなんだか恥ずかしくて書けなかったことを書かせてもらう。

——俺ことスノフは、幼馴染で婚約者のレンのことを愛しています。今までも、これからも。

○

協会の上層部による議論の結果、途中で記載されていた旅人の名前や外見的特徴、内容の一部を添削して各地に存在する支部を通じて公表することに決定。

——魔法統括協会が公表した今回の事件の首謀者の日記が、黒髪に

金色の瞳をした旅人や過去に国を訪れた二人の目に留まることはな
かった。

獣人の姉妹（前編）

季節は冬である。雪が降り積もって辺り一面が真っ白になっている光景は好きだ。

気温もすっかり低くなっており、俺はいつものスーツの上からコートを着ていた。着なくても寒さに耐えられるが、着ない理由がないため着ることにしている。

マフラーを巻いたイレイナは現在パン屋で買い物をしている。イレイナは気付いてないが、マフラーは俺が編んだものだ。どこかの店で買ったものだと思っている彼女にこのことを旅が終わった後に打ち明けるのが楽しみである。あ、でも乱暴に扱われてから捨てられたりしたらショックだな……。

話は戻すが、イレイナがどのパンを買うか少々時間が掛かりそうだったので俺は近隣の店を見て回ることにした。

八百屋に肉屋、本屋などの店を見て満足した後は次に作る魔道具について考えることにした。

「どこでもパンを作れる魔道具……。いや、パンが焼きあがるまでの時間を考えたら魔力の消費量が馬鹿にならないからなしだな……」

イレイナは喜ぶだろうけど、現実的ではないな。

「建物の中から逃げるときに床や壁に穴をあける魔道具なんてどうだ……。よし、それでいこう」

別に誰かに渡したりしななければ犯罪に使われることはないだろうし問題はなさそうだ。名前はどうしようか。『開けるくん』は既にいるから……。穴……。丸……。そうだ、『丸いくん』とでもしようか。

「ん？」

誰かが俺のコートの端を引っ張る。下を見てみるとロングコートを着た子どもがいた。フードを被っていたので顔は見えなかった。

「どうしたんだい？」

「お姉ちゃんを助けて……」

「……詳しく聞かせてごらん」

どうやらただ事ではなさそうだ。

「え、良いの？」

「良いよ。お兄さんが出来ることなら協力してあげるよ」

「えっと……その……どこから話したら……」

「最初からで大丈夫だよ。一度深呼吸してからゆっくりとで良いよ」
「うん。……わたしたちは山で暮らしていたの」

目の前の少女——ミリーナちゃんは自分たちの境遇について話してくれた。

以前は山で両親と姉の四人で暮らしていた。しかしある日、両親が狩りに出かけ、姉と二人で待っていたのだがその日のうちに帰ってこなかった。

翌日、この国の役人と三人の商人が彼女たちの両親の遺体を届けた。突然の両親の死にまだ幼い姉妹はしばらく泣き続けた。

幼い姉妹だけでは生きていくことは叶わないのは目に見えていたので、役人はこの国で保護することを提案。商人が両親の墓を作ってから彼女たちは国に連れていかれ、家や食事、お金が与えられた。

両親との死別——それだけでも十分悲しい出来事だ。しかし、ミリーナちゃんたちに起きた不幸はそれだけでは終わらなかった。

国に来てから数日後の夜、商人たちがナイフとたいまつを手には彼女たちの家に忍び込んだ。

最初に姉が見つかり、商人たちは姉に暴行を加えた。彼女が何を言おうと、何をしようと暴力が襲い続けた。

ミリーナちゃんは姉を助けようと商人が姉を殴るために一度置いたナイフを取り、商人の背中に刺そうとした。

その時、ナイフを握った彼女の手を大きな皺くちやの手が包み込んだ。顔を上げるとそこには一人の老人がいた。

老人はミリーナちゃんの手を下げさせ、「その手を汚してはいかん。ここは儂に任せなさい」と言つて商人たちを目に見えない一撃で気絶させていった。

姉の傷を老人は魔法で治し、姉にしか聞こえない声量で何かを言うてから気絶した商人たちを連れてどこかに去っていった。

呆然としていたミリーナちゃんは慌てて姉に近寄って大丈夫か心

配したが、姉は「私がミリーナを守らないと……。この国の人たちから守らないと……」と虚ろな表情で繰り返して呟いていた。

それ以来姉の様子が変わってしまい、自分たちを心配してくれている国の人たちを威嚇するようになり、役人が置いて行った食事やお金を捨てるようになってしまった。

ミリーナちゃんは何度も声を掛けたが、「大丈夫、ミリーナはお姉ちゃんが守るから」と言葉は届かなかった。

そしてミリーナちゃんはこの国で見たことのない人物——俺のことを見つけて助けを求めたということらしい。

「なるほど……ね」

「わたしたちのこと、助けてくれる……?」

酷い話だ。彼女たちに襲い掛かった商人も、彼女たちを守れなかった役人も、後のことの面倒を見なかった老人も何もかも。

聞けばミリーナちゃんの年齢は十歳だという。姉は二つ上の十二歳。もつと周りが面倒を見てあげべきだったのだ。

恐らく役人も老人も悪気はなかったのだろう——重要なことを見落としてただけで。

辛いことがあった時、誰かが傍にいてあげべきである。生きるために必要なものを与えるだけや、助けた後に一言だけ言って去るのは間違いだと俺は思う。

だからこそ俺は——

「分かった。俺は君たちの助けになろう」

彼女たちの傍にいてあげるべきなのだろう。

「ホント!? やったあ!」

「だけど、お兄さんには一緒に旅をしている人がいるからその人にも話をしないとね。大丈夫、優しい人だから一緒に協力してくれるよ」

「うん! ありがとう!」

嬉しそうに笑う彼女の頭をなでる。おや?

「角……?」

「……わたしたち、獣人なの。もしかして嫌だった……?」

フードを取って不安そうな顔を見せてくるミリーナちゃん。その

髪は金色で、白い肌をしていた。そして一番目立つのは頭から生えた羊のような角だろう。

「いやいや、少し驚いたただけだよ。その角の可愛さにね」

「よかったあ……」

「じゃあ俺の旅の同行人のところまで移動しようか」

「分かった！お兄ちゃん！」

お兄ちゃん……お兄ちゃんか……。良いかもな……。俺は一人っ子だから新鮮な気分だ。弟か妹がいたらこんな風に呼ばれたのかな。

「どうしたの？」

「何でもないよ、行こうか。ところで壁や天井に丸い穴をあける道具の名前が『丸いくん』ってどう思う？」

「凄くダサイ！」

「凄く!?!」

凄くショックを受けた俺はミリーナちゃんと手をつなぎ、イレイナがいるパン屋に向かった。

ミリーナちゃんの手は柔らかくて暖かった。俺の手とは逆だな。

●
道を進んでいると、向こう側から歩いてくるイレイナとその隣に見知らぬ男性の姿が見えた。

「あつ」

「……!」

ミリーナちゃんを見て驚いた男性は逃げるようにどこかへ行こうとする。しかし、ミリーナちゃんが男性の服を掴んだのでそれは叶わなかった。

「イレイナ、彼は？」

「この国の役人さんらしいですよ。魔女である私に依頼があるらしく、移動している最中でした」

「役人？そうか、彼が……」

先ほどの話に出てきた役人というのは彼のことなのだろう。ミリーナちゃんたちのことに対して負い目を感じているのだろうか。「ところであの少女と手をつないでいましたけど彼女とはどんな関係なんですか？何も知らない少女に変なことでもしようとしてたんですか？警察に突き出しますよ」

え。

「いやいや、そんなこと考えてないよ」

「怪しいですね。その慌てぶりは特に」

「ミリーナちゃんとはさつきそこで会ったばかりで——」

「ちゃん？」

「俺が年下の女の子をちゃん付けで呼ぶの知ってるでしょ。俺は彼女に頼られただけ」

「ふうん……」

信じてないのか……やましいことは考えてないのに……。

「お兄ちゃん！この人がさつき話した役人さん！」

「お兄ちゃん？」

やばい、何故かイレイナの顔を見ることが出来ない。俺悪いことしてないはずなのに……。

「……ミリーナちゃん、君は天使のような笑顔で俺を地獄に叩き落とすね……」

「んー？」

「……皆様、もうよろしいですか？」

いつ会話に参加したら良いか分からなかったのか、困った顔をした役人がそう尋ねてきた。この状況を変えたい俺には渡りに船だった。

「良いですよ良いですよ。移動しましょうか、そうしましょうー！」

「……………」

イレイナからの視線が痛い……。

俺たち四人は一緒に移動することにしたが、ミリーナちゃんが俺の手を掴んできたことで隣のイレイナからの視線がさらにきつくなった。本当に彼女に手を出そうとは考えてないって。だから犯罪者を見るような目でこつちを見ないで下さい……。

隣から発せられる気配に俺の限界が来そうだったが、その前に応接間に通され、役人とテーブルを挟んで向かい合う形で俺たちはソファに座った。……ミリーナちゃんは俺の隣に座った。彼女の反対側に座っている人物に腕を抓られた。痛いっス。

「それで、依頼とは何でしょう？あ、パンを食べながら聞いても？」

イレイナが尋ねた。え、パン食べながら聞くの？まあでも俺も小腹が空いてきたし貰おうかな。

「……どうぞ」

「どうも」

「俺もパンを貰っても——」

「あなたの分はありません」

「そつすか……」

パンが入っている袋に手を伸ばしたらぱちんと叩き落とされた。

結構強めだった。

「そして依頼内容ですが……」

役人はちらりとミリーナちゃんの方を見た。どうやら依頼内容は彼女に關係があるようで、あまり聞かせたくないらしい。

となるとどんな話かは見えてくる。

「ミリーナちゃんの姉の話ですよ？それならこの子にも聞かせてあげてください」

「しかし……」

「役人さん。わたしなら大丈夫だからお願い」

「……分かりました。依頼内容はあなたたち姉妹についてです」

役人はテーブルに二枚あるスケッチのうち一枚を置く。そこにはミリーナちゃんに似た、角が生えている女の子が描かれていた。

「まずこの獣人の少女はエリーゼ。そちらにいる彼女の姉です。依頼内容はこの姉妹を一旦、国から出して欲しいのです——」

それからミリーナちゃんの知らなかった部分も含めての獣人の姉妹に起きた悲しい事件を語ってくれた。

俺がそこで初めて知ったのは彼女たちの両親は商人たちによって殺されたということ、当時の役人はそのことを知らなかったこと、二人

を助けた老人にお礼をしようとしたが自分にはやらなければならぬことがあると商人たちを引き渡した後名乗ることもせずすぐに国を出て行ってしまったことなどについてだ。

両親の本当に死因を知ったミリーナちゃんは泣きそうになっていた。それでも泣くことはせず、役人の顔を真つ直ぐと見ていた。

強い子だ。

「お願いします。どうか、彼女たちを救っていただけませんか……」

辛そうな顔で俺たちに頼み込んでくる役人を見て、俺はイレイナの方に顔を向ける。

「この依頼はイレイナ宛てのものだ。どうするかはイレイナに任せるよ」

「あなたはそれでも良いんですか？ 私が断るかもしれませんが。そうになったらあなた一人でやることになるんですよ」

「俺はイレイナを選択を尊重するよ」

「……実際にエリーゼさんのことを見てから決めさせてもらいます」

「分かりました。魔女様、どうか彼女をよろしくお願いします」

役人と別れた後、俺たちはミリーナちゃんを家の前まで送ることにした。彼女たちの家にたいまつを持った商人たちが入ったと聞いていたので、もしかしたら家の一部が燃えてしまったのではないかと思っただが特に目立った損傷は見られなかった。

「お兄ちゃん！イレイナさん！今日はありがとう！」

「私のことは名前で呼ぶんですね」

もしかしてお姉ちゃん呼びを期待してたのだろうか？ ミリーナちゃんには既にお姉ちゃんがいるから無理なんじゃないかな……。

「どういたしまして。だけどまだまだこれからだからね。明日また来るから待っててねー」

「うんー！」

俺たちに手を振ってから家に入っていくミリーナちゃん。それを確認した俺たちは窓に近付いて聞き耳を立てた。

「お姉ちゃん！ただいまー！」

「ミリーナ！どこに行ってたの！心配したんだから！」

ミリーナちゃんと話しているのは姉のエリーゼちゃんだろう。

「ちよつと散歩してただけだよ」

「この国の人たちに何されるか分からないから家で待っててねって
言っただじやない！」

「……ごめんなさい」

「大丈夫、ミリーナはお姉ちゃんが守るから」

「お姉ちゃん……」

エリーゼちゃんは妹の身を案じるあまり、他人との接触どころか外出すら許せないようだ。以前、似たような人がいたことを思い出すな。

バレないように一瞬だけ顔を出して中を覗き見る。

ミリーナちゃんを抱きしめている少女がエリーゼちゃんだろうか。
妹と同じ金色の髪と角が生えていた。

「……あら」

「ん？どうしたの」

「エリーゼさん……でしたか。先ほどパン屋で見ましたね」

二人で旅をしている俺たちに二人の姉妹がそれぞれ会っていたのか。奇遇だな。

エリーゼちゃんが持つてきたリングを二人で食べ始めたところで俺たちは家を離れた。

「さてイレイナ、君はどうするんだい？」

「依頼を受けることにします」

「そっか」

優しい彼女のことだ。あの姉妹を放っておくとは最初から思っ
てなかった。それでも依頼を受けると聞くと嬉しくなる。良い幼馴染
を持って幸せだよ。

「彼女——エリーゼさんのことは私に任せてください」

「え、俺もミリーナちゃんからエリーゼちゃんのことを頼まれてるん
だけど……」

「カイはミリーナさんの方をよろしく願います。懐かれていますよ

うですし」

ミリーナちゃんは俺の依頼人であり、姉を助けてほしいとだけ頼まれた。依頼内容にミリーナちゃんは入っていない。

「理由を聞いても？」

「はい。今回の依頼はエリーゼさんを何とかすれば良いように思えますが、それは違うと私は考えています」

「ほほう」

「まず、傷付いているのはエリーゼさんだけではありません。なのでミリーナさんの傍にいてあげる人が必要です」

それはそうだ。だから俺は明日ミリーナちゃんと一緒にエリーゼちゃんと話でもしようかと思っていた。

「次にエリーゼさんについてです。彼女は妹を守ることを第一にしています。私たちがミリーナさんと一緒にいるところを見られたら警戒されてしまう可能性があります」

「なるほど」

そこは考えてなかった。ミリーナちゃんが俺たちに心を許しているからエリーゼちゃんも心を許してくれるとは限らない。だから二人には分かれて接する必要がある。

「最後にミリーナさんについてです。私はエリーゼさんに人を信じられるようにしながら狩りでも教えて一人前にしようかと思つています。無事にエリーゼさんが一人前になったとしましょう。しかし、妹のミリーナさんは？」

「……姉に頼つてばかりとなり、負い目に感じるかもしれない」

イレイナはエリーゼちゃんを一人前にするつもりらしい。このまま俺がミリーナちゃんに何もなかったら姉の足手まといになっていると考えるとしまうかも。そうならあの姉妹に幸せは訪れない。

ミリーナちゃんのことでも面倒を見る必要があるというわけだ。

「分かった。ミリーナちゃんのご事は任せて」

「よろしくお願いしますね」

「よし、大事なことに気付かせてくれたイレイナ様には、私が今日の夕食を奢らせていただきます」

「ほうほう、それは素晴らしい。では参りましたようか」
俺たちはレストランで少し高い食事を取った。

・
○

無人でリンゴを販売している屋台で良くないことをしようとして
いるエリーゼさんを止め、彼女と話をすることが出来ました。

最初は警戒している様子でしたが時間を掛けて私が旅人であるこ
とや獣人であることを気にしてないことが分かると警戒を解いてく
れました。

レストランで彼女から話を聞いた後、私は一つ頼み事をしました。

「私にあなたを助けさせてください」

少々汚い手を使いましたが、エリーゼさんは承諾してくれました。

最初に彼女に狩りをするのに必要な弓矢を教えることにしました。
少々準備が必要でしたがカイが手伝ってくれたのでそこまで苦労は
しませんでした。

森の中に作った射的場にエリーゼさんを連れていき、弓矢の練習を
させました。今日が初日なので的にはまだまだ届きそうにありませ
ん。

昼になり、お腹が空いたので寒さに震えながら国に戻ってレストラ
ンで食事をすることにします。

「いらっしやいませ。お好きなテーブルへどうぞ」

レストランに入ると暖かい空気と共にウェイターが歓迎してくれ
ました。

私たちは言われたとおりに席に座ります。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ではこれとこれとこれと——」

到底二人では食べきれない量を注文していきます。あ、私が大食
いってわけではありませんよ。だからウェイターはそんな目で見て
こないでください。

「お待たせいたしました」

ウェイターが料理を持ってきてくれました。

おや——

「口に何かついてますよ」

「ん？ああ、これは申し訳ございません」

「仕事中につまみ食いですか。良いご身分ですね」

「最近良い新人が入りましたね。その新人が作った料理を先ほどまで試食しておいりましたので。それではごゆっくりどうぞ」

ウェイターは厨房の方へ戻ったので、私はエリーゼさんと食事しながら話をします。

「弓矢を触ってみてどうでしたか？」

「お父さんとお母さんは当たり前のように使っていたけど凄く難しいね……」

「努力していれば上手く扱えるようになりますよ」

「そうだね。そしたらミリーナを守ることも……」

「危ないので人には向けないでくださいね」

そんな会話をしている時、丁度近くを通ったつまみ食いをするウェイターが私たちのテーブルまで来ました。

「おやお嬢さん、あなたはこちらの魔女様から弓矢を習っているのですか？」

「……うん」

突然ウェイターに話しかけられたエリーゼさんは警戒しながら頷きました。

「それなら面白い話をしてあげましょう——あれは昨日のことでした。私が森の中を散歩していると魔女様が何かをしているのを見かけました」

おや？おやおや？

「何か怪しい実験をしているのかと思います、私は咄嗟に隠れました。こっそりと様子を窺ってみると、魔女様の手には弓と矢が……。そう、なんと魔女様は弓矢の練習をしていたのです」

「へえ！」

これはいけません。早く彼を止めなければ。

「あの——」

「何度も外しましたが挫折せずに矢を放ち続けるその姿に私はとても感動しました。あ、これその時の写真です」

ウエイターがエリーゼさんに写真を渡しました。

「ホントだ！でもイレイナさん弓矢は上手いって言ってたような……」

「意地があるのですよ。このことは本人には秘密ですよ……」

本人目の前にいるんですが。私は杖を取り出してウエイターに向けます。

「人のプライバシーをばらすなんていい度胸してますね」

「これはこれは。誠に申し訳ございません」

「あなたの謝罪には重さを感じないのですが……。店長を呼びますよ？」

「それは困りますね。少々お待ちくださいませ」

そう言つてウエイターは厨房に行き、カゴを持って戻ってきました。良い匂いがします。

「こちらをどうぞ」

「これは？」

「こちらは先ほど出来上がったばかりのパンです。代金はいりません。私からのお詫びの品と言ったところでしょうか」

カゴの蓋を開けてみると、確かにパンが入っていました。それもたくさん。

「……まあ今回は特別に許してあげることにしてしましよう。私は優しい魔女なので」

「パンが嬉しかっただけじゃ——」

「何ですか？」

「う、ううん。何でもない」

「慈悲深き心に感謝いたします、魔女様。では私はこれで」

ウエイターが去った後私たちは食事を再開し、食べきれなかった分をエリーゼさんに持たせました。

「そのパンはくれないの?」

「おや、うつかり忘れてました。どうぞ」

ウェイターから貰ったパンをエリーゼさんに半分渡します。私の分が減ってしまいました。残念。

「なんかイレイナさんの方が多くない?」

「私も食べたいので」

「まあ他にも貰ってるから良いんだけど……」

このパンを後で食べるのが楽しみです。美味しいに決まっています。うふふ。

エリーゼさんの上達は早いもので、修行を開始してから五日が経った頃には的に矢が当たるようになっていました。私の教え方が上手いのでしょうか?もしかして私、先生とか向いてたりしますかね?後でカイに何か教えてみることにしましょう。

的に当てたご褒美として服を買ってあげることになりました。エリーゼさんは妹の分も買いたいと申し出たので「あなたが欲しいと思うものなら何でも幾らでもいいですよ」と言っておきました。

私たちは射的場から服屋に移動しました。

「いらっしやいませー」

服屋に入って歓迎してきたのはあのウェイターでした。

「あれ、ウェイターさんだよな?どうして今日はここにいるの?」

当然の疑問です。

「たまには服屋で働くのも悪くないなと思っただけです。最近入った新人が今頑張ってるところでしてね。最高のものが出来上がりそうです」

「はあ、そうですか。とりあえずエリーゼさんと一緒に服を選んであげてください」

「かしこまりました。それではこちらへどうぞ」

「うんー!」

エリーゼさんは警戒することなくウェイターについていきます。以前とは違い、人を信じる事が出来ているように見えます。この調

子なら問題なさそうですね。

「ところでレイナさんにはどんな服が似合うと思う？」

「彼女の美しさなら何を着ても似合いますよ」

「そういうことを聞きたいんじゃないんだけどな」

.....。

獣人の姉妹（後編）

「ねえ見てイレイナさん！やったーやったよ、ほらー！」

エリーゼさんが小さな野ウサギに矢を命中させました。

「おめでとうございます。ご褒美として手料理を食べさせてあげます」

「美味しいの？」

「忘れられなくなりますね」

「それは楽しみ！」

「あと、これはご褒美ではないんですけど、一つ提案が」

私はエリーゼさんに元の家にもう一度住まないか尋ねました。彼女はしばらく考え込みましたが、あの国を離れても良いかもと頷きました。

エリーゼさんが仕留めたウサギを血抜きし、紐でくくってから国へ戻りました。

エリーゼさんたちの家に行く途中、彼女に待つように頼んでから私はいつも訪れていたレストランに入ります。

「いらっしやいませ——おや、今日はお一人ですか」

「先ほどエリーゼさんがウサギを仕留めました」

「そうですね。おめでとうございます」

「ありがとうございます。私はもう行きます」

「はい」

レストランから出て少しゆっくりと歩いてエリーゼさんのところに戻りました。

「お待ちせしました」

「イレイナさん遅いよー」

「すみませんでした。やつておかなければならない用事があったので」

今度こそエリーゼさんたちの家に向かいました。

家に着くなり、エリーゼさんは荷物を取りに走ってしまいました。

タイミングを見計らっていたのか、私に依頼をしてきた役人さんが

現れました。

私は役人さんに依頼は順調に進んでいると報告をしました。すると彼はもう一つ依頼したいことがあると言い、「機会があれば、我々の本当の気持ちを、どうか彼女に伝えていただきたく思います」と語ってから去っていききました。

「おまたせー。二人分の荷物をまとめてたら、時間かかっちゃった」
入れ替わるようにエリーゼさんが戻ってきました。その後ろにはミリーナさんの姿もありました。

「イレイナさんには紹介してなかったよね。この子が妹のミリーナだよ」

「よ、よろしく！・イレイナさん！」

ミリーナさんは少し緊張しているようです。そんな彼女に私は「よろしくお願ひします。ミリーナさん」と微笑んでおきました。

私たち三人は国から出て暫く歩き、森の中にあるエリーゼさんたちの家が見えてきたところであることに気が付きます。

「誰かが私たちの家の暖炉を使ってる？」

「そのようですね」

エリーゼさんが走って家に入っていったので私たちも早足で向かいます。

「私たちの家で何やってるの！」

暖炉の前の椅子に誰かが座っていました。その誰かはエリーゼさんの言葉を聞いた後ゆっくりと立ち上がり、こちらに振り向きま

「おかえり、待ってたよ」

「え……」

その誰かとはいったい誰か。それは私とエリーゼさんがレストラ
ンや服屋で会ったウエイター——黒い髪に金色の瞳をした青年、つま
りカイでした。

「君たちが帰ってきた時のために掃除はしておいたよ」

「なんでウエイターさんが……」

「そうだね。いろいろと話したいことがあるけどお腹が空いてきたか

らお昼ご飯にしようか。エリーゼちゃんは誰が料理を作るか知ってるかい？」

「イレイナさんでしょ？」

そう答えるエリーゼさんに対し、カイは首を横に振ります。

「違うよ。今から料理をするのは君の妹——ミリーナちゃんだよ。一人だね」

「ミリーナが？」

「うん！前はお姉ちゃんと一緒に作ってたけど、今はもう一人でも作れるようになったの！」

そう言つてミリーナさんはキッチンの方に歩いて行きました。

「ミリーナちゃんの腕は俺が保証するよ。さ、俺たちは座って待つてようか」

「う、うん」

「私はウサギをキッチンに置いてくるついでに捌いてきますね」

カイとエリーゼさんはテーブルの前に置かれた椅子に座るのを横目に私はキッチンにいるミリーナさんのところにウサギを届けるのでした。

●
俺たちが依頼を受けた次の日。俺はエリーゼちゃんがいなくなった隙にミリーナちゃんと接触していた。

「——というわけでエリーゼちゃんの方はイレイナに任せて俺は君を助けることにした。依頼を破るような形になってごめんね」

「ううん、大丈夫。お兄ちゃんの話聞いてその通りだと思ったもん。わたし、お姉ちゃんに頼つてばかりでいたくない！」

「ありがとう。そう言つてくれると助かるよ。それで、君は何をしたい？」

「そうだなあ……うん。わたしは一人で料理が出来るようになりたい！それと——」

俺の問いにミリーナちゃんは下を向いて少し考えた後、俺の眼を

真っ直ぐと見て答えた。

「分かった。ミリーナちゃん、俺に君を助けさせて欲しい」

「うん！よろしくねお兄ちゃん！」

俺は手を差し出し、ミリーナちゃんと握手をした。

ミリーナちゃんの望みを叶えるためには彼女の家ではない場所で練習する必要がある。料理なんかは匂いでバレるだろうし、もう一つの方も念のためだ。

なのでその日はそこで解散し、国にあるレストランと服屋の店長に事情を説明して、少しの間俺とミリーナちゃんが働かせてもらえないか頼み込んだ。

二人の店長からの返事は即答だった。

「ウチは構わないよ。あの子たちにはもつと良い物を食べてもらいたいからな」

「当然良いわよ！あの子たちにはおしやれをしてもらいたいもの！」

「ありがとうございます！」

俺は頭を下げて感謝を伝えた。

この国の住民は酷い人たちばかりではない。幼い獣人の姉妹を助けてあげたかったが、彼女たちを苦しめたのも自分たちと同じ国民だったためにどう接すれば良いか分からなかったようだ。

二人の店長と話し合い、俺たちが働かせてもらう時間を調整した。昼前までは服屋で、昼頃から夕方まではレストランで働くことになった。

働き始めるのはイレイナがエリーゼちゃんに狩りを教え始めるのと同じタイミングにしたかったため、店長たちにはいつ頃から入れるか分からないと言ったら、二人ともいつでも来て良いと答えてくれた。

イレイナがエリーゼちゃんと話している間に、ミリーナちゃんにこのことを説明した。

「少し大変かもしれないけど大丈夫？」

「大丈夫！お姉ちゃんを助けられるように頑張る！」

「良い子だね。じゃあ明日迎えに来るから待っててね」

「うん！また明日！」

ミリーナちゃんと別れた後、イレイナと合流した。

「そつちも大丈夫そうだね。狩りを教えるって言ったって何を教えるの？」

「まずは弓矢について教えます」

「え。イレイナって弓矢扱えるの？」

「扱えますよ。こう見えても上手いですからね」

「へー、今まで見たことなかったけどそうだったんだ。弓矢持ってないでしょ？俺のを貸すよ」

俺が使っている弓矢を取り出してイレイナに渡そうとするが、彼女はそれを断った。

「カイが使っている弓の弦は固すぎるのでこちらで用意しておきます」

「じゃあ他に何か手伝えることある？」

「射的場の準備をお願いします。私一人だと時間が掛かってしまいうなので」

「了解」

それから俺たちは一緒に森の中に射的場を作った。的に当てたらご褒美があるらしい。やる気を出させる良い方法である。

俺は店長たちに明日から働かせてもらうことを伝えに一度国に引き返した。

用事が済ましてから射的場に戻るとイレイナが的に向かって弓矢を構えていた。俺はなんとなく隠れてしまった。

イレイナが放った矢は的に当たらずに別の方向に飛んでいった。

「うーん……。数年ぶりとは言え腕前には自信があったんですけど……。カイが戻ってくる前に感覚を取り戻しておかないと」

どうやら久しぶりに弓矢を扱うので感覚を忘れていたようだ。俺に内緒で練習するとは……。うん、写真を撮ろう——パシャリ。

写真を撮られたことに気付かないイレイナは何度も矢を放ち、少しした後ようやく的に当てることが出来た。それを見届けた俺は隠れるのをやめることにした。

「よしっ」

「戻ったよー」

「おかえりなさい。どうですか、私の腕前は」

「しつかり的に当たってるねー。これならエリーゼちゃんに教えることも大丈夫そうだね」

「私は魔法が凄いだけの魔女ではないんですよ」

そうやって胸を張るイレイナ。これは面白い話のネタになるな。

次の日。俺はエリーゼちゃんが家を出てくるのを確認してからドアをノックする。

「はーい。あつ、お兄ちゃん！」

「迎えに来たよ。じゃあ行こうか」

「うん！」

俺たちは服屋を訪れ、ミリーナちゃんに服屋の店長を紹介する。

「この人が店長さんだよ」

「よろしくお願ひします！」

ぺこりと頭を下げるミリーナちゃんに服屋の店長はにこりと笑う。

「それではミリーナちゃんのことよろしくお願ひしますね」

「ええ。任せて頂戴」

「お兄ちゃんが教えてくれるんじゃないの？」

「最初はそうしようかと思っただけど店長さんが譲らないって聞かなくてね」

「そうよ！今まで手を差し伸べてあげられなかった分の手伝いをしてあげたいの」

「店長さん……ありがたう！」

それから俺たちは店長の指示通りに働くことになった。俺は他の店員と同じように接客をし、ミリーナちゃんは働くと言っても店長に教えてもらいながらある物を作るといった感じだった。

昼になる前まで俺たちは服屋でお世話になり、時間になったら今度はレストランに向かった。

レストランでも同じようなやり取りをし、ミリーナちゃんは店長に

教わりながら料理の練習、俺はウェイターとして接客をしながらたまにミリーナちゃんの様子を見に行くようにした。

厨房では丁度一つ目の料理が完成したらしく、ミリーナちゃんの前にはスープが入った皿が置いてあった。

「ミリーナちゃん、調子はどうだい？」

「今までお姉ちゃんと一緒に作ってたけど一人で料理を作るのって難しいー！」

難しいと言いながらもミリーナちゃんは楽しそうに笑っていた。

俺は彼女の頭をなでる。

「そうだね。けど食べてくれる人のことを考えると苦にならないでしょう？」

「うん！」

「二つ良いことを教えてあげよう。料理を作るときに、食べる人が笑顔になりますようにと愛情を込めるととても美味しくなるんだよ。さてと一口貰いますかね——おや、ミリーナちゃんは既に分かっていたか」

「そうだよ！お兄ちゃんのことを思ってたんだ！」

俺が一口頂いたスープは、胸の奥が温かくなる味だった。大事なことが分かって以上、後は経験を積み重ねていけば良いだろう。

レストランの店長は苦笑いをしていた。

「やれやれ、俺から教えることの最後としてとっておいたことだったんだがな。先に言われた上に既に実行していたとは……」

「良いお嫁さんになりそうですね」

「お兄ちゃん、わたしまだ十歳なんだけど」

ジト目で俺のことを見てくるミリーナちゃん。彼女は可愛いから将来は多くの男性からお誘いをいただくだろう。

「ははは、是非とも結婚式には呼んでね」

「もー」

こうして俺たちは暫くの間二つの店で働き続け、エリーゼちゃんがウサギに矢を当てられるようになった頃にはミリーナちゃんの準備も済んでいた。

イレイナから報告を受けた俺は店長にそのことを伝え、ミリーナちゃんを先に家に帰してから二人の店長にお礼を言った。

「今までありがとうございました。故郷にいた時のことを思い出して楽しかったです。俺たちはもう行かなければなりません」

「ああ。元気でな」

「こちらこそありがとうねー。それにしてもミリーナちゃんにも挨拶したかったわ」

「そうだな。最後にあの元気な顔を見たかったな」

店長たちはミリーナちゃんと最後に話せなかったのが残念なようだ。どうやらもう二度と会えないと思っっているらしい。

「大丈夫です。ミリーナちゃんはまたこの国に来ますよ。今度は仲良しの姉と一緒に」

「そうだな。その時は美味しい料理でも振舞ってやるか」

「ええ。二人にピッタリな服を作っておくわ!」

「それでは俺はこれで失礼します」

店長たちに手を振ってから俺は全力で山の中にある家まで走った。既に何度か訪れて掃除をしていたので家の中は綺麗な状態だった。

よし、問題はなさそうだ。

俺は暖炉に薪をいくつか放り込んでから火をつけ、イレイナたちが来るまで椅子に座って休んでいることにした。

そして君たちが来た。



「あの国の人々が私たちのことを……」

「さて、何か質問があるかな?」

ミリーナちゃんが料理を作ってる間に、俺の向かい側の椅子に座っているエリーゼちゃんにこれまでのことを説明していた。

「ウェイターさんがミリーナにいろいろしてくれたのは分かったけど、ミリーナが料理以外にしたかったことって何?」

「良い質問だね。これについて今は――」

答えられないと言おうとした瞬間にミリーナちゃんが料理を運んできてくれた。

「お待ちせ！」

「何作ったの？」

「クリームシチュー！」

「ミリーナの好物だね！美味しそうな匂い！」

エリーゼちゃんの言う通り、にんじんやイモ、ウサギの肉が入ったクリームシチューからは美味しそうな匂いがしてきた。レストランで学んだことは十分に活かせてるな。

「さて、さっきの話の続きをする前にミリーナちゃんが作ってくれた料理を食べることにしようか」

全員お腹が空いているらしく、反対の声は上がらなかった。

シチューが入っているのは違う皿にパンが乗せられていたが、まずはシチューをそのままスプーンを使って一口食べる——うん。

「美味しい！」

「本当？よかったー」

「まさかミリーナが一人で料理できるようになってたなんて驚いたよ」

「わたしも力になりたかったからね！」

目の前で行われる中の良い姉妹の会話に俺はほっこりとしていた。

「ところで私が弓矢の練習をしているところを見てたんですね」

隣の椅子に座っているレイナが聞いてくる。エリーゼちゃんのために弓矢の練習をしていたことを俺が暴露したことを根に持っているようだ。

特に誤魔化すつもりもないし正直に答えよう。

「うん、見てたよ」

「どのあたりからですか」

「数年ぶりとは言え腕前には自信があったんですけどーって言う前からだね」

「最初からじゃないですか。あの後エリーゼさんから練習していたことを何度も聞かれたんですからね」

「いやー俺もエリーゼちゃんと話してみたくなってきた。丁度良いネタがあつたからつい言っちゃった。ごめんね」

「何がついですか。そんな風に謝られても許しませんよ」

流石にこんな謝罪じゃ許してもらえないようだ。と言つても声の感じからして本気で怒つてるわけじゃないようだ。

俺は自分の皿に乗っているパンを一つイレイナの皿に乗せた。どうなる？

「許します」

許された。

「ごちそうさまでした」

料理を全て食べ終えた俺は先ほどの話の続きをすることにした。タイミング的にも今が丁度良いはずだ。

「さて、美味しい料理も食べたことだし話の続きだね。ミリーナちゃんが料理の他に何がしたいと言つたか——その答えを今から見せてあげようか。ミリーナちゃん」

「うん！」

ミリーナちゃんが自分のカバンから取り出したのはマフラーだった。

「マフラー？」

「お姉ちゃんが狩りに出かけてるときに寒くなって欲しくないからわたしが編んだの！少しだけ形が変になっちゃったけど」

『わたしは一人で料理が出来るようになりたい！それとお姉ちゃんのためにマフラーを作つてあげたい！』

そう、ミリーナちゃんは姉のためにマフラーを上げたいと言つていたので。店で買うのではなく、愛情が籠った手作りのだ。

まだ初心者であるミリーナちゃんが編んだマフラーは端と端で太さが違っていた。

しかしエリーゼちゃんはそんなことを全く気にせず受け取ったマフラーを抱きしめていた。

「ううん、全然変じゃない。ありがとうミリーナ、大事にするね」

「試しに巻いてみてよ！」

ミリーナちゃんに促され、マフラーを首に巻いてみるエリーゼちゃん。

「どう？」

「似合ってるよお姉ちゃん」

「俺も似合ってると思うよ」

「良い物を貰いましたね」

「そうかな。えへへ」

少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑うエリーゼちゃんと、姉にプレゼントを渡せて喜んでいるミリーナちゃんの姿を残すために俺はカメラで写真を撮った。



エリーゼちゃんとミリーナちゃんが家に戻ってから俺たちはしばらく彼女たちと一緒に過ごした。二人とも一人前に近付いたが、完全に一人前になったわけではなかったからだ。

晴れた日の雪景色の中を走り、エリーゼちゃんや俺が狩りをして、ミリーナちゃんとイレイナが家で料理や編み物をしてみんなで一緒にご飯を食べる。たまに当番を入れ替えたり、家事についてや傷や病気に効く薬草の知識なんかを教えたりしながら楽しく暮らしていた。まるで家族みたいだなと思った。誰も口にすることはなかったが、きつと皆そう思っているのではないだろうか。

何の変哲もない日常の繰り返しだった。刺激が無くてつまらないと思う人がいるかもしれないが、俺はそうでもなかった。

俺はこの日常が好きだ。好きな人たちと一緒にゆつくりするのが好きだ。子どもが成長していく様子を見るのが好きだ。

師匠の下で強くなった俺だが、どうやらこの力を使わないことの方が好きなようだ。同じく師匠の下で修行した父さんが自分は結婚してから弱くなったけど後悔はないと言っていたが、ようやく、その意味が分かった気がする。

今度父さんと母さんにこのことを手紙で伝えよう。息子の成長に喜んでくれるだろうか？いや、考えるまでもなくあの二人なら喜んでくれるだろう。

二人が一人前になるまであと少し、俺はこの幸せに身を委ねることにした。

エリーゼちゃんが狩りを、ミリーナちゃんが家事を完全に覚えたところで彼女たちは両親の墓の前で口を開く。

「私たち、もう一人前だよ」

「わたしたち、二人の分まで立派に生きていくよ」

その言葉にはいろいろな感情が含まれているように思えた。

「じゃあ私たちはもうお役御免ですね」

「お役御免ってわけじゃないけど……でも、今までありがとう。イレイナさん、カイさん」

「どういたしました。二人とも、これからも頑張つてね」

「お兄ちゃんたちもね」

「……寂しくなるなあ」

「でも、二度と会えないと決まったわけじゃないよ」

「わたしの結婚式には必ず来てね！」

「もちろん。だから良い人を見つけてるんだよ」

「カイさん、ミリーナとそんな約束してたんだ」

「エリーゼさんも呼んでくださいね。私も楽しみにしてますから」

「うん。呼ぶよ、絶対」

「君たちはこれからどうするんだい？」

俺の質問にエリーゼちゃんとミリーナちゃんは一瞬見つめ合った後、

「私たちね、しばらくしたら、またあの国に戻ってみようと思うの」

「わたしたちに優しくしてくれた人たちにお礼も言えてないからね！」

「私はあの国の人たちのことを一方的に敵視しちゃってたから謝罪が

先だけど。と言つても、私はまだ決心がついてないし、両親にちゃんとお別れを済ませてから。あとしばらく——雪がとけるまではここで住み続けるよ」

「そっか。これからも君たちの前には壁が立ちはだかるだろうけど、君たちなら大丈夫。そうだね?」

「うん!わたしたち二人ならどんな困難でも乗り越えられる!」

その時、俺たちの背後で木の枝から雪が落ちた。春が近付いているのだろう。

「まだ時間はかかりそうですね」

イレイナの言葉に二人はかぶりを振って微笑んだ。

「もうすぐだよ」

——パシヤリ。

これが今回撮った最後の写真となった。

○

一度国に戻って役人さんに依頼が達成されたことを報告してから国を出ました。

「楽しかったねー」

「そうですねー」

エリーゼさんたちの写真を眺めながらカイが言ってきました。今までで一番写真を撮ったんじゃないでしょうか。

「しかしイレイナが報酬を全く受け取らなかったのは驚いたな。少しくらいは貰うと思ってた」

「私だってそんな日もあります。カイだってミリーナさんから報酬を貰ってないじゃないですか」

「俺は貰ったよ。これだよこれ」

彼はそう言つて手に持っていた写真を揺らします。

どうやらカイはミリーナさんと一緒に働いていたお店から給料が出たけど、それを全部エリーゼさんたちに渡したそうです。

彼も人のことを言えませんか。

「……………」

私の首を温めてくれているマフラーに触りながらカイのことをチラリと見ます。

このマフラーはカイが編んでくれたものです。彼は私が気付いてないと思っているようですが、そんなことはありません。

大切な幼馴染が編んでくれたこのマフラーを大切に使い、旅が終わった後に気付いてたことを教えてあげようかと思っています。

一体カイはどんな表情をするのでしょうか。きっと驚いた後に喜ぶんでしょうね。分かりやすい人。でもそんな彼だからこそ、見たいと思うのです。

「ふふふ」

「ん？どうかした？」

「なんでもありません」

——その時が楽しみです。

正直者の国と執事長（前編）

今回、俺たちは海沿いにある面白い国を訪れていた。

「俺たちは旅人である」

何故分かりきったことを言っているか疑問に思う人もいるかもしれないが、これには訳がある。

俺は今『俺たちは旅人ではない』と嘘をつこうとしたのだが、俺の口からは真実が語られた。

この国は正直者の国といって、中に入ると嘘がつけなくなる不思議な国だ。

半年前から国王が持っている剣の力で結界を張っており、その結界の力で嘘がつけなくなったのだと説明された。国全体を覆うほどの魔力はどこから来てるんだろうか。機会があれば国王に聞きに行くのも良いかもしれない。

俺が来ているスーツは魔法の効果を軽減してくれる機能があり、最初は嘘をつくことが出来たのだが今はもう本当のことしか言えなくなってしまうている。

嘘をつこうとして本当のことを喋ってしまう感覚はなかなか面白いものだ。

「私は美しくあり、あり……私はとても美しい！」

隣にいたイレイナも嘘がつかないかいろいろ試していたのだが、今度は手鏡を持って自分の容姿を絶賛していた。

俺はそんな彼女を見つめていると、こちらの視線に気付いたのか睨まれた。

「なんですか。何か文句でも？」

「いや、その通りだなーと思ってただけ。俺もイレイナの容姿も心も美しいと思ってるよ」

「私は自分の容姿だけを言ったつもりですが……。まあ、ありがとう
ございます」

おやおや、後半部分は言うつもりなかったんだがつついっ出でしまったようだ。

それにしてもイレイナは自分の心が汚いと思っっているのだろうか。俺はそう思ったことないんだけど、彼女は自己評価が少し低いのかもしれない。

検証も程々に、俺たちは国の中を観光することにした。

途中でいろんな人から話しかけられたり、すれ違う人の会話を盗み聞きしたりしていたのだが、相手に対して思っていることをありのまま喋ってしまうからか失礼なことを言われたり、剣？な雰囲気にかまれている人たちが多かった。

「イレイナは俺に対して何か不満があつたりする？」

聞くのが怖い質問ではあつたが、俺はイレイナに尋ねた。もしイレイナが俺にしてほしくないと思っっていることがあれば出来るだけ直すようにしたいとは思っている。

「カイに対してですか。うーん、もつとパンを作つて欲しいとかですかね」

「そんなことかい？思つてたのとは違うけど分かつた。次からはもう少し数を増やすことにするよ」

「カイはどうなんですか」

「俺がイレイナに対して不満に思っっていることかー。……もつと俺に頼つても良いんじゃないかとか？」

「十分頼つてますよ。これ以上頼つたら私はダメ人間になつてしまいます」

「俺は別に構わないんだけどなー」

俺がお金を稼いできてイレイナがお金の一部を使って笑顔になる。それを見た俺も笑顔になつてさらにお金を稼ぐ。永久機関の完成だ！

そんな感じで俺は構わないんだけどイレイナ的には駄目だったようだ。

街を進んでいくと、この国で一番大きな建物——王宮が見えた。

王宮では若い国王が演説を行っていた。

手に持っているのはこの国に結界を張つたという剣だろう。俺だったら持ち歩きたくないと思うくらいには変わったデザインをし

ていた。

もしかして常に握っていないと効果を発揮しないのだろうか。風呂とかどうしてるんだろう？

国王は嘘が嫌いなようで、嘘をつくことは悪で本音を言うことが正しいと語っていた。

本音を言い合えば本当の信頼関係が生まれるとも語っていたが、国民たちの様子を見た限りそうとは思えなかった。

国王は悪い人ではないんだろうが、少し頭が固いのかもかもしれない。ところで国王は嘘をついたことがないのだろうか？聞きたいことが増えてくるな。

「イレイナはどう思う——って何やってんの？」

イレイナはスケッチブックを持った茶色の髪の魔女と話をしていた。喋っていたのはイレイナだけだったが。

「この魔女さんが私を魔法統括協会の魔女と勘違いしたようです。ちなみに魔法統括協会に所属している人は、胸に月をかたどったブローチをしているんですよ」

魔法統括協会は魔法についての事件なんかを解決する組織のことである。そういえば以前頼むように伝えた花畑はどうなったんだろうか。ちゃんと処理してもらってると良いのだが。

イレイナが魔法統括協会について説明してあげると、勘違いしていた魔女はスケッチブックに何かを書きだし、

『ごめんさい人違いでした今のは忘れて！』

そう書いてあるスケッチブックを掲げてからお辞儀をして走っていった。

「魔法統括協会に何の用だろう？」

「さあ……。む？紙に書いた場合はどうなのでしょう？」

「紙か……。ふむ」

俺は国王の演説に來ている国民たちが持っている看板を見た。

『王様素敵！』『イケメン！』『王様のお陰で彼女が出来ました！』『手に持つてる剣カッコいいですね！』『好きな女性のタイプを教えてください』『俺じゃダメですか？』

「……宿を探すついでに街の中を歩いてみようか」
俺たちは王宮に背を向けて再び街を進んでいく。
宿屋を探す最中、いろんなお店の看板を見るがどれも酷いものだった。

『新作できました！本当は前からあったものに新しい要素を加えただけです』『店長おすすめの新商品！美味しいよ！嘘です。ゴミです。くそです。食べたら死にます』『金貨三枚する高級アクセサリーが今なら金貨一枚！相場は銀貨一枚の安物だけど』『王様の持っている剣のアクセサリー！超ダサイ！』

これは数あるうちの数の数個である。

どの店も後半に本当のことを書いているようで、それを消したり汚したりしたものが多くて読みづらいものが多かった。

文字でも嘘がつかないというのは分かったが、先ほどの演説を聞いていた人たちの看板に書かれていたことも本音だったのだろうか。

『激安宿屋！安いけど滅茶苦茶綺麗です』

そんなことが書いてある看板が立っている宿屋を見つけた俺たちは特に疑うこともせずに入りに入り、部屋を取った。

「……………汚い」

看板に書いてあることとは裏腹に、用意された部屋は滅茶苦茶汚かった。こんなところに長居したら病気になるんじゃないかってくらいには酷かった。

嫌々荷物を置いた俺はイレイナの部屋を訪ねることにした。俺のところだけ汚いならまだ良いんだけど……。

「……………」

駄目だった。イレイナの部屋も同じように酷いものだった。看板に書いてあることで正しいのは前半の部分だけのようだ。

「…………イレイナ、俺はこの店主と話をしてくる」

「銅貨一枚残さずふんどくって来てください」

「そこまでする気はないんだけど」

俺はカウンターにいる店主に文句を言うことにした。

「すみません、用意された部屋が汚かったんですけど」

「それが何か？」

店主は俺の言葉に何が問題があるか分かっていないような口ぶりで応えた。

「いや、看板に書いてあることと真逆じゃないですか。これって詐欺ですよ詐欺」

「そうは言われなくてもねえ。この国で嘘をつくことは出来ないんですよ、文字であつても」

「それは分かってますけど……。あなたはあの部屋を見て本当に綺麗だと思いませんか？」

「そこは人の価値観によって変わってきますよ。だから問題はないと考えておりますが」

この店主絶対に分かってやっているな。この国で嘘をつけないという事実や、人の価値観などという形のよく分からないものを使って俺の質問をのりくらりとかわしている。詐欺師がやりそうな手口だ。

「俺はあなたの意見を聞いてるんですよ。答えてくれないならこの宿屋のことを国王に報告しますよ」

「国王があなたのような旅人の言葉なんぞに耳を貸すでしょうか。仮に国王に報告することが出来たとしても、この国に長く住んでいる私たちの言葉の方を信じるでしょう。無駄なのでやめた方が良くと思いますよ」

よく回る口だ。しかし店主が語ったことも事実だ。ただの旅人である俺の言葉を国王が簡単に聞いてくれるとは思えないし、どちらの言葉を信じるかとなったら自分の国民を信じるだろう。

「面白い話をしていますね」

「ん？」

「ゲっ、あなたは……」

どうしたものか次の一手を考えていると背後から老人が話に加わってきた。執事服を身にまとい、片眼鏡を付けて背中が真っ直ぐと伸びている姿はどこか気品さを感じさせられた。

「えっと、誰です？」

「ワシはバトラという者でございます。以後、お見知りおきを」
「旅人のカイです。よろしく願います」

バトラさんは右手につけていた手袋を外して手を差し出してきたので握手する。

「なんで王宮の執事長であるあなたがこんなぼろ宿に……」

あつ、ぼろ宿って言った。

しかし王宮の執事長か。なかなか偉い立場の人じゃないか？

「若者を騙している小悪党を偶然見かけてしまいましたね。灸でも添えてあげようかと思っただけです」

「おっ——私はただ商売をしていただけで何もそんな……」

「ワシの言葉なら、国王様も聞いてくださると思いませんか？この宿屋はどうなってしまうんでしょうね」

「坊主！今日の宿泊費はタダにしてやるからこの人を止めろ」

本性を表した店主は俺に命令してくる。なんでそんな偉そうなのだろうか。まあ鬱憤を晴らす良い機会だ。

「はあ、それが人にものを頼む態度ですか？」

「……止めるように頼んでくださいお願いします」

「まずは謝罪が先では？」

「このガキ……。騙すような真似をして申し訳ありません——申し訳ないなんて思っていないませんよクソが！……あ」

嘘をつけないこの国では表面上だけの謝罪すらできないようだ。

この国の接客業の人は苦勞するだろうな。

「あなたに謝罪する気がないのは分かりました。まあ俺も鬼ではないので慰謝料をくれたらバトラさんに頼んであげましょう」

「チツ。幾らだ？」

「金貨二十枚」

「そんな大金ウチにはねえよ！」

「なら十枚で良いです。ありますよね？」

「ああもう持っていけ！こんなことになるならあんなこと書くんじゃないかなかった！」

「あ、今日の宿泊費もタダにするのを忘れないで下さいよ。最初はこ

んなことするつもりはなかったんすけどねー」

「……………」

俺は店主から金貨十枚を受け取って、カウンターから離れる。

店主の態度が気に食わなかったからついついやってしまった。だけれど最初は宿泊費だけで勘弁しようと思ってたし店主の自業自得でことにしておこう。

俺はこちらを睨んでくる店主の視線を気にすることなく、助けてくれたバトラさんにお礼を言う。

「バトラさん、ありがとうございました。あなたのお陰で話が上手く進みました」

「お気になさらず……と言いたいところですが、カイ殿に依頼したいことがあるのです」

「俺にですか。助けてもらった恩もありますし無理のない範囲なら手伝いますが」

「ここでは何ですのであなたの部屋に案内していただいてもよろしいですか？」

「ん？大丈夫ですよ」

執事長ともなれば良いところに住んでるだろうしそこで話せば良いだけなのは。それとも極秘のことだから誰かに聞かれる可能性が低いさつき出会ったばかりの俺の部屋の方が安全だということだろうか。

特に拒否する理由もないので俺はバトラさんを部屋に招いた。

部屋には椅子が一個しかなかったのでバトラさんには椅子に座ってもらい、俺はベッドに腰を掛けることにした。

「それで依頼とは？」

「その前にワシについてお話しなければなりません。先ほど店主はワシのことを王宮の執事長と言ったじゃないですか。実はもう違うのです」

「え、そうなんですか」

確かに言われてみれば彼は一度も自分が執事長だとは言ってなかったし、店主に問いかけるように話しかけていたから嘘をついたわ

けではないということだ。

「ワシは執事長をクビになりました。あなたに出会う少し前に」

「今日ですか。それなら店主が勘違いするのも無理はないですね」

「はい。追放された理由は些細な行き違いと言いますか、今まで国王様に嘘をついていたのがバレてしまったからなのです」

「へえ、執事長でも嘘はつくんですね」

椅子に座っていても背もたれに背中を付けずに真っ直ぐと伸ばしている姿と同じように、嘘をつかない真っ直ぐな人かと思っていた。

「人間誰だって嘘をつきます。ワシの場合は国王様のことを考えてついた嘘だったのですが……」

「なるほど、嘘つきは部下にいらん！みたいな感じですね」

「そんな感じです。多分お分かりかと思いますが、ワシの依頼は国王様を説得してワシを執事長に戻すようにしていただきたいのです」

「依頼内容は分かりましたが何故俺に？」

「あなたならこの依頼を達成してくれるとワシの勘が囁いたからです」

随分と適当な理由だったからベッドから落ちそうになる。この国の人は信用できないとか旅人だから極秘に頼みたいとかそんなものだと思っていたのだが……。

「ま、まあそれくらいなら危険なこともないでしょうしその依頼、お引き受けしましょう」

「ありがとうございます。報酬は……後のお楽しみということはどうでしょうか」

「いいですよ。俺は既にあなたに助けられていますしどんな金額でも文句は言いません」

「それではまた明日訪ねさせていただきます」

「はい、それではまた明日会いましょう」

俺はこれから自分の家に帰るであろうバトラさんを宿屋の外までついていき、見送った。

バトラさんの姿が見えなくなったら俺は店主に頼んでキッチンを使わせてもらい、カゴ三つ分のパンを焼いた。

いつもよりも多く焼いたパンのうちの一つを店主に渡ししてからイレイナの部屋のドアをノックした。

「イレイナー、開けてー」

「はいはい。どうしましたか——ってパンじゃないですか。それもいっぱい」

「頼まれていたからね。はいどうぞ」

「ありがとうございます、これは今日だけでは食べきれないですね。うふふ」

「喜んでもらえたようになりより。それと店主と話をしてきた結果、今日の分の宿泊費はタダになったし感謝料として金貨を貰って来たよ。これ半分ね」

俺はイレイナにパンと金貨五枚を渡す。

「今の私幸せすぎでは……？やはりカイとの旅は最高ですね」

「お、嬉しいことを言ってくれるね。俺もイレイナとの旅は最高だと思ってるよ」

早速笑顔でパンを食べ始めてるイレイナを見て俺も笑顔になる。いつまでも見てられるな、写真を撮っておこう。

「何ですか？」

「美味しいかい？」

「はい。これなしでは生きていけない自信があります」

「そっか。ならこれからも作らないとね」



翌日。イレイナは街を散策すると言ってきた。

「カイも一緒に行きませんか？」

「あーごめん、これから人と会う約束があるんだよね。ま、俺の分も楽しんできてよ」

「そうですね……。残念です」

イレイナが宿屋から出て言った後、バトラさんが来るのを待っている間に新しい魔道具作りに励んでいた。

今回作ろうとしているのは片手で持てる特殊な銃だ。

銃口の先には吸盤がついており、引き金を引くとこの吸盤を発射する。吸盤と銃はワイヤーでつながっており、引き金から指を離すとワイヤーを巻き上げる。

銃に魔力を流し続けることでワイヤーを伝って吸盤に魔力が行き、吸盤が壁や天井に張り付く。魔力を流すのを止めると吸着力が無くなるといったものである。

これを使えば立体的な機動をすることが出来る。

魔法使いはほうきに乗ることが出来るから必要ないように思う人もいるだろう。いやはや全くその通りだと思います。

けれどほうきを使わずにこれで移動するのを想像してみよう。格好良いと俺は思った。だから作ることにした。

名前はどうかだろうか。吸盤が壁や天井に吸着するから『吸ちやくん』なんてどうだろうか。

新しい魔道具の完成が近付いてきた頃、部屋のドアがノックされた。

ドアを開けるとバトラさんが立っていた。

「おはようございます」

「おはようございますというかもうそろそろ夕方なんですけど……。ここにちは」

「これは失礼いたしました。報酬の方を準備するのに時間が掛かってしまいました……。それで本日はどういたしましょうか」

「とりあえず王宮に行ってみましょう。国王様と話が出来ないか聞いてみます」

「かしこまりました」

そう言ってお辞儀をするバトラさん。気のせいか服が昨日より汚れてるような？

「バトラさん、ここに来るまでに何か事件でもありました？」

「いえ、何事ありませんでした」

「あら、そうですか」

俺の勘違いでそういう執事服だっただけなのかもしれない。「あな

たの服汚れてますけど——あつ、元々そういう服でしたかすみませ
ん」なんて会話はしたくないからこれ以上は聞こうとは思わないが。
「ところでこれ見てください。今新しく作ってる新しい道具なんです
けど名前は『吸ちやくん』って言うんですよ。良い名前ですよね？」
「……ワシ個人の感想は控えさせていたいただきたいのですが、正直に申
し上げますとあまりネーミングセンスはよろしくないかと」
「!？」

正直者の国と執事長（後編）

宿屋から出て王宮の近くの広場までやってきたところで見覚えの三人の姿が見えた。

一人は俺と一緒に旅をしているイレイナ。一人は昨日イレイナに話しかけていた魔女。そしてもう一人は――

「サヤちゃんか。久しぶりだね」

「あ、カイさんじゃないですか。本当にまだイレイナさんと一緒に旅をしていたんですね！イレイナさんはぼくのなので邪魔しないで下さいね」

「私はあなたのものじゃないです。変なこと言うのやめてください」

いろいろ言いたいことはあるけど、俺は彼女の胸についている星をかたどったブローチに目をやった。

「どうやら無事に魔女になれたようだね。おめでとう」

「ありがとうございます。魔女名は炭の魔女です。灰の魔女に近いのにしてもらいました」

「なるほど、良い魔女名だね。ところで――」

三人で何をしてたんだい？と聞こうとした時、俺の隣にいたバトラさんは突然声を上げた。

「魔女エイヘミア！貴様のせいでワシまで追放にされてしまったではないか！どうしてくれる！」

『ひい！ごめんなさい！ごめんなさい！』

バトラさんからは今までの礼儀正しさが消え、スケッチブックを持った魔女――エイヘミアさんに対して怒りを露わにしていた。

「バトラさん、彼女のせいでクビになったとはどういうことですか？」
「む、おほん！失礼。この魔女エイヘミアはワシと同じで元々王宮で働いておりましたが、彼女が剣に魔法を掛けたことでこの国では嘘がつけないようになってしまったのです」

「元凶ってことですか」

「そういったところです。どうやら自分の声と魔力を代償にして魔法を使ったらしく、今は声が出せないし魔法も使えない役立たずになっ

たので追放されました」

『ちよつと、役立たずは言いすぎじゃないかしら！取り消して！事実だけ』

エイヘミアさんはスケッチブックを勢いよく掲げて抗議しているが、最後の一言で意味が無くなっている。

「それで、イレイナたちは何をしてたんだい？」

「……丁度良いですね。サヤさん、例の物を」

「はい！」

俺はサヤちゃんから薄汚れた紙を受け取った。なんでこんなに汚れてるんだ？まあいいや。

「なにになに……。『流砂の魔女エイヘミアの追放を撤回する。並びに、灰の魔女イレイナ、炭の魔女サヤの入城を許可する』へー、そうなんだ」

「おや、ワシはそのような話聞いておりませんが……」

「多分バトラさんが追放された後に決まったことなんじゃないですかね。ついでにバトラさんも戻してもらえようように頼むチャンスじゃないですか」

「それはそうですがこの紙にはワシたちの名前が書かれてないから王宮には入れないでしょう」

「んー、それなら中に入れるイレイナたちに頼みませんか」

「?どういうことですか?」

「昨日のことなんだけど——」

俺はイレイナたちに昨日バトラさんに助けてもらったことや、彼の境遇について説明した。

話を聞いたイレイナは合点がいったと感じに頷いた。

「事情は分かりました。それなら時間を少しだけ下さい。あなたたちも入れるようにしてみせましょう」

「出来るの?」

「私を誰だと思ってるんですか?」

「最高の幼馴染」

「正解です」

「ぼくもイレイナさんのこと最高だと思ってますよ！幼馴染って良いですよ。イレイナさん、ぼくと幼馴染になってください！」

「幼馴染って後からなれるものなんですか？一先ずその紙を返してください」

「はいよ」

イレイナは俺から紙を受け取ってどこかへ歩いて行った。

●
「カイさんってイレイナさんと付き合ってるわけじゃないんですよ？」

イレイナが姿が見えなくなった後サヤちゃんが尋ねてきた。

「ん？まあそうだね。告白もしてないよ」

「カイさんって男性が好きなんですか？」

「いや、俺の恋愛対象は異性だよ」

「ならどうしてイレイナさんに告白しないんですか？ぼくならしますね！というかもう求婚します。もしかしてイレイナさんに魅力がないとか言わないですよ？」

求婚したんだ……。それは置いといて、サヤちゃんが聞きたくなる理由も分かる。イレイナみたいな魅力的な女性は中々いないからね。そんな彼女と一緒にいるのに告白しない俺が同性にしか興味ないのではと思うのも無理もない。

「イレイナの魅力は誰よりも分かってるよ。そして告白はするよ、将来」

「それっていつの話ですか？」

「俺たちの旅が終わった時だね」

「先が見えませんか。そんなに悠長にしてたらぼくが先にイレイナさんを貰っちゃいますよ」

「最終的にイレイナがサヤちゃんを選んだときは諦めるけど俺は負けるつもりなんてないよ」

「ほう、つまり勝負ってことですね？」

「まあそんな感じだね」

「ぼくが勝つたらあなたには置物になってもらってぼくとイレイナさんのイチヤイチャしてる姿を見てもらいますからね」

「え、何それエグイ……。もしかして俺のこと嫌い？」

「そんなことないですよ。これでもぼくはカイさんにも感謝してるんですから」

「感謝してる相手にすることがそれってどうなのさ……」

好きな女性が他の人とイチヤイチャしてる姿を見せられるとか拷問じゃないか。長々と見せられたら舌を噛み切る自信がある。そうならないように頑張らないとな。

とはいってもこれ以上俺に何が出来るんだろう。もっと男としての魅力を上げるとか？でも人によって魅力的だと思う部分は違うし、本人に聞くのも露骨すぎて引かれないだろうか。

今は特に思いつかないし別の話題について話すとしよう。

「そういえばサヤちゃんは魔法統括協会に入ったんだ」

「ええ。旅をしながらお金を稼ぐにはこれが一番手取り早いかなって思っています」

「それなら花の国の花畑ってどうなったか聞いてたりする？」

「うーん、聞いたような聞いてないような……。師匠なら知ってると思いますよ」

あの花畑がどうなったか知りたかったが、魔法統括協会の支部はいろんなところにあるから仕方ない。その師匠とやらに会ったら聞くことにしよう。

「なるほど。ところで魔法統括協会に入ったってことはここに仕事をしに来たってことかい？」

「そうですよ。今回の依頼は――」

「お待ちせしました」

「あつ、イレイナさん！おかえりなさい！」

サヤちゃんが依頼内容について話そうとしたところでイレイナが戻ってきたので話は一先ず置いて王宮に向かうことにした。

「失礼。何用ですか？ここから先は国王様の許可なしでは入ることは出来ません」

王宮の門の前まで来たが、そこにいた門番に止められた。

「あつ！あなたはバトラ殿！あなたは昨日で追放された身です。一体何用でしょうか？」

「ワシは——」

「ごほん。門番さん、この紙に書かれていること、分かりますか？」

バトラさんが門番からの質問に答えようとしたがサヤちゃんが一歩前に出て遮り、先ほどイレイナが持ってきた紙を掲げていた。

その紙を見た門番が本当かどうか怪しんだがサヤちゃんが「ここは正直者の国だから嘘なんてあるはずがないじゃないですか」と言ったことで俺たちは門を潜り抜けることが出来た。

「やー。上手くいきましたね。流石イレイナさんです」

「それはどうも」

「ん？」

城内を歩いている時、イレイナとサヤちゃんの会話に俺は疑問を覚える。

「上手くいった？どういうこと？」

「さっき見せた紙は私が書いた偽物です。私たちの目的は国王様の剣を破壊することです」

イレイナはエイヘミアさんが剣に魔力と声を犠牲にして魔法を掛けたことでこの国では嘘をつけなくなったこと、魔法を使えなくなった彼女が王宮から追放されたこと、そんな彼女が剣を破壊してほしいという依頼をサヤちゃんが受けたことを説明してくれた。

「バトラさん、もしかして俺たちヤバイことしてるのでは……？」

「死刑になるかもしれませんね」

「大丈夫ですよ、私たちが国王様の剣を破壊して嘘は悪いことばかりでないと分かってもえれば許してくれるはずですよ」

「樂觀的な……」

『よく考えてみればわたくしの追放が撤回されるかも怪しいわね』
下手したら俺たちは指名手配犯だ。ここに来る前にしっかりと話を聞いておくべきだったか……。

もう起きてしまったことは仕方ない。ならば俺も剣を破壊することに協力することにしよう。

「分かった、俺も手伝うよ。バトラさんもそれで良いですか？」

「ワシは構いませんよ。国王様には言いたいこともありますので」

「カイがいれば百人力です」

「イレイナさん！ぼくは？」

「あなたの実力を知らないのでなんとも……」

「そんなー」

『わたくしは戦えないから最後尾で隠れるわね』

どや顔しながらスケッチブックを見せてくるエイヘミアさん。何故そこまで自信満々なのだろうか。

「ところでバトラさん、国王様の居場所ってどこだか分かります？」

「恐らく玉座の間でしょう。国王様は暇な時はいつもそこでワシと話をしておりました」

「国王様に暇な時間とかあるんですね。ところで玉座の間はどこですか？」

「こちらです」

バトラさんは俺たちが今通り過ぎようとした扉を指しました。

「何だ騒がしい。一体何事——」

「あ」

玉座の間から出てきたのは昨日演説していた国王。

あつちから来ちゃったかー。

「ばれたなら仕方ありません。国王様、とつとつその剣を手放してください」

イレイナが杖を取り出して国王へと向けて詰め寄り、玉座の間へ押し戻す。

「侵入者だああああああああああああああああつ！」

「そー！」

そう叫ぶ国王はあまりにも隙だらけでむしろ罠なんじゃないかと思っただが、俺は剣を取り出して瞬時に国王に近付き、右手に持っていた剣を叩き切った。

「くそダサイ剣が!」

「やっぱり国王様もそう思ってたんですね……」

「これから私と国王様が一对一の攻防を繰り広げ、最後は私の機転によって勝利を収める流れじゃありませんでしたか? 何私の出番を奪ってくれちゃってるんですか」

破壊された剣からは魔力が一気に放出され、青白い光となってエイヘミアさんの体に吸い込まれていった。イレイナの言っていることはよく分からない。

その光景はなかなか綺麗なもので、写真を撮ってもう少し眺めていたかったのだが国王の声を聞いた兵士たちが駆けつけてきた。

このまま何もしなければ俺たちは捕らえられてしまうだろう。

「カイ、サヤさん。国王様の説得は私たちがやります。あなたたちは時間を稼いでください」

「了解!」

「任せてください!」

俺は自分の剣を戻してから木刀を取り出し、サヤちゃんは杖を構えた。バトラさんとエイヘミアさんはイレイナと一緒に国王の説得をするようだ。

「さて、サヤちゃん。魔女になった君の力を見せて頂戴」

「カイさんこそ、イレイナさんと一緒に旅をしているあなたの实力を見せてくださいよ!」

「極力怪我はさせないようにね」

「当然です」

兵士たちを俺が木刀で気絶させたりサヤちゃんが魔法で吹っ飛ばしたりしていた。

「強いね。流石魔女様ってところかな?」

「カイさんだって強いじゃないですか!。正直舐めてました」

ゴウザン師匠のところで修行した俺と、魔法使いの頂点であるサヤ

ちやんにとつては一国の兵士なんて取るに足りないのである。

お互いの背中を守るようにして戦う俺たちに兵士たちは攻めあぐねていた。

とはいえ兵士の数が多いのでなかなか終わりが見えない。

そろそろ説得を終えてくれないかとイレイナたちの方を見た。

「なら何だというのだ……！我が、我が間違っていたとでも言うのか……？」

「いいえ、間違っておりませんよ。国王様は——ただ、ほんの少し、自分の気持ちに正直すぎただけです」

「なのでこれからはワシたちと一緒に嘘との付き合い方や使い方を学んでいきましょう」

イレイナはこちらの視線に気付き、頷いた。どうやら終わったようだ。



翌日。国王は国民の前で半年もの間、嘘がつけなくさせてしまったことを謝罪した。国民たちの反応は淡白なものだった。きっと国民たちも国王が国を良くしようとして行っていたことなのは演説を聞いて分かっていただろう。

もし嘘がつけないままであったのなら罵詈雑言が飛んできていたのかもしれないが、今は本音を隠して嘘でも国王を励ますことが出来る。今の国王に必要なのは本音よりも嘘の方なのかもしれないな。

「それで今日俺を呼んだのは報酬についてで良いんですかね、バトラさん」

「はい。カイ殿にはお世話になりましたのでとっておきの物を用意させていただきました」

俺はバトラさんに呼び出されて王宮まで赴いていた。イレイナには国の門か外で待ってもらおうことになっている。

「そういえば門番から聞きましたよ。バトラさん、ここに住んでいたんですね。もしかして一昨日つて野宿とかしてたんですか？」

「その通りです。ワシがあの宿屋に訪れたのはその日泊まる宿を探していたからです。と言いましてもお金が足りないことに途中で気付いて野宿することになりましたが」

「言ってくればお金くらい貸しましたよ?」

「カイ殿に頼りない姿は見えたくありませんでしたからね」

「はあ……」

この人俺が思ってるよりお茶目なのだろうか。

「昨日はなかなか宿屋に来ませんでしたけど何してたんですか?」

「昨日はずっとあなたに渡す報酬を探していたので少々遅くなっちゃいました」

「報酬を?」

探すってどこからだ?どこかの店で売ってるものなのだろうか。

「こちらはワシのおすすめの一品でございます」

彼が俺に渡してきたのはどこかで見たことがあるような絵柄の表紙が描かれた本だった。嫌な予感がしてページを捲ってみると、子どもに見せられないような内容の絵が描かれていた。

「……………あの、これは…………?」

「そちらはワシのお気に入りの先生の先生が書いた本でしてね。その先生の名前は『ユーノ』と言います」

「知ってます。俺の師匠もその人の本をよく読んでましたよ……」

「ほう、その方は良い目をしていきますね。是非一緒にユーノ先生の作品について一晩中語り合いたいものです」

まさかこんなところで師匠と同類の人物に会うことになるとは…………。人は見かけによらないんだなあ…………。

「申し訳ありませんがこの本はいりません。あなたが大切に保管しておいてください。保管せずに使用するのかもしれないませんが」

「そうですか…………。しかしワシはもう同じものを三冊持っているのでもいつも通り国王様のベッドの下にでも入れておきます」

「…………いつも国王様のベッドの下にエロ本を入れてるんですか?」

「はい。国王様が隠していたものとは違うものにするのがワシの趣味です」

最低である。人の隠していたエロ本を勝手に見た挙句、自分の好きなものに入れ替えるとか人道に反しているのでは？

「近頃国王様もワシと同じ趣向のものを買うようになりましてな、時間があればユーノ先生の本をじっくりと読んでいます。同士が増えて嬉しい限りです」

「……………そっすか」

「今まで国王様にはワシがやっていることを隠していたのですが、それが原因で国王様に嘘をついたことがあるか質問された時に『はい』と答えてしまったのですよ。ほっほっほ」

「……………」

この人は別に助ける必要なかったのかもしれないな。国王が不憫で仕方がない。

このままでは国王が師匠のようにエロ本に憑りつかれて結婚できなくなるかもしれない。そこは彼に恋してるらしいエイヘミアさんに頑張ってもらうしかないか……………

「はあ……………なんか疲れました。俺はもう行きますね」

「お待ちください」

立ち去ろうとする俺を呼び止めたバトラさんは袋を渡してくる。

中身を見てみると金貨が十枚ほど入っていた。

「報酬はエロ本だったのでは？」

「ほんの冗談ですよ」

「そうですか、ありがとうございます。冗談つてのは国王様の話も入ってますよね？」

「いえ、そちらは本気ですが」

「……………」



王宮を出てから真っ直ぐにイレイナがいる国の外に向かった。そこにはイレイナの他にサヤちゃんもいた。

「あ、カイさんじゃないですか。あれ、なんか疲れています？」

「まあちよつとね……。世の中にはヤバい人もいるんだなーって思っただけだから」

「ところでカイさん、イレイナさんとぼくを見て何か気づきませんか？」
「ん？」

俺はイレイナとサヤちゃんを交互に見る。黒いローブにお揃いの三角帽子にネックレス——ああ、そういうことね。

「お揃いのネックレスをしてるね」

「そうなんですよ！これはぼくがイレイナさんと再会した時のために買ったものなんですよー」

「イレイナが誰かからプレゼントを貰うのは珍しいね」

「たまには良いかなと思っただけです」

「良い物貰ったね」

見た感じそれなりの値段がしそうなネックレスだ。サヤちゃんが本気さを感じる。

「そうだ、カイさんにも渡すものがありました」

「俺に？」

「魔法使いの国にいた時に赤い髪をした男の子から預けられたんです。どぞ」

「エイデンから？」

サヤちゃんがカバンから封筒を取り出した。封を開けると中には一通の手紙が入っていたので読んでみる。

『カイ先生へ』

先生がこの国を去ってから俺は魔法の練習や体を鍛えることが続いています。魔法は他の子たちにも負けないくらいには上達し、体の動かし方も徐々に良くなってきました。

僕が先生と初めて会った時に虐めてきた子たちとも仲良くなることが出来ました。最初は避けられていたのですがこちらから何度も話しかけていると、彼らは泣きながら謝ってきました。どうやら元気がなかった頃の僕を元気づけさせたかったけど、どうすれば良いか分からなかったから罵ったり困んだりしていたそうです。その後自分たちのしたことが悪いことだったと気付いて罪悪感を抱き、僕を避け

ていたそうです。

僕が気にしてないことを伝え、友達になろうと言うと彼らは喜んで友達になってくれました。今はみんな仲良く遊んだりしています。先生のお陰で今の僕があります。なので手紙という形ではありませんが改めてお礼を言わせてもらいます。

ありがとうございました。

俺も将来は先生みたいなカッコいい男性になりたいです。これからも頑張るので応援してください。

・カイ先生の弟子 エイデンより』

そうか、エイデンはあの子たちとも仲良くなれたのか。よかったよかった。

「サヤちゃん、ありがとう。この手紙は俺の宝になるよ」

「そうですか？なら良かったです！ではこれで用が全部済みましたのでぼくはもう行きますねー」

「そっか。久しぶりに会うことが出来て楽しかったよ」

「こちらこそです。カイさん、ぼくは手強いですよ！」

「ははは、そうだね。俺だって勝つための努力を続けるからね」

俺たちが何を言っているのか分からないイレイナは首を傾げる。

「何の話ですか？」

「これはぼくとカイさんの勝負なのでイレイナさんは気にしないでください。あ、でもぼくのことには気になって夜も眠れなくらい気にしてくださいねー」

「別にあなたのことを気にしないので今夜も熟睡します」

「ま、サヤちゃんは俺たちにまた会わない限り勝ち目はないよ」

「はい、なのでまた会いましょう！約束ですよ」

「そうだね、また会おう。俺は約束を破らないよ」

俺はサヤちゃんに頼んで写真を撮らせてもらい、それからほうきで飛んでいく彼女を俺たちは手を振って見送った。

「俺たちも行くか」

「はー」

正直者の国から離れた平原を俺は自分の脚で、イレイナはほうきで駆け抜けていた。先ほどまでは振り返ると海が見えていたのだが、今はもう見えない。少し寂しい気もするが、新しい出会いへのワクワクの方が強い。

「嘘がつけないってのはなかなか楽しかったなー。サヤちゃんも立派な魔女になってたし」

「そうですね。サヤさんに関しては数日間とはいえ私が教えたので当然です」

サヤちゃんは私が育てました、みたいな感じにどや顔をしているイレイナ。サヤちゃんの魔女見習い時代の師匠の方がいろいろ教えているだろうけど、サヤちゃんの様子を見る限りイレイナの存在が大きいのは確かなのであながち間違ってるわけではないだろう。

イレイナは恥ずかしがって本人の前で言うことはないだろうが、サヤちゃんがこの発言を聞けば大喜びだったろう。

「しかし、昨日のカイとサヤさんのコンビネーションは見事でしたね」「まあね」

「……少し羨ましいですね」

「ん？どうしてだい？」

「私はカイに守られることはあっても、カイを守ったことはない気がするので……。いつもあなた一人で相手の攻撃を捌いていて私が守る必要がないんですよ。なんだか頼られてないのではと思ってしまうます」

うーむ、俺としてはイレイナには安全な場所にももらいたいからそれで問題ないと思うんだけどな。まず魔法使いは前に出ないで後ろから魔法を撃つてる方が強いだろう。

「俺はイレイナのこと頼りにしてるからね？イレイナに守ってもらおうほど危険な状況になったことがないだけだよ。まあ今回サヤちゃんに守ってもらったのは俺の問題なんだろうね」

「カイの問題？どういうことですか？」

「……うん、この話はこれで終わりにしようか」

「えー、気になるじゃないですか。教えてください」

「教えてください」

「おーしーえーてーくーだーさーいー」

「いーやーだーよー」

イレイナが俺に近付いてスーツを引っ張ってくるが気にせずの前に進んでいく。

恥ずかしくなってしまうたので言うのをやめてしまったが、俺はイレイナを守るときだけいつもよりも全力を出せている気がするのだ。当然、それ以外の時は全力を出していないというわけではない。

大好きな女性には傷付いて欲しくない、男としてそう思うのは当たり前だ。俺の命を掛けてでもイレイナを守りたいと思ってる。とはいえそれで俺が死んだりしたら優しい彼女は悲しむだろうから危険なことにはなるべく近寄らないようにはしているのだが。もしまだ嘘をつくことが出来ないままだったら俺はこの話をしていたかもしれない。

たまにイレイナに俺の本音を全て伝えたくなる時もあるが、心を強く持って打ち明けないようにしている。正直者の国では話してしまわないように別の本音を用意したり考えないようにしたり、逆に質問したりと大変だった。

少し疲れはしたが、楽しいことも多かった。以前イレイナが魔法を教えた女の子との再会、真っ直ぐな心を持った国王、そんな国王のために魔力と声を代償に魔法を使った魔女、人格者のように見えたが実はエロ本が大好きで主のベッドの下に仕込む執事。そんな彼らとの出会いや最後に貰ったエイデンからの手紙。こういった出会いがあるから旅はやめられない。

さて、次の国に着いたらエイデンに手紙でも書くとするかな。

「いい加減教えてください」

「はいはい、いつか教えてあげるからねー」

「むう……」

今はまだ俺の奥底にある本音を伝えることはないだろう。

だけど旅が終わったら、お互い本音を全部語ろうか。

サボタージュ調査局とお悩み相談

「お悩み相談どうですかー。他人に打ち明けることが出来ないあなたの悩み、今なら無料で聞きますよー」

とある国の道の端の方で『お悩み相談受付中！』と看板を立てて椅子とテーブルを用意して座っている男性がいた。

彼は旅人であり、いつも一緒に旅をしている女性がこの国で休暇を取ると言ってどこかへ行ったので暇つぶしとして他人の悩みを聞きたくなったのだ。

悩みをただ聞くだけではなく、彼が出来る範囲でのアドバイスをしようにとしたのだが、先ほどから来る人々は皆一様に働きたくないと言ってくる。この国はとても平和なのだが国民の頭の中まで平和になっっているようで、働く意欲の薄い者たちばかりであった。

アドバイスをしようにも国民たちは男性の話を一切聞こうとしないので男性は困っていた。

さて、そんな自分の想いを本人に打ち明けることはしないのに他人の悩みを聞こうとしている男性は一体誰か。

そう、俺です。



イレイナは普段と違う格好をしているのだが、俺はいつも通りスーツを着ていた。俺は極力お金を使わないようにしているのと、師匠から貰ったスーツと執事服が良すぎるため他の服を着ることは滅多にない。

この国に来て少し経ってからイレイナに「しばらくこの国でゆつくりしましょう。しばらく一人になりたい気分なのでカイはどこか適当にそこら辺でもぶらぶらしてください。宿も各自で取るようにしましょう」と言われてしまった。

俺と一緒にいるのが嫌なのか聞いてみたところ、「そういうわけじゃないですが、たまには一人にならないとダメ人間になってしま

そうなので……」と言っていた。意味がよく分からない。

まさか俺に会わせたくない恋人でも出来たのか考えたが、初めて来たこの国に知り合いがいるはずないのでその考えは捨てた。全力で。

街で欲しいものがあつたら買えるようにと金貨を十枚くらい渡そうとしたのだが全力で拒否されてしまった。悲しい。

シヨックを受けているうちにイレイナは喫茶店に行ってしまった。急に休暇を与えられても俺は特にやることもなかった。先に宿を取ってから暇つぶしとしてこの国に住んでいる人たちはどんな悩みを持っているか悩み相談という形で聞いてみることにしたのだった。だったのだが……

「働いたら負けかなと思ってる」

「国民全員が働いてたらこの国は完璧な国となってしまうだろう？しかし物事には一つくらい欠点があつた方が美しいと僕は考えていてね。だからあえて働かないでいるのさ」

「お金は欲しいけど働きたくない」

「俺が働かないのはこの国が悪い」

この国には働きたくないと言う人が多いのである。悩み相談という名の働かない宣言ばかりで少しうんざりしていた。というか全員仕事をサボつて来ているようだった。

「えっと……休みの日までは頑張つて働いてみませんか？」

などと休みになつたらもう働かなくても良いのかと聞きたくなるようなアドバイスを彼らにした。したのだが……

「最初から働かない方が良くね？」

「君の言うことには美しさが無いね」

「働かないで貰うお金が欲しい」

「国は国民の面倒を見るのが役目だから俺は働かなくても良いんだ」

そんな戯言を言ってから彼らは立ち去ってしまった。

いや、最初から働く気がない人を働かせるようにアドバイスをするって難しすぎないか？もつとこう、恋の悩みとか将来への悩みとかいろいろあるんじゃないかな。

俺が期待していた悩みとはかけ離れたものばかりで嫌になってきたので次で最後にしようかな……。

「はあ……」

「まだやってるかしら？」

これまでの客のことを思い出して下を向いて溜息を吐いたタイミングで最後の客が来た。

顔を上げて客を見ると、年齢は二十代後半くらいだろうか。スーツを着てメガネを掛けている姿はまさに仕事人って感じであり、これなら期待できそうだ。

「はい、やりますよ」

俺は目の前の女性が悩みを相談しやすいように笑顔を作って返事をする。

「……………」

俺の顔を見た女性は何故か黙ってしまった。

ずっとこのままの状態にいるわけにもいかないので俺は声を掛けることにした。

「あのー、どうかしましたか？」

「……………あなた、結構良い顔してるわね」

「えーっと……………ありがとうございます？」

理由は分からないが急に顔を褒められてしまったので一応感謝をしておく。知らない人に顔を褒められて嬉しくないわけではないが急にどうしたんだろうか。俺の中でこの人への警戒度がひっそりと

上がった。

今の言葉の真意は分からないが、客を立たせたままでは良くないので椅子に座ってもらった。

「それで、あなたは一体どのような悩みを抱えているんですか？」

「私はサボタージユ調査局に勤めているわ」

「サボタージユ調査局……ですか」

「あら、知らないの？」

「俺は旅人です……。まだこの国に来て日が浅いのであまり詳しくないんですよ」

「旅人なら仕方ないわね。それならば私が教えてあげるわ」

そう言って彼女はサボタージユ調査局について教えてくれた。

サボタージユ調査局というのはその名の通りサボタージユに関して調査をする、この国独自の機関らしい。会社や店で働いている人の出勤管理をし、その中で不審なものを探し出し、吊るし上げることを目的としているようだ。

この国ではサボタージユする若者が多く、国が機関を作る必要があるほど問題は深刻そうだ。先ほどまでの客たちは確実にこの機関の対象者だろう。早く全員捕まってほしい。

「なるほど、サボタージユ調査局については分かりました。ありがとうございます。そこで働いていることがあなたの悩みとどんな関係があるんですか？」

「サボタージユ調査局って休みが少ないし、サボタージユ調査局というだけで若い人たちが恐れられるのよ」

「ふむふむ。簡単にまとめると仕事についての悩みってことですか」「そんなところかしらね。ちなみに今は休憩時間だけど今日も仕事はまだまだあるわ」

「大変ですねー。けどそれだけ重要な仕事ってことなんだと思います。あなたたちの働きによってこの国の若者が働くことの大切さに気付いたならば、きっと若者たちはあなたたちのことを尊敬するようになるでしょう。今は国の方に休みを増やせないか聞いてみませんか？」

今の俺に出来るアドバイス——アドバイスと言えるのか怪しいが——はこんなものだろうか。

休みが少ないことについてはあまり語れないが、若者から恐れられていることについてはあなたがやっているのは立派な仕事であり、いつかそれが報われる可能性があるってことを提示してあげれば良いのではないかと俺は考えた。ほんの気休め程度ではあるけど、他人からそう言われるってのは案外効くものだ。

「少しは気が楽になったわ。ありがとう」

「こちらこそ興味深い話をありがとうございました」

「……あなた、私に興味はあるかしら？」

ん？いきなり自分のことが気になるかどうか聞いてくるってどういうことだ？

流石に会って一時間も経ってないそんなことは聞くわけないよな……。ということはここで言う『私』とは『サボタージュ調査局の局長』なのだろう。

なるほど、それなら興味があるな。他の国にはない機関の仕事を見るのは良い機会だ。

「まあ、ありますね。あなたのことを近くで見たいですね。一緒にいても良いですか？あ、俺はカイって言います」

「そんなに！ま、まあ良いわよ……。私はアメリカよ、よろしくね。……よしっ」

メガネをクイっとしてから俺が同行することを許可してくれるアメリカさん。後半の部分は聞き取れなかったが、その声はなんだか嬉しそうだ。

椅子とテーブルと看板を片付けた俺はアメリカさんについて行き、どのような仕事が行われるか見学させてもらうことにした。

アメリカさんはそれなりに上の立場なのか、サボタージュ調査局の局長たちから頭を下げて挨拶されていた。話を聞くところ彼女は局長になってからずっと真面目に働き続けて成果を出しており、他の局長たちの憧れの存在らしい。

そんな見た目のイメージと違わない彼女の仕事ぶりは凄まじいも

のだった。

「離せ！俺が一体何をしたって言うんだ!!」

「何もしていないからこうなっているのよ。後でお店の方から処罰が下されるので楽しみにしていることね」

「やだー！会社やめたーい」

「それなら何故辞表を出さないのかしら。会社にまだいたいならしっかり働きなさい。自分の意見をはっきりと示せない男性は誰からも好かれないわよ」

「ちよつと今日は体調が……」

「今日で一週間の無断欠勤よ。本当に体調が悪いのなら病院に行つて調べてもらうべきよ。あなたたち、この女性を病院に連れて行ってあげなさい！」

こんな感じでアメリカさんはサボタージユをする人たちの言い訳をバツサリと切り捨てて他の局員たちに連れて行かせていた。

最後に捕らえられた男性が「ケツ！そんなだから男が出来ないんだよババア！」などと言っていたが、アメリカさんは涼しげな顔で聞き流していた。

男性は局員たちに連れ去られ、俺とアメリカさんだけになった。

外も暗くなり始めたので俺はお礼を言つて別れてからどこかのレストランで食事をしようかと思ひアメリカさんの方を見たが、彼女の顔には元気がなかった。

「そんな顔してどうしたんですか？」

「カイ君……。今年で二十九になる私ってババアかしら？」

どうやらアメリカさんは先ほどの男性が最後に言い放つた一言を気にしているようだった。きつと真面目な彼女は男性や他の局員たちにそのことを出さないように取り繕いつていたのだろう。

「あんな言葉気にするだけ無駄です。アメリカさんは素敵な女性だと思えますよ」

「……カイ君、まだ時間はあるかしら」

「ん？ありますよ」

「良かったらうちでご飯を食べない？」

それなら無駄に食費は掛からないだろうから嬉しい誘いだ。けど急に家を訪れたらアメリカさんの家族に迷惑が掛かってしまうのではないだろうか。

「嬉しい誘いではありませんけど家族の方に迷惑を掛けてしまうんじゃないですかね？」

「大丈夫よ、一人暮らしだから」

「うーん、それならお言葉に甘えさせてもらいましょうかね。ただし、一つだけ良いですか？」

「な、何かしら……？」

「アメリカさんは仕事で疲れてるでしょうから俺が料理を作らせてもらいますよ」

「……私が作ろうと思ってたんだけど……良いわよ」

「よし、じゃあ決まりですね。それじゃあよろしくお願いします」

無事に元気を取り戻したアメリカさんは俺を家まで連れて行ってくれた。今まで真面目に働いてきた彼女はそれなりに裕福であるらしく、隣の家よりも少し大きい家に一人で住んでいるようだ。

家の上がらせてもらった俺はキッチンでどんな食材があるか確認し、クリームパスタを作ることにした。

食材を確認している間に楽な恰好に着替えたアメリカさんには椅子に座って待っててもらい、俺は料理をし始める。

何もせずに待ち続けるのは暇だからか、彼女は俺に話しかけてきた。

「良い匂いね。カイ君は料理が得意なのかしら？」

「得意な方だと思ってますよ。レストランでバイトしてたこともありませんからね」

「それは楽しみね」

それから雑談をしながらクリームパスタを完成させ、アメリカさんが待っているテーブルに運んだ。

きのこほうれん草が入ったシンプルなクリームパスタではある

が、美味しく作れた自信はある。

「わあ……」

「お待たせしました。では、いただきます——あ、飲み物」

そう言っただけで食べ始めようとしたが、飲み物を用意するのを忘れていたことに気付いた。

俺は立ち上がって取りに行こうとしたが、アメリカさんが止めた。

「私が持ってくるわよ。カイ君はワイン飲む？」

「お酒は飲めないのだから水でお願いします」

「分かったわ」

アメリカさんは立ち上がってキッチンに行き、ワインが入ったグラスと水が入ったコップを持ってきて水の方を渡してくれた。

「はいどうぞ」

「ありがとうございます」

飲み物も用意できたので今度こそクリームパスタを食べ始める。
うん、美味しい。

「美味しい！」

「喜んでもらえたなら俺も嬉しいです」

余程気に入ったのか、アメリカさんはパスタをどんどん口に運んでいく。それに合わせてワインの飲むスピードも上がっていく。

パスタもワインも後一口というところで彼女の手は止まり、こちらを見てくる。

「——はあ……。もう一つだけ悩み事を相談しても良いかしら？」

「今ですか。まあ良いですよ」

「ありがとう。本当はあの時相談しようとしたけど恥ずかしくて出来なかったのだけれど、私には恋人がいないの。さっきも言ったけど私はもう今年で二十九よ」

「はい」

アルコールが入ったおかげでその恥ずかしいことも言えるようで、アメリカさんの口からは彼女がどのような人生を送ってきたのかが語られた。

「私は小さい頃から両親に良い子でいなさいって言われててね。だから

「私はずっと真面目に良い子であろうとし続けたわ。学生の頃は周りの子が遊んでても勉強ばかりしていたから碌に友人も出来なかったわ」

「……………」

「大人になってから故郷を出てこの国で働き始めたわ、これまで通り真面目にね。サボタージュ調査局で真面目に働いていた私は周囲から賞賛されることは多かった。けれど私と付き合いたいという男性は一人もいなかったの。新聞社が勝手にやったアンケートで私は結婚したくない女性ナンバーワンだったわ。理由は分かるかしら？」

「……………恐れられているから、ですか」

「確証はないのだが、彼女が最初に悩み相談をしたときの言葉を思い出せば答えは分かった。」

「俺の答えは当たっていたようで、アメリカさんは頷いた。」

「正解。この国の若い男性は真面目に働いている私の姿を見て怖い女性だと思ってしまうらしいのよ。私だって一人の女性だから誰かと恋をしたいし、幸せな家庭を持ちたいの。最近なんて故郷にいる両親から孫の顔が見たいと手紙を送られる始末。もう限界なのよ、私。それでねカイ君、あなたが良かったらだけど私と付き合ってくれないかしら」

「それは……………俺があなただけのことを恐れたりせずに素晴らしい女性だと言ったからですか？」

「そうよ。あなたが私に興味あるって言うってくれた時はとても嬉しかったわ。年甲斐もなくこっさりガッツポーズをしたくらいよ。けれどあなたは私を見てるんじゃないやなくてサボタージュ調査局の仕事ばかり見ていたから、本当は私自体にはさほど興味がないことなんですよに分かったわ」

「俺はとんでもない勘違いをしていたようだ。どうやらアメリカさんは本当に自分という女性に興味があるか聞いていたのだ。」

「言葉の意味をしっかりと聞かなかった俺が悪い。俺のせいで彼女を悲しませてしまった。」

「別に攻めてるわけじゃないからそんな顔しないで。本当はね、仕事

が終わった後私のことを素敵だと言ってくれたあなたに振り向いてもらうために私が作った料理に惚れ薬を入れて既成事実でも作ろうかと思ってたの。けれど優しいあなたは私が疲れてるだろうからと逆に料理を振舞ってくれたわ。あなたの作ってくれたパスタを食べるとそんな汚い手を使おうとしている私が嫌になっちゃった。だからもうこうして全てを打ち明けることにしたのよ。それで、私と付き合う気はないかしら……?」

そう語る彼女の顔は悲しげで、今にも泣きだしてしまいそうだ。その原因は自己嫌悪からだろうか、それとも俺がなんて答えるのか不安だからか。

約三十年間真面目に生きてきた彼女に俺はこれから酷いことを言うだろう。勘違いさせたくせに最低な男だ。

「すみません、俺はあなたと付き合う気はありません」

「そう……よね。こんな醜い女、嫌に決まってるわ」

目に見えて落ち込むアメリカさん。このまま放っておくと彼女はどこかへ消えてしまいそうな雰囲気を出している。

「けど、俺はあなたが素敵な女性だと思っているのは変わっていませんよ」

「それはどういう——」

「アメリカさん、あなたは素敵で立派な女性です。それは俺が保証します。今のあなたは疲れているだけです。だから一度ゆっくり休みましょう。さっきは休みを増やせないか国に相談しましょうなんて言いましたが取り消します。一旦この国から離れて故郷にいる両親に本音をぶつけましょう。あなたたちは親子なんですから思いは通じるはずですよ」

「でも仕事が——」

「しばらくサボタージュ調査局なんてサボタージュしちやいましょう。今まで真面目に生きてきた分、不真面目になってしまいましたよ。文句を言ってくる人もいるかもしれませんが。けどそんな人を気にする必要なんかありません。あなたより私の方が頑張ってきたんだと言いつ返しやりましょう」

「……………」

「休みすぎじゃないかと思うくらい休んでからまた仕事をしませんか。たまにはずる休みもしましょう。周囲の人たちからの賞賛や給料は減るかもしれませんが、心が病んでしまうのよりはマシです」

「けれど、それだと私のことを好きになつてくれる男性が——」

「あなたは素敵な女性です。それは絶対に代わりません。だからあなたの魅力に気付かない男性なんてこつちから願ひ下げだと思ひましょう。寧ろ真面目な女性がたまに不真面目になるというギャップが堪らないつて男性がいるかもしれませんよ」

「私、不真面目になつても良いの？」

「良いんですよ。俺だつてたまにふざけたりするんですから」

「そつか……そうよね……たまには休んでも良いわよね……」

そう言つて最後の一口の Pasta とワインを飲み込んでからアメリカさんの眼から少しづつ涙が流れ始める。勢いが強いわけではないが、それは長い時間流れ続けた。きつと今まで我慢してきた分だろう。俺は何か言うわけでもなく、ただ黙つて彼女のことを見ていた。アメリカさんは泣き止んだのと同時に疲れからか椅子に座つたまま眠つてしまつた。

俺は物音を立てないように皿やグラスを片付けてからアメリカさんの寝室と思われる場所から毛布を持ってきて彼女に掛けてあげてから家を出ていった。

家の鍵は開けるくんで閉めておいた。

翌日。俺は昨日と同じ場所で同じようにお悩み相談室を開いていた。

今日はどんな悩みが聞けるだろうか。下を向きながらそんなことを考えてると本日最初のお客様がやってきた。

「まだやつてるかしら？」

顔を上げると、そこにいたのはスーツではなくカジュアルな私服を

着ている女性だった。その顔はとても良い笑顔だった

だから俺も笑顔で答える。

「はい、やっていますよ」

・○

私は大通りに面した喫茶店のテラス席でカフェオレを飲みながら本を読んでいました。

しばらくカイと離れて生活をしていましたが、彼がいない日常というのは凄く味気ないものでした。

サボタージュ調査局なんてものについて教えてもらったりしましたが、すぐに飽きてしまいました。気性が荒い男性が多くてうんざりしたというのがありますが。

正面の席に座る青年を見ます。

「ん？どうしたんだい？」

「いえ、何でもありません」

目の前の青年——カイはホットミルクを飲みながら新聞を読んでいます。彼は食べ物の好き嫌いはありませんが、コーヒーなどの苦い飲み物は苦手です。私が今飲んでいるカフェオレでも苦いと言っています。なんだか子どもっぽくて可愛らしいですね。

「おや、『サボタージュ調査局、活動停止』だって。なにになに……。男女問わず、一部の局員が仕事をサボり始めたため活動停止を余儀なくされた。男性局員は『可憐な女の子にたぶらかされた。後悔はしていない』、女性局員は『私は私の幸せに会いに行く。私の魅力に気付けなかったあなたたちが悪い』と語ったそうらしい。イレイナは何か知ってるかい？」

「知りませんねー」

白を切る私にカイは何か納得したような表情で頷いた。

「まあそうか、可憐な女の子だもんねー」

「むっ、もしや私が可憐ではないとでも言うんですか？」

私は読んでいた本を置き、カイから新聞を取り上げて抗議します。

可憐で完璧で美しい魔女である私のどこに文句があるって言うんですか。

「いや、イレイナは可憐なのは知ってるよ。だけど俺だったら可憐だけでは終わらせなかつたね。だから違うのかなーって思っただけさ」
「……………なるほど」

それなら仕方ないですね。彼が私の魅力を分かっているのなら言うことはありません。

特に理由はありませんが本を読むふりをして顔を隠します。特に理由はありませんが。

「それにしてもサボタージュ調査局の女性たちはちゃんと休むことを選んだようで安心したよ」

「何かしたんですか」

「悩み相談室を開いてたらとある女性に『私と同じような境遇の子のことも助けてほしい』って人物の名前が書かれた紙を渡されて頼まれたんだよ。それであることを条件にして受けることにしたのさ」

「その条件とは？」

私は本を少し下げて彼のことを見ます。

まさか私という幼馴染がしながら女性にいかがわしいことを強要したのでは……。いや、彼がそういうことをするような人間じゃないのは分かっていますが。

「いつか再び会うことが出来たのなら、さらに素敵になったあなたの写真を撮らせてください。それが依頼の報酬でもあります。って条件だね」

「ナンパですか？」

彼のことを睨みつけてやります。

「いやいや、ナンパなんかじゃないよ。その女性に悩み相談をされてアドバイスをした翌日に依頼されたっただけ。写真を撮らせてほしいって言ったのも幸せになってほしいってことを遠回しに伝えただけだよ」

「ふーん、本当にアドバイスだけだったんですか」

「あー、あとはサボタージュ調査局の仕事をさせて貰ったり料理を

作ったくらいかな」

「その女性のことを甘やかしたんですか？」

「甘やかしてはないと思うよ。ただ、告白みたいなのはされたけど断ったよ」

「ふっ、それなら良いですよ」

カイは甘やかしてないなどと言っていますますがきつとその女性のことを甘やかしたんでしょね。彼は困っている人がいれば力になろうとしますし、悩んでる人や落ち込んでる人のことを肯定しまくりますからね。

優しくしていろんなことが出来てそれなりに顔も良い彼のが欲しいと思うってしまうのは無理ありません。

ただ問題があるとすれば、彼は人を甘やかしまくろうとするのでそれに甘え続けてしまったらダメ人間になってしまいます。生粋のダメ人間製造機です。

今回カイと離れて休暇を取ることにしたのはそのことが原因だったりします。このままだとカイに依存してしまうと考えた私は、しばらく別行動しようと思ったのです。

初日に大金を渡されそうになった時は危なかったですね。あと少しでダメ人間の仲間入りをするところでした。

「しかし勢いに任せてしまったけどこの国には悪いことしちゃったかな。サボタージュ調査局は重要な機関だったはずだし」

「大丈夫ですよ。そんな機関が無いとまともにやっていけない国ならとつくに滅んでると思います」

「そんなもののかねー」

「そんなものです」

私たちは旅人ですから訪れた国の未来のことなんて考えるだけ時間の無駄です。その国のことはその国の人たちに任せてしまえば良いんです。

何かやらかしたとしても罪に問われなければ問題ありません。カイはそういうところを少し考えてしまうようです。

責任感が少し強い彼のことは私が支えてあげないといけませんね。

「そっだイレイナ、パンあげる」

「ありがとうございます」

やはりカイの作るパンは最高ですね。これがないと生きていけない気がしません。

あれ、もしかして私、カイに依存しちゃってます？

.....。

まあいいや。

グールが怖いわけじゃない

『この国は死人によって占拠された。入るべからず』と国を囲う高い壁には大きな文字で書かれていた。

「……へえ」

「………やっぱりやめない?」

俺たちは近隣の国では有名な国の門の前まで来ていた。

この国はグールという魔物の作り物を使って観光客を楽しませているらしく、この辺りの国の人たちが一番おすすめてきた国だった。

グールとは簡単に説明すると動く死体のことであり、噛まれたりすれば自分もグールになってしまう恐ろしい魔物だ。

多分いきなり驚かせてきたり追いかけてきたりするんだろうな……。

「何ですか?もしかして怖いんですか?」

「………」

乗り気ではない俺をイレイナは面白そうにからかってくる。

怖くないよ、本当だよ。あれ、声に出せてない……。

「まさかカイにこんな弱点があったとは……。ふふふ、楽しくなってきましたね」

「俺は全然楽しくないよ……」

はあ、とため息を零す俺をよそにイレイナは閉ざされたままの門の周りをうろうろとしていた。

イレイナのことを無理やり抱えて全力で別の国に走ったらダメかな?

「カイー、入口がありましたよー。早く入りましょーう」

どうやら入口を見つけてしまったらしいイレイナが声を掛けてくる。どうやら彼女の中ではこの国に入ることは確定事項らしい。

嫌々彼女のところまで行くと、門の横に小さな扉がついていた。しかも張り紙付きでだ。

『ここは既に死人によって乗っ取られてしまった。どうか入らないでほしい』

『しかし、我々のほかにもまだ生きている者がいるかもしれない。勇気のある強き者がいるのであれば、この国に入り、中にいる人々を助け出してほしい』

「ほほー」

「ええ……」

俺のやる気はもうゼロだ。

「危険かもしれないから中に入るのはやめない？」

「何言ってるんですか、私たちは今試されているんですよ。私は当然入りますよ、勇気のある強き者なので」

イレイナはそう言って躊躇することなく扉を開いて中に入ってしまった。

ええ……。



扉をくぐり抜けた先には平和な街……とは正反対のボロボロになった街の姿があった。建物はほとんどが壊れているし、道には瓦礫が積み重なったりしていても人が住める場所には見えない。

「……ほほー」

「イレイナ、俺から離れないでね」

「おや、おやおや。カイは甘えん坊さんですねー。カイこそ私から目を離さないでくださいね」

「……………」

甘えん坊さんの俺は特に何か言うわけでもなくほうきで空を飛ぶイレイナの後をついて行く。

まさか本当にこの国全体がアトラクションとしてこんな姿になっているのだろうか。それならこの国の人はどこで買い物とかしてるんだろう。もしかして地下に街があるとか？

そんなことを考えていると何かが道の端から飛び出してイレイナ

のほうきと正面衝突し、イレイナがほうきから投げ出された。

『ああああ……！』

「わあっ！」

「イレイナー！」

このままではイレイナが陥没した道の上にある水溜りに落ちてしまうので俺は跳んで彼女のことを空中で抱きかかえた。

「大丈夫かい？」

「カイのお陰で私は大丈夫ですけど……」

イレイナが視線を向けた先には水溜りの上で転がるほうき——と柄の先端に人間らしきものの姿。

男性のこめかみをイレイナのほうきが貫いていた。その男性は何故か両手に大きな剣を持っている上に上半身裸でマツチヨとおかしな恰好をして水溜りの上にうつ伏せになって倒れていた。

……もしかして、殺った？ いやでもそこまで速度は出てなかったよ
うな……。

俺はイレイナを下ろしてから男性に近付いて声を掛けてみた。

「あのー、その……」

『うー……』

どうやら目の前の男性は人間じゃなくてグールだったようだ。顔は腐っていたし、片眼が空洞で口からはよだれを垂らしていた。

これならお金で解決できるよな……？

「大丈夫ですか？」

『あー』

「大丈夫みたいですね。じゃあ先を急ぎましょう」

人じゃなくてグールだったことに安心したイレイナはグールの肩を踏みつけてほうきを抜こうとしたが、なかなか抜けない。

「カイ、お願いします」

「………え、これに触らないとダメ？」

「ダメです」

「………」

『ああ……』

結局俺はイレイナに代わってほうきを抜くことにした。今の俺は絶対嫌そうな顔してるだろう。

少し力を入れてほうきを引っ張ると、すぽーんと抜けてくれた。

『……………うあー』

「うわ……………」

「抜けてませんね……………」

ほうきの柄の先端にはグールの頭が刺さったままだった。

足元を見ると、頭を失ったグールの体がビクビクと跳ねていた。グロイ。

「……………カイ」

「嫌だよ」

いくらイレイナの頼みといえどこればかりはなあ……………。いくら作り物だとしても触りたくない。

とりあえず誰か見つけて謝ることに決めた俺たちは空を飛び始めた。

イレイナはほうきに刺さったままのグールの口に石を詰め込んでから布で包んでいた。

「いつもより近くないですか?」

「こんなものでしょ——あつ、急にスピード上げないで」



結果的に言うと、人を見つけることは出来た。

何故かグールに見向きもされないまま俺たちが国の中を彷徨っていると、大きな家の窓から二人の人が上空にいる俺たちに手を振って助けを求めてきたのだ。

その家の庭には大量のグールがいたので窓から入らせてもらったのだが、助けを求めてきた二人は物騒な恰好をしていた。

一人はアナさんという、くしゃくしゃの茶色の髪をしたメガネの女性で、大きな剣を腰に据えていた。

もう一人はアンソニーさんという、甲冑を着た男性で、しばらく風

呂に入っていないのか凄く臭かった。後で鼻栓でもしようかと思うくらいには。

軽く自己紹介をした後、イレイナが遠回しにグールのことを聞いていたが、どうやら俺たちが作り物だと思っていたグールは本物だったらしい。

外にいるグールが全部本物ということはつまり、この国を囲う壁や張り紙に書いてあることは本当だったということだ。なんてこった……。

イレイナがほうきを投げ捨てたので俺は地面に落ちる前に回収しといた。自分の相棒に何してるんだ。

この国で何があったのか武装した二人に聞いてみたところ、グールが蔓延りしたのは一週間前のことらしい。

少し前にこの国を訪れて、作り物のグールを見たところ魔法使いが本物のグールを使った方が良いと言って、後日本当に本物のグールを連れてきた。本物のグールを見た民衆は大喜びし、導入することにした。

その時はグールの歯を全て抜いていたから感染などしなれと思っ
ていたようだが無事に(?) 感染してしまい、現在の惨状が起きた。

何というか、いろんな意味で酷い話である。誰かが故意に感染を広げたのなら素直に同情できたんだけどなあ……。

生き残っているのはアナさんとアンソニーさんだけかと思っただ
他にもいるらしく、アナさんに言われるがまま窓の外を見てみると街
のいたるところに助けを求める看板が掲げられていた。

救助に行きたいが、この国にたくさんいるグールを何とかしない限
りはそれも難しいだろう。だがアナさんたちはこの国が滅びる前は
グールの研究をしていたらしく、秘策があるそうだ。

「まあ、建物の真下を埋め尽くすくらいのサンプルがあればな、グール
対策の代物なんて簡単に作り出すことが出来るんだよ。つーわけで、
こんなものを作ってみた」

そう言っつて一つの小瓶を俺たちに向かって掲げてきた。なんか赤
黒い液体が入っつていて嫌な予感しかないんだけど。

「……なんですかそれ」

「こいつはグール避けの香水さ。あいつらは共食いを一切しない。だから、仲間と同じような匂いを発することが出来れば、恐らくグールを避けることは可能だろうと考えた。さほど鼻も良くないからな、嗅ぎ分けられないだろう。その思考の結果生み出されたのが、この香水だ。これを使えば匂いがある間はグールに襲われることはなくなる。完璧だ」

グールの匂い……絶対臭い、絶対完璧じゃない。

「……ほう。それは凄い」

「つまり一攫千金のチャンスだ。……ふふふ」

「いや、誰に売るんですか。もう滅びてますよこの国」

こういう人たちが多かつたから滅んだんじゃないのか？

しかしこの臭そうな香水があればアナさんたちだけでも救助に行けるのではないかと思ったのだが、本物のグールを連れてきた魔法使いの男性のグールが強い上に香水が効かないから彼女たちだけでは無理らしい。

アナさんが言うには、そのグールは筋骨隆々で上半身裸で両手に剣を持つているらしい。

どこかで見た格好だ。

「……ぬ？カイ、布を取ってください」

「はいはい……」

「もしかして、魔法使いの男って、こんな顔をしてました？」

『ぬあー……』

俺はイレイナのほうきの先端に巻かれてた布を取ってグールの頭をアナさんたちに見せた。

二人はハイタッチをしていた。

「おまえたち最高だな」

「よく言われます」

俺はそんなに言われた覚えはない。

なっていた。

「イレイナごめん、少しだけ別行動するね」

「いくら香水の効果があるとはいえ一人で行動するのは危ないんじゃないですか?」

「大丈夫、基本的に空を跳ぶようにするし俺はグールに後れを取るつもりはないよ」

「……無事に帰って来てくださいね」

俺はイレイナたちから一人離れ、グールが来ることが出来ない家の屋根に座る。

暴徒と化したアナさんたちを見ていて少しだけ気分が悪くなってしまった。救助していくうちに傲慢になってしまい、ああいう態度になってしまうのは分かるのだがグールだって元々は人間だったのだ。

俺だって自分やイレイナの身に危険が迫ったのなら躊躇なく剣を抜くことが出来るが、人の形をしたものに刃を向ける気にはあまりない。

グールが一人でも残っていればまた感染が広がってしまう可能性があるのも分かっている。それでも、まともな判断力がない人たちが刃を振るう姿は俺的には好ましくない。

言葉や内心どう思っているかを聞かないふりして、行動だけを見れば彼女たちの行っていることは正しいだろう。それを受け入れられていない俺はまだ未熟だということでもある。

これからも旅をしていく中で同じようなことがあるかもしれない。だから徐々に慣れていくしかないのだろう。

……少しだけ気持ちの整理が出来たことだしそろそろ戻るとするかな。

「ワンワンー」

「ん?」

犬の鳴き声が聞こえたから不思議に思っただを覗いてみると、どうやら一匹の犬が三人のグールに追い詰められていた。

犬はまだどこか噛まれたりしたわけではなさそうで、必死にグールを威嚇している。

このまま放っておけば無残なことになるのは目に見えてるので俺は下に降りて犬の前に立つ。

犬は俺のことを敵ではないと判断してくれたようで、邪魔にならないよう後ろに下がってくれた。

「さて、少しだけ待っててね」

「ワン！」

グールに直接触れたり武器で殴ったりしたくない俺は杖を取り出して魔力の塊を撃ちだす。

まともに思考できないグールたちは避けようとすることなく魔力の塊によって吹き飛ばされる。

俺は辺りを見回し、他にグールはいないことを確認した。

「よし、もう安全だよ。えーっと、君の名前は……マドンナちゃんね」

「ワン！」

首についていたタグに書いてある名前を言うと、元気よく返事をしてくれた。

たしかマドンナちゃんを探している人がいたよな……。ならば連れて行ってあげるのが良いだろう。まあこんなところで置いていくわけにもいかないから探している人がいなくても連れて行くんだけど。

「マドンナちゃん、行くよ」

「ワン……」

マドンナちゃんを持ち上げると少しだけ元気がなくなっただけ気がする。ああ……臭いか……。少しだけ我慢してほしい。俺だって鼻栓してても辛いもの……。

指輪に魔力を込めてイレイナの位置を探してみると、どうやら国の門の前にいるようだった。

マドンナちゃんを抱えたまま向かうと、そこにはイレイナと生存者である数十人が集まっていた。

「ただいま」

「おかえりなさい。おや、その犬は？」

「さつきグールに襲われそうになっているのを見つけて助けたんだ。この子を探してたおばさんはいまどこかな？」

「あそこです。マドンナちゃんを見つけてないからこの国を出ていかないって言ってましたよ」

イレイナが指差した先にいたのは先ほどマドンナちゃんを探していたお金持ちみたいな雰囲気があるおばさんだ。

俺は彼女に近付いて声を掛ける。

「あの——」

「あら私のマドンナちゃあああん！会いたかったわ！もしかしてあなたが見つけてくれたの？ありがとうね！」

「クーン……」

彼女は俺の腕の中にいるマドンナちゃんを見つけると奪い取るかのように持って行った。心なしかマドンナちゃんが寂しそうに俺の方を見てくる。旅人の俺に懐かれても困るんだけど……。

「え、ええ。どういたしまして。これからは目を離さないてくださいね。まだ外は危険なので」

「分かったわ！」

一応念は押しておいたからもう大丈夫だろう。多分。

どうやら生存者は全員ここに残って国を復興させることに決めたようで、この国を出ていくのは俺とイレイナだけだった。

イレイナはアナさんにほうきについていたグールの頭を取ってもらっていた。よく触れるな……。

今回、イレイナのほうきは水溜りの上に落ちたりグールの頭が刺さったりと酷い目に会ったな。次の国に着いたらメンテナンスでもしておくか。

「結局、この国から出ていくのはあんたたちだけか」

「俺たちは旅人ですからね。いつまでも同じ国にいるわけにはいきません」

「それなら少しの間だけ残っても良いんじゃないか？」

「そうになったら出ていくタイミングを見失ってしまいそうですね」

一度手を貸したら最後まで面倒を見たくなくなってしまおうから今のうちに国を出ていく——というのは建前で、本音を言うとグールが蔓延るこの国に長居したくなかったからだ。

グールに噛まれればグールになってしまおうし、グール避けの香水だつてこれからも効くかどうか分かったものではない。ハプニングが起きて再び感染が広がってしまうかもしれない。

そんな危険性があるところに長時間イレイナを滞在させたくない。「まあたしかにな。よかつたらさ、一ヶ月後くらいにまた来てくれよ。きつとあたしたちの国は元通り——いや、今まで以上に良い国になつてはるはずだ」

「……………まあ、気が向いたら、また来るかもしれない」

どう答えようか考えていたら、隣にいたイレイナが先に答えていた。

え、また来るの？復興してたら絶対に怖い思いをすることになるんじゃないか？いやでも気が向いたらだからもしかしたら来ない可能性もあるな。

イレイナの方をちらりと見ると、彼女は俺に微笑んできた。俺が怖がつてるのを察したらしい。

なるほど、俺の余命は一ヶ月か。遺書でも書いておこうかな……………。



一ヶ月後。

俺たちは再びグールが蔓延っていた国に訪れていた。

前回と同じように国の中に入ってみると、これまた前回と同じような国の光景が広がっていた。

「滅びたままですね」

「……………」

もしかや何か問題が起きてこの国の人たちは全滅してしまったのだろうか。もしそうだとしたら悲しい現実を見てしまう前にこの国を出ていった方が良いのかもしれないな。

悲観的に考えていた俺の肩に誰かが手を置いた。

誰かと思つて振り返つてみると――

『ああー……』

「おおおうっ?!?!」

「え、ちよつ――」

そこにはグールがいた。

突然のグールの出現により驚いた俺は声にならない悲鳴を上げ、イレイナを抱えてから全力で上に跳んだ。

グールが絶対に来れない高さまで来たら、魔法で空中に足場を出して息を整える。

「はあ……はあ……。イレイナ、大丈夫?」

「急に抱えてきたので驚きましたが……。うわ、心臓の音が凄い……」
俺の心臓はもうドクンドクンとフル活動していた。危ない、あと少しで止まるところだった……。

「おや……。カイ、下を見てください」

「ん?」

イレイナに言われた通りに下を見ると、誰かが俺たちに手を振っているのが見えた。

手を振っているということはグールではないだろう。なので俺はほうきを取り出してゆつくりと下に降り、イレイナのことでも下ろした。

「二ヶ月ぶりだな」

俺たちに手を振っていたのはくしゃくしゃの茶色の髪をしたメガネの女性――アナさんだった。あの時持っていた剣を今は持っていなかったが、隣には先ほどのグールが立っていた。

「お久しぶりです。アナさん」

「いやあ、少し挨拶しただけなのに驚いて凄い高くまで跳ぶんだから驚いたよ」

「……………もしかしてそのグールってアナさんが?」

「ああ、あたしたちが新しく作ったグールだ。噛まれても感染はしないから安心してくれ」

それからアナさんはグールの手や首を動かしながら俺たちが出ていった後の話をしてくれた。

あの後、特に問題が起きることなくグールを全て片付けることが出来たので次に建物を直そうとしたが、最終的に面倒だしこのままにしておいた方が雰囲気があつて良いという意見にまとまり、一部の区画だけは人が住めるように直して後はそのまま利用することになったらしい。

アナさんたちはこの国を再び観光地にするべくこれまでのよりもさらに本物に近いグールの偽物を作り、国のいろんな場所に配置していつでも観光客を迎える準備をしていたところで俺たちが来たので挨拶がてら驚かすことにしたということだ。

グールを作るのに時間を掛けてしまったので復興はまだ終わっていないが、一ヶ月前に言った通りに以前よりも良い国になりそうだと嬉しそうに語っていた。眼を見た感じ、お金のことばかり考えているようだったが。

「無事に復興できそうなのは良いんですけど俺はそういうのは苦手です……」

「男のくせに情けないこと言うなよ。グールがそんなに恐ろしいか？」

「いえ……グールじゃなくて急に驚かしてくるのがダメです……暗闇の中でいきなり目の前に現れるとかいつの間にか後ろに立っていたとか……敵意とか殺気とかなら気付けるんですけどね……」

ただの化け物とかなら何も怖くないんだけど、俺の意識の外から驚かしてくるのだけが昔から無理なんだ。この前の本物のグールはうめき声を出しながら歩いていたらまだ大丈夫だったんだが今回の急に来たから驚いてしまった。本当に心臓に悪いからやめてほしい。

それから俺たちはアナさんに案内してもらい、以前助けた人たちの元気な姿を見ることが出来た。マドンナちゃんと再会した時なんて、ものすごくしつぽを振って俺に跳びかかってきて飼い主のおばさんに少し嫉妬された。他にもグール避けの香水をまだ使っている人や、

懲りずにエロ本を集めたり壺を売ろうとしてくる人たちなんかとも一言二言話をしてから写真を撮らせてもらった。なるべくグールは写らないように工夫するのは大変だった。

臭い以外は誰もグールになっていないようで安心した俺たちは、またしてもその日のうちに国を出た。国を出る際に、イレイナはアナさんから何かを貰っていたが俺には見せてくれなかった。

「またいつか訪れるの良いかもしれませんね」

「俺は別に……」

「さっきのカイは面白かったですね。まさか変な声を上げて上空に逃げるとは」

「……………」

人間誰しも怖いもの一つや二つはあるさ……。旅人とはいえ普通に生きてたら意識の外から驚かされるというのは滅多にないはずだ。だから克服とかする必要はないしする気もない。克服するためには何回も驚かされたりしたら今度こそ死んでしまう自信がある。

「よく一人だけで逃げたりしないで私のことも連れて行きましたね。私だったらカイのことを置いて行く自信がありますよ」

「物事の優先順位があるからね。どんな時でもそれを忘れるつもりはないよ」

「ということとは私の優先順位は高いと……ほうほう」

俺はイレイナがいたからこうして楽しく旅が出来ているし、師匠から教わった無形流むぎようりゆうは特定の型がないけど誰かを守るための流派であり俺の心にその教えは刻まれているから、イレイナが最優先なのは当然だと言える。

「そうそう、だから助けてほしいときはいつでも呼んでね。必ず駆け付けるから」

本当はずっと一緒にいるのが良いのかもしれないが、彼女にだって一人になりたいときや依頼なんかで一人になってしまうこともあるだろう。俺だって魔道具を作ったりお金を稼いだりする必要があるからずっと一緒にはいられないのだ。

けれど俺はイレイナから助けを求められればすぐに駆け付けるつもりだし、俺が出来る限りの手伝いもするだろう。多分彼女だって俺が助けてほしいと言えば助けてくれるだろう。俺たちはそうやって今まで助け合って来た。

これからもその関係は変わらないだろう。俺にとってその関係は非常に心地良いものだ。

叶うならばいつまでも助け合っていける関係でいたいものだ。



その日の夜。宿で寝ていた俺はトイレに行きたくなくなって目が覚めた。

部屋にあるトイレで用を足し、再び寝ようと思ってドアを開けると

「わあー！」

そこにはグールのお面を着けたイレイナが杖から光を出し、そのお面を下から照らして俺のことを驚かせてきた。

「どうです？…驚きました？」

「……………」

「……………気絶してる」

こうして俺は守ろうとしている人に殺されそうになったのだった。

ネコ神さまと怪盗ネコキャット（前編）

旅の途中で訪れた村の村人に面白い国はないかと聞いたところ、とある国のことを教えてくれた。

「へえ。不思議な風習の国ですか」

「左様でござる」

「左様でござるか」

「ござるござる」

「ござるござるござるござるござるござる？」

「ござるござるござる」

「ギーヤギーヤギーヤ〜」

「ござる」

「ござる」

「二人とも普通に喋ってください」

村人と遊んでいたらいレイナに怒られてしまった。仕方ない、普通に話すことにしよう。

「それにしても工作人員が丸め込まれたから口調で田舎っぽさをアピールするってのは面白い発想ですねー。まあ人を勘違いさせてお金を稼ごうとしている時点でいつかはこうなると決まってるんじゃないですか？」

「痛いところを突いてきますね。みんな最初はノリノリござるござるとで言っていましたけど段々冷静になって、今は次の手を考えている最中ですよ」

「ところでござるって田舎っぽい口調なんですかね？」

「どうぞでしょうね」

「ちよつと待ってください。え、カイも村人さんも何の話をしてるんですか？」

などとのんきに話をしているとレイナが慌てた様子で俺たちの会話を遮ってきた。

「何って言われても話の続きだとはか言えないかな」

「そうですね。魔女様に邪魔される前の話の続きだとしか……」

「あの会話って成り立ってたんですか？」

「立ってた」

「ええ……」

旅人としていろんな人と話した経験が生かされた瞬間であった。

村人はイレイナに最近近くにできた国の話を一から説明し、その国に興味を持ったイレイナが道を尋ねていた。どうやら次に行く国が決まったようだ。

近くにあるということでも話を聞いた後すぐに村を出て西に向かって進み続けた先には、林の中にひっそりと存在する国が俺たちを待ち構えていた。

村人は最近できた国だと言っていたが城壁は色あせており、蔦も這っていて年季を感じさせるものだった。しかし、国に入るための門だけは新しい鉄製のものだったため、違和感を感じさせた。

国の中に入らないことにはこの国ができた経緯も知ることもできないので入国するために門の前に立つと、門に備えられた小さな窓が開き、兵士がこちらを覗いてきた。

「何者か」

「旅人です。魔女です。イレイナといいます」

「同じく旅人です。魔道士です。カイといいます」

「この国に何の用だ？」

「ここに最近できた素敵な国があると聞いて興味を持ったので訪れました。とりあえず数日間滞在したいかなと思ってます」

俺がそう答えると、兵士は軽く頷いた。

「……よかろう。しかし、この国に入りたければ、質問に答えてもらう。猫さまは好きか？」

ネコサマ……ねこさま……ああ、猫さま。猫にさまを付けている人は初めて見たな。猫と猫さまの違いは敬意を払っているかどうかからしい。

兵士の質問に俺は「好きです」と端的に答えておいた。猫が好きと

いうのは事実だし、仮に嫌いだったとしても国に入るために嘘をついていただろう。

猫は旅をしている中で見たことも触ったこともある。猫だつて人のように一匹一匹性格が違うので触れ合っていて楽しいと思う。

二人して猫が好きだと答えを聞いた兵士は俺たちの入国を許可し、軽く手続きをしてから国に入ることができた。



「うっ——うん？」

「どうかしましたか？」

「いや、なんか違和感みたいなのを感じたような気がする」

「私は何も感じませんでした」

「気のせいか……？」

国に入った瞬間、俺はどこかで感じたのと同じような違和感を感じた。どこで感じたんだっけかな。

……うーむ、思い出せない。少し頭がぼんやりする気がするけどこれも気のせいだろうか。

どこかで休むにしてもまずはこの国を見て回らないことには始まらないのでイレイナと一緒に歩き始める。

俺の見える限りでは、レンガの家はどれも作られてから結構な年代が経っているように見え、城壁と同じように蔦が這っているものばかりだった。それからどの家にも扉に小さな四角い穴が開いていた。あれはペットを飼っている家で見られるものだった気がする。

少し歩き回ったことで、俺たちは兵士にされた質問の意図を理解した。

「猫ばかりですね」

「……………そうだね」

イレイナの言う通り、この国のいたるところに猫さまがいた。どの猫さまも野生というものを失ったのか、外敵の存在を気にすることなくまったりとしていた。可愛い。ずっとここに暮らしたい。

——猫さま？俺はいつから猫をそう呼ぶようになった？それに……。

「カイ？大丈夫ですか？なんだか顔色が悪いような……」

俺の様子に気付いたイレイナが心配してくる。俺は彼女に心配させたくないがために無理して笑顔を作り、嘘を言う。

「大丈夫。ちよつと昨日は夜遅くまで一人で修行していて睡眠不足なのかもしれないだけだからそんな気にする必要はないよ。ほら、あつちにパンの屋台があるから何か買ってきたら？」

「無理しないでくださいね。何か欲しいパンはありますか？今なら私の奢りですよ」

「そうだな……イレイナが美味しそうだと思ったものが食べたいかな」

「分かりました。少し待っててください」

そう言い残してイレイナは屋台に歩いて行く。

「カイ……？」

彼女が屋台で出会った魔女と一緒に戻ってきた時には、そこに俺の姿はなかった。

・
○

屋台で出会った魔女と一緒に幼馴染のことを探したが夕方になるまで見つけることができず、絶対に守らないといけない掟を知らないうちに破ってしまい、抵抗する間もなく牢屋に捕らわれてしまった魔女がいました。

そんな可哀想な魔女とは一体誰か。

そう——

「私です。くしゅん」

どうやら私はこの国に来てから体調が悪く、本調子とは到底言えません。

こんな時カイがいてくれればなあと思い、幸いなことに私の指から

外されることはなかった指輪に魔力を強めに流して彼に居場所を知らせませす。

これで簡単に彼が来てくれるなら、長い時間を掛けて彼を探したりはしません。最後に見たカイもなんだか調子が悪そうでしたし、少しの間とはいえ離れたのは間違いでしたね。

けれど私は信じてます。彼が私を助けに来てくれることを。

今度は弱めに魔力を込めてカイの位置でも探そうとした瞬間、鉄格子の外にある通路の天井に丸い穴が開いて誰かが降ってきました。

「——よっと。こんなものだろう」

牢屋の中は暗く、光源といえるものは小さな窓から入ってくる月明りのみなのでその姿はよく見えませんでした。聞こえてきた声はいつも聞いている人のものだというのはすぐ分かりました。

「そこにいるのはカイですか？助けに来てくれたんですね」

「違うが。吾輩は誰かを助けるために来たわけではない」
「え」

カイが私のことを見捨てるわけがありません。ならば目の前の人物は偽物なのでしょう。けれど、彼の声にそう言われるのは大変堪えます。

私がショックを受けていると、上から降ってきた謎の人物が私のいる牢屋の鉄格子の前まで来ます。

近くまで来たことで目の前の人物の姿がはっきりと見ることができきました。

それはいつも着ているスーツがとある事情で臭いがしばらく取れなくなつたから着ている執事服に、いつもはしていない黒い手袋やマントやシルクハット、何故か暗いのにサングラスを身に着けている黒い髪の青年でした。きつとサングラスの下にあるのは金色の瞳なのでしょう。

なんか変なものを身に着けて不審者になってますが間違いなくカイです。

「えーつと……カイですよね」

「違うが」

「ええ……。ならあなたは誰なんですか」

私の問いに目の前の不審者さんは足を肩幅ほどに開き、左手の親指と人差し指でシルクハットのつばを掴み、右手の手のひらが上を向く形で右腕をこちらに伸ばすという変なポーズを取りました。何ですかそれ？

「吾輩は怪盗——怪盗ネコキャットである！」

「……………」

お母さん、お父さん、フラン先生。私の幼馴染がおかしくなっていました。

○

「それで怪盗ネコキャットさん？は何をしに来たんですか」

いつまでもポーズを取ったまま動かない彼に尋ねます。

「よくぞ聞いてくれた！では説明しよう！——その前に……………」

やっとポーズを解いて大げさな反応をしたかと思ったら、彼は鉄格子の鍵を開けて中に入り、私の手枷を外してくれました。

その手には鍵のような形をした魔道具を持っていました。名前は何でしたっけ……。あまりにもダサイので忘れてしまいました。

「ありがとうございます。けれど私のことは助けるつもりはなかったのでは」

長時間手枷につながれていたので感覚が無くなっていた手を開いたり閉じたりしながら彼のことを睨んでやります。

私に睨まれても全く動じる素振りを見せない彼はまた変なポーズを取っていました。

「そうとも！吾輩は怪盗。つまり宝を盗むためにここに侵入したのだ！」

「宝ですか」

「そう、宝である！この国にある最も素晴らしい宝を手に入れる！」

この国で最も大切にされているものといえば、私がここにぶち込まれる原因となったネコ神さまとやらでしょうか。

「——面白そうなことになっておるのう」

「あなたは……」

「む！」

月明りの量が少なくなり、声が聞こえてきた窓の方を見るとそこには黒く艶のある毛並みをした青い瞳の尻尾が二つある猫——丁度私
が頭に思い浮かべていたネコ神さまがいました。

ネコ神さまを見たカイは身構えてました。

「シャー！」

あ、威嚇してる。

「今までいろんな人間を見てきたが、お前のようなのは初めてだ」

ネコ神さまは興味深そうにカイのことを観察していました。仮に
こんなのがたくさんいたらこの国は既に滅びてそうです。

やがてカイの観察が終わったのかネコ神さまは私の方に振り向い
てきました。うう、身体が痒い。

「さて、魔女殿。我輩はお前のような人間を待ちわびたぞ。お前、我輩
と交渉する気はないかの？」

「私ですか？私よりそっちにいる怪盗ネコキャットさんの方が良いと
思いますけど。どうやらあなたのことを攫おうとしているらしいで
すし」

「無理だと思うがの。一応聞いてみるが我輩と交渉する気はないか、
怪盗ネコキャット殿？」

「断るー吾輩は貴様なんぞと交渉する気はないーシャー！」

最初から期待してないといった声色のネコ神さまに対し、カイはい
つもと違う口調で拒否しました。ついでに威嚇も続けていました。

二人……？は知り合いなんでしょうか。

それにしてもカイが狙っている宝がネコ神さまではないというこ
とは、この国にある希少な宝石か何かを狙ってるってことでしょ
うか。後で分けてくれたりしませんかね。

「やれやれ、嫌われたものだな。というわけで我輩には魔女殿しか交
渉する相手はおらんのだ」

「はあ……。それで交渉というからには、少なからず私に利益のある

話が聞けるんですよね?」

「我輩がお前をここから出してやるのが利益だ——と言いたいところだったが、先を越されてしまったからのう」

「なら無理ですねー」

「しかしこのままだとその男は元に戻らんぞ」

「マジですか」

「マジだ」

視界の端でまだ威嚇しているカイを見て溜息を吐きました。珍しい様子のカイを見るのは面白いとは思いますが、さすがとこの調子でいられるのは困ります。一緒に旅をする私まで変な目で見られそうです。

「はあ……。まずは事情を一から説明してください。あ、私たちに関連するところだけお願いします。なんだか疲れたので」

「……まあ良いだろう。簡単に言ってしまうえー」

「おっと！それ以上その女性に近付くのはやめてもらおうか！貴様はこつちだ」

「何をする?!」

私に近付こうとしたネコ神さまをカイが持ち上げて遠ざけました。もしかして縄張り意識というやつですかね。

「絶妙に遠い位置まで移動させよって……。話の続きをするが、我輩のせいでのこの国は出来てしまったのだ」

と、ネコ神さまはこの国について語り始めました。

○

「それで我輩はこの国の人口を減らしたいというわけだ。事情は分かっただかの?」

「くしゅんー!」

私はくしゃみで返事をしてあげました。

「お前のように猫を拒絶する体質の持ち主は我輩の力が効かないから交渉することにしたわけだの」

どうやら私は猫と触れ合っただけにはいけないようです。可愛いから触れ合っただけだとは思っていましたが残念。

この国に入ってから私は猫が、カイはネコ神さまが原因で調子が悪くなっていたようです。

「これですますます貴様を彼女の近くに行かせられなくなったというわけだ！はーっはっは！」

……カイは元気そうですけど。ネコ神さまにも彼がこうなった原因は分からないそうで、「我輩の力が効いてるのに我輩を崇めない者は初めてだ。まあ長い間生きていればそんなこともあるかもしれないのう」とどうでも良さそうです。

「作戦決行は明日の昼頃だ。派手に暴れながら国の外まで我輩を連れて行って貰いたい」

私は今じゃなくて良いのかと聞いてみましたが、人々に国を出ていく姿を見られる必要があるそうです。面倒くさい。

「貴様は余程の目立ちたがり屋ということだな！吾輩とは大違いだ！」

こつちも面倒くさい。

明日の朝になるまで寝ることにしましたが、カイが「これを使うが良い！」などと言いながら枕と毛布数枚を渡してくれました。荷物は没収されたのでありがたいです。こういうところは変わらないんですね。

私は毛布に包まって寝るのでした。

「貴様はこつちだ！彼女の近くで寝ることは許さん！」

「離せー！」

うるさい……。うるさい……。

ネコ神さまと怪盗ネコキャット（後編）

窓から朝日が差し込んできて目が覚めると、目の前にはテーブルと椅子がありました。

何故こんなものが……？と寝起きの頭で考えていると良い匂いがしました。匂いのする方向を見てみると昨日と同じ変な姿のカイが朝食をテーブルの上に置きました。

パンにベーコン、目玉焼きというシンプルなものでしたが匂いからして美味しいことは分かりました。

「はーっはっは！起きていたか！本当は目を覚ます直前に置いておきたかったのだがな。余分な作業が一つあったから仕方ないか！これも吾輩のこだわり故に……」

そう高笑いしながら焼いてある魚やら野菜やらが入った小皿をネコ神さまの前に置きました。朝からテンションが高い……。

「まさか我輩の飯まで準備するなんてのう。うむ、美味しい」

「当然である！むしろ不味いなどと言っていたら貴様をその窓からぶん投げていたところだぞ。……む、食べないのか？」

「あ、いただきます。……相変わらず美味しいですね」

「そうだろう、そうだろう！」

カイはサングラスを掛けているのでどんな目をしているかは見えませんが不安そうな声で聞いてきたので一口食べて感想を述べます。そうすると彼は満足したのかどこかへ行ってしまった。

あんな騒がしい不審者に気付かないここの警備はどうなってるんでしょうか。

朝食を食べ終わり、昼まで何をして時間を潰そうか考えていた時、カイが私のカバンを持って戻ってきました。

「さて！後は吾輩の怪盗七つ魔道具の点検をして終わりだな！流石吾輩、完璧だな！」

普段と違ってやたらと自己評価が高い彼はスペースがある場所に座り込んで魔道具を取り出し始めました。鍵の形をしたもの、鉄の棒

の先に円形の板のようなものがついたもの、銃のようなもの……あれ？

「七つと言っている割には三つしかないですね」

「フツ、分かってないな。もしや朝食が食べ足りなくて頭に糖分が回っていないとでも言う気か？」

「……………」

何故かしたり顔をするカイ。なかなか腹が立ちます。吹っ飛ばしても良いですかね。……いえ、今のカイは普通ではないので我慢です。

「考えてみたまえイレソン君、自分の手の内を全て晒す馬鹿者なぞどこにいる？残りの四つは隠しているだけなのだよ」

誰がイレソン君ですか。しかもそれ怪盗じゃなくて探偵が言うセリフですよ。

「でも今は魔道具の点検をしてるんですよ？なら全ての魔道具を出さないといざという時に困りませんか」

「……………」

「もしかしてないんですか、残りの魔道具」

「……………はーっはっはー！」

「誤魔化そうとしないでください」

私もほうきや杖の点検を軽くしてから本を読んで昼になるまで待つてから、盛大に牢獄をぶち壊して外に出たのでした。

私がネコ神さまを抱えると体質のせいで良くなってきていた体調が再び悪化してしまうのでカイに持って貰ってます。私はいつも通りほうきで空を飛んできますが、カイは先端に吸盤がついた銃のような魔道具を使って建物と建物の間を縦横無尽に駆け回っていました。少し楽しそうでしたが、彼の腕の中にいるネコ神さまの反応を見る限りそうでもないのかもしれない。

「——ひゃああああああつー！」

「はーっはっはー！楽しい、楽しいな！さらにただほうきで空を飛ぶよ

りもカッコイイとききた！吾輩は最高にカッコイイ怪盗、怪盗ネコキャットである！」

目立つように国中を駆け回ってからこの国の門の方に向かうと、先日私のことを捕まえた晴天の魔女ルシエさんがほうきに乗って待ち構えていました。

「イレイナさん！見損なつたよ！まさか怪盗と手を組んでネコ神さまを攫おうとするだなんて！」

「はーっはっは！吾輩は別にネコ神さまとやらはいつでも良かったんだがな！」

「ネコ神さまがどうでも良いだなんて、とんでもない悪党のようだね！極刑だよ！ギルティ！」

怒ったルシエさんが杖を振るい、彼女の真下の地面から出てきた七本の水の柱をカイに向けて飛ばしました。

「私がやりましょうか？」

カイは強いので簡単に負けるわけなのですが、ネコ神さまを抱えている状態で魔女と戦うのは危ないので彼に声を掛けます。

「問題ない！このくらいの危機を乗り越えられないで何が怪盗か！君はそこで見ているんだな！」

蛇のようにうねりながら襲い掛かってくる水を避けながらルシエさんに近付きます。

「ああもう！どうして当たらないの！」

「吾輩を捕まえたければ探偵と刑事を連れてくるんだな！貴様のような正気を失っている者など恐るるに足らん！」

「我輩、ここで死ぬかも……既に一度死んでるけど」

いえ、正気を失っているのはあなたも同じです。あと腕の中のネコ神さまが生きること諦めたような顔をしてるんですが大丈夫でしょうか。

「うるさい！これでどう！」

ルシエさんが杖を振って水の柱をカイの前後左右と上空から挟むように飛ばしてきました。流石にこれはまずいかと思つて私も杖を取り出していつでも魔法を使えるようにします。

「甘いぞー」

その瞬間彼の姿が消えました——いえ、正確には目に見えないくらい
の速さで移動しました。ではどこに移動したかと言いますと、

「これで吾輩の射程距離だ！」

ルシエさんの目の前にいました。

「自分から飛び込んでくるだなんて馬鹿だね！私が何の対策をしてな
いと思う？そう、私の真下にも水が——え？」

ルシエさんの言葉は途中で止まってしまいました。それもそのは
ず。カイの姿は先ほどまでとは違い、シルクハットとマントを外して
いました。シルクハットが無くなった頭からは猫のような耳が、マン
トで今まで見えてなかったお尻のところからは尻尾が生えてました。

まさかの猫です。

「え、ちよ……その姿は猫さま……？いやでも人間……？」

「隙ありいー」

困惑するルシエさんの顔にカイはネコ神さまを抱えていない方の
手でパンチを放ち、ルシエさんのことを吹き飛ばしました。ルシエさ
んは咄嗟に魔法で防いだのでしょうけど衝撃を全て軽減できたわけ
ではなかったようで、鉄製の門にぶつかって気絶してました。うわ
あ、痛そう……。

「勝負あり！勝ったのは吾輩こと怪盗ネコキャット！観客の諸君、応
援ありがとうございます！」

「し、死ぬ……」

何故か自分自身で勝利の宣言をしているカイと、彼の腕の中で息絶
えそうなネコ神さまに向けて「さっさと行きますよ」と一声かけてほ
うきから降りて門の前に立ちました。

未だ敵意をむき出しの人々は私たちのことを取り囲みました。私
は精一杯、悪役らしい表情を作りながら、彼らに向けて言い放ちまし
た。

「さて皆さん、この国で一番強そうな魔女さんは怪盗ネコキャットに
あっさりと負けました。まだ私たちに挑む者は？」

「吾輩は諸君らの挑戦を待つ！どんな勝負でも吾輩は逃げも隠れもせ

んぞ！かかってこい！」

意味のない挑発をする人がいますが、誰も前に出ることはありませんでした。逆に出て来られても対応に困るので必要以上に挑発するのやめてください。

「いないのか……。つまらん！目的も果たしたし、もうこの国に用はない！早く門を開けるんだな！でないとその門に穴をあけるぞ！ついでにこいつにも穴をあける」

最後の脅しが一番効いたのでしよう。門番は慌てた様子で門を開きました。門が完全に開くまで少し時間が掛かりましたが、その間誰も襲ってくる様子はありませんでした。

私たちは国の外に歩いて出てから振り返りました。私たちに向かって罵倒を浴びせましたがカイが一步前に出た瞬間、皆口を閉ざしてしまいました。

「では私たちはこれで」

「さらばだ皆の衆！これからも怪盗ネコキヤットの活躍を期待しているのだな！」

私はほうきに乗って、カイはいつものように走って去るのでした。

●
深い森の中で俺が意識を取り戻した時、周囲にはイレイナしかいなかった。

「……………あー」

「もしかして正気に戻りました？」

俺は手袋とサングラスを外して無言のまま頷く。

「記憶はありますか？」

「……………少しは」

「……………吾輩は！怪盗ネコキヤット！」

「やめて！お願いだから！」

猫耳と尻尾を外し、俺はあの国でやらかした言動の数々を思い出してイレイナに背を向ける。今の俺は絶対に顔が真っ赤になってる。

「ふふーん。でしたら、はい」

イレイナはそう言っただけに両手を差し出して来る。何か欲しい雰囲気なのは分かるけど一体なんだ？

「えーっと……？」

「カイがああ国で盗んだ宝をくれるのでしたら今回のこと誰にも言わないであげます」

「？」

何を言っているのだろう。俺がああ国で盗んだと言えるものは没収されてたイレイナのカバンとネコ神さまくらいだ。

「いや、ないけど」

「え……。でもさっき目的は果たしたって言っていましたよね。隠すのはダメですよ。あなたの両親に言いふらしちゃいますよ」

「それはやめてほしいけど本当にないって」

「ええ……」

本当に宝なんて盗んでないしなあ……。いくら俺がお金を貯めているからと言っても盗むようなことはしない。そんなお金はいらないからだ。

「……あ」

「何か思い出しましたか？」

「い、いや。何でもない」

「その顔は絶対に心当たりがありますね。白状してください」

イレイナが俺に詰め寄ってくる。俺は一步後退るとイレイナが一步詰めてくる。もう一步後退るともう一步詰めてくる。

彼女には嘘を言ったが、俺は二つほど思い出したことがある。

一つ目はイレイナが言っていた宝について。二つ目は昨日イレイナがパンを買いに行った後のことだ。

二つ目は特に重要なことだ。それは思い出した瞬間、何故俺がああ国で猫が最優先にならなかった理由が分かってしまったからだ。



イレイナがパンを買いに屋台に歩いて行くのを見届けた俺は人々の往来の邪魔にならないように道の端に寄って建物の壁に背中をつけて座り込む。そんな俺の周りに猫さまが近付いてきた。

——ああ、一生愛でてたい。

今の俺は何かおかしい。頭が上手く回らないし、猫さまに対する異常な愛情が生まれてきている。

——写真撮ろ。

あの村の工作員が丸め込まれた理由は、この国の不思議な力の影響で今の俺のようになってしまったからだろう。このままでは俺は正気を失い、この国に永住しようとしてしまうかもしれない。

——別に良いんじゃないか？

ダメに決まってるだろ。俺は旅人だ。大好きな幼馴染のイレイナと一緒にいろんな国を見て回ろうと約束したんだ。それを放り出すわけにはいかない。

——彼女と一緒にこの国に住めば良いんじゃないかな？・妙案だ！

俺はイレイナに満足する旅をして欲しいんだ。この不思議な力が働いている国に住んで彼女が幸せになれるとは思えない。

——そんなの分からないじゃないか。もしかしたらここで楽しく暮らすかもしれないぞ。

そんなことイレイナを小さい頃から知っている俺なら分かるだろ。いろんなところを旅して、いろんな思い出を作って、旅が終わったら故郷に帰ってその思い出を楽しむ。そこにイレイナが要るかは分からないが、俺はその予定だ。

——故郷になんて帰る必要ないさ。それに未来のことより今のことを考えよう。

俺にとって今のことも未来のことも、両方同じくらい大切なことだ。それに、俺は旅が終わって故郷に帰ったらイレイナに告白するって決めてるしな。帰らない理由を見つucker方が難しいよ。

——我ながら強情だな。けどもうそろそろ限界なんじゃないかな。さあ、猫さまに尽くそう。やはり猫さまこそこの世で一番素敵な生き物だ。

……我ながら馬鹿らしいよ。猫さまが一番？違うだろ、俺には優先順位が変わることのない、一番大切で素敵な人がいるじゃないか。どんな魔法や呪いを受けたとしてもこればかりは変えることはできない。

そこで俺はこの国の力に？み込まれた。しかし、俺の中で一番に優先されるのはイレイナであり、猫はその次くらいの順位になった。俺はこの国の力に打ち勝ったのだ。

問題なのはネコ神さまの力が変な感じで効いてしまい、俺の中の優先順位以外がおかしくなってしまったのだろう。

そうして誕生したのが怪盗ネコキャットだというわけだ。

「いやー、ははは……」

「さしずめ、今の私は悪い怪盗を追い詰めた名探偵と言ったところでしようか。さ、早く言つて楽になった方が良いでしょうよ」

後ろに下がり続けていたら木にぶつかってしまい、逃げられなくなっていました。

「あー！今思い出したー！思い出しちゃったなー！いやー実はねー、俺があこの国でネコ神さまを少し雑に扱えたのは自分が猫になりきることで彼女の力を軽減したからなんだよー」

「……………」

また一步無言で近付いてくる。咄嗟に出た嘘だったが説得力はあつたはずなんだけど。

「えーつと……えーつと……。言わなきやダメ？」

「ダメです」

イレイナはどうしても引く気はないらしい。そんなに知りたのか……。ならばせめてこちらに来るダメージが浅い方を選ぶしかない。

俺は一度目をつぶって深呼吸をし、目を開いて彼女のことを真っ直

ぐに見つめる。

「……俺が言っていた宝つてのは……あー、そのー……」

「何ですか、早く教えてください」

「恥ずかしいが言うしかない。覚悟を決めろ。」

「君のこと……だったんだ」

「……………え」

イレイナの足が止まる。

「イレイナが俺のことを探し回ってくれてたのは分かってたんだけど、その時の俺はもう普段の俺じゃなかったからあんまり会いたくなくて逃げることにした。君が捕まったのは君から送られてくる指輪の位置が、ある場所から動かなくなったことから分かった。だから助けに行こうと決めたのは良いけど、恥ずかしいから変装したんだよ。すぐにばれちゃったけど……」

「……………」

「俺は君を助けに来ただけ言いたかったんだけど、ネコ神さまの力の影響でおかしくなっていた俺が君のことを宝つて言つてややこしくしてしまったね」

俺は今少しだけ本音を隠した。俺がイレイナから距離を取っていたのは変な言動をしている俺を見られるのが恥ずかしいというものがあるが、彼女に嫌われるかもしれないと考えてしまったからだ。

彼女のことを宝だと思っているのは本当のことである。

「……………宝の前に『最も素晴らしい』とついていました」

「それはつい本音が出たというか……俺が今まで見てきた中で君ほど素晴らしい人はいないって思ってるからと言いますか……まだダメ……………」

「……………今のあなたは何も持っていないのが分かったのでもう良いです」

「そ、そうか。ありがとう」

そこでようやくイレイナは後ろに下がって向こう側を向いてくれた。そのおかげか少しずつ冷静になってきた。

……………もしかなくてもやっちゃったな。絶対言わなくても良いと

ころまで言った。俺の心の中にしまっておくだけのつもりを持ちを言ってしまった。

何が『本音が出たと言うか……』だ。現在進行形で本音駄々洩れじゃないか。隠せてる本音なんて少ししかないじゃないか。正直者の国にいた時よりも正直になってるぞ。もしかしてここは真の正直者の国だった……？

それにしても『君ほど素晴らしい人はいない』ってちよつと……つて感じだよなあ。「うわ、気持ち悪い」なんて言われたら俺は立ち直れる気がしない。

ああ、さつきとは別の恥ずかしさからイレイナの顔を見ることが出来ない……。

それからしばらくの間、俺たちは動かなかった。



一ヶ月後。俺たちはとある国からもう一度来るように言われていたのでその国に行ったついでにネコ神さまがいた国のことを教えてくれた村にも寄ることにした。

「どうもだにゃん！」

再び訪れたのだが、俺が吹き飛ばした魔女が変な口調と猫耳をしていた。魔女ともあろう人が何という格好を……。まあ俺も人のことを言えないのだが。

猫耳魔女様の話を聞いてみると、あの国はネコ神さまがいなくなつてから人口が減ったそうだ。国が減ぶほど少なくなつたわけではないそうなので彼女の狙い通りに事が運んだようだ。

その後、生まれたばかりの子猫に名前を付けてほしいと頼まれたイレイナは、どこかで見たような特徴をした黒い子猫にどっかの誰かさんが普通に生きていた頃の名前を付けたのだった。

さて、この村にはこれといった用事もないし次の国へ向かうとしようか――

「はーっはっは！貴様は一ヶ月前に来た旅人ではないか！」
「!?」

聞き覚えがある声と忘れたい口調が聞こえてきたので後ろを振り返ってみると、一ヶ月前はござると言っていた男性が執事服を着て黒いシルクハットや手袋やマント、今は明るいのに何故かサングラスを身に着けていた。ほぼ間違いなく猫耳と尻尾もつけているはずだ。

今すぐ逃げたい俺の心情などお構いなしに、彼は変なポーズを取って高らかに叫んだのだった。

「吾輩は！怪盗ネコキャット……三世！」

二世はどこ行つた。

手紙

魔法使いの国にある一軒家。そこでは赤い髪をした少年——エイデンが学校の宿題をやっている最中だった。

自室の机の上に紙を置き、彼は何故か椅子に座らずに立ったままプルプルと震える手で文字を書いていた。

「——疲れる！カイ先生はいつもこんな繊細なことをやってるのか！」

彼は自分の師匠（勝手にそう呼んでいる）と同じように普段から自分に過重力の魔法を掛けて生活をしていた。

過重力の重さに体が慣れてきたらさらに過重力を強くするのを繰り返していたのだが、最近椅子が重さに耐えられなくて壊れてしまったようで椅子の残骸が部屋の隅に寄せられていた。

「以前先生が家に来た時は僕よりも何倍も強い過重力を掛けたまま椅子に座っているように見えただけだなあ……」

椅子と接する部分だけ過重力を解いているのかなと考えていると、彼の母親が部屋にやってきた。

「エイデン、あなたに荷物が届いてるわよ。私が持つてこようかと思っただけどやたらと重かったからあなたが持つてきてちょうだい」

「はい」

何が来たのかなと呟きながら家の入口まで行ってみると、何やら縦に大きい箱が置いてあった。

「何だろう？とりあえず部屋に持つて行こう——重っ」

彼は箱を持つとしたのだが、思っていた以上の重さに驚いてしまった。とはいえ持てないほどの重さではなかったので頑張つて部屋まで運び、中を見てみることにした。

「椅子？」

箱の中に入っていたのは何かの金属で作られた椅子だった。体が触れる部分にはクッションがついているので体が痛くなることはなさそうだ。軽く叩いてみると、カンカンと心地良い音が聞こえてきた。

彼はすぐに座ってみようと思ったが、部屋の隅に放置されたままの椅子の残骸が視界の端に写ったので一度過重力を解いてから座る。

「お、これはなかなか……」

その椅子の座り心地はエイデンが今まで座ってきた椅子の中でも上位のものだった。流石にこんな良い椅子を壊したくはないのでこの椅子に座るときは過重力を解こうと決めた。

ところで誰が送ってくれたのだろうかと気になった彼は椅子が入っていた箱を調べてみると、箱の中に封筒が入っていることに気が付いた。封筒に書かれていた差出人を見ると、そこには彼が尊敬している師匠の名前があった。

「カイ先生からだ！」

彼は少し興奮気味に封筒を開けて中に入っていた手紙を読み始めた。

『エイデンへ』

君がサヤちゃんに渡した手紙は無事に俺のところへ届きました。どうやら友達も出来ているようで安心しました。自分が困ったときに助けてくれる人の存在はかけがえのないものです。大事にしてください。

今回、この手紙が入っていた箱には椅子が入っていたと思います。その椅子は俺が作ったもので、過重力にも耐えることのできる代物です。そろそろ自分に掛ける過重力の力が大きくなりすぎて普通の椅子では耐えられなくなってしまったのではないかと思ったので送ることにしました。

俺が君の家に遊びに行った時に椅子に座っていたけど、その椅子は壊れなかったのを不思議に思っているかもしれない。何故でしょう？

……君からの返信を待っていると次に俺が手紙を送るのが数年後とかになりそうなので普通に答えを書きます。実のところ俺は椅子に座っていません。座っているように見えるだけで、ほんの少しだけ浮いています。空気椅子という奴です。この体勢はなかなかきついのに加えて椅子に座るタイミングならいつでもできるのでおすすめ

です。

いきなり普通の椅子でやるのは難しいと思うので俺が送った椅子を使って練習してください。失敗して椅子に座った時に座り心地の良さで悔しがってください。

いつかまた成長した君と会えることを楽しみにしています。その時はどれくらい強くなったか見せてくださいね。

今日も気ままに旅する愉快な旅人 カイより』

「カイ先生が成長した僕と会いたがってる……。よし、これからも頑張るぞ！」

手紙だと普段の口調とは異なるカイから貰った手紙を読んでやる気を出したエイデンは、早速貰った椅子を使って空気椅子の練習を始めるのだった。



とある田舎にある国——平和国ロベツタはその名の通り、今日も平和であった。

「ふう……。今日も平和だなあ」

それ今言ったばかりなので同じことを言うのはやめていただきたい。

そんなふざけたことを言いやがったのは黒い髪をした和服の男性だった。今は平日の昼間だというのに自宅で椅子に座つてのんきに水を飲んでいたのである。働け。

しかし残念なことに、この男性は既に一生働かなくても生活ができるくらいのお金を持っているのである。俗に言う勝ち組というやつだろう。

「そうね。あの子たちも平和に旅できると良いけど」

そう言つて金色の髪をした女性が男性の隣に座った。

「カイとイレイナちゃんなら大丈夫さ。今頃二人で昼ご飯を食べてるかもね」

「ふふ、そうね」

二人は窓から見える青空を眺め、きつとあの子たちも同じ空を見ているのだろうか考える。

「郵便でーす」

「はい」

彼らはいつ帰ってくるんだらうなど思っていた時、玄関の方から声が聞こえたので女性が向かった。

再び戻ってきた女性の手には封筒が握られていた。

「おや、もしかして」

「噂をすればというやつね。カイからよ」

封筒を開けてみると一枚の手紙と数枚の写真が入っており、まずは手紙を読むことにした。

『両親へ』

前回お金と一緒に手紙を送ってからそこまで時間が経っていないので簡単に近況報告だけをします。

俺とイレイナはこれまで通り毎日楽しく旅をしています。二人で次に行く国の名物を予想したり、どちらが早く目的地にたどり着けるか競争をしたりと至って平和です。

そう、最近俺はこの平和が大好きなことに気付きました。以前訪れた雪が降り積もった国で小さな獣人の姉妹と少しの間一緒に過ごしたのですが、その時の何事もない日常に安らぎを覚えました。

小さい子たちが成長していく姿を近くで見るのが楽しく仕方がありませんでした。まだ旅に出る前、二人が俺の方を見て優しい笑みを浮かべていた理由が分かった気がします。なんだかんだで俺も大人になったということなのかもしれません。

今回は写真もいくつか同封しておいたので見てみてください。

少し短いですがこれで終わりとさせていただきます。そちらに帰るのはいつになるか分かりませんが、家に帰ったら二人の手料理が食べたいです。味の方は気にしないでください。——愛情が込められた料理が不味いわけではないのですから。

あなたたちの息子 カイより』

「あらまあ、嬉しいことを書いてくれるわね」

「そうだね、カイの成長を知れて良かった。さて、次は写真を見てみようか」

そうやって男性は写真を手に取り、一枚一枚ゆっくりと見ていった。

先ほどの手紙にもあつた獣人の少女二人との写真、黒い髪の魔女との写真、端の方にグールっぽいものが写ってる写真、それと――

「おやこれは……はははー」

「なになに……ふふふ」

執事服に黒いシルクハットやマントに、手袋やサングラスをしている息子の姿が写った写真だった。

あまりそういうことをするイメージが無かった息子の姿に二人は大笑いした。きつと旅先で何かがあつたのだろうが、それにしても面白すぎるとしばらくの間笑いが収まることはなかった。

このことをイレイナの両親にも伝えることにした男性は、彼らの家に着くなり「いやあ聞いてくださいよ。どうやら僕の息子が大人になつたらしくてねー」と話し始めようとした。

その言葉を聞いて、娘に手を出されたと勘違いしたイレイナの父親は発狂した。



俺は今回訪れていた国の郵便局で手紙を出した。国外への郵便なので少々値が張るが、仕方のない経費と割り切ろう。

宿に戻ると、出かける前と同じくイレイナが部屋の中でコーヒーを飲んでいた。

「おかえりなさい。手紙は無事に出せましたか？」

「はいただいま。何事もなく出せたよ――あれ、テーブルの上に置いてたあの写真はどこにいったかな？」

あの写真とは、俺がネコ神さまの力の影響で変な言動をしている時にいつの間にか撮っていた自撮りのことだ。帰ってきたら燃やすな

り捨てるなりしようと思っていたのだが、どこを探しても見当たらない。

「ああ、あれですか。あれなら私が魔法でこの場から消しておきましたよ」

「それは助かるよ、ありがとう。ちなみにどんな魔法で消したんだい？燃やしたとかバラバラに引き裂いたとかいろいろ方法はあるだろうけど」

「カイがよそ見している間にこっそり他の写真と一緒にしておきました。その手際の良さは魔法と言っても過言ではありません」

イレイナは得意気な顔をしてそう言った。

「……………ん？」

「それってつまり他の写真と一緒に俺の両親のところに送られたってこと？」

「はい」

「……………しばらくパンを作らないことに決めた」

「?!?!」

今日の夕食はきのこたつぷりのパスタかなー。

あーあ。

泣き鬼（前編）

「現在、我が国は少々物騒ですのであまり出歩かないことを推奨いたします」

俺たちがとある国の入国審査を受けた後に門兵から言われた一言である。

どういうことか聞こうとしたのだが、門兵は既に自分の持ち場に戻ってしまっていた。

「何でしょうね？」

「うーん、とりあえず観光でもしてみようか。でもさっきの言葉が気になるから俺から離れないようにね」

少しの間街を見て回ったが、景色は平凡と言ったところだろうか。他の国でも見られるような作りの建物が並んでいる。ちらりと見た屋台で売っているものも特に珍しいものはない。

ただ、一つ気になった点があるとすれば。

「なんだかこの国の人たちは何かに怯えているように見えますね。それに人の数も少なく感じます。何かあったんでしようか？」

「あの人に話しかけてみようか」

一体この国で何が起きているのだろうか。俺は大通りの真ん中を歩く青年に話しかけた。

「すみませーん、少し聞きたいことがあるんですけど」

「ひつ……。な、なんだよ」

普通に正面から話しかけただけなのだが、目の前の青年は驚きのあまり小さい悲鳴を上げていた。彼の名誉のためにそのことは触れないでおこう。イレイナは……俺の方を見てにやついていた。なんだ、俺が驚く姿を思い出したとでも言いたいのか。

「この国では今何が起きてるんですか」

「何ってお前知らないのか……？」

「ええまあ。旅人ですのよ」

俺の答えに彼は「そうか……」と呟き、何故か周囲を見まわしてか

ら口を開いた。

「ここ数日のことなんだが、毎日殺人事件が起きてるんだ」

「殺人ですか。それは物騒ですね」

「そうなんだよ。まだ犯人は捕まっていないから怖くてしようがないんだ」

連日起きている殺人事件。確かに一般人からしたら恐怖だろう。俺たちも襲われる可能性があるからもつと情報が欲しいところだ。

「よろしければもう少しだけ時間をいただいてもいいですか」

「いつ襲われるか分からない状況でこれ以上お前らに構っている時間はない！俺はもう家に帰らせてもらおう！」

殺人事件について詳しく聞きたかったのだが、やはり殺人犯が怖いのか青年は足早に去って行ってしまった。

「ええ……」

「まだ昼前なので犯人も動かないと思うんですけど」

全くその通りである。こういった事件は夜に人目に付かない場所で行われているのがお約束ともいえる。ちなみに彼のようなことを言った人が被害者になるのもお約束である。彼が無事に明日を迎えられることを祈ろう。

「とりあえずレストランにでも行って昼食を取ることにはしうか」

「そうですね、ところで奢ってくれたりはしますか？」

「イレイナが食べる料理を俺が決めても良いなら。きのこがたっぷり入ってるのを選んであげるよ」

「……あのー、そろそろ許してくれませんか」

「はて、なんことやら」

そんな会話をしながら俺たちはレストランに行った。この国で殺人事件が起き、怖がった住民たちが外出してないせいお客が俺たちしか店内にはいなかった。

「なんだかレストランを貸し切ってる金持ちの貴族みたいな感じがするねー」

「何おかしなこと言ってるんですか。私たちのような旅人にそんなお金はありませんよ。さっさと決めて注文しましょう」

思ったことを口にしたらイレイナに両断されてしまった。悲しい。メニューに書かれている中から一番食べたいと思った料理を頼む。今回はカルボナーラにした。イレイナは少し迷っているようだった。「思ってたよりも高い……けど一番安いのを頼んでもお腹が……コーヒーも飲みたいですし……」

どうやら財布と相談していたらしい。この前「見てくださいこのパン。『ここ]でしか買えないパン！期間限定販売！』と書かれていたので全部買ってみました。え、どんなパンかですか？よく見ないで買ったので詳しくは知りませんが美味しいに決まっています。……不味い』などとお金をどぶに捨てていたのが効いているようだ。

「すみませーん、カルボナーラを二つにコーヒーを一つください」
「え……？」

俺が勝手にイレイナの分まで注文したのに驚いたのか彼女の口は半開きになっていた。そんな彼女に少し笑ってしまう。

「俺の奢り」
「でもさつき——」

「良いの良いの。俺が食べたい料理を食べてる前で一番安い料理を仕方なく食べてる姿を見せられても困るだけよ」

「……写真の件はすみませんでした」
イレイナがペこりと頭を下げてくる。心なしか彼女のアホ毛も項垂れている気がする。

「何のことを言ってるのかな。知らないね、そんなこと」

「……次は私が奢ります」
「おや、それは楽しみだ」

過ぎたことに対していつまでも怒っているほど俺は器量が小さい男ではない。イレイナの反応を楽しんでただけだ。写真の件はテーブルの上に放置していた俺も悪かったしね。

料理が運ばれてくるまでの間はこれからの予定について話し合い、特に見るものは無さそうなのと事件に巻き込まれたくないから明日にはこの国を出ることに決まった。

運ばれてきた料理を食べている間はこれとって中身のある話を

するわけでもなく、料理の感想を言うくらいだった。

昼食を食べ終わった後はウエイトレスに頼んで数日分の新聞を読ませてもらうことにした。普段なら店や他の客の迷惑になるかもしれないが、今は俺たちしか客はいないので気にする必要はないだろう。

渡された一週間分の新聞の見出しを軽く読み進めていくと、最初の殺人事件が起きたのは五日前のことだと分かった。

最初の被害者は二十代の男性。死因は体を一刀両断されたことらしい。凶器は不明で、鋭利な刃物ではないかと書かれてるし、魔法による風の刃ではないかとも書かれていた。

遺体は路地裏で発見され、そこに残されていた血の量から現場も路地裏だと考えられている。近所の住人は被害者の悲鳴など聞こえなかったと語っており、当初は口を塞がれた状態で殺されたのかと思われた。しかし被害者の顔は恐怖や痛みに歪んだ顔ではなく、何かに驚いたような顔をしていたらしい。

それから昨日に至るまで毎日被害者が出てしまった。どの事件も遺体の状態や現場が路地裏という点から警察は同一犯による犯行と断定したようだ。

「とうとうこたらしい。さっきの青年が道の真ん中を歩いていたのは毎回現場になっている路地裏から距離を取りたいという理由だったんだろうね」

「物騒ですねー」

「他人事だね……。しかしこの事件には不思議なこともあってね。現場の近所に住人のうちの何人かは事件発生前後に子どもの泣き声が聞こえたらしいんだよ」

「子どもの泣き声ですか。とても子どもができるような犯行じゃないと思いますか」

「そうなんだよね」

凶器が鋭利な刃物だろうと風の刃だろうと、殺害方法からそれを扱う犯人は武術か魔法に秀でた人物であることは分かる。少なくとも子どもと言えるような年齢ではないはずだ。なら一体誰が泣いてい

るんだらうか。

「どうやら泣き声がするということからこの殺人鬼は『泣き鬼』と呼ばれているようだ。やっていることに対して通称が情けない感じがするが、かえってそれが住民たちの恐怖を煽っているのかもしれない。」

「新聞から分かるのはこんなところかな。というわけでそろそろここから出ようか」

「その前にコーヒーのお代わりを頼んでもいいですか？」

「……………いいよ」

レストランから出た俺たちは今日泊まる宿を探した。最初はお金を節約するために安宿にしようかと思っただが、防犯のことも考えて少しだけ高い宿を取ることにした。

イレイナは「お金が……」とか言ってたので俺が二人分の宿泊費を払っておいた。ある程度の安全はお金で買えるが、命は買えないのだから出し渋るつもりはない。使えるお金にまだ余裕があるしな。

「カイは良いんですか？」

いつも通り部屋を二つ取り、俺は自分の部屋に荷物を置いて一息ついていたところにイレイナがやってきて聞いてきた。

「何が？」

「泣き鬼のことですよ。あなたのことですから『これ以上犠牲者を出したくない』とか言っただけ泣き鬼を探そうとするんじゃないかと思っただけですけど」

「確かにこれ以上犠牲者は出てほしくないね。だから正直な話、後で街中を見て回ろうかと思っただけ」

これまで泣き鬼は路地裏で犯行に及んでいたが、だからといってこれからも路地裏のみで事件が発生するとは限らない。もしかしたらイレイナが狙われる可能性も……。明日にはこの国を出ていくとしてもできることはやっておきたい。

「危ないですよ、もしかしたら殺されるかもしれません。それでも行くつもりなんですか」

「それでもだよ。とはいえ俺も死ぬつもりはないから安心して欲しい」

「一体何を根拠に安心すれば良いんですか。……指輪の防御機能が発動したらすぐに帰って来てください。それが条件です」

「……分かった」

イレイナは俺の答えを聞いて満足したのか自分の部屋に戻っていった。

俺だって命は惜しいから無理をするつもりはない。だけど俺の隙をついて防御機能を発動させる相手から簡単に逃げられるだろうか。

いや、弱気になつちやダメだな。大丈夫、俺は師匠の下で強くなつたんだ。相手が師匠よりも強いなんてことはないはずだ。

俺は軽く支度を済ませてから宿を出た。



俺は殺人現場である路地裏やそうでない路地裏を一個一個調べていった。しかし、特に泣き鬼の証拠を見つけることが出来ないまま夕方になつていった。

「ここで最後にしようか——って今は一人だった」

ついイレイナがいるつもりで喋ってしまった。彼女が隣にいるのが当たり前のことになつているのだろう。そう考えると今は少し心細くなる。

一度深呼吸をしてから路地裏に足を踏み入れようとした時、俺の耳に何かが聞こえてきた。

『グスン……グスン……』

「？」

誰かの声が出たかと思つて周囲を見渡すが、俺以外の姿はなかった。

「気のせいか……？」

今度こそ路地裏に入ってみると、向かい側から誰かが歩いてくるのが見えた。

歳は八十くらいの白髪の男性だ。杖についてふらふらと歩く様は見てるこちらを不安にさせる。少し気になってしまいが俺は気にしないようにしながら路地裏を進んでいく。

血などは見当たらない、泣き鬼がどこかに隠れている様子もない。どうやらここも外れだったのだろう——いや、泣き鬼が出ないのならそれに越したことはないから外れという表現は違うだろう。宿に帰るときに通る、既に調べた路地裏をもう一度見てみるか。

そのまま路地裏を進み続けて男性とすれ違う瞬間、何かに躓いたのか転びそうになった彼を俺は慌てて受け止めた。

「つと、大丈夫ですか？こんなところ歩いてたら危ないですよ。近頃は物騒ですし」

俺は声を掛けながら男性を立たせようとしたが、男性は何か小声で呟いていた。

「また泣いているのかい？そうか、こいつらがみんなを奪った奴らの仲間なんだね。今日は二人、今からそっちに送ってあげるから泣き止みなさい」

——殺気。

俺は斜め後ろに跳び、さつきまでいた場所から三メートルほど後ろに着地した。

跳んだ瞬間、何かが俺の胴体があつた場所を横切った。躊躇なんてものを感じさせないこちらを殺しに来ている一撃だった。

今の攻撃の鋭さからすると、もしも避けられなかったら俺の体は真っ二つに別れていただろう——ここ数日起きている殺人事件の被害者のように。

つまり、目の前のこの男が連続殺人鬼『泣き鬼』なのだろう。

「——ッ！」

「今のを避けるか」

泣き鬼を見ると、手には刀が握られていた。さつきまでは杖を持っていた筈である。では杖はどこに行つて刀はどこから出てきたのだ

ろうか。

よく観察してみると、刀の柄の部分はさつき見た杖と同じ形をしているように見える。ならば答えは一つ。

「仕込み刀！」

「ご名答。奴らの仲間にしては腕が立つ。私の攻撃が避けられるのは初めてだ。だが殺す。死んであの子たちに詫びるんだ」

何を言っているのか分からない。何故襲われなければならない。奴らとは誰だ、あの子たちとは誰だ。

その答えを考えようとしたが、目の前の殺人鬼は待つてくれない。勢いよくこちらに斬りかかってきた。

「一体何のことだ！」

瞬時に剣を取り出して防御する。人を殺すことに迷いが無い一撃は俺が想像していたよりも重かった。

仕込み刀と打ち合った瞬間に泣き鬼からは見えないように足払いを仕掛けるが、まるで見えてるかのように避けられる。並大抵の者なら今のを食らつてくれるんだけどな！

フェイントとして突然剣の軌道を変えてみても、読んでいたかのようには防がれる。弓で牽制をしたいところだが、彼の速さを考えると剣を仕舞った瞬間に斬られてしまうだろう。

「無駄だ。お前では私には勝てん。覚悟が違うのだ。己のことしか考えない、大した覚悟もないままあの子たちを奪ったお前たちとは違う！」

「何を言っている！分かる言葉で説明してくれ！俺が何をしたって言うんだ、お前たちって誰のことなんだ！」

「盗人猛々しいとはまさにこのことだな！私の眼だけでなく、私の大切なものを全て奪っていったお前たちを私は許すことは出来ない！」

何度目か数えることも忘れた打ち合いが行われる。そこで初めて泣き鬼の眼を見た。その眼には光が無く、視線を動かさないことから恐らくこちらのことなど見えていないのだろう。

「そうか眼が……。ということはまさか音だけでこちらの動きが分かっているというのか」

「だからどうした！私はお前たちに復讐するためだけに生きてきた！」

泣き鬼の過去に悲しい出来事があったのは分かったが、何故か俺たちがやったと勘違いされてしまっている。

まずは気絶させて拘束しないと碌に話もできない。だが普通にやっつけてもこちらの攻撃は全て躲されてしまう。ならば、身を犠牲にしても相手の動きを止めなければ……！

「ハアッ！」

「甘い！」

突撃する俺に泣き鬼は仕込み刀を振ろうとする。このままいけば指輪の防御が発動するだろう。その瞬間に一撃叩きこんで泣き鬼を倒す作戦だ。イレイナにはいろいろ言われるだろうが、泣き鬼を逃がしたり指輪の防御を無駄遣いするよりはマシだ。

「このまま突っ込んでくるつもりか！」

「逃がさな——ッ！」

俺のしようとしていることに気付いたのか泣き鬼は驚きの声を上げた。あと少しで仕込み刀が俺の体に触れるという瞬間、上から何かが降ってきたので後ろに下がらざるを得なかった。

何が降ってきたんだ、あと少しだったのに……。何かが降ってきた地点を見てみると、そこには見覚えのある老人がいた。髪の毛がない頭に皺が刻まれた顔だけを見るとその年齢を感じさせるが、真っ直ぐに伸びた背中からは老いなんてものは感じられない。

「……間髪つてところじやな」

聞いたことがある声でした。その声を最後に聞いたのは数年前、平和国ロベッタの近くにある山の頂上にある家の中でだ。

突如上から降ってきたもの——いや、人物はゴウザン師匠だった。

泣き鬼（後編）

「師匠！どうしてここに」

「野暮用じゃ。まさかお主がここにいるとは思っておらんかったがの」

師匠は泣き鬼の方を向いた。

「お久しぶりですな、院長」

「その声、佇まい。喋り方は少し変わってますが憶えていますよ、ゴウザンさん」

師匠は何故か泣き鬼に対して親しげに話しかけていた。しかも泣き鬼の方も師匠のことを知っているようだった。

「師匠、知り合いなんですか。しかも院長って……」

「うむ、今から数十年も前のことじゃ。この人はある国で自分のお金で孤児院を開いておつてな。子どもたちからとても好かれるような優しい人じゃった。儂も当時は若く、腹を空かせて倒れそうな時に助けてもらったのじゃ」

「あの頃のゴウザンさんは元気が無さそうでしたが、今は大丈夫そうで安心しました」

師匠と話をする泣き鬼の口調は先ほどまでの彼と同一人物とは思えないほど落ち着いたものになっていた。

泣き鬼が喋り終わった後、師匠は俺の方を見てきた。

「……儂がカイとの修行を終えた後、院長の孤児院はどうなったか気になって見に行った」

「……どうなつてたんですか？」

「無くなつておつた。何があつたのか調べたところ、賊に襲われたということだけが分かつたのじゃ。院長や子どもたちの行方は分からなかつた」

「それって一体——」

「ええ、ええ！そうです。あなたが去つた数ヶ月後の夜のことでした」
院長と呼ばれた泣き鬼は俺たちの会話に割って入り、彼は己の過去

を語り始めた。

「みんなー、もう寝る時間なので部屋に戻って寝ましょうねー」

「はい。院長、おやすみなさいー」

私は親に捨てられた子どもたちを放っておけなかった。なので己の全財産を使って孤児院を開くことにした。十人の子どもたちと一緒に暮らしていた。

孤児院での暮らしは裕福とは言えなかった。だが、子どもたちの笑顔を見ているだけで幸せだった。

「よし、全員部屋に戻ったね。後は残っていた書類を片付けるだけと」
私は自分の部屋に戻って書類仕事をしていた。全ての書類を片付けた頃には既に夜遅い時間だった。

寝る前にトイレに行くかと廊下に出たところで異変に気付く。

「入口のドアが開いてる……？閉めてたはずだけ——」

入口に気を取られていた時、背後から肩を掴まれて無理やり振り向かせられ、眼を切られたのだ。

「——うわあああ！痛い！眼が！何も見えない！」

「うるせえ！静かにしてろ！」

「グッ——」

全く聞き覚えのない声の持ち主に私は殴られ、気絶してしまった。目が覚めた時、自分の体は椅子に縛られているのだと気付いた。

「——！——！——！」
口は布で喋れないようにさせられ、声にならない声はその場に響いた。

体を動かしてみた。縄は解けない。

一体何が起きてるのか分からず、考え込んでいた私の耳に子どもたちの声が聞こえてきた。

「ヤダー！ヤダー！どこに連れてくのー！」

「院長！助けて！」

助けを呼ぶ子どもたちの声。すぐにでも助けに行きたかった。体を動かす。縄は解けない。

「院長！院長ツ！院長ーッ!!」

「うるせえガキだな。静かにしやがれ！」

その後、聞こえてきたのは人を殴る音と、子どもの悲鳴。

何をするんだ、やめてくれ。その子たちが何をしたって言うんだ。

私が何をしたって言うんだ。平和に暮らしていただけなのに！

必死に体を動かす。縄は解けない。

「兄貴、このガキ動かなくなつちまいやしたぜ」

「チツ、脆すぎんだろ。煩いしこれだからガキは嫌いなんだ。他のガ

キ共は殺すんじゃないやねえぞ！傷もだ！売り物にならなくなつちまうか

らな」

耳を疑った。

動かなくなつた……？売り物……？誰か殺されたのか？奴隷とし

て売られようとしてるのか？

必死に体を動かす。縄は解けない。

「院長！どうして助けてくれないの！どこにいるの！院長！」

「うわーん！」

必死に体を動かす。縄は解けない。

「嫌だ！院長と一緒に良い！」

「ここは僕たちの家なんだ！どこにも行きたくない！」

子どもたちが外に連れていかれる音が聞こえる。

必死に体を動かす。縄は解けない。

「グスン……」

馬車の動く音が聞こえた。

必死に体を動かす。縄は解けない。

必死に体を動かす。

縄は解けない。

どれくらい時間が経ったのかは憶えていない。

「——ですか！大丈夫ですか！」

「……………」

「おい来てくれ！こっちに生存者がいるぞ！……この院長だ！」

私は病院に運ばれ、孤児院に起きたことを教えられた。

孤児院に賊が入り、十人いた子どもの内三人が孤児院の中で殺されていた。他の七人の子どもの行方は分からないらしかった。

政府はこの事件の犯人を捕まえてくれると言ってくれた。

「何か聞きたいことはありませんか」

「……子どもたちの、子どもたちの顔を見せてください。お願いします」

「院長、あなたの眼は……。いえ、分かりました」

医者に連れて行ってもらった場所。そこには三人の子どもの死体があり、私は一人一人の顔を触って確かめた。

「この子は最年長の……みんなの手を引いてくれてた子……。この子はいつも私の後ろに隠れてた子……。この子は最近逆立ちができるようになったと私に自慢してきてくれた子……。あ、ああああ……………」

その後、私は国の端っここの小さな家に住むことになった。一人きりで、何かをするわけでもなく。

それから何年経っても賊が捕まったということや子どもたちが見つかったという報告を聞くことはなかった。

政府の方に何度も話を聞きに行った。しかし、返ってくるのは現在調査中という事務的な対応のみ。

私は静かな家の中で絶望していた。そんな時のことだった。

『グスン……………グスン……………』

「この声は死んだはずの……！どこだ！どこにいるんだ！」

『グスン……………院長……………みんなのことを……………』

「みんな……？　そうか、奴らに捕まってるみんなのことか！　助ける！　私が絶対に助けてあげるから！」

『グスン……違……う……』

「ああそうだね！　助けるだけじゃだめだね！　みんなを酷い目に合わせた奴らは私が全員殺してあげるから！」

『院長……』

そうして私は私から全てを奪った奴らに復讐するために力を付けた。目が見えないが、毎日体を鍛えたし刀の振り方だって練習した。何十年も掛けて。

『院長……こっち……』

私は声に導かれるまま国を渡り歩いていた。仕込み杖を手にして。

あの子たちを見つけたことは出来なかったが、標的を見つけることは出来た。

『院長……その人を……』

私は声が指し示した人物とぶつかった。

「おい！　痛いじゃねえか！　どうしてくれんだ！」

少し年老いていたが、その声に聞き覚えがあった。

あの夜、私たちの全てを奪っていった罪人だ。

「これはすみません。お詫びと言っては何ですが、私のおききプレゼントしましょう。どうぞこちらへ……」

「なんだよ、話が早えじゃねえか。へへへ」

疑いもしないで私の後ろを付いてくる罪人を路地裏まで誘い込んだ。

「さて」

「なんだよここ？　ただの路地裏じゃねえかよ。おい、どういふことか説明しろよ」

「これが私からのプレゼントだ！」

「なっ——」

一閃によって罪人はあの子たちのところへ送られた。

『まだ……院長……』

「何？　まだいるのかい？　ならば教えてくれ！　私が殺すべき罪人を！」

それから私は声に導かれるまま罪人をあの子たちのところへ送り続けた。

数年掛かってしまったが、あの夜に聞いた賊全員を送り終えた。

『グスン……グスン……』

「どうしたんだい？何故まだ泣いているんだい？賊は全員送ったはずだよ」

『グスン……グスン……』

「そうか……。まだいるんだね！みんなを苦しめた奴らが！」

私は様々な国を渡り歩いた。

『グスン……グスン……』

「おじいさん、大丈夫ですか？転びそうでしたけど……。家まで送ってあげましょうか？」

「ああ、分かっている。今から送ってあげるからね……！」

「え？」

斬。

『グスン……グスン……』

「ちよつと大丈夫？酔っぱらってるのかしら？水でも持ってきてあげようか？」

「お前もあの子を苦しめた罪人か！」

「は？」

斬。

私はあの子を泣かせている奴らを切り続けた。

そして、今日もあの子は泣いていた。



俺は泣き鬼の昔話を聞いて絶句していた。

孤児院の院長の身に起こった悲劇、大切なものを奪った者たちへの復讐。その部分はまだ理解できる。理解できないのは、復讐を誓った無関係の人たちを殺した原因。

「死者の声を聞いたと……?」

死んだ人間が喋れるわけがない。生きている人たちからすれば当たり前前のように知っていること。

「そうだ！あの子の声があったからこそ私はここまでできた！私はあの子を泣かせるお前を斬らねばならない！」

死んだあの子とやらの声なんて聞こえるはずがないと言いたいが、路地裏に入る前に聞いた気がする声が脳裏をよぎる。

「そうはさせませんぞ。儂はあなたを止めるために痕跡を追い、この国に辿り着いたのですから」

泣き鬼の前に立ちはだかる師匠。

「……いくらゴウザンさんとは言えども、私の邪魔をするのは許せませんよ?」

「ゴミ屑同然だったあの時の儂にさえ優しくしてくれたあなたに、これ以上無関係の人たちを殺させるわけにはいきませぬ」

「そうですね。ならばあなたも同罪だ！あの子たちのところに行つて詫びなさい！」

猛スピードで接近し、師匠に切りかかる泣き鬼。

それに対し師匠は特に慌てた様子もなく取り出した刀で防ぐ。

「ほう。強いですね」

「あなたこそ、元孤児院の院長とは思えませぬ。それ程までにあなたの憎しみや絶望が大きかったということなのでしょう……。しかし、儂には勝てませんぞ」

「私は！あの子たちの想いを背負っているんです！だからこそ、私は負けない！」

路地裏という建物に挟まれた狭い空間。泣き鬼は壁を何度も蹴つて加速していく。

「あなたは勘違いしている！儂が知っているあの子たちなら、あなたに人を殺して欲しいなどと言うわけがない！」

「この一撃で終わりですー！」

ギリギリ目で追える速さの泣き鬼が、師匠の心臓を狙った突きを放つ。

「泣いていたのも！人殺しをするあなたに心を痛めていたからじゃ！」

師匠は両手で仕込み杖の刃を左右から挟み込み、そのままへし折った。

「なっ——」

「あなたの復讐はもう終わっているのです！目を覚ましてくだされ！」

呆気にとられる泣き鬼の頭に頭突きをする。泣き鬼はふらふらと後退ってから倒れた。気絶しているようだった。

師匠は泣き鬼を縄で縛って動けないようにした。

「……今まで気付くことが出来なくて申し訳ございませんでした、院長」

『ありがとう……』

どこからか安心したような声が聞こえた気がした。辺りを見回してみるが俺たち以外の姿はなかった。

その後、師匠は泣き鬼をこの国の警察に引き渡した。

俺は久しぶりに会った師匠と話がしたく、その旨を伝えると師匠は自分が宿泊している部屋に案内してくれた。

部屋に入った俺と師匠は備え付けの椅子に座った。

「師匠、今日はありがとうございました」

「お主の実力なら簡単に院長を倒すことは出来たはずじゃ。けれど彼の気迫に押され、戦闘に集中出来ていなかったようじゃな。まだまだ修行不足じゃ」

「……はい」

師匠の言う通り、俺の力を十分に出せていたら無傷で泣き鬼に勝っていただろう。しかし、俺はあの時、指輪の効果で防がれるとはいえ自ら攻撃を食らいに行った。そうしないと勝てないとその時は思っただからだ。

「ああいった手合いの言葉など気にする必要などない。どうしても話をしたければ殴って大人しくさせてからでもよい。お主にはまだ難

しいのかもしれないがのう」

「……………」

「まあよい。儂はもう暫くこの国に残って院長と話をするつもりじゃ。まともに話を聞いてくれるかは分からんが今日よりはマシじやろう。…………お主はどうする？」

「この国は見るところもなさそうですし、明日には出ていくかと。ところで泣き鬼——院長はどうなるんですか？」

「まあ極刑じやろうな」

「そう、ですよね…………」

人を殺しておいて安く済むわけがない。殺された人の中には彼の復讐とは無関係の人もいた。仕方のないことである。例えどんな理由があつたとしても。

「連れ去られた孤児院の子たちはどうなつたんですか？」

「…………院長は眼が見えないから調べることが出来なかつたようだが、全員奴隷として売り出された後まともな扱いを受けずに亡くなつておる」

「それは…………救いのない話ですね…………」

「そうじゃな。自分の大切なものを守ることが出来ず、全て失つたのじゃから」

「大切なものを守る…………」

俺は大切なものを守ることが出来るだろうか。

大切な人の顔が脳裏に浮かぶ。いつも一緒に旅をしている女性の顔だ。

「不安そうな顔じゃな。何を考えているかはおおよそ分かる。それはお主次第と言つたところじゃのう」

「顔に出てましたか…………。師匠は孤児院の子たちが復讐を望んでないと言つてましたが本当にそうなんでしょうか？」

「……………」

師匠は何も答えない。きつと続きを促しているのだろう。

「俺は、自分を殺した相手を憎まないわけがないと思います」

「…………儂が知っている院長の子どもたちは優しい子ばかりじゃつた。」

自分を殺した相手が憎くないわけないが、それ以上に院長のことを心配しておったのじやろう」

「でも彼はいないはずの子どもの声を聞いて復讐を誓いました。けど本当に幽霊なんているんでしょうか？」

「儂は長い間生きてきたが、幽霊はいると考えておる。……そしてすれ違いだったのじやろう。一人になって落ち込む大好きな人を元氣付けたかったから子どもは話は話しかけただけなのかもしれん」

「……………」

「実際のところはよう分からん。だが、そうであって欲しいとは思う。すれ違いで人を殺すというのも悲しい話じゃがな」

「なるほど、大体分かりました。……ところで師匠は人を殺したことがあるんですか？」

俺は修業時代に怖くて一度も聞いたことがない質問をする。

「ある」

さも当たり前かのように師匠は答える。

根拠はなかったのだがこの答えが返ってくるのは確信していた。今の質問は次の質問——本当に聞きたいことのためのものだ。

「……それは自分が殺したかったからですか、それとも仕方なかったからですか」

「これ以上何も言う気はない。その答えは己で考えるんじやな」

師匠は昔の話を聞かせてくれることはない。理由は分からないが今回もこれ以上は何も教えてくれないだろう。

師匠が自分の欲望のために人を殺すような人物ではないのは分かっている。それを教えてくれないことも……。それでも聞かずにはいられなかったのだ。

せっかくの師匠との再会ではあったのだが今日は疲れたので自分たちが泊まる宿に帰ることにした。

「……ありがとうございます。また会えるのを楽しみにしています」

「うむ、これからも精進するんじやぞ。大事な人を守るために」

俺は師匠に一度頭を下げてから宿を出た。

「……………」

イレイナがいる宿に戻る道の途中。考えてしまうのは、俺が人を殺す機会が来てしまうのではないかということについて。

これまで旅をしていて誰かに襲われるということはあったが、気絶させたり無力化させることでどうにかなってきた。

しかし旅を続ける以上何が起こるか分からない。相手が善人であれ悪人であれ、殺す以外の選択肢が無かった場合俺はどうするのだろうか。躊躇いなく殺すのか、それとも嫌だ嫌だと言い続けるのか。

どんなことを思い、どんな顔をするのか想像できない。これ以上考えたくもない。だが考えてしまうのだ。

俺は一度頭を振って答えを求めるように空を見上げた。

月は雲に隠れており、見ることは叶わない。誰も答えを教えてはくれない。

視線を自分の手に移して俺は願う。

——ああ。できればそんな機会、来ないで欲しい。

お酒を飲むペースには注意しよう

「問題です。天使っぽくもあり、悪魔っぽくもある魔女は誰でしょう？」

「……………」

「そう、私です」

のどかな田舎道を走っている時にふとイレイナが変なことを言い出した。

「天使の部分は同意するとして、イレイナはお茶目なところがあるから悪魔というよりは小悪魔かなー」

「うるさいですよ」

「俺は何っばいかな？」

「…………サラリーマン？」

「うん、服装だけ見てるねそれは。もっとう、姫様を守る騎士とかないの？」

「私は守られるだけの存在ではないのでそれはないですね」

なかなか手厳しいものである。

俺としてはイレイナには安全な場所において欲しいのだが、優しい彼女としては俺だけ戦うことを快く思っていないようで、この前の泣き鬼の時もそんな元気がない顔をして帰ってくるなら自分も連れて行くと怒られてしまった。

確かに魔女であるイレイナがいれば百人力だ。しかし俺は自分の実力に絶対の自信があるわけではない。俺のミスでイレイナが傷付いてしまうなんてことだけは避けたいから何が起きるか分からない場合は彼女を連れて行きたくはないのだ。

ゴウザン師匠との修行で俺も強くなったのは分かっているのだが、それを全力で発揮できた覚えがあまりない。できたのは師匠との修行の時や猫が称えられていたあの国にいた時くらいだろう。誰かに俺は強いと自分で言っている時は俺自身にも言い聞かせているのだが、やはり自信は持てない。

「見えてきましたね」

「……そうだねー」

イレイナの声に思考を中断する。少し先には二つの小さな村が見える。そこは今回の目的地であるぶどう酒村と呼ばれている村たちだった。

村の片方に訪れてみると、村人たちは俺たちのことを大歓迎してくれた。いや、俺たちというよりはイレイナの方ばかり見ていたような気がする。

村人に案内されて村長の家に行くと、そこには初老に差し掛かった老人がいた。きつと彼が村長なのだろう。

「しかしお主、めんこいのう」

「あー、もしかして俺って可愛く見えます?」

「いや、魔女殿に言ったんじゃが」

「私が可愛いのは知ってます」

………まあ、今のは俺が悪いだろう。この村の人たちが俺に全然興味を持ってくれないから出しゃばったとかそんなのではないとだけ言っておこう。誰も俺の方に視線を向けなくて寂しかったとかではない。

「この村ってぶどう酒が有名なんですよね?」

「然り。ぶどう酒は我が村の特産物であるぞ。……して、お主ら、結構

若いが、ぶどう酒は好きかね」

「んー」

「俺は酒に弱すぎるので飲めないんですよねー」

そう、俺は酒に弱いのだ。昔の話だが師匠の家にある酒を間違って飲んでしまったことがあるが、一口飲んだだけで気を失ってしまった。それくらいダメなのだ。

ちなみに父さんも酒に弱い。母さんも嗜むくらいしか飲まないから遺伝なのだろう。

今回はイレイナがぶどう酒を飲んでみたいらしく、だからこそ美味

しいと噂のこの村を訪れたのだ。村長が語るには自分たちの村のぶどう酒の方が美味しいらしいが、噂だとどちらも同じ味だと聞いた。

「あっちの村といたら強情なものでな、我が村に負けたくないらしく、最近、あることをし出したのじゃ！けしからんことになー！」
「へへえ」

競合相手に勝つためにはいろいろ工夫するのは当然なのではないだろうか。とはいえぶどう酒に誇りを持っている人たちだからこそ味だけで勝負をして欲しいとか思っているのかもしれない。

「それがこのぶどう酒じゃー！」

村長はテーブルの上に大きな音を立てながら一本のワインボトルを叩きつけた。そのボトルに張り付けられたラベルにはぶどうを踏んでいる女性が印刷されていた。

『わたくしが愛情を込めてぶどうをふみふみしました』『原産地：あっちの村のぶどう踏み乙女のローズマリーちゃん』とも書かれていた。あっちの村というのはもう一つの村のことで、この村はこっちの村と違うらしい。ややこしい。

言いたいことはいろいろあるが、このラベルにしてからあっちの村のぶどう酒の売り上げはフェチズムやら何やらで伸びているようで、こっちの村は困っているらしい。

まあ結果が出ているように、良い手であるのは確かだ。味が同じぶどう酒なら女性が印刷されているラベルの方を選ぶ人は多いだろう。俺はそういうところはあまり気にしないからどちらでも良いのだが。「では可愛い女の子にぶどうをふみふみさせて対抗してみたらどうですか」

「よくぞ言った！その通りである！めんこい乙女にぶどうをふみふみさせれば、我々は勝てるのである」

「は、はあ……」

「というわけでお主ーやってくれ」

どうやらこっちの村のぶどう酒を買うことになりそうだ。

イレイナが返事をする前に家から飛び出た村長は大声で彼女がぶどうをふみふみしてくれと言っていた。こっちの村の男性たちはそのことに大喜び、女性たちの目は冷めきつたものだった。怖い。「さあ皆の者！でっかい桶とぶどうをありったけ持って来い！死ぬまで踏ませるぞ！」

「応ッ！」

「カイ、何やってるんですか」

ぶどうを持つてくるのさ。イレイナがふみふみしたぶどう酒なら俺も頑張つて飲んでみようかと思う。ククク、楽しみだ。

俺は村人たちと一緒にぶどうを取りに行き、戻ってきてみると何故かイレイナがぶどう踏みやる気になっていた。村長に聞いてみると、ローズマリーちゃんが来てイレイナのことを馬鹿にしていったらしい。

ぶどうをふみふみするためイレイナは赤いメイド服のようなものに着替えていた。この村の伝統なのだとか。即座に写真を撮りました、ありがとうございます。あつ、睨まれた。

イレイナはぶどうがたくさん入った桶の中に足を下ろしてぶどうをふみふみし始めた。

「死ぬ……死ぬ……死ぬ……死ぬ……！」

「ええ……」

なんか背後からどす黒いオーラみたいなのが見える気がする……。きつとストレスが溜まっていたんだろうな……。今度俺の奢りで好きなものを好きなだけ食べさせたりするべきなのだろうか。

桶の周りで男性たちが歓声を上げていたが女性たちの姿がないことに気付いた俺はどこにいるのだろうかと探してみると、少し離れた場所で大きな桶の中にぶどうを入れていた。

「何やってるんですか？」

「あら、あなたはさっきの魔女様と一緒にいた人ね。私たちはいつも

通りのラベルのぶどう酒を作ろうとしていたのよ。あつちはたくさん作れないだろうしねえ」

「なるほど。しかしこの量のぶどうを踏むのって大変だと思いますし、よろしければ手伝いましょうか？ やったことはないですけど、俺は鍛えているので自信はありますよ」

「……アリね。ならやってもらおうかしら」

何がどうアリなのかは分からないが、俺もぶどうをふみふみするこ
とになった。

俺も着替える必要があるかと思っただけどスーツのままが良いらしい。というか着替えないで欲しいって言われた。そっちの方がそ
るらしい。

俺はズボンの裾を上げて裸足になり、足を洗ってから桶の中に足を
下ろした。

過重力を掛けたままだったからか、ぶどうの粒は勢いよく潰れてい
き大量の果汁を吹き出した。ちよつと強かったかもしれないので過
重力を弱めておく。

後は踏み続けるだけで良いのか聞こうかと思つて女性たちの方を
見ると、何故かカメラを用意していた。

「何です？ そのカメラ」

「あなたのことを撮るために決まってるじゃない」

「何故取る必要が？」

「あなたの写真を使ったラベルを作るためよ」

「さつきはいつも通りのラベルのぶどう酒を作るとい話だったはず
ですけど……」

「予定変更よ。あなたなかなかカッコイイし女性に売れるわよ。ふふ
ふ、フェチズムをくすぐるわね」

この村の男性も女性もあんまり変わらないのかもしれない……。
それから俺はぶどうをふみふみし続けた。結構踏めたと思うので
終わりにさせてもらうことにした。

「どれくらいの量のぶどう酒ができそうですか」

「そうねえ、ワイン樽一つと半分くらいかしら。このペースでこの量

は凄いわよ。これからもここで働かないかしら?」

「俺は旅人なので遠慮しておきます。そうだ、さっきまで向こうでイレイナがふみふみしてたぶどう酒を三本この住所に送ってくれませんか」

「手伝ってもらったからそれくらいなら良いわよ。でもお金は頂戴ね」

「しつかりしてますねー」

俺の実家の住所が書かれた紙と金貨数枚を渡しておく。ぶどう酒を買うには多い金額だがこれくらい出しておけば確実に送ってくれるだろう。

イレイナと合流しようと思つて指輪に魔力を込めたところ、彼女はこつちの村とあつちの村の間にいるようだった。ぶどう踏みの乙女の姿からいつも通りの姿に着替えてどこかに行くのは見ていたのだが何故そんなところに?

彼女がいる場所まで向かってみると、ローズマリーちゃんらしき人物が縄で縛られていた。その様子に気付いた二つの村の村人も集まって来ていた。

俺はこうなつた経緯を聞くために片手にワイングラスを手にしたイレイナに近付いた。

「何があつたんだい?」

「どうやらあつちの村の人たちは産地偽装をしていたんですよ」

「産地……?」

「あのローズマリーさんが描かれていたぶどう酒はあつちの村の男性たちが踏んで作っていたんですよ。彼女が一人で踏んでいるにしては販売されているぶどう酒の数が多かったですからね」

産地つてぶどうの産地じゃなくてあのラベルに書かれていたぶどうを踏んだ人の方ね。確かに書かれていたけど一瞬そのことを忘れていた。

「……いや、それはね、なんというか……その」

「というよりローズマリーさん。よくもまあ、男たちに無理やり作らせたぶどう酒を美味しそうに飲めますよね。罪悪感とか不快感とか

ないんですか?」

「あ、それは大丈夫。かなり前にわたくしがふみふみしたやつだから」
「それは?かなり前?」

「……しまった」

つい本当のことを言ってしまったようだ。原産地にするんじゃないかと『こちらはイメージです』みたいな感じにしておけば良かっただろうに。

二人の会話を聞いたこっちの村の村人たちは怒り、ぶどうをローズマリーちゃんに投げた。ぶどうの粒のほとんどはローズマリーちゃんに当たったが、イレイナの方にもぶどうの粒がいくつか飛んできていたので彼女に当たる前にキャッチした。

ローズマリーちゃんにぶどうの粒が当たったことであっちの村の村人たちも怒り、ぶどうの粒を投げ始めた。こっちの村とあっちの村の間にいる俺たちの方にもぶどうの粒は飛んでくる。かなり数が多いので俺は自分の体を盾にしてイレイナにぶどうの粒が当たらないようにする。

ローズマリーちゃんは今回のことを反省して欲しいのでそのままにしておこう。

「……どうしますのよ、これ」

「……………」

「しばらく耐えるしかないか……」

俺のスーツがぶどうの匂いまみれになっていき、一度イレイナを連れてどこかに行こうかと思って振り返ってみると、彼女は杖を取り出していた。

「……ふふ。うふふ。本当にもう……さては皆さん、私たちを馬鹿にしていますね?」

「……イレイナ、何しようとしてるの?ちよつと——」

俺の問いに答えることなくイレイナは杖を振るう。

その瞬間村人たちが投げたぶどうの粒や、まだカゴに入っていたぶどうが村人たちに向けて発射される。

その速度は普通に投げるよりも何倍も速く、もはや弾丸と言っても

過言ではないぶどうの粒に当たった人たちが次々と気絶していくのが見えた。しかもイレイナはワイングラスに入ったぶどう酒を飲み続けている。

「ははーあははははははーははははははははははー！」

「イレイナ!?ぶどう酒を一度に飲みすぎ！」

「何ですかあ?邪魔するんですかあ?あなたも困った人ですねえ」

イレイナからワイングラスを奪おうとするが、その前に彼女は俺にまでぶどうの弾丸を飛ばしてくる。

「うおおおっ！」

俺は避けたり盾を出して防いだりするが、流れ弾が村人たちに当たってどんどん気絶していった。



イレイナによる攻撃が止まったのはその場にあるぶどうの粒を全て撃ち切り、村人全員が気絶してからだだった。

弾が無くなったことでイレイナに近付くことが出来たのだが、近付いた瞬間彼女が崩れ落ちたので慌てて受け止める。顔を見みると満足そうな顔をして眠っていた。

「ごめんなさいもうしません」

「ん?」

足元の方から声が聞こえてきたので見てみると、ローズマリーちゃんが涙目になってうわごとのように眩いていた。

「……まあ、これからは真面目にぶどうをふみふみするのがいいんじゃないですか?あとイレイナを馬鹿にしたようなので縄は誰かほかの人に解いてもらってください。それではさよならー」

俺はそう言うってからイレイナを背負って村長の家に行き、魔法で荷物を仕舞い、スーツに染み込んだぶどうの果汁を取り除いてから村を出た。

「ん……」

田舎道を歩いている内にすっかり日が変わり、日が昇り始めた頃。ようやくイレイナが目を覚ました。

「あれ……私は……」

「おはよう」

「おはようございます……」

彼女はまだ寝惚けているようだった。

「カイ……。私の顔って微妙ですか……。？子どもみたいな体型ですか……。？」

「そんなことはないよ」

「そうですか……。ならよかったです。えへへ……」

イレイナは俺の答えを聞いて嬉しそうにしてから再び眠ってしまった。ローズマリーちゃんに馬鹿にされたのはそういう部分なのね。

心配する必要なくイレイナは可愛いし、子どもみたいな体型だなんて俺は思ったことはない。まるで天使だと思えるくらい魅力的な女性だ。

そんな人と一緒に旅をしている俺は幸せ者だよ。いつか故郷に戻った時、一緒にぶどう酒を飲みながら今回の話をしたいものだ。俺は酒に弱いけど、その時は頑張ろう。

まずはイレイナに酒を飲むときは注意するように言わないといけないけれど。

「ぐう……。カイは強いです……。大丈夫……」

「……………」

「私を……信じて……むにゃ」

俺はまだまだ未熟だ。けどもう少しだけ自分を信じてみるべきなのかもしれない。どんな危険な状況でも隣にいるイレイナを守り切れるだけの力は俺にはあるのだと。

「いつかまた俺の弱いところを見せるかもしれないけど、その時は許してね。イレイナ」

「……もう食べられません……。すぴー」

ありがとう。

「母さーん、何か届いたよー」

「あら、何かしら」

平和国ロベッタにあるカイの実家に『こっちの村』という変な名前の村から荷物が届いた。

「開けてみようか。僕が開けるから何かあったら魔法でよろしくね」

「はいはい」

危険物の可能性も考慮してカイの母は杖を取り出し、父は箱を開ける。

箱を開けても特に爆発したりはせず、中に入っているものを取り出してみる。

箱の中に入っていたもの。それは六本のぶどう酒が入ったボトルだった。

「これは……イレイナちゃんね」

六本の内三本がイレイナの写真が印刷されたラベルのボトルだった。

「変な恰好してるね。なになに、『私が憎悪とか苛立ちとかを込めて作りました』『原産地：灰の魔女のイレイナさん』だって。何かあったんだろう?」

「人って原産地になれたかしら?」

二人して首を傾げるが、答えが見つかるわけではなかったので残りの三本も見てみることにした。

「なんとなく予想はしてたけどこっちはカイね」

残りの三本はカイの写真が印刷されたラベルのボトルだった。

「こっちはいつも写真で見る姿のままだね。なになに、『僕が皆の笑顔を思い浮かべながらふみふみしました』『原産地：旅人のカイさん』だって。なんで一人称が僕?」

「ふみふみって何かしら?」

再び首を傾げるが、やはり答えは見つからない。

「三本ずつあるってことは一本ずつ僕たち、ヴィクトリカさんたち、本人たち用って感じかな」

「きつとそうよ。でも私たちのボトルを開けるのはカイたちが帰って来てからにしましょう」

「僕は飲めないから君に任せるよ。じゃあ僕は今からヴィクトリカさんのところにこのぶどう酒を一本ずつ渡してくるね」

「行ってらっしゃーい」

カイの父はボトルが丁度二本入るくらいの大きさの箱にカイとイレイナのラベルのボトルを入れ、その箱を持って家を出ていく。

「さて、このボトルは大事に仕舞っておかなきゃね」

カイの母は四本のボトルを地下に持って行った。

こうして、この六本のボトルは二つの家で大事に保管された。

カイとイレイナがそれぞれ印刷されたラベルのぶどう酒は数が非常に少なく、マニアの間ではこの二種類のぶどう酒を両方とも持っている者は存在しないと言われたり言われなかったりするものであった。

物々語：物だらけの国と幸せ物（前編）

『十年もの間、妻の帰りを待っている男性に会いました。国と国の間にあるベンチに一人座って帰りを待つその姿に、俺は尊敬の念を抱きました』

メモ帳にペンを走らせる。

『俺も愛する人の帰りを信じて待てるような人間になりたいと思いました』——と

「何書いてるんですか？」

隣にいるイレイナが俺の様子を見て話しかけてくる。

「今度両親に送る手紙に書くことの下書きをしてたんだよ」

「それ今やる必要ありますか？走ってますよね、今」

そう、俺は現在森の中を走っているのだ。メモをしながら。

「移動とメモを同時に行うことで後で他のことに時間を回せるのさ」

「木にぶつかっても知りませんよー」

そんなヘマをするほどメモに集中しているわけではないので――

おっと、木の枝にぶつかりそうだった。危ない危ない。

「……………」

「そんな残念な人を見るような目で見るのはやめて」

俺はイレイナの視線を気にしないようにしながら続きを書こうとするが、空から水滴が一粒、二粒と降ってきてメモ帳を濡らしていく。

「おや」

「雨……………ですか」

雨の勢いは強く、こうなった以上メモを書き続けることは叶わないので大人しくメモ帳を鞆に仕舞い、傘を取り出す。

俺はほうきで飛ぶイレイナの隣まで近づき、彼女を傘の中に入れる。

「さ、少し急ごうか」

「…………魔法を使えば雨を防ぐことくらいできるので私のことは気にしなくてもいいんですよ。私のことを考えてくれるのは嬉しいですけどカイの肩が濡れますよ」

「このくらい平気平気。それにいつ止むか分からない雨に魔力を使い続けるのは良くないでしょ?」

「はあ……分かりました。風邪ひいても知りませんからね」

密かな自慢なのだが俺は一度も風邪をひいたことがないのだ。ゴウザン師匠と一緒に真冬の湖の中に潜って修行をしたこともあるがそれでも元気なままだった。

風邪をひかせる魔法があれば俺も風邪をひくのかもしれないがそんな魔法があるとは思えないので考えるだけ無駄だろう。いや、でも嫌がらせ目的で開発している人もいるかもしれない……。

イレイナが濡れないようにするのと同時にくだらないことを考えながら森の中を進んでいると、運が良いことに国を見つけることができた。

雨が降っている中これ以上外に居続ける理由もないので俺たちは入国しようと門を叩いた。

「すみませーん、開けてくださーい!」

門には木の枝や蔦が這っており、年季を感じさせるものだった。あまり手入れはされていないのだろうか?

同じようなものを以前見た気がする。何も問題が起きなければいいのだが。

少ししてから門は開き、門の向こうでは一冊の本が開いた状態で蝶のように羽ばたいていた。

『……………』

本が出迎えてくれるというのは初めてだ。本に旅人を迎えさせるのがこの国の文化なのか、それとも門兵が本の姿に変えられてしまったのだろうか。それは国の中を見てみないことには分からない。

新しい体験に心を躍らせるべきなのか、それとも未知の出来事に対して警戒するべきなのだろうか。

「……………」

「あ、どうも。雨宿りさせてもらえませんか?」

警戒することにした俺に対し、イレイナは心を躍らせている——のではなく早く雨宿りしたいだけのようだ。

『……………』

目の前の本は一度だけ頷くように体……？を上下させてから国の奥へ進んでいった。

「ついて来いってことかな？」

「そうなんじゃないでしょうか。ありがとうございます」

イレイナがお礼を言ってから俺たちは本についていく。門を越えて完全に国に入った時、背後で門がぎぎぎと軋む音を出しながら閉まった。

他の国でも俺たちが通った後に門が閉まることはよくあることだから普段は特に気にならないのだが、今は閉じ込められたように感じた。



国の中に入って見たものの人の姿は一切なく、目に入るのは古い民家や道の上に転がっている物たちだ。

壊れた時計や椅子、割れた皿などの——直せばまた使えるような物ばかりで道は溢れかえっており、いくつか魔法で手元に呼び寄せて見ると、そのどれもが汚れてはいるが上物であるのが分かった。

「それどうするんですか？」

「直してみるよ。勿体ないからね」

俺がイレイナの質問に答えると彼女は「そうですか」とだけ言って視線を俺たちの前を進む本に戻した。イレイナはここにある物にあまり興味がないみたいだ。

本が案内してくれたのは道中で見た民家同様古い宿屋だった。入り口に『宿屋』と書いてある看板が落ちており、このままでは踏みそうなので邪魔にならない位置に魔法で動かしてから中に入った。

「……………なにこれ」

「……………」

宿屋の中では本だけでなく壊れた椅子やほうき等が動き回っており、俺たちの存在に気付くとその場で上下に跳ねた。その行動にどん

な意味が込められているかは分からないがいきなり襲ってくるわけではないので少しだけ警戒を緩めても良いのだろうか。

その後は本にそれぞれが泊まる部屋を案内された。俺とイレイナの部屋は隣同士だから何かあってもすぐに駆け付けることはできるだろう。

本がいなくなった後に部屋の中にあつた修理された形跡があるベッドや椅子が動き始めたが俺は気にすることなく道中拾つて来た物の修理でもしようかと思つた時、廊下の方から大きな物音が聞こえてきたので一度手を止めて扉を開けた。

部屋の外では先ほどまでそこになかつた家具の姿があつた。イレイナのいる部屋にあつた物だろう。

俺はイレイナがいる部屋の扉をノックする。

「イレイナー」

「はいはい何ででしょうか」

「これは一体……」

既に寝間着に着替えて眠そうな顔をしたイレイナが出てきた。俺は視線を家具たちが置かれているところにやってから尋ねた。

「ああ、それですか。あまりにも騒がしいので追い出しました」

「なるほど」

「私は静かな部屋で寝たいので」

「なるほど」

「よかつたらカイも一緒に寝ませんか？」

「なるほ——ん？」

今何と？

「……………少し語弊がありました。私の部屋で私と同じように寝袋で寝るのはどうですか？」

「……………なるほど」

急な誘いに驚いてしまった。心臓に悪い。

「それで、どうするんですか」

「俺はこれからさつき拾った物の修理をしようかと思つてただけど……………」

「ならこっちの部屋でやってください」

「イレイナの睡眠を妨害するかもしれないんだけど……」

「静かにやってください」

「ええ……。……まあいいか。じゃあ今から荷物をこっちに持つてくるね」

というわけで俺は自分の荷物と修理が必要な物を持ってイレイナのいる部屋に行き、彼女に背を向けるようにして床に座り、なるべく音を出さないように物の修理を丁寧始めた。

修理をするための道具は魔道具を作るための道具を使い、一部の部品がなくなっている物を直すためには同じ素材の物が必要なのでこれは魔法で作った素材を加工していく。

物を作ったり修理するのは好きだ。俺が手掛けた物を使ってもらっている様子を想像するだけで嬉しくなる。使用者に満足してもらうためにも手を抜くことなどできない。そのせいで時間が掛かったりするのだが良い物作るためなのだから仕方ないことである。

もう少しで日が昇り始める時間になる頃によく皿や時計、人形等の片手で持てる物しか持ってこれなかったが無事に修理することができた。元の状態をこの目で見たわけではないので完全に直せたかは分からないが大体こんなものだろうという形にはできたのでいいことにする。

後ろを振り返ると寝袋に収まったイレイナの無防備な寝顔を見ることができた。同じ部屋に男性がいるというのに全く気にする素振りのないその表情は俺を信頼している証なのだろうか。

こうしてイレイナの寝顔を見るのは滅多にない気がする。こっそ一枚だけ写真を撮る。バレたら大目玉だろう。

俺はこの写真を宝物にすることに決め、音を立てないように自分の部屋に行つて着替えてから戻り、イレイナと同じように自分の鞆から寝袋を取り出して彼女から少し離れた位置で短い時間ではあるが睡眠を取ることにした。

翌日。本に連れられてやって来たこの国にある城のような建物の一室にて。

「イレイナ！」

物ばかりの国で物の修理を行っている人から話を聞いていた俺たちだったが、隣に立っていたイレイナが突然倒れそうになったので支える。

「イレイナ！イレイナ！」

意識がないのか何度呼び掛けても返事はない。

『……………』

「……………イレイナに何をした」

俺たちの目の前でぱたぱたと音を出している本に語気を強めて問いかける。

『……………』

「——ッ！」

しかし本は何も答えることはなく、この場所に居続けるのはまずいと考えた俺は足に力を込めて逃げ出そうとしたところで後頭部を殴られたような感触を覚える。

片手で後頭部を触ってみるが特に痛みはないが体中から力が抜けていくのを感じられた。

十中八九、目の前の本が俺たちに何かしたのだろう。俺は床に片膝をつきながら本を睨む。

『……………』

本は俺がイレイナみたいに気絶しないことに驚いたのか一度その身を震わせた後、仲間を呼んだのか俺たちは動く物たちに囲まれてしまった。

「ほう。お主、なかなか耐えるのう。しかし無駄じゃ。もう逃げられんぞ」

俺たちの様子を見ていた魔法使いの老人が声を掛けてくる。

「……………これは……………あなたが……………仕向けたこと……………ですか……………？」

「いや違う。わしもお主たちと同じじゃよ」

「それは……つまり……」

この人たちも被害者なのだろう。このままではいずれ俺とイレイナもここで物の修理をさせられることになる。

俺たちは旅人だ。ここで立ち止まっているわけにはいかない。

力が抜け続ける体に入力、イレイナを抱えてこの部屋の入口目掛けて走り出す。進行方向上にいる物や扉を蹴り飛ばす。

廊下を走り抜け、城の門は飛び越し、この国の外に出るための門に向かつて駆ける。

『……………』

当然俺たちの逃亡を見逃すつもりはない物たちは俺のことを追いかけてくる。

本調子でないとはいえ、速さなら俺の方が上だ。それを理解しているのか物は先回りしたり待ち伏せしたりとあの手この手で俺を捕まえようとしてくる。

俺は跳んだりしゃがんだりして躲しながら進む。

——門が見えた。

しかし俺の体は限界が来ていた。体にほとんど力が入らず、意識も朦朧としてきた今のままではイレイナを抱えて門を越えるのは無理だろう。

外に出れるのは俺かイレイナのどちらかだけ。そんな選択肢が今俺の前に突き付けられている。

もしかしたら一生この国で物を直し続けることになるかもしれない。物にどんな扱いをされるか分からない。長生きできるとは限らない。

自分を取るか他者を取るかという簡単な問いだ。

だから俺はイレイナを投げ飛ばすことに決めた。

——この国の外へ。

俺とイレイナを天秤にかけた時、それは当然イレイナの方へ傾く。考えるまでもない。

イレイナは頭が良いからきつと俺のことを助けに来てくれるだろう。

う。

門よりも高く飛ばすから落下した時の衝撃はそれなりにあるだろうが指輪が守ってくれる。

イレイナを落とさないようにスーツのジャケットを脱いで彼女に巻き付ける。

「行けえええ！」

そして足に、腕に、全身に残っている力を全て注ぎ込んでイレイナを投げ飛ばす。

俺を捕まえることに夢中になっていた物たちは上空を飛んでいくイレイナに反応することができず、門の上を越えて姿が見えなくなつた。

今の俺ができることは全てやった。後は優秀な幼馴染がどうかしてくれる。もしも彼女一人で逃げたとしても俺は恨むことはないだろう。

「……ははは」

イレイナを助けた達成感に満足しながら俺は意識を手放すのだつた。

・
○

「……ん……」

日が沈んだ薄暗い森の中、木の葉から落ちてきた雫が顔に落ちてきて目が覚めました。

「……は……う？ カイ……？」

何故こんなところで寝ていたのか思い出せず、幼馴染に聞こうと思つて辺りを見回しますがその姿は見つかりませんでした。あるのは彼がいつも着ているジャケットが私の体に巻き付けられているのみ。

「……………」

時間が経つにつれて頭の回転が上がり、私の身に何が起きたのか思い出してきました。

物がひとりで動く国で一泊した私たちは本に案内されるままにお城の一室に行き、そこで頭を硬い何かで叩かれたような感触がして倒れそうになったところをカイが支えてくれたところで記憶が途絶えています。

右手の中指につけている指輪に魔力を込めてカイの位置を探ってみると、少し離れた場所——まだあの国の中にいるようです。彼が私の傍にいないということは私を逃がした後に捕らえられてしまったのでしょうか。

焦って彼を助けるためにもう一度あの国に入ったところで失敗するのは目に見えています。ならばどうするべきか。

「……あの魔法を使うしかありませんね」

あの魔法とは物に命を与える魔法のことです。私が開発した魔法で、調子に乗ってこの魔法を使いまくって自爆したのも私です。

物に対抗するためにはこちらも物の力を借りる必要があると考えた私はこの魔法を久しぶりに使うことを決めました。

自らの物に襲われるという体験をしてから使うことのなかった魔法ですがカイを助けるために四の五の言ってられません。

——私はほうきを取り出して魔法を掛けます。

今まで散々こき使っておいて、困ったときにお問い合わせするなど、白々しいことの上ありません。

——魔法を受けたほうきは輝きました。

愛想をつかされて拒絶されても文句は言えません。

——しばしの時間を置いてから、ほうきは姿を変えました。

その時は仕方のないことだと受け入れて私一人で彼のことを助けに行きます。

——目の前には私にそっくりな姿の桃色の髪の女性が立っていました。

それでも、もしもあなたがいいと言ってくれるのであれば——

「どうか私たちを助けてください」

どうかお願いします。

「ええ。喜んで」

物々語：物だらけの国と幸せ物（後編）

わたくしことほうきはイレイナ様と暫しの間、話しをしました。

ずっと顔を合わせようとしなかったこと。わたくしがイレイナ様やカイ様を恨むどころか感謝していること。グールの頭をぶっ刺したまま飛ぶのはどうなのかということ。そして、どうやってカイ様を救出するかということ。

作戦が決まったところでイレイナ様には離れたところへ隠れてもらい、わたくしはカイ様がいる国に侵入しました。

わたくしが灰色の髪に瑠璃色の瞳をした悪い魔女とその仲間である黒色の髪に金色の瞳をした男性に呪いをかけられて、このような姿になってしまったと説明すれば物たちはあっさりとわたくしに同情しました。

「それで、魔女とその仲間はこの場所にやって来たのですか」

『ええ。魔女の仲間の男性は離れた場所で修理を手伝っていますが申し訳ございません。魔女の方は取り逃してしまいました』

「そちらだけでも結構ですので差し出していただきたいのですが」

さつさとカイ様を救出してイレイナ様を安心させてあげたいのですが、本は身を横に振りました。

『それは不可能でございます』

「えっ」

『その男性は我々が処刑いたします。既にこの国で暴れた後に魔女を逃がした彼を処刑しようという話が上がっていたのですが、彼に修理された物の進言とその腕の良さからとりあえず記憶を封印して無理やり修理を手伝わせることにいたしました。しかしどのような人物か判明した以上生かしておくことはできません。なので残念ながら、あなたにお渡しすることは叶いません』

「……………えっ？」

まさかのびつくり情報でした。事態は考えていたよりも深刻かもしれない。

一先ず、その男性が本当に魔女の仲間なのか確かめたいと駄々をこね、この国の成り立ちを説明されながらわたくしが案内されたのはお城の地下にある牢屋でした。光源と言えるものはろうそくのみ。その灯りは周囲を最低限照らすだけで、人が長時間いるのに適していません。

そのろうそくの傍に青年が一人。大きな音をこの地下牢に響かせていました。

わたくしは牢屋の扉を開けてもらい、その青年——カイ様に近付きました。

「……………おや、あなたは……………誰ですか？」

わたくしに気付いた彼は手を止めてこちらに声を掛けてきました。

「ほうきと申します」

「えーっと、どこかでお会いしましたか？」

「いいえ、初対面でございます」

「そうでしたか。実はここに来るまでの記憶がなくてですね。自分の名前さえ分からないんです。知り合いだったら嬉しいなーって思っただんですけれどねー」

「……………」

「しかしあなたのことを見ていると安心すると言いますか、元気になると言いますか、なんだか不思議な気持ちになります。すみませんね、変なこと言ってしまうって」

「……………お気になさらないでください」

カイ様は本当に記憶を失っているようでした。しかしレイナ様への想いは魂に刻み込まれているようで、彼女に似ているわたくしを見て顔を綻ばせておりました。そんな彼をすぐにでも助け出してレイナ様のところに連れていきたいのですが、今はそれは叶いません。

今のわたくしにできることはカイ様の容態を確認するくらいでしょう。

「あなたはここで物を直していると伺いました」

「はい。記憶はないんですけど修理の仕方はなんとなく分かるんです

よ。こうやってこうするんですよ」

『ぎゃー！』

カイ様はそう言って手元にあった皿を割りました。修理……………？

これのどこが修理なのかと尋ねようとしたのですが、次の瞬間割れた皿は元に戻っておりまして。いえ、正確に言うなれば少しだけデザインが変わって前の姿の時より高価そうな見た目になっております。ええ……………。

『ふう、生まれ変わったような気分だぜ。ありがとよ兄ちゃん！』

気分ではなく実際に生まれ変わった皿はどこかへ飛んでいきました。

「一つ直したらまた次を直す。これを繰り返しているんですよ」

「休憩は取られていますか？」

「目が覚めてからずっと物の修理をしています。理由は知りませんがこれが俺のやるべきことなのだと感じています。休む気にはなりませんね」

そう答えるカイ様の目の下には薄っすらとクマが出来ていました。彼は昨日からあまり寝ていないはずですのでこのままだと体が壊れてしまうかもしれません。普段ならば限界が来そうならば休むのですが物に操られてしまっている彼にその判断は不可能でしょう。

『彼にはこのまま休まずに死ぬその時まで物を直し続けてもらいます。それが処刑方法でございます』

わたくしたちの会話を聞いて本が彼の状態について補足しました。今すぐに殺されるわけではないようです。わたくしは本に「そうですか」とだけ答えてカイ様の方に視線を戻します。

「あまり無理をなさらないでください。人も物も酷使しすぎると壊れてしまいます」

「心配してくれるんですか。ありがとございます。けど大丈夫ですよ、まだまだ元気ですから。——フンッ！」

今度は今にも足が折れてしまいそうな背もたれのない椅子を盛大にぶっ壊しました。もしかしたら物に対する恨みのようなものを覚

えているのかもしれませんが。

『ああん！私はあなたが前みたいに優しい人に戻れるって分かってるから！今はちよつと機嫌が斜めなだけだから！これも愛なのね!!』

椅子は暴力を振るってくるダメ男から離れることができないう女性みたいな言い方をしておりました。カイ様はそういう男性ではございませんのでやめていただきたいです。

カイ様が睡眠不足であることや記憶喪失であること、それでもイレイナ様のことを忘れ切つてはいないことを知れただけでもよしといたしましょう。

後はどこか目立たない場所でイレイナ様からの連絡を待つことにします。

「それではわたくしは——」

「あ、そうだ。ここに座ってもらってもいいですか」

カイ様が何か閃いたのかわたくしの言葉を遮つて背もたれのない椅子を指さしました。今直したばかりの椅子です。直すところは見えておりません。

「こうでしょうか？」

「あー……後ろ向いて座ってください」

「むむ、それならそうと先におっしゃってください」

「ははは。すみませんねー」

言葉足らずのカイ様にむくれながら言われた通りに彼に背を向けて座り直します。一体何をしようというのでしょうか。

「……おや」

「痛くないですか？」

驚いたことにカイ様はわたくしの髪を櫛で梳かし始めました。その手つきは優しく、丁寧だったのでとても気持ちいいものでございました。

「問題ありません。しかし何故このようなことを？」

「んー、なんででしょうかねー。理由は分かりませんが無性にあなたの髪を梳かしてあげたくなったんですよ。不思議ですねー」

あなたにはそうさせたくなるような魅力でもあるのでしょうか、と笑

いながらカイ様はわたくしの髪を梳かしていきます。

いつもはイレイナ様がわたくしの整備をしてくださるのですが、時にはカイ様にしていただくこともございます。どこかに異常がないか確認し、少しでも気になるところがあれば直してくださいませ。整備が終わった後、イレイナ様がわたくしに乗っている姿を思い浮かべたのか少しだけ嬉しそうに笑う彼の顔を見るとわたくしまで嬉しくなってしまうます。

主人とその大切な方に大事に扱ってもらえるわたくしは世界で最も幸せ物です。だからこそ、お一方の危機に頼ってもらえたのがとてもなく嬉しいのです。

「よし、こんな感じですかねー」

「ありがとうございます。わたくしはもう行かせていただきます」

「はい、また会えるといいですね」

「……そうですね。またいつかお会いしましょう」

今度こそわたくしは牢屋から出ていきました。

『何やら親しげに話しておりましたね』

カイ様から離れて城の一階に戻った後、彼とのやり取りを見ていた本が尋ねてきました。わたくしのことを疑っているようです。

「そう見えてしまいましたか。わたくしは彼が記憶を封印されている様を見て楽しんでいましたよ。特に最後なんて彼にわたくしの髪を整えさせるのは楽しかったです」

『おお、そうでしたか！わたくしどものような力を使わずに人を使うその手腕、見事でございました』

わたくしが勘違いされて不愉快になったような顔をして嘘をつく、本はこれまたあっさりとは信じてしまいました。わたくしはどうか、嘘をつくのが得意のようでした。姿同様、持ち主に似たのかも知れません。この姿になってから嬉しい発見の連続でございます。

「これからの予定について考えたいのでしばらく一人にさせていただきます」

『分かりました。私はこの城にいますので何かありましたらこちらま

で訪ねてください』

こうしてわたくしは城から出て物がいない場所を探してイレイナ様からの連絡を待ちました。

・○

「——といった具合でした」

「……そうでしたか。ありがとうございます」

「いえ、当然のことをしたまです」

「感謝は素直に受け取っておくべきですよ。あなたはそれだけのことをしたのですから」

ほうきさんが情報収集のために国の中に侵入した後、まだ本調子ではなかった私は森の中に身を隠しながら体を休めていました。

そしてある程度時間が経ったら他の物にバレないように魔法を使っ
てほうきさんの頭に直接声を掛けてカイの様子を報告してもらいま
した。

「あなたから見てカイは後どれくらい持ちそうでしたか？」

「睡眠不足なだけならともかく、休憩や碌な食事も与えられていなさ
そうでしたので長くは持たないかと……」

「そうですか……。本当はもう少しだけ休んで万全の状態でカイの救
出に行きたかったですが仕方ありません。今から私もそちらに向か
います」

「はい。お待ちしております」

ほうきさんの返事を聞いてから魔法を解きました。

あの国で操られそうになってからまだ体調が完全に回復したわけ
ではありません。しかし私は魔女です。最初から警戒していれば動
くようになつたとはいえ、物に負けるわけがありません。

それにカイから託された彼のジャケットもあります。これはいつ
も彼が身に着けているもので、外から掛けられる魔法の効果を軽減し
てくれる効果があるらしいです。つまりこれを着ていれば操られそ
うになっても先に物を壊してやれば大丈夫なはずです。

「……待っていてくださいね。今度は私があなたを助けてみせます」
私は彼のジャケットに袖を通しました。なんだか彼に守ってもらってるように感じられ、私の中に少なからずあった不安や緊張がほぐれていきます。

カイとほうきさんが待っている国に足を進めます。足を一步進める度に彼らとの思い出を振り返ります。

ほうきに乗って飛ぶ私の横を走ったり空中に足場を作って跳ぶカイと次に訪れる国の話をする時間は私の密かな楽しみです。私一人でしたら退屈な時間もあつたのですが、彼と一緒にそんな時間なんてありません。

これからも退屈なんてものと無縁でいるために、早いところ私の幼馴染を返してもらいましょうか。

国の中に入るための門が見えてきました。

「……とりあえず、カイには私の髪を梳かしてもらいましょうか」

ほうきさんだけやってもらうのはずるいですからね。

私は杖に魔力を込めて、盛大に門を吹き飛ばしました。

「お待ちしておりました。イレイナ様」

国の中へ足を踏み入れた私をほうきさんは出迎えてくれました。

「では始めましょうか。ほうきさんは私の後ろへ」

「仰せのままに」

私の敵はこの国に存在するほうきさん以外の全ての物です。人を操ることができるのが一部の物だけとは限らないので。

なので物に気付かれるように杖を真上に掲げて光の柱を出しました。夜空に突如現れた一筋の光はとても目立つでしょう。

私はここです。私を捕らえてみてください。捕らえられるものならですが。

『……………』

ぞろぞろと集まって来た物たちが私に向かって飛びかかってきますが魔法で吹き飛ばしていきます。私を操ろうとしているのか頭が少々痛みますが物を吹き飛ばしているのとカイのジャケットのお陰で今のところは支障ありません。

物たちはがむしやらに突撃しても無駄だと悟ったのかありとあらゆる物が積み重なり、巨大な人型の化け物になっていました。

『……………』
「そういえば物たちの間で合体がブームらしいですよ。ちなみに今は小物っぽい笑い声をあげております」

「的が大きくなった上に一個一個吹き飛ばすより手間が省けるので助かります。小物は小物らしくさっさと吹き飛ばされてください」

『……………』
「イレイナ様、少々お待ちを。彼らの話を聞かせてください」

私は目の前の巨人に魔法を放とうとしましたが、巨人が何か喋ったのかほうきさんに止められてしまいました。

「む…………。まあいいでしょう」
「ありがとうございます」

私が腕を下ろし、手出しする気がないことを確認したほうきさんは物と会話を始めました。私には何を言っているのか分かりませんので大人しく待つことにします。

この国にある物たちを作り、そして捨てたのは人です。それゆえに人は彼らに恨まれても仕方のないことです。

しかし、そんな彼らの恨みを受け止めてあげるのもまた人なのでしよう。物は人の願いを発端として作り出されます。ならば人も物の願いを叶えてあげるべきなのかもしれません。

彼らの願いを聞きたくても普通ならば物の声を聞くことは出来ませんが今の私にはほうきさんがいます。物の声分かる彼女が願いを教えてもらい私ができる限り叶えれば彼らの恨みもある程度は消えることでしょう。

それにしてもさつきよりも頭痛が酷くなってきているような…………。

「イレイナ様！」
『……………』

私が倒れそうになったのをほうきさんが支えてくれました。

「申し訳ありませんイレイナ様。精一杯彼らを説得しようとしたのですが、わたくしの言葉は届いてないようです。時間稼ぎもされてしま

しました」

「いえ……そんなことよりも——」

あの巨人を吹き飛ばしてもいいですか。そう聞こうとした私の眼前には巨大な掌が迫っていました。

このままだと私たちはまとめて押しつぶされてしまいますが不思議なことに恐怖というものはありません。

だって信じていますから。

そうですよね、カイ？



「……………」

いつの間にか物たちの姿がなくなっていた。

『……………』

いや、正確に言うといなくなったのは修理が必要な物と修理した記憶がある物たちだ。皿や時計、人形等がふわふわと俺の周囲を漂っていた。

綺麗に修理された物たちだ。俺がここで直した物と比べて完成度が明らかに違うのが分かる。しかしこれらは俺が直した物であるというのも分かるのだ。

漠然とした気持ちで修理していた今の俺と違い、記憶を失う前の俺はどんなことを考えながら物を直していたのだろうか。

「……………おや」

物たちが牢屋の外に行ってしまった。俺はここで壊れた物を直さなければならぬのだが、今は俺以外の姿はない。

少し前に話をした桃色の髪の女性のことが頭から離れず、外に行けばまた会えるかもしれないと考えた俺はこの場所から出ることにした。

階段を上り、城の外に出た俺の目に映ったのは遠くにいる多くの物が集まってできた巨人と、その巨人と何か話をしている桃色の髪の女性。さらにその後ろに——

「彼女は……」

灰色の髪に三角帽子、ジャケットを着た女性の姿がおり、俺は彼女から目が離せなくなっていた。彼女を見てみると桃色の髪の女性の時よりも全身に力がみなぎってくる。

ここからだと言距離があるので顔はあまり見えないがきつと瑠璃色の瞳をしているのだろう。

「！」

灰色の髪の女性がふらついたのが見えた。その隙に巨人の手が動いたのが見えた。恐らく姉妹である桃色の髪の女性と灰色の髪の女性を叩き潰そうとしているのだろう。

「——ッ！」

どうやったのかは分からないが俺の手には弓と矢が握られており、そのことを認識した俺は思考することなく矢を弓につがえて即座に放った。

物を壊してはならない、物を直さなければならぬという考えが頭の中を支配したが、矢は二人に迫っていた巨人の腕に当たり、巨人の腕は吹き飛んだ。

・

「イレイナ様！」

「分かっています！」

遠くから飛んできた矢によってわたしたちは助けられ、その隙にイレイナ様は物でできた巨人に魔法を放ち、巨人をばらばらに吹き飛ばしました。

巨人の体の一部になっていた物たちは今ので力を使い果たしたのかももう動くことはないようでした。

「終わった……？」

「はい、そのようです。お疲れさまでした」

イレイナ様はまだ頭痛がするのか頭を押さえておりました。

『お待ちください』

そんなわたくしたちの前にまだ動く物たちが現れました。

「まだ残ってましたか。もう休みたいのでさっさと片付けましょう」

「イレイナ様。もう一度だけ話をさせてください」

「……分かりました。けれど今度は何を話しているか私にも聞かせてください」

「ありがとうございます」

今日の前にいる物たちに敵意がないのはイレイナ様も感じ取ったのでしよう。彼女は杖を仕舞いました。

こちらが話を聞く態勢に入ったのを察したのか時計が前に出てきました。

『この度は同胞が失礼いたしました。彼らは人に対する恨みが大きく、人を信じる心を忘れてしまっていました。そしてそれは私たちも同じでした。しかしある日、そんな私たちの前に一人の男性が現れました』

「それがカイ様ですね？」

『はい。彼は操られたわけでもないのに嫌な顔一つせずに自分から修理してくださいました。だから私たちはもう一度人を信じることにしたのです』

「しかし彼は無理やり修理をさせられておりました」

『他の物たちに人をもう一度信じよう、操るのはもう終わりにしようと言ったのですが耳を貸してはくれませんでした。なんとかこの国で暴れた彼の処刑を引き延ばすことはできましたが……』

「カイ様を助けていただきありがとうございます」

『いえ、受けた恩を返そうとただけです。私たちももうじき動かないくなります。あなたたちの旅路に幸福があらんことを』

そう言っ物たちはどこかへと去っていきました。恐らく誰もいないところへ行つたのでしよう。

「イレイナ様。一つお願いがあるのですが」

この国の物たちの話を聞いてわたくしは彼らを助けたいと思いましたが。

「言わなくても分かっていますよ。私たちに任せてください」

「ありがとうございます」

いい主を持ってて本当にわたくしは幸せ物です。

「しかし少し疲れましたねー。その前の門の前で休憩しましょうか」

「カイ様を迎えに行かなくてもよろしいのですか？」

「いいんですよ。カイですから」

そんなものでしょうか？ イレイナ様はカイ様のことを心配している様子でしたので一刻も早く無事を確認したいはずです。

わたくしだけでもカイ様を迎えに行こうとしましたがイレイナ様がわたくしの服を引っ張って離さないのので仕方なく門の前で休むことにいたしました。

休み始めてから時間が少々経った頃のことです。

「——おや」

「来ましたか」

城の方からこちらに歩いてくる人影が見えました。

「こんばんは」

黒い髪に金色の瞳をした男性——この国の物によつて記憶を封印され操られていたカイ様でした。イレイナ様は彼に歩み寄りませぬ。

「あまり女の子を待たせるのは感心しませんね。相手の子が不機嫌になつてしまいますよ」

「それでも急いだ方なんですけどね」

「まあ今回は許してあげます」

「ははは、ありがとうございます」

お二人は楽しそうに話しておりました。イレイナ様は彼がここに来るのを分かっていたようです。ここで休憩していたのも彼に疲れを見せたくなかったからかもしれない。

「早速ですがここから出ましょう」

「ここからですか……」

カイ様は近くに落ちていた先ほどまで巨大な人型になっていた物たちの方を見ました。

「彼らを直したいと思っておられますか？」

「……今はあなたたち——君たちと一緒に居たい」

わたくしの質問に対し、彼は穏やかな顔で答えました。

「なら行きましようか」

そう言ってイレイナ様はカイ様に背を向けて門の外へと歩き出し、彼もそれに続きました。

イレイナ様は門を通る直前、門の前にいたわたくしには彼女の顔がはつきり見えました。

それはそれは、とてもいい笑顔でございました。

よかったですね、イレイナ様。



「あー……」

門を通って国の外に出た瞬間、俺の記憶は蘇った。

「自分の名前は分かりますか?」

「俺はカイ。平和国ロベツタ出身でゴウザン師匠の下で修行し、現在幼馴染のイレイナと一緒に旅をしている旅人」

「大丈夫そうですね」

記憶を失っている間の記憶もある。俺はあれから休むことなく物の修理をさせられていた。俺の意思でないことに加え、疲労もあつたため出来はあまりよくなかったが……。

「助けてくれてありがとうイレイナ」

「こちらこそありがとうございます。カイが私を逃がしてくれたおかげです」

イレイナは平然とそう言った。まだ余力が残ってそうだ。流石は灰の魔女様である。彼女の才能や努力によって蓄えられた力は俺が想像しているよりも凄いのもかもしれない。俺も負けてられないな。

「カイ様が無事で何よりです」

「あなたは地下牢に来てくれた……」

「はい。わたくしはイレイナ様のほうきでございます」
「なるほど」

俺はほうきさんのことを見る。髪の色以外イレイナにそっくりだ。

その落ち着いた雰囲気は持ち主よりも少し年上を感じさせる。

「二人並んでいると姉妹みたいだなあ」

「私の方が姉ですよね？」

「……さあ？」

「それもう答え言ってますよね」

「姉と呼んでくださってもいいんですよ」

ほうきさんが姉か……。なかなかいいのではないだろうか。俺が彼女のことを呼ぶとしたら、もしも許してくれるのなら――

「えーつと……義姉さん。今日はありがとう」

「……おやおや。ふふふ、どういたしまして」

ほうきさんは俺の言葉の意味が分かったようで、微笑ましそうにこちらを見てくる。俺は言ってから恥ずかしくなって目を逸らしてしまった。

「姉は私ですよ。そうですよねほうきさん」

イレイナは分かっていないようで、どちらが姉か気にしていた。彼女にもバレていたら恥ずかしさで死にたくなってしまうかもしれない。それなら言うなという話ではあるのだが言わずにはいられないのだ。それだけイレイナは魅力的な女性である。

「いえ、姉はわたくしです。例えばイレイナ様でもこれは譲れません」
「!？」

意外なことにほうきさんは姉という響きが気に入ったようだ。恥ずかしいからもう呼ぶことはないと思うが。

「イレイナ。俺のジャケットは役に立った？」

「はい。これのお陰で私は戦えました」

「そっか。じゃあそれを返してもら――あ、やっぱまだいいや」

イレイナが着ているジャケットを返してもらおうかと思ったが、彼女は少し残念そうな顔をしたのでやめにした。そんなに着心地がよかったのだろうか。まあ俺が今まで着た服の中でも一番の着心地なので仕方ないのかもしれない。

「そろそろ行くかうか」

「操られている間ずっと起きていたようですけど大丈夫なんですか

？」

「……正直言ってかなりきつい」

長時間起きていただけならともかく、物の修理に体を動かしたり魔力を使っていたので今はとても眠い。

「なら私のほうきに乗りますか？」

「えっいいいの？迷惑じゃない？」

「迷惑だなんて思うわけありませんよ。ほうきさんもいいですよね？」

「当然です。ただカイ様には過重力の魔法を解いていただかないとわたくし折れてしまいます」

「そうだった。危ない危ない」

杖を取り出して過重力の魔法を解く。あまりの眠さに忘れるところだった。

「ふわあー。ここまで眠いのも久しぶりな気がする」

「ほうきの上で寝てもいいですけど落ちないでくださいよ」

「バランス感覚には自信があるから心配ご無用。いつも通りの速さで飛んでも大丈夫さ」

「カイがそう言うならいいんですけど落ちても文句は言わないでくださいね。ほうきさんに掛けた魔法が解け次第出発です」

「タイミングのいいことにもうじきのようです」

ほうきさんの体が半透明になっていた。彼女が元の体に戻ってしまいう前に一言言わねばならない。

「改めて二人ともありがとう。二人が助けに来てくれて嬉しかったよ。これからもよろしく」

俺の感謝の言葉に対し、二人は同じように微笑んでくれた。

「どういたしまして。これからもよろしく願います」

疲れている体でも無意識のうちにカメラを取り出して二人の写真を撮ってしまった。後で見るのが楽しみだ。

ところで持ち主に似るってなんだかペットみたいだなあ。

○

森を抜け、草原の上でほうきを走らせているローブではなくスーツのジャケットを着ている魔女がいます。ほうきに横向きで座っている彼女の隣には同じように横向きに座っている青年がいます。その魔女と違う点を挙げるとするならば、すうすうと静かな寝息を立てていることでしょうか。

あまりにも疲れているのでほうきが多少揺れても目覚めることはなく、それでも落ちそうな素振りを見せない様子からは彼の体幹の強さが見て取れます。

「んん……」

「おや」

青年の頭が魔女の肩の上に乗せられました。彼の方から甘えてきているみたいだったので魔女はつい笑みをこぼしてしまいました。

「すう……」

「……」

そんな何かが起こるわけでもない静かなひと時を大切なほうきの上で過ごしている二人組は一体誰でしょうか？

そう、私たちです。

「夜明けですねー」

日が昇り始めて辺りが明るくなってきました。

誰かが聞いているわけでもないのに思ったことを声に出してしまいます。いつもならそれを聞いてくれる人がいるのですが、今は隣で夢を見るのに夢中のようにです。寂しくないですよ？

「うーん……」

寝言でしょうか。彼がどんな夢を見ているのか気になるので聞き耳を立てることにしましょう。

……もしかして私の夢でしょうか。体を張って私を助けてくれる彼ですからもしかしなくてもそうですよね。

「……サヤちゃん……」

「……えい」

「——ぐえっ」

おやおやおや。何故かカイがほうきから落ちてしまいました。不思議ですねー。ふん。

……………馬鹿。

時計郷ロストルフにて——（前編）

時計郷ロストルフ。

その美しい国は平原地帯にあり、中央の広場には国のシンボルなのか大きな時計台が立っている。

時計の針は十二時を指しており、それを告げる鐘が鳴り響いていた。

広場ではスーツに身を包んだ青年が片手にパンを持ちながら、目の前のベンチに座る女性を見下ろしていた。

女性は俯いて何も喋らない。目の前の青年への恐怖からだろうか？いや、違う。

「……お金ない」

「イレイナ、ちゃんとご飯を食べないと体に悪いよ。これ食べて」
「……………」

イレイナは無言でパンを受け取り、さほど時間を掛けずに食べ終わった。

「……ありがとうございます」

「どういたしまして。これからは財布の中を確認するんだよ」

イレイナは自分の所持金がなくなりかけていることに気付かなかったようで、先ほど演劇を観終わった後に寄ったパン屋で支払いをしようとした時によく気付いたらしい。

俺は使えるお金にまだ余裕があったから自分の分の他に彼女の分も買って渡したのである。ちなみに彼女が受け取ってくれるのに少々時間が掛かった。パンを食べ始めてから食べ終わる時間より長かった。

「ありがとうございます……。はあ……またカイに助けられましたね……」

「困ったときはお互い様だからねー。気にしなくてもいいよー」

「そういうわけにはいきません。私だってあなたがいなくても平気だということを証明してみせます」

パンを貰った後に言うセリフなのかどうかはともかく、彼女は何やらやる気を出していた。

「これから私はあなたがびっくりするくらいの大金を稼いできます」

「どうやって?」

「魔女の力でどうにかしてみせます」

「詐欺とかマッチポンプとかはダメだよ」

「……………分かってますよ」

随分と間があつたな……。大丈夫だろうか。まあお金がないのは自業自得などころがあるのだが。

この前イレイナはチワワ男なるゴブリンっぽい見た目の男性と結託してお金を稼ごうとしていた。初めて見た時はどこにチワワ要素があるか分からなかったが毛を剃った後らしい。

真つ当に働いてお金を稼ぐならともかく、チワワ男改めゴブリン男が街の住人からお金を巻き上げ、イレイナがその一部を貰っていたのだ。ここだけでも十分問題なのだが、さらにイレイナが最後にそのゴブリン男を退治することで住民から報酬を貰おうとしていたのだ。大問題である。

その事情を知った俺は激怒。二人を正座させてから説教。そのまま街の住民たちに謝罪して奪った分のお金を慰謝料として少し多めに返したのだ。

俺としてはイレイナにはそういうことをして欲しくないのだが、彼女は手っ取り早く、楽にお金を稼ぎたかったらしい。それを聞いて俺はもしかしたら彼女は真つ当にお金を稼ぐ方法を知らないのではと考えた。

考えてみればイレイナは小さい頃から魔女になるための努力し、十五歳で魔女になって旅に出た。それまでの間にどこかの店でバイトなどはしていないだろう。魔女という肩書があれば訪れた国で高額な報酬の依頼をされることが多い。何ならさらに報酬を引き上げさせることもできるくらい魔女の力は凄い。

この金額に慣れてしまったらそこらへんにある店のバイトとして長時間誰でもできるような労働をして決して多いとは言えないお金

を稼ごうなどと思わないだろう。だから占い師を名乗って詐欺に近いことをして金貨を要求しているのかもしれない。今までは誰かを不幸にはしてなさそうだったから何も言わなかったのだがそれがいけなかったのかもしれない。

俺だってそれなりに稼いではいるのだが、それは受けた依頼の報酬だったり自分で作った魔道具やアクセサリーなどを売っているからであって何か悪いことをしているわけではない。労働に見合った対価を貰っているだけである。

今度イレイナには俺の魔道具を売るのを手伝ってもらってお金を稼ぐことの大変さを知ってもらわなければならない。

「……………む」

考え事をしている間にイレイナがいなくなってしまうていた。指輪に魔力を込めて位置を探してみると街の中を歩いているようで問題はなさそうだ。

彼女は稼いでくると言っていたがどんな手段でお金を得るのだろうか。俺をびつくりさせるくらい稼ごうとしているらしいので彼女から見せに来るのを楽しみに待つておくのもいいかもしれない。

「そうと決まれば……………」

この国の観光をしておくことにしよう。面白いところがあれば後でイレイナに教えてあげよう。



現在この国ではある演劇が流行っている。

『二丁目殺人鬼』

先ほど俺とイレイナが一緒に見た演劇なのだが街のいたるところにチラシが張られていた。

実際にあつた出来事をほとんどそのまま演劇にしたらしく、大まかに言ってしまうえばセレナという女の子が殺人鬼になり、最終的に薫衣くぬえの魔女エステルによって捕らえられ、処刑されたという殺人鬼の半生を描いた物語だ。

殺人鬼という存在に魅力を感じるのか街を歩いていると「セレナマジヤベーよな！」や「ああ、ベーヤーだよな！」といった具合に彼女について話しているのが聞こえてくる。何がどう具体的にやベーのかは話してなかった。

以前俺が訪れた国では丁度殺人鬼が毎日人を殺しており、その時の住民たちは皆襲われるかもしれないと怯えていた。そういう雰囲気加えられないのはきつとセレナがもうこの世にはいなく、自分に危害が

まあこの世にいない殺人鬼にいつまでも怯えて暗い雰囲気のままであるよりは断然いいだろう。寧ろ国の名物として収入に繋がっているのだから大したものである。

どこに行つても二丁目殺人鬼のことばかりで、そろそろ飽きてきたなーと思つたところであるチラシが目に入る。

『次の流行はこれで決まり！』と大きく書かれた下には新しい演劇の題名だろうものがこれまた同じように大きく書かれていた。

『五十三番』

題名からはどういった内容の演劇なのか分からないが、少し先に見える劇場には既に人が大勢入つていくのが見えたので俺も観てみることに決めた。

演劇のチケットを買つて劇場の中に入る。俺の席は真ん中らへんで結構見やすい位置だ。

『まもなく開演でございます。お客様は席についてお待ちください』
これから始まるのだと思うとなんだかわくわくしてくる。カメラで写真を撮るのを禁止されているのが悔やまれる。

『お待ちせいたしました。これより開演いたします』

『これは遙か東の国。海を越えた先の国』

『そこで起きた物語。一人の男の物語』

大人しく、ゆっくりと観ることにしよう。

「んー……」

劇場から出た俺は演劇の内容を振り返っていた。

東の国の犯罪組織で育てられた孤児『五十三番』は他者への関心が薄く、感情もほとんどなかった。しかしある日仕事の帰りにとある女性と出会い、彼女の家で、話をしている内に彼女のことが気になっていった。

それからというもの、五十三番は女性の家に度々訪れては彼女と話し、自分の知らない何か胸の奥で大きくなっていくのを感じていた。彼はそのことを彼女に話そうかと考えたが何故か口にする事が出来ないまま時間が過ぎていった。

しかしある日のこと。五十三番が女性の家の訪ねたところ、なんと家は燃えていた。彼は急いで家の中に入って女性を探す。

家の中に女性はいたが全身傷だらけで傷も深く、もう助からないのが分かった。女性に死んでほしくなかった五十三番だが、彼にはどうすることも出来ずに女性は死んでしまう。

怒りに燃えた五十三番は彼女を殺した相手に復讐してから姿をくらませた……というものだった。

演劇というものは時間が限られているので仕方のない部分もあるだろうが説明不足のように感じられた。犯罪組織ってどんなことしているのかや、五十三番が気になっていた女性を殺した相手は誰だったかがよく分からなかった。というかなんで番号で呼ばれてるんだってなった。復讐するシーンなんて五十三番役の男性が小物っぽい男性に斬りかかるだけで済まされていた。

一応買ったパンフレットには細かく書かれており、犯罪組織は孤児を番号で呼んでいることや小物っぽい男性は組織のボスらしい。とはいえ演劇を観た人全員がこのパンフレットを買うわけではないだろうから多くの人は何だこれってなりそうである。というか周りの

席に座っていた観客はなつてた。シリーズものとしてやってれば話はまた別だったろうになあ。

『二丁目殺人鬼』に対抗しようとして焦つたのだろうか？あの作品の人気はこの国で起きたことだからつてのがありそうだから流行が去るまで待つかじつくりと話を練るべきだったのではないかと思う。まあ俺が思いつくことで解決できるほど簡単な話ではなかったのだろうか……。

脚本を書いたのは劇団の団長らしいのだが、『この話は昔訪れた国の骨董屋で買った本に書かれていた話を基に作つた。五十三番の結末は書かれていなかったためこのような最後になった』とパンフレットには書かれていた。誰が書いたかは知らないけど、最後まで書いてくれてればもう少しマシな演劇になつていたのでないだろうか。五十三番がどうなつたかそこまで知りたいわけでもないけど。

別にイレイナに観るのをお勧めするほどのものではなかったかなというのが総評である。後で俺が彼女に掻い摘んで話せばいいだろう。道中の暇つぶしとしては丁度いいはずだ。

次はどこへ行くか決めていなかった俺の足は無意識のうちに国の中心部の広部へと再び歩みを進めていた。顔を上げて時計台を見てみるともう少しで三時になるところだった。少し早いがそろそろ宿を探してもいいかもしれない。空いている宿が見つからず夜遅くまで国中を歩くなつてことにはなりたくない。

お金を稼ぎに行っているイレイナがいつ帰ってくるのかは分からないがこのことを伝えておくべきだろうと思い、指輪に魔力を込めて彼女の位置を探ろうとして——背後から誰かがぶつかってきた。指輪の自動防御が発動するほどの強さはなかったが勢いはあった。その誰かは俺の背中の方から手を回された。まあ……抱きしめられてと言つた方が伝わりやすいか。

「……………どこにも行かないで……………ください」

一体誰がぶつかつてきたのかは見なくても、声を聞かなくても気配で分かる。

「俺はどこにも行かないさ。イレイナ」

「そんなの……そんなの簡単に信じられるわけないじゃないですか……！」

彼女の体に傷は付いていないが心が傷付いているのも分かる。

「俺たちは幼馴染じゃないか。今更君を置いてどこかに行くなんてことしないよ」

「幼馴染……彼女たちだって……」

だが彼女が傷付いて泣いている理由までは分からない。なんて声を掛ければいいのか分からない。

だから俺はそれ以上喋ることなく泣いている彼女の体を優しく抱きしめるくらいしかできなかった。



少し時間が経ち、一先ず泣き止んだイレイナをベンチに座らせ、俺も隣に座る。

「……………」

「……………何も聞かないんですか」

「辛いことや苦しいことは無理に言わなくてもいい。思い出だけでも大変だろうしね」

本当は何を言えばいいか分からなかったただけだが、一応本心でもある。俺だって言いたくないことも、思い出したくないこともある。

だがこのままというわけにもいかない。

「……………」

「逆に口に出すことで気が楽になるのであれば幾らでも聞かすよ」

「私は……………」

イレイナはそれ以降喋ることなく思い悩むように下を向いたまま座り続ける。俺は何度も彼女に掛ける言葉を考えては違うと切り捨てていた。俺にもっと勇気があれば今度は俺の方から彼女の体を抱きしめて慰めの言葉を掛けてあげることまでできたのかもしれないが、なんとなく違う気がした。じゃあ何もしないのが正しいのかと聞か

ればそれも違う気がする。きっと今の俺に正解を導き出すことはできないのだろう。

優柔不断な俺はただ彼女の隣に座って時々手を伸ばそうとしてやめるのを繰り返しているだけだった。

何もできないまま時が進み、日が落ちる時間になった。

このままだと野宿することになってしまう。

「……イレイナ。宿を探しに行こう」

「……はい」

イレイナは落ち着いてきたがまだ元気は戻っていない。それでもここに居続けるわけにもいかないので俺は立ち上がって歩き始める。イレイナも俺の服を掴みながら後ろを歩いている。

幸いなことに一つ目の宿で空き部屋がまだあることが確認でき、俺たちは泊まることができそうだった。

「部屋はどういたしますか？」

「なら別々で——」

「一緒がいいです」

いつも通り別々の部屋にしようとしたら後ろからイレイナの弱々しい声が聞こえてきた。

「お願いします……私を独りにしないでください……」

「……一緒に部屋をお願いします」

「かしこまりました」

俺は馬鹿野郎だ。こんなにも傷付いている幼馴染を放っておいてはダメなのに彼女を独りにしようとしてしまった。今の言動のせいで彼女はさらに傷付いてしまっただろう。本当に馬鹿な男だ。

従業員から鍵を受け取って部屋に入って荷物を置き、備え付けの椅子に座る。今日の夕食は途中のパン屋で買ったパン——イレイナの好物だ。

「美味しい？」

「……よく分かりません」

大好きなパン、それも一番美味しそうなのを買って来たのだがその

味も分からないくらいショックを受けている。どうしたものか……。

「……ちよつと用を足してくるね」

「……………」

一人で考え事をするためにトイレに行こうと立ち上がったのだが、テールを挟んで向かい側に座っていたイレイナも立ち上がった。

俺が歩き出すと彼女も歩き出す。トイレの方に向かうと彼女も向かう。別の方向に進むと彼女もそちらに進む。……俺の後ろから離れようとしなない。

嫌な予感を感じつつトイレに入ってドアを閉めようとするが、イレイナが入ってこようとしたので止める。

「イレイナ。俺トイレがしたいんだけど……」

「そうですか」

「……もしかして先に使いたかった？」

「いえ」

「……………トイレくらいは一人にさせて欲しいんだけどなあ」

「嫌です」

おうう……。

●
どうやらイレイナは傍に誰かがいないと駄目らしく、トイレや風呂について来ようとするのだ。まだ付き合ってもない女性に裸を見せるのもよくないので一人にさせてもらうよう説得し始めたのだが、泣きそうな顔をされたので別の方法を考えた。

その方法とはほうきさん呼び、俺がトイレや風呂に行ってる間や逆に彼女が行っている間、彼女の傍に寄り添ってもらおうというものだ。最初は難色を示されたがそれ以外は一緒にいると伝えることで渋々とだが了承してくれた。

ほうきさんはイレイナの身に何が起きたのか全て知っているからか特に何かを言うわけでもなくただ一言、「承知いたしました」とだけ言っただけイレイナの傍にいてくれた。

イレイナは魔法にそこまで魔力を注いでいなかったのか俺たちが寝る時間になる頃にはほうきさんの体は半透明になっていた。

「カイ様。イレイナ様をよろしくお願いします」

「それは分かっているけど……どうすれば……」

俺は一人になっっている間、どうすればイレイナに元気を与えてあげられるか考え続けていた。しかしいい考えは浮かばなかった。

ほうきさんにイレイナのことを頼まれてもその期待に応えられる自信がなく、彼女から視線を逸らしてしまう。

「大丈夫です。あなたなら」

ほうきさんは両手で俺の手を優しく包み込んだ。

「このように手を握って傍にいてあげるだけでいいんです」

「……………」

「お二人はこれまで一緒にしたね。それは、これからも変わることはありませんよね？」

「……………」

俺の答えに満足したのか、ほうきさんは微笑んだ。

「無理に何かをする必要はありません。これまで通り一緒にいることこそが彼女のためになります」

「……………」

「もう一度言います。イレイナ様をよろしくお願いします」

「……………」

そこでほうきさんは元の姿に戻ってしまった。俺は心の中で感謝しながらほうきを壁に立てかける。

「……………」

俺たちが話し終わるのを待っていたイレイナが話しかけてくる。とても眠そうに目をこすっていた。

「終わったよ。もういい時間だし寝ようか」

「はい」

ベッドは二つあり、そのうちの一つにイレイナが入る。俺はその隣に椅子を持ってきて座る。

「一緒に寝てはくれないんですか」

「俺が入ったら狭いからね」

「……………」

「イレイナ、手を出して」

「……………はい」

イレイナはベッドの中から右手を出してくる。俺はさつきしてもらったように、その手を両手で包み込むように優しく握った。

「一人で寝るのは怖い？」

「……………はい。目が覚めたら私は一人取り残されてしまってるんじゃないかと思えばかりが浮かなくなります」

「じゃあ、さ。寝てる間はこの手を握りっぱなしにしろよ。そうすれば俺はどこにも行かない。君は一人にならない」

「いいんですか……………」

「いいよ」

俺がそう言い切るとイレイナは俺の手をじっと見つめ、彼女の方からも弱く握り返してくれた。

「なら……………お願いします……………」

安心したのかイレイナは目を閉じてすぐに寝始めた。規則正しい呼吸音が聞こえてくる。

「おやすみ、イレイナ」

時計郷ロストルフにて——（後編）

真つ白な空間の中、私はポツンと立っていました。宿屋でベッドに入ったのが最後の記憶なのできつとここは夢の中なのでしょう。

そう理解した瞬間景色は一転し、時計郷ロストルフの街の路地になりました。

「……………」

路地には演劇のチラシが至るところに張られています。私の目の前には別のチラシ——薫衣くぬえの魔女エステルさんの張ったチラシがありました。

お金がなく、カイにも大金を稼いでくると言いましたがそんなあてもなくどうしようかと悩んでいた私には好都合なものでした。

また景色が一転し、今度はエステルさんの家になりました。いつの間にか私はソファに座っており、テーブルを挟んだ反対側には彼女が座っています。

……………今日の出来事を夢の中でもう一度体験しているようです。

「——だからね、わたしが、あの子を救ってあげたいんだ」

「……………」

エステルさんは三年前に処刑された幼馴染のセレナさんを助けたいと言いました。話を聞いているうちに私は感情移入してしまったのか依頼なんて関係なしに彼女の手助けがしたいと思いました。報酬は欲しいので口にはしませんでした。

幼馴染の大切さは私にも分かるということを伝えると彼女はクスクスと笑い出しました。

『イレイナさん。その人のこと大好きなんだね』

『いきなりなんですか。私そんなこと一言も言っていないですよね』

『顔を見れば分かるよ。声も弾んだ。きつとわたしも、セレナを語るときはこんな感じなんだろうね』

「……………」

エステルさんに揶揄われたりしましたが別に嫌ではありませんで

したし、心地よいものとさえ思っていました。

『きみの想いは早めに伝えておくべきだと思うよ。相手がいなくなってしまうたら、その人と話すための声さえ聞こえなくなってしまうから』

「……………」

またしても景色が一転。エステルさんの魔法で十年前のこの国に遡り、セレナさんの両親を助けるために家から連れ出して私はその場に残った時の景色。

エステルさんが渡してくれたメモを眺めて考え事をしていた私の小指に嵌められていた、過去に遡るために魔力を使い果たしたエステルさんと魔力を共有するための指輪から魔力を吸い上げられた時のことです。

「……………」もう終わりにしてください」

これ以上先は見たくないのに、夢から覚めたいと思っているのに私はセレナさんの家を出て夕暮れ時の街並みを歩き、路地を曲がってゴミ箱がいくつも並ぶ仄暗い路地裏へと足を進めてしまいます。

「もうあんな光景見たくない!!」

そう願っても目を逸らすことも閉じることも出来ず、ついにその光景が再び目に入ってしまいました。

『——あ。お姉さん、さつきこの女と一緒にいた人ですよね。わあ。困ったなあ』

そこは地獄でした。全身が真っ赤に染まったセレナさんと、地面に横たわった彼女の両親とエステルさん。そして彼女の手に握られた血がついたナイフ。誰が三人を刺したのかは明らかでした。

『え？殺されちゃったの？誰にです？』

『あなたの親友にですよ』

『わたしに親友なんていませんが？』

心底不思議そうに言う彼女に、私は絶句してしまいました。エステルさんはセレナさんのことを想っていたのに、セレナさんはエステルさんのことなんてこれっぽっちも……………。

『だって、人を殺すのって、こんなに愉しいんだもの!』

セレナさんは手に持ったナイフをこちらに向けながら突撃してきました。

『——ッ!』

動揺していたことで反応が遅れてしまい、私は杖を構える前に彼女に刺される——瞬間、青い光が私を守ってくれました。光の出処は右手の中指に嵌められている指輪からでした。

『惜しかったですねー。その指輪のお陰かな? 綺麗な指輪だね。お姉さんを殺したら貰おうかな』

『これは大切な人から貰ったものです。誰があげるもんですか?』
今度こそ私は杖を構え彼女に向けます。

『ふーん。大切な人ねえ……。彼氏とかですか?』

『……彼は大切な幼馴染です。こんな私と一緒にいてくれる、私を守ってくれて頼りになる幼馴染です』

『でも今は一緒じゃないですよね? お姉さんは今一人独りですよ?』

』

頭が真っ白になりました。それでも構えた杖を下ろさないまま視線を左右に逸らしました。

いつもなら私を守るように前に立ってくれるカイはいません。目に映るのはナイフをこちらに向けているセレナさんと彼女に刺されて倒れている三人。彼女の言う通り、今の私は一人独りでした。

私の呼吸は荒くなっています。

『もしかしてお姉さんのこと捨ててどこかに行っちゃいました? だってお姉さんが危険な状況なのに助けに来てくれませんか?』

『違う……。それは私が彼に何も言わずにここに来たからで——』
『ならお姉さんの方から離れてしまったんですねー。幼馴染さんに呆れられちゃいますよ?』

『こんなことになるなんて思ってた……。! 彼の手を借りる必要はないと思っただから……。!』

『さっきのお姉さんは隙だらけでしたよ。その指輪が無かったら簡単に刺せてただけだなあ。もしかしていつも幼馴染さんに守られるせいで自分が強いとでも勘違いしてしまいましたか?』

『……………私の心は九歳の少女にズタボロにされ、完全に思考が停止してしまいました。』

『あれ？どうしたんですか？……………動かなくなっちゃった。愉しかったけど飽きてきたからもう殺しちやおうかな』

今度こそ私を刺し殺そうとセレナさんが動き出した直後、路地に置かれていたゴミ箱たちが彼女に襲い掛かって壁に押し付けました。

『……………許さない』

ほぼ条件反射で声のした方に目を向けると、腹部から血を流しながら杖を構えているエステルさんが立っていました。

「……………」

それからエステルさんはその感情の赴くままセレナさんを殺してしまいました。私が魔力を供給する指輪を外しても、彼女はセレナさんの記憶を代償に魔力を生み出していました。彼女にとっての大部分を占める大切な思い出を、全て投げ捨ててしまったのです。

景色が一転。未来に戻った彼女は、セレナさんを助けるといふ原動力がなくなつたからか無気力になってしまっていました。

そんな彼女から逃げ出すように私はあの家から飛び出しました。

一人独りになりたくなくて、どうしたらいいか分からなくなつて、無性にカイに会いたくなくて、私は街の中を走り続けました。

『二丁目殺人鬼』のチラシが貼つてある路地を、劇場の前を、大きな時計台がある広場を。

走つて、走つて、走り続けて。

「え……………」

いつの間にか私は真つ暗な空間に立っていました。

誰もいない。たった一人独り、私は取り残されていました。

「カイ……………カイはどこに……………」

「いないですよ」

「あなたは……………」

私の前に現れたのはエステルさんの魔力の塊を何度もぶつけられ

たことで血だらけになったセレナさんでした。

「お姉さんが過去に行ったことで指輪で位置を探せなくなり、指輪を捨てられたと思った幼馴染さんはこの国を出ていきました。お姉さんを置いて」

「彼はそんなことしません」

「でもお姉さんが国中走り回っても見つけられませんでしたよね？
じゃあそういうことですよ」

「カイは私を信頼してくれてるんです。きっと彼も私のことを探し回っていたからすれ違いになっただけで……」

「お姉さんってすごく自分勝手ですねー。お姉さんは幼馴染さんのことを信じていなかった時期があったのに幼馴染さんがずっとお姉さんを信じていると思ってるんだ。度重なる詐欺行為やマッチポンプによるお金儲け。わたしだったら魔女なのにこんなことしてるお姉さんなんて見放しますよ？」

「やめて……やめてください！何も聞きたくない！見たくない！夢なら早く覚めて！」

もう限界だった私は蹲って目を瞑って耳を塞ぎます。

「そうやっても無駄です。現実を見るべきですよ」

「……………」

「あははははははは！ははははははははっ！」

置いてかないで。私を一人独りにしないで。

誰か助けて……カイ……。

助けは――

――来ました。

「え……」

暖かい光が私の右手を包み込み、思わず顔を上げました。

『イレイナ。これを』

『指輪……ですか?』

見えてきたのは懐かしい光景です。

まだ旅を始めたばかりの頃。別行動をしたら夜になっても合流できなくてカイが大声で私の名前を呼んだことがありました。

他の人の迷惑になるのでやめて欲しいと伝えた数日後、彼は銀色の指輪を渡してきました。

『君につけてほしいんだ』

『え………これってその………そういうことですか………?』

『そうだね』

何気なく言う彼に私は戸惑ってしまいました。

『あなたの気持ちは嬉しいですけどまさかこんなに早いだなんて………』

『ん?どうかしたの?』

『その……あなたがつけてください』

『変なことを言うね。いいけど』

彼は緊張する私の右手を取って指輪を嵌めてくれました。中指に。

『……はい?』

『もしかしてきつかった?』

『………まだ聞いてませんでしたがどうして指輪を?』

『俺たちが離れちゃうとお互いどこにいるか分からなくなっちゃうじゃない?だから魔力を流せばお互いの位置が分かる魔道具を作ったんだ。身に着けていても邪魔にならないよう指輪にしたんだけど嫌だった?』

『………いえ』

『え、何その間は』

当時の私は大きな勘違いをしてました。

男性から女性に贈る銀色の指輪なんてそう、まるで……婚約指輪みたいじゃないですか勘違いしても仕方ないじゃないですか私は悪くありません。

まあ今となってはいい思い出です。彼は私と一緒にいてくれるためにこの指輪を作ってくれました。

彼は私とずっと一緒にいてくる。危うくそれを忘れるところでした。

この指輪は私を守ってくれるものです。今は右手の中指にありますがいつかは――

「あーあ。もう終わりですか」

目の前のセレナさんは残念そうに呟いてから消滅しました。当然のことではありますが彼女は本物なんかではなく、私の弱い心が作り出した幻影のようなものだったのです。

彼女が消える。それは私が目覚めるということだと直感で感じました。

後は瞼を開けるだけ。先ほどまでの私なら現実を見ることへの不安や恐怖で目を閉じたままだったかもしれないが、今はそんなことはありません。

この右手に感じる暖かき、温もり。何も心配する必要なんてないのです。

「……………」

目を開きました。天井が見えます。

そして右を見れば予想していた通り幼馴染の姿がありました。私の右手を握り、椅子に座ったまま寝ていたようです。彼の後ろにあるベッドは使われた形跡はありませんでした。

私が一人独りになる可能性なんて最初からなかったんです。いつも傍にいてくれる彼がいるのだから。

「カイ……………」

空いている左手で寝ている彼の頬に触れました。

「んん…………イレイナ…………？おはよう……………」

「おはようございます」

くすぐったかったのか彼は起きてしまいました。もう少し寝顔を見ていたかったですが残念です。

「調子はどうだい？」

「大体戻りましたよ。あなたのお陰です」

「そっか。それはよかった」

「ただもう少しだけ、一つだけ我が儘を聞いてもらってもいいですか……っ？」

「俺ができることならなんでも言っただらァン」

彼は優しく微笑んでくれました。

彼がいいと言ってくれたので今回だけは素直に甘えることにします。

私がお願いするのは以前彼にお願いできなかつたこと。

「私の髪を梳いてください」

彼がいてくれるだけで十分なのだと思ってきました。

だから私はもう、大丈夫です。



「痛くない？」

「滅茶苦茶痛いです」

「え」

「冗談です。痛くないですよ」

「そ、そっか……」

イレイナに頬を触れられたことで目が覚めた。

なぜ彼女が俺の頬を触っていたのか教えてはくれなかつた。いつまで手を握っているんだと叩こうとしていたわけではないと信じた。

その後髪を梳いて欲しいと頼まれた。女性の髪を触る機会などほとんどなかつたので不安だったが無事にできているようだった。

冗談を言えるくらいには元気になっているようで本当によかつた。

「それにしても、綺麗な髪だね」

灰色の長くてさらさらしていて艶のある綺麗な髪。毎日隣で見ている髪ではあるが見飽きることはない。本音を言えばずっと触っていたい。

とはいえ彼女の髪単体で見た時にこんな感想を抱くことはないか

もしれない。その髪の持ち主も重要なのだ。

「まあ自信はありますね。ローブを着た後にふあさーつという感じになびかせる仕草が癖になってたりします」

「服の下にある髪を上を持ってくるってことね。朝俺とイレイナが会う時には既に着替え終わった後だから見たことなかったけどそんなことしてたんだ」

「……………見たいんですか？」

「まあちよつと気には……………あ」

俺がその仕草を見たいと言うことは彼女が着替える瞬間を見たいと言っているようなものである。本人にその気が無くてもそう思われかねない。

「変態」

「待つて待つて、そんなつもりで言ったんじゃないやなくてね。君の仕草に興味があるだけで下心があるとかじゃないんだって」

「あわよくば……………とか思ってるのでは？」

「そんなこと思っていないよ！全然！全然見たいと思っていない！」

「私の体に魅力がないとでも？」

「そうは言ってないじゃん!？」

着替えを覗きたいとか見たいとかは思っていない。興味がないとは言い切れないがそんな不誠実なことをする気は毛頭ない。

「……………ふふふ」

「……………ははは」

俺たちは静かに笑った。俺たちの日常が戻ってきた。寧ろイレイナは精神的に逞しくなった気もする。

少しの間笑い合った後彼女の髪を梳かし終わり、俺は買い物に行くことにした。

「イレイナ。俺は買い物に行くけどどうする？」

「……………そうですね。私は残っていいようかと思えます。街を歩いていると彼女に会うかもしれないので」

「彼女？」

「気にしないでください。私には会う資格なんてありませんからね

……」

イレイナは昨日ほどではないが暗い表情をしていた。もちろん詳しく聞くつもりはない。

「……………」

彼女は俺の顔を見た後困ったように笑った。

「そんな顔しないでください。心配せずとも私は大丈夫ですから」

「顔に出てたか……。それじゃあ行ってくるね」

「いってらっしゃい。楽しみに待ってますよ」

イレイナが手を振ってくれたので俺も振り返してから宿を出た。

「さて、買うものは全部買ったかな」

街道の真ん中にて俺は紙袋を抱えて歩きながら買い忘れがないか確認していた。後は宿のキッチンでも借りてパンを焼くだけだ。

宿屋へ帰っている途中で路地から人が出てきた。咄嗟のことだったのと荷物を持っていたことで避けれずにぶつかってしまった。

「おっと」

「あ、ごめん……」

俺にぶつかったのは薄紫色の髪に金色の瞳を持った女性で、髪と同じ色のローブと三角帽子をしていることから一目で魔法使いだと分かった。三角帽子には魔女の証であるブローチが付けられていた。

謝ってくる彼女の顔はどこか虚ろで今にも消えてしまいそうな霧囲気が漂っていた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫か、ね……。なんだか昨日から大事なことを忘れてる気がして落ち着かないんだ」

「記憶喪失……」

俺も物が支配していた国で記憶を失ったことがある。失っていたというよりは封印されてたと言った方が正しいが。

ん？それ以前にも記憶を失ったことがあるような……。頭が痛い……。

「……急に頭を押さえてどうしたの？」

「気にしないでください」

「はあ……？」

初対面の俺に対しても心配してくれる彼女はきつと優しい人なのだろう。そんな彼女に何かしてやれないだろうか。

「さて、あなたはその記憶を取り戻したいですか？」

「どうだろう。思い出したくない気がするんだけど、わたしの生きる意味だった気もするんだ」

生きる意味だと言えるほど大事な記憶。それを忘れてしまったということはやはりこのままだと彼女にとってよくないだろう。

とはいえ思い出したくない記憶を思い出してしまうのもよくないだろう。……記憶が戻ることが必ずしも幸せとは限らないのは見たことがあるから知っている。

「仕事は何を？」

「国の専属魔女をしているよ。理由は思い出せないけど今は休暇中さ」

魔女なのは分かっていたが国の専属魔女とはなかなか偉い人物だったようだ。この国で悪いことをしたら彼女に捕まってしまうかもしれない。するつもりはないのだが。

そんな立場の彼女に俺がこれから提案しようとしていることはこの国にはえらい迷惑だろう。

「忘れてしまった生きる意味について考えるのではなく、新しい生きる意味を探してみるのはどうですか？」

「新しい生きる意味？」

「そうです。趣味でも人でも何でもいいので楽しく暮らすための生きがいみたいなものを見つけてください。旅でもして」

旅をしていると自分の知らない文化や景色、人物に出会う。そうすることで自分の世界が広がる感じがして楽しいのだ。目の前の何も知らなそうな女性にもそれを知ってもらいたい。

「旅……。でもわたしは国の専属魔女だよ？わたしがいなくなったら大変だと思うけど……」

「あなたが来る前からこの国はあったんですよね？ならあなたがいなくても大丈夫ですよ」

実際のところは分からないが。

俺と同じくらいの年齢の女性が一人いなくなったただで国が上手く回らなくなるのならそんな国遅かれ早かれ滅んでしまうだろうし問題ないだろう。

「……考えておくよ」

「おっとそれはやらない人の言うセリフですよ」

「いや普通に考えたいんだけど」

「今のあなたが一人で考えたら後ろ向きな答えしか出ないのは見えてるのでここで決めちゃいましょう」

俺は荷物を持っていない方の手でポケットの中から一枚のコインを出して表面を見せる。

「ここにコインがあるでしょう？これが表面です。今からこのコインを上弾いて落ちてきたところをキャッチします。手を開いた時に表面が上だったらあなたは旅に出る。どうですか？」

「……うん、決めた。君の言う通りにしよう」

「よし。じゃあいけますよー」

俺はコインを弾いた――



「ただいまー。パン焼いてきたよー」

宿の部屋に戻る前に厨房を貸してもらってパンを焼き、お礼として一部を宿の人に分けてから来た。

部屋に戻るとイレイナは椅子に座って本を読んでいる最中だったようだ。

「おかえりなさい。少し遅かったですね」

「ん？まあ美味しいパンを作ったからね。どう、美味しい？」

昨日買ったパンはあまり味わえなかったようだったので今度こそじっくり味わって欲しい。俺も腕によりをかけて作ったのだから。

彼女は俺が作ったパンを一口食べ、ゆっくりと噛んでから呑み込んでから口を開いた。

「はい、美味しいですよ。とても」

「ならよかった」

「それを食べ終わったら出発しようか」

「分かりました」

パンを味わって食べてるイレイナを一度見てから俺は部屋の窓を開けた。生温い風が入ってくる。

この部屋から時計台は見えないが鐘の音は聞こえてくる。

時計郷ロストルフ。高い建物がずらりと並んだその国の中央の広場には大きな時計台が立っている。

現在の流行は『二丁目殺人鬼』という実在した殺人鬼をテーマとした演劇。次の流行は『五十三番』という演劇だろうか。

多くの人がこの国をいい国だと言うだろう。しかし俺の幼馴染は違うというかもしれない。

何があったかは分からないままだが彼女は辛い思いをした。俺は悲しむ彼女の隣にいることしかできなかった。

どうするのが正解だったのかは分からないし分かったところで意味はない。もう過ぎてしまったことだ。

時間を巻き戻すことができれば話は別なのかもしれないが――

「行きましようか」

三角帽子とローブを身に着け、出発する準備ができたイレイナが声を掛けてきた。

最近はお考え事をしているとすぐ後ろ向きな考えをしてしまう。頑張るって決めたんだ。そのためにはもっと前向きに考えるように、もっとポジティブに生きよう。

「どうかしました?」

「いや、君が言ってた癖を見れなかったなと思ってね」

「それは残念でしたね」

「まあいいさ。また次の機会にでも見せて貰うとするよ」

「そんな機会、次いつ訪れるか分かりませんよ」

「これからも一緒に旅をしていくんだから問題ないね」

「ふふ、それもそうですね。それじゃあ行きましようか」

昨日は悲しかったとしても、明日楽しければそれでいい。生きてい
ればいいことはあるはずだ。

今はそう信じて旅を続けよう。



「おや、なんですかそれ」

「これ？これは遊びで作ったコインだね。珍しい金属を使ってるから
売れば高く売れるよ。それとこれには一っだけ特徴があつてね」

「ほう」

「まあ見てみなよ」

「うーん……このコイン、両面とも同じ柄が書いてありますね。普通
表と裏で違いますよね。これのことですか？」

「その通り。世の中にはこんなコインを使う人がいるから気を付けて
ねってことさ」

「？」

切り裂き魔と怪盗ネコキャット（前編）

今まで作った魔道具の中で一番思いを込めて作ったものは何かと問われれば、俺は迷うことなく指輪だと答える。

この指輪は二つで一つの魔道具で、これの効果は魔力を込めるとも片方の指輪の位置を覚えてくれるというシンプルなものだ。

今は魔力を強めに込めれば位置を知らせる効果と、指輪に貯まっている魔力を使って一度だけ体を守ってくれてついでに位置も知らせる効果もある。魔力は一日くらいで元に戻るなので新しく指輪を作ったりする必要はない。作る気もないが。

つまりこの指輪をしていけば一度だけではあるが不意打ちを食らったとしても無傷で済むのだ。まあ危害を加えられないのが一番なのだが保険は張っておくべきである。

なかなか便利な魔道具だと俺は思うしイレイナもずっとつけていてくれるのでそう思っているのだろう。製作者冥利に尽きるというものだ。

しかし一つだけ問題点があるとすればこの指輪でも防げないものがある。

まずは毒。飲み物や料理に毒を入れてそれを口にしてしまったとしても指輪は守ってくれない。毒にも種類があるし恐らく辛いものなんかに反応してしまうからだ。一応毒は魔法で取り除くことが出来るからそこまで気にする必要はない。

あとは体の特定の部分を防いでくれない。

例えばそう爪や――

「あー、イレイナ。もしかしてイメチェンってやつ……?」

「……………」

――髪である。

現在この国では切り裂き魔という人物が出没してゐるらしく、国民たちはその噂話ばかりしていた。

何度か盗み聞きしてみるとどうやら切り裂き魔はこの国で五人の女性の命を奪った凶悪犯であることは間違いないようだ。肝心の切り裂き魔の正体だけははつきりとしていなかった。切り裂き魔は男性だったか女性だったとか人形だったとか人によって言つてることが違う。全員言つていゝことが本当のことであるなら複数犯つてことになるのだろうか。

「やー大變そうですね」

「そうだね。イレイナも気を付けるんだよ」

「私は大丈夫ですよ。魔女ですし。それにあなたもいますからねー」

「なるほど、その期待に応えられるよう頑張りますよ」

ベンチに座つてパンを食べているイレイナとその隣で扇子を扇いで涼んでいる俺は呑気に会話をしていた。

「まあ早めに宿屋を探して部屋をとつてもいいかもしれませぬ」

「それもそうですね。じゃあそれを食べ終わつたら早速――」

「ちよつといいか？」

俺たちの会話を遮つて声を掛けてきたのは先ほどから国民に聞き込みをしていた金色の髪をした女性だった。その女性は白いローブと三角帽子を身に着け、星をかたどつたブローチと月をかたどつたブローチをしていた。手には煙管を持つており、時折白い煙を吐いていた。

立っている相手に座つたまま話すのもどうかと思つたので俺は立ち上がった。イレイナはまだパンを食べているので座つたままだ。

「魔法統括協会の魔女様が一体何の用でしょうか？」

「あたしは『夜闇の魔女』シーラ。お前が言つた通り魔法統括協会の魔女だ」

「カイです。こちらは『灰の魔女』イレイナです」

イレイナはパンを食べたままぺこりと頭を軽く下げる。

「お前ら、この国の人間か？」

「違います。ただの旅人です」

「そうか。ところでこの国で起こっている事件について何か知っているか？」

「事件つてのは切り裂き魔についてですね。残念ですがまだこの国に来たばかりなので全く知らないですねー」

「犯人はそうやってしらばっくれるもんだ」

そう言つてシーラさんは煙管をこちらに向けてくる。

「……もしかして疑われてます？」

「冗談だ。まあ、何か情報を見つけたらあたしに教えてくれ。あたしはこの国の集会場にいるからよろしく頼む」

シーラさんはポケットから小さな紙きれを取り出して差し出した。受け取つてみると彼女や魔法統括協会の名前が書かれていた。

「何もないのが一番なんです、分かりました」

丁度話が終わるタイミングでイレイナもパンを食べ終わつて立ち上がった。もしやシーラさんと話するのが面倒だからわざとゆっくり食べていたのか？

まあシーラさんとの話が終わり、イレイナが食べ終わった以上ここに居続ける必要もないので宿を探すとしよう。

「……さつきから気になってたんだが、何でこっちに向かつて扇いでんだ？」

「いやーシーラさんも暑いかなーと思ひまして」

「扇がれすぎて体が冷えてきたんだが」

「そうですか」

「おい、手を止める」

「……………」

「おい」

とりあえず俺たちはシーラさんに頭を下げてからその場を立ち去るのだった。



今日は日差しが強く、季節が季節だったので気温が高い。イレイナ

は暑さに耐えられなかったのかローブを脱いで腕にかけて歩いてきた。そのせいで魔女のブローチが見えなくなっている。彼女が魔女であることが初対面の人には分からないが、シーラさんが聞き込み調査をしているからか魔女に対する視線が好ましくないものだったので逆によかったのかもしれない。

ちなみに暑さに平気だった俺は彼女の隣で日傘をさしている。当然入るのは俺ではなくイレイナだ。女性は日焼けしたくない人も多いだろうし彼女もそのはずだろう。

赤レンガで染められた街を歩き続けて気付いたことがある。

「すれ違う人皆人形を持つてるね」

右を見ると男性が「マリイちゃん今日も可愛いねー」とにやにやししながら人形の髪を撫で、左を見れば女性が「あぁなんて美しい人形なのかしら。まるで私みたい……」とうっとりしながら人形を見ていた。

「この街の特産物でしょうか？」

「そうなのかもね。おっ、あそこ人形屋っぽいよ。一つ買ってみる？」

「それもいいかもしれませんね」

俺たちが入ったのは看板に『人形差し上げます』と書かれた店だった。なんと太っ腹な。

「ほう。凄いものですね」

「数も凄いけど質もなかなか……」

店内には数えきれないくらい人形が陳列されており、そのどれもがそれなりに高い完成度を誇っていた。

「フフフ……ようこそいらっしやい」

突如カウンターに置いてあった人形が喋り出した——と思ったらカウンターの裏から女性が出てきた。

「この店にある人形は全てボクの手作りだよ」

「へえ。それはなかなか大変だったんじゃないんですか」

「大変なんかじゃないよー。ボクは皆を笑顔にたくて人形を作って街の皆にプレゼントしているのさ。だからお金もいらないよ」

「立派ですねー」

俺が店主と話している間イレイナは店にある人形を見ていた。

「欲しいのがあったら持って行っていいからねー」

「ふむ。どうするイレイナ？」

「えーつと……」

イレイナは店にある人形を見渡し、それから何故か顔をしかめた。

「……荷物になるので気持ちだけありがたいいただきます」

「あれ、いいのかい？」

「いいから行きますよ。それでは失礼します」

「まあ君がそう言うならいつか。すみませんが俺もこれで」

俺は身を翻して店の外に出るイレイナの後を追う。

「……………」

その時背後から視線を感じて振り返ると、無言のままの店主がいた。

いやまあ彼女が俺たちのことを見てくるのはおかしなことではないので振り返る必要はなかったかもしれない。

だから彼女の目が何かを捉えたかのように見えたのも気のせいなのかもしれない。



人形だらけの街を歩き、俺たちは宿屋を見つけていつも通り部屋を二つ取った。幸いなことに部屋は隣同士であり、大きな物音がしたらすぐに気付くことができるだろう。

俺たちはそれぞれの部屋のドアの前で立ち話を始める。

「大丈夫？」

「舐めないでください。切り裂き魔が出たとしても私がちよちよいと倒しちゃいますよ」

「おお頼もしい。でも何かあったら呼んでね？」

「はいはい。それではまた明日」

イレイナは部屋の鍵を開けて中に入っていった。すぐに鍵の閉ま

る音が聞こえたので彼女なりに用心しているだろう。

仮に切り裂き魔に襲われたとしても指輪が一度だけ守ってくれるので致命傷を貰うことはないはずだ。

「俺も部屋に入るか」

イレイナが入ったドアの隣のドアの鍵を開けて中に入る。

備え付けの家具は他国の宿屋と同じようなものばかりだが、ベッドサイドテーブルには茶髪の人形が置いてあった。流石特産物。

「完成度高いなあ」

この人形を見ていればこの国の人たちがハマるのも理解できる。俺も人形を作ったことがあるのだがここまで綺麗な造形はできなかった。製作者の技術と情熱が見て取れる。

しかし完成度が高いが故に少し不気味でもあった。夜中見たら怖いかもしれない。まあ気にしななければいいだけなので問題はないのだが。

俺は風呂に入り、武器や魔道具の点検をしてからベッドに入って寝たのだった。

窓から朝日が入り込み、その眩しきで目が覚めた。

俺は窓を開け、入ってくる心地よい風を浴びながら一呼吸。うん、素晴らしい朝だ。何かいいことが起きる気がする。

イレイナの部屋に挨拶しに行つて彼女が起きているようなら一緒に朝食を食べに行こうかね。

「おーい、イレイナー。起きてるー?」

着替えを済ませてから彼女がいる部屋のドアをノックするが返事はなかった。指輪に魔力を込めると彼女が部屋の中にいるのが分かった。

まだ寝ているのかもしれないので起こすのも悪いし一人で朝食を食べようかと横を向いて歩き出そうとした時、もう指輪に魔力は込めてないのにイレイナの居場所が強く伝わってくる。

それはつまりイレイナが俺を呼んでいるということだ。先ほどノックした時に部屋の中にいるはずの彼女がドアを開けたり返事を

しなかった——いや、できなかつたから指輪を使って俺に助けを求めているのかもしれない。

そう考えた瞬間には俺の体は動いていた。

「イレイナー！」

ドアの方に振り向くのと同時に回し蹴りを放ち、ドアを蹴破った。

部屋の中。イレイナーは備え付けのベッドの上に座っていた。

「大丈夫か……いい……？」

彼女に近付いて顔を見た時、彼女の髪がロングからショートになっていたのに気が付いた。

イレイナーの顔は滅茶苦茶不機嫌なものだった。

「……なるほど。切り裂き魔にやられたってわけね」

イレイナーの話によると昨夜本を読みながら寝て、今朝は窓から入ってくる風で目が覚め、洗面所で鏡を見た時に髪を切られたことに気付いたらしい。

切り裂き魔が奪った女性の命というのは髪のことだったようだ。ややこしい。

だがイレイナーの命は無事だったことは不幸中の幸いというものだろう。安心した……と言ったら目の前で頬を膨らませている彼女に怒られてしまうかもしれないので言わないが。

「とりあえずこのことをシーラさんに報告しに行ってくるよ」

「……カイ」

「なんだい？」

「今の私は変ですか……？」

切り裂き魔についての情報も欲しかったためシーラさんがいる集会場へ向かおうとドアノブに手をかけたところでいつの間にかベッドの上でうつ伏せになっていたイレイナーに声を掛けられた。

「変……というのは髪についての話かな？それだったら全然変じゃないよ。髪が短いイレイナーは昔を思い出すね」

木の上で一緒に旅を出る約束をした時もイレイナの髪は今のよう
に短かった。そのことを思い出すと写真を撮りたくなるけど彼女は
撮るなど言ってくるだろう。

「……このままの方がいいですか？」

「いいや」

俺は自分でもびっくりするくらい即答した。

「俺はイレイナの長い髪を見ているのが好きなんだよね、結構」

以前も語ったが俺はイレイナの髪が好きだ。彼女の長い髪が彼女
の一つ一つの動作で揺れているのを隣で眺めてるだけで一日を潰し
てもいいと思っている。

「……分かりました。後はよろしくお願いします」

「了解」

俺は今度こそ部屋を出てシーラさんの下へ向かうのだった。

「そうか。協力感謝する」

昨日言っていた通り集会場にいたシーラさんに俺は事情を説明し
た。今日も彼女は煙管で煙を吸っては吐いていた。

「じゃあ部屋を捜査するからお前らが泊まった宿に案内してくれ」

「待ってください」

俺が着た方向へ歩き出したシーラさんを呼び止めた。

「なんだ？」

「シーラさんが持つてる切り裂き魔の情報を全て教えてください」

「お前の幼馴染の魔女ならともかく、何故ただの旅人であるお前に教
えなければならぬ？先に言っておくがお前に意地悪したいわけ
はないからな」

シーラさんの言うことももつともだ。魔法使いの中でも最上位に
位置する魔女の名を持つイレイナなら実力が保証されているから協
力者として情報を得ることもできるだろう。

しかし基本的に女性よりも魔力が少ない男性である俺がこの事件
に関わり、実力不足から怪我をするかもしれない。これは偏に彼女の
優しさだと言える。

だが俺はここで引くわけにはいかない。

「大切な幼馴染が被害にあってじつとしていられる男はいませんよ」

「切り裂き魔の實力は不明だ。もしもあたしと同じくらいの腕の魔法使いだっただけの場合、お前を守ることはできないぞ」

「最初からその必要はありませんよ。俺は師匠から無形流むぎやうりゅうを習ったんです。自分の身くらいは自分で守れますし誰かを守ることだってできます」

切り裂き魔からイレイナを守れてない時点でどうなのかとは思いますが命に別状はないから今回はノーカンにしてももらいたい。師匠は許さないだろうけど。

「……お前、名前なんて言ったっけ」

「カイです」

「両親の名は」

「父がシン、母がエイラです」

急に不思議なことを聞いてくる人だ。

「……分かった。お前の男気に免じて特別に教えてやろう」

「なんか違う理由な気がしますがありますがとうございます」

何故か意見を変えたシーラさんに切り裂き魔の情報を教えてもらった。

まず女性たちの髪を切ったのは魔法か何かで操られた人形であるらしい。確かに俺が泊まった部屋にも人形があっただしイレイナの部屋にもあったのだろう。納得。

しかも切られた女性の髪はその人形の部品として使われるそう。次にその人形の入手経路についても既に判明しており、この国で行われている裏オークションで取引されているらしい。人間の髪を使用した人形なんて普通に売り出せないし当然と言えば当然である。

最後に裏オークションの会場については三つ条件があるらしい。

一つ、自らの身分を明かさないこと。二つ、仮面を被ること。三つ、入場料を払うこと。

「ざつとこんなもんだな」

「……なるほど」

流石魔法統括協会の魔女だ。後はこの裏オークション会場に乗り込んで切り裂き魔を捕らえるだけといったところまで捜査が進んでいた。

もしかしなくても俺やイレイナが動いたりせずともシーラさん一人で解決できそうな気がする。だからと言って何もせずにいるつもりはない。

「お前がどう動こうが勝手だが無理だけはすんなよ」

「少しでも危ないと思ったら逃げますよ。命が惜しいですからね」

「……まあいい。お前はこれからどうするんだ？」

「一人で動きますよ。あ、宿屋の位置はこれに書いておきました」

シーラさんに宿屋の位置が書かれた紙を渡した。

「お前の幼馴染にはどう説明すればいい」

「んー。そこはシーラさんに任せますよ」

「そういうのが一番困るんだがな」

俺は相も変わらず煙を吐いているシーラさんが付けている魔法統括協会のブローチを見てあることを思い出した。

「そうだ。シーラさんって花の国の花畑がどうなったか知ってますか？」

前に俺とイレイナが訪れた国の近くにあった花畑。その花畑はたくさんの魔力を吸って人を誘い出して養分に使っていた。

花の国の住民である女性が花畑に囚われているところを俺たちが助け、魔法統括協会に花畑をどうにかするよう依頼を出すように忠告していた。

正直者の国で再開したサヤちゃんはこの依頼がどうなったか知らなかったが、シーラさんなら知っているかもしれない。本当はサヤちゃんが言っていたように彼女の師匠に聞けばいいんだけど誰か聞くのを忘れていたので仕方なし。

「あの花畑のことか。知ってるぞ」

「本当ですか！」

「ああ。なんとたつてあたしが担当したからな」

「それでどうになりましたか？もう被害は出ないんですか？ソロルさんとアルテミシアさんは元気でしたか？」

ずっと気になっていたことだったのでつい早口になってしまった。

「まあ落ち着け。まずは花畑についてだが、あたし一人だと時間も手間もかかるから他の魔女の力も借りて燃やしておいた。もう誰も犠牲になることはないだろう」

「おお……！」

「んでソロルとアルテミシア？って名前なのは知らんが仲のいい兄妹から二人組の旅人へ代わりに礼を伝えてほしいと頼まれた。それがお前らだったというわけか？」

「そうですね！」

「嬉しそうだな」

「はい！」

そうか……無事にあの花畑は処理されたんだな。ソロルさんとアルテミシアさんも元気そうでよかった……。あの時彼女を救うことができて本当によかった。

あまりの嬉しさに今なら何でもできそうな気がする。

「それじゃあ俺はもう行きます。準備もあるので」

「気を付けるんだぞ」

「はい。……あ、そうだ。シーラさん」

一つだけ言い忘れてたことがあった。

「なんだ」

「あまりイレイナの前で煙草を吸うのはやめてくださいね。彼女、その臭い嫌いなので」

「……昔同じようなこと言われたよ」

「俺だけの時は別に構わないので。それでは」

一度軽く頭を下げてから俺はシーラさんに背を向けて歩き出した。

これから俺は裏オークションの会場に行く。

中に入るためには三つの条件があり、三つ目の入場料はどうでもよかったが一つ目と二つ目について考えていた。自らの身分を明かさなない、仮面を被ること。

「……む」

そういえば丁度良さそうなのがあつたな。

○

「つてな感じでお前の幼馴染はどっかに行っちゃったよ」

「そうですか」

カイから事情を聞いて来たシーラさんが部屋を捜査しながら切り裂き魔についてや彼がない理由を教えてくださいました。

「なんだ。思ってたより反応が薄いな。心配じゃないのか？」

「ないですね」

「信賴しているのか薄情なのか。いや、聞くまでもないか。それで、お前はこれからどうしたい？」

一通り捜査が済んだのか、シーラさんは手に持った煙管で頭を掻きながら聞いてきました。

当然答えは決まっています。私は立ち上がって右手を握り締めながら言い放ちます。

「切り裂き魔をぶっ潰します。この世に生まれたことを後悔させてやりますとも。さ、早く切り裂き魔の下へ案内してください」

「物騒な上に性急すぎるだろう……。お前が何もしなくてもあたしが切り裂き魔を捕まえてお前の髪を取り戻してやる。切り裂き魔の実力は分かっちゃいない。魔女であるお前なら自衛するくらいなんともないだろうが危険であることは変わらない。それでもか？」

「愚問ですね」

別に私が魔女だからといって切り裂き魔に負けるはずがないと慢心しているわけではありません。カイが動いているのに私だけ宿で待っているだけなんてできるわけないじゃないですか。

「そうか。ならさっさと着替えて行くぞ。……まったく、見せつけやがって。あの人たちを思い出すぜ」

「？」

シーラさんは私の右手を見ながら何か呟いてました。なるほど指

輪ですね。カイも同じ指輪をしていますし私たちの仲を羨ましいと思ってるのかもしれませんが。シーラさんは雰囲気的に男性に怖がられてそうですから——あ、睨まれた。怖い怖い。

仕返しなのかシーラさんは私の胸をずっと見て貧相だなんて言うてきやがりました。ぐぬぬ……。

切り裂き魔と怪盗ネコキャット（後編）

切り裂き魔の商品が出品される裏オークション会場に入る条件のうち、身分を明かさないといいものがありました。シーラさんはやけに目立つドレスを着込んでいました。

何故か自信ありげな彼女に「お前もどうだ？」と聞かれましたが遠慮しておきました。今の私はいつもの三角帽子とローブを脱いでシャツとスカートだけの格好に、目のあたりを隠す仮面被っただけの状態です。

払いたくもない入場料を払って裏オークション会場に入って赤いシート of 座席に座ります。費用はシーラさん持ちです。

どうやらここは昔はオペラ座として利用されてたらしいです。今は人形を手に入れるために気合が入っているのか鼻息の荒い人たちでいっぱいなのでお洒落な雰囲気が出なくなっています。

「……………」

「どうしたきよろきよろして……ああ、幼馴染を探してるんだろ。大切だもんかな？」

私が辺りを見渡していると隣に座っていたシーラさんが揶揄ってきました。

「静かにしてください怪しまれますよ。私は切り裂き魔がいなか探してただけです」

「ぷっ。切り裂き魔を探す？顔も知らないのか？しかも見つからなくて寂しそうな顔をしている奴が何を言ってるんだ。ふふ、もつとマシな嘘があるだろうに。あーやべえ、面白すぎて笑いが抑えられ——あっははは！——」

「……勝手にしてください」

カイの位置なんて指輪に魔力を込めれば分かることなのでそんなことするわけないじゃないですか勝手に想像しないでくださいこちらの顔を見てにやにやしないてください。

「あたしが悪かったって。だからそっぽ向くなよ。ほら、そろそろ始

まるで」

シーラさんがそう言うのとステージ上に一人の男性が現れてオークションの注意事項やルールについて説明し始めました。商品を購入するのが目的ではないので軽く聞き流しておきました。

今の私は切り裂き魔をぶっ潰すことしか頭にありません。ついでに夜闇の魔女もやれないでしょうか？

説明が終わった後は等身大サイズの人形がいくつか競られ、大金で落札されていくのを見て、それだけあればしばらくはパン食べ放題だなーなんて考えていると徐々に周囲が騒がしく(元々騒がしかったですが)なつてきました。

「さあ皆さんお待ちかねー！これが！今回の！目玉商品です！」

男性の声に合わせて登場した人形は先ほどまでと違って一般的な大きさの小さい人形でした。その人形は私が泊まった部屋に置いてあったものと同じドレスを着ていました。というか同じ人形です。昨日見た時と唯一違うのは髪です。金髪から艶のある美しい灰色の髪に変わっていました。

人形を見て客たちはさらに湧きあがり、その騒がしさで鬱憤が溜まっていきます。

「シーラさん。ここにいる人たち全員始末してもいいですか？いいですよね？」

「まあ落ち着けよ。イライラしたっていいことないぜ。あとここにいる人たちの中にあたしも入れてないよな？」

切り裂き魔からの出品であることを紹介された後に競が始まりました。我慢の限界が来た私は杖を取り出したところでようやく彼が現れました。

「そのオークション、ちよつと待った！」

突如聞こえた大声に客たちは一度ざわつきましたが後方から足音が聞こえて皆一様に振り返りました。

「なかなかどうして、こんなオークションに大勢集まるのか分からないな、吾輩には」

「ええ……」

歩いてきたのは執事服の上にマントを着て黒い手袋やシルクハットを身に着け、顔には以前見たサングラスではなく顔全体を覆う真っ白い仮面を被った黒髪の青年でした。あの時の衝撃は凄まじかったのでその姿を憶えています。考えるまでもなくあれはカイです。

彼はそのままステージ上まで上がり、人形の前まで来たところで男性が彼と人形の間に入りました。

「何をしている！一体誰だお前は！」

「吾輩か？吾輩は怪盗ネコキャット！本日はこのくだらない人形を頂戴しに来た！」

「そんなことさせるもの——」

「うるさい」

「おわああっ！」

彼に掴みかかろうとした男性はステージの外に投げ出されました。尻もちをついていましたが怪我はなさそうです。

「……あれお前の幼馴染じゃね？」

「……まあ……はい」

「何やってんの？」

「もしかしてですけど身分を隠してるんじゃないんですかね」

「このオークションに入る条件の一つのか。あいつってあほなのか？それともクソ真面目過ぎて壊れたか？」

「きつと何か考えがあつてあんなことしてるんですよ」

恐らく、大方、多分。

「おい、目を逸らすな。現実をしつかり見ろ」

「ま、まあ彼が何をするか見ていきましょう」

「今度は話を逸らそうとするな。はあ……なんだか保護者の気分だぜ」

巧みな話術によってシーラさんの気を彼の方に逸らした私は安堵の息を漏らしながら再びステージの方を向きます。

「くだらないってなんだ！」「そうやって人形を独り占めするつもりだろう！」「この素晴らしさが分からないの！」「帰れ！」

人形を侮辱されたことで怒った客たちは彼に向かって様々な言葉

を浴びせます。

「言いたいことはそれだけか！」

彼はそんな言葉に物怖じすることなく客たちを見やりました。

「怪盗を名乗ってるのに予告状は出してないのか！」「怪盗ネ……えつと何だっけ？」「センスのない田舎者！」「都会は初めてかー？」

「……………む？」

おや、風向きが。

「クソださ仮面！」「安直なキャラ付け！」「色が少ない！」「お前の人生の色と同じかー！」

「……………」

ステージの端の方に座り込んでしまいました。えええ……。

「メンタル弱いなー、あいつ」

「普段は悪口とか滅多に言われませんかね。慣れてないのでしよう。保護欲が掻き立てられますね」

「いや別に」

そんなことを話していると立ち直ったのか彼は立ち上がってまた前に来ました。

「貴様らが何と言おうとこの人形はくだらん！無論、製作者もな！さあ出てこい切り裂き魔！どこかで見ているのだろう？」

切り裂き魔に正体を現すよう促しますが当然のこのこと出てくるはずがありません。

「貴様がその気ならそれはそれでいい。こちらの用事を済ませるだけだ」

彼は懐から布を取り出して人形の隣に置き、杖を出して人形に魔法を掛けました。人形に植えられた私の髪は人形の頭から離れて布の上にふわりと着地しました。時間逆転の魔法を使ったようでした。

彼は大事そうに私の髪を布で包んで出した時と同じように懐に仕舞いました。そして髪のなくなった人形を持って客たちに見せつけます。

「吾輩は思う！何故人間の髪を使う？人形は人間を象って作られた物である。一般的にその材料は磁器であったりガラスであったり人

間の一部を使用することはない」

客からの罵詈雑言が飛んできますが今度はへこたれる様子はありません。

「それも当然だ。そんなものを使わなくても素敵な人形は作ることはできる！髪だってそうだ！職人が苦勞しながら作った人形用の髪の毛を使った人形はこの人形の数十倍も素晴らしかった！」

彼も物を作る人なので言いたいことがあるのか言葉に熱が入っていますね。

「人形の髪は人形に合わせて作られるものだ！人間の髪を使うなどただの妥協でしかない！確かに植えられていた髪は美しいものだったがこの人形には不釣り合いだ！貴様ら客とこれを作った切り裂き魔には分からないだろうがな！」

客たちの彼を罵る声は次第に小さくなっていきました。そして最後に言い放ちます。

「切り裂き魔！貴様は人形師としては三流以下だ！」

さつきまであんなに騒がしかったオークション会場は静まり返り、私やシーラさんも含めて誰一人として動こうとしません。

もしかしたら切り裂き魔はここにいないのではないかと考え始めた時のことでした。未だにステージの上で客席を見回している彼の背後からハサミを持った人形が襲い掛かりました。

「甘いッ！」

彼は振り向きざまに短剣を投降して人形を破壊しました。背後からの奇襲など彼には効くはずありません。

「酷いことするなあ。ボクが頑張って作った人形なのに」

後ろの方から女性の声が聞こえてきました。振り返ると私たちが昨日訪れた人形店の店主さんが柱の陰から現れました。

「ほう。貴様が切り裂き魔だな？」

「そうだよ怪盗さん。それにしても三流以下だなんて言われたのは初めてだよ。ボクとしてはそこいらの人形師に負けない腕前だと自負しているんだけどねえ。人形も一つ一つ愛情を込めて作っているよ」

「だが貴様は他人から髪を奪ってそれを売っていた。その時点で人形

師失格だ」

「ただどこににいる人たちは皆ボクの人形を求めて来ている」

「そうだな。全員まとめて人形を愛する資格なんてないな」

「……やれやれ。どうしても君はボクを認めたららないんだね。これ以上この話を続ける意味はなさそうだ」

おお。カイと店主さんこと切り裂き魔は睨み合っています。バチバチに睨み合っています。カイの方は仮面のせいで目が見えませんが多分睨んでいます。

「君が懐に仕舞った髪を返してくれないかな？あんなにも美しい髪に出会うことなんて滅多にないからね。ちゃんと人形の材料として使ってその人形が誰かの手に渡るところを見たいんだ。だから大人しく返してくれるなら命までは取らないでおいてあげるよ」

「何を偉そうに言っている。この髪は貴様のような犯罪者のものではないだろう。盗人猛々しいとはこのことか」

そうだそうだ。その髪は私のですよ。……私は犯罪者じゃないですよね？

「いいのかい？ボク実は魔女なんだよ。多少は腕に覚えがあるようだけれど君が挑んで勝てるような相手じゃないよー」

切り裂き魔は魔女でしたか。なら同じく魔女である私が寝込みを襲われても仕方のないことですねそうですね。

カイが一緒の部屋にいてくれたらこんなことにはならなかったんですかね。今度からは同じ部屋に泊まるようにする……？いやでも……むむむ。

「そうか。ところで何故人形を闇オークションに出品する？お金はいらないんじゃないのか？」

「ん？お金は本当にいらないよー。闇オークションの儲けだつて――」

パアン、と銃声が響き渡りました。音の発生源を見てみるとカイの片手には銃が握られています。切り裂き魔が喋っている最中に撃ったようです。容赦がないですね……。

撃たれた切り裂き魔はというと、流石は魔女というべきか一瞬で杖

を取り出して防いでいました。

「ふふん。そんな攻撃じゃボクには届かないよ。とは言えいきなり撃たれたのはびっくりしたなあ。もしかして怒ってるの？ああ、怒りで歪んだ君の顔が見たい！その仮面を取ってボクに見せてよ！」

「断る」

「なら無理やり見ることにするよ！」

今度は切り裂き魔の番のようです。彼女が杖を一振りするとこのオークション会場にある人形全てが彼女の周囲に集まり、ふわりと浮いてカイを見つめていました。

そして彼の方へ杖を向けると人形たちが次々に飛び掛かります。

「——ッー」

危険だと思ったのか隣に座っていたシーラさんが立ち上がろうとしていたのを私は手で制しました。

「おい。自分が今何してるか分かってるのか」

「当り前じゃないですか」

このままだとたくさんの人形に動きを封じられて何もできないまま斃られてしまうのは想像に難くありません。もしかしたら殺されてしまうかも。

けれどそれは彼が弱かった場合の話です。彼は強いです。それは私が保証しましょう。以前物だらけの国で彼が私のことを信じてくれたように、私も彼のことを信じます。

「はあ……。そんな顔されたら何も言えねえよ。……しばらくは見守るがこれ以上は命に係わるとあたしが思ったら今度こそ止める。それが大人としての責務つてやつだ」

「はい。それをお願いします」

カイは両手に銃を一丁ずつ持って襲い掛かってくる人形を一体一体正確に素早く撃ち抜いていました。銃は彼が作った魔道具なのか弾切れする様子は見られません。そのおかげで彼のもとまでたどり着く人形は一体もいません。

「……保護者つてのも楽じゃないな。何しでかすか分かったもんじゃねえ。まああたしも人のこと言えた義理じゃないか」

シーラさんって怖そうな雰囲気がありますがなんだかんだ面倒見がいいですね。後輩に慕われるタイプですねきつと。煙管をやめるとか目つきや口調を柔らかくすればもう少し人気が出るんじゃないでしょうか。それが彼女の魅力なのかもしれません。

いつの間にか切り裂き魔の周囲にいた人形は全てステージの上に転がっていました。

「ボクの人形を全部捌き切ってみせるなんて！君強いね！」

「もう終わりか？」

「まさか！」

切り裂き魔が杖を振るうと人形たちが起き上がりました。カイに撃ち抜かれた部分が元に戻っていくのが見えます。これも時間逆転の魔法ですね。

彼女はもう一度杖を振るって再び人形をカイへ突撃させました。今度は次々と発射する感じではなく一斉に飛び掛かりました。その様子は壁が迫っているかのようです。

「……………」

それに対してカイは銃を一発撃つのみでした。当然銃弾はたくさんの人形の内の一体にしか当たりません。

「おやあ。弾切れかな？それじゃあお終いに——」

その瞬間。人形の壁にできた穴から音もなく一本の矢が飛んできて切り裂き魔の杖を折りました。

杖がなくなったことで人形に掛けられた魔法が解け、重力に従って落下しました。障害物がなくなったのでカイは切り裂き魔に接近して彼女の首元に剣を突き付けました。勝負ありです。

「吾輩の武器は銃だけだと油断した貴様の負けだ。最後まで相手から目を離すな。まあ吾輩の弓を引く速さに貴様が反応できたか怪しいかな」

「ふふふ。油断してるのは君の方だよ。まだ終わって——」

「いや、終わりだよ」

切り裂き魔が何かしようとしたところで彼女の手に手枷が嵌められました。杖が握れないように指に鎖を通したやつです。いつの間

にかシーラさんがステージに上がっており、手枷を嵌めたのも彼女のようでした。

「む。別に手助けはいらなかったのだがな」

「はいはい。お前の強さは分かったよ。正直あたしが想像していた倍は強かったぜ。あとはこつちでやっておくからお前は幼馴染のところに言ってやりな」

シーラさんはしゅしゅと手を振り、カイが切り裂き魔から離れたのを確認してから彼女を大きな籠で捕らえていました。

「ああ待って！その仮面を取ってボクに顔を見せて！お願いだから！」

「うるせえ静かにしてろ！」

騒いでいる二人を置いてカイがこちらに向かって歩いてきました。

「これを君に」

そう言って彼は懐から布で包まれた私の髪を差し出してきました。

「ありがとうございます。お礼にいいものを見せてあげましょう」

「？」

私は魔法で髪を元通りにし、ローブを着ました。

「では見ててください」

そしてローブの下から髪を掻き上げるようにふあさーつとなびかせました。カイは以前に話した私の癖の一つであるこの仕草を見たいと言っていたので今回の報酬として見せてあげることになりました。

いくらお金を積まれても他の誰かにこの仕草を態々見せる気はありません。贅沢な報酬です。

「どうでしたか？」

いつの間にかカメラを持っていた彼に感想を聞きます。

彼は仮面を取って笑顔で一言。

「凄く綺麗だった」

それなら、よかったです。



俺が怪盗ネコキャットとして切り裂き魔を倒してイレイナに髪を返した後のこと。シーラさんは切り裂き魔を魔法統括協会の支部に送るためこの国を出発するというので俺たちは見送りに来ていた。

「ほら。こいつをやるよ。協力してくれたお礼だ」

そう言つてシーラさんは小さな袋を投げ渡してきた。そう言えばサヤちゃんの時もお札を貰った記憶がある。

袋の中身を見てみると金貨が五枚ほど入っていた。

「あ、ずるい。シーラさん私にはないんですか」

「あるわけないだろ。お前はあたしの横で座っていただけだったじゃねえか」

「私は被害者ですよ。賠償金というものがありますよね」

俺の隣で金貨を見たイレイナが片手を出しながらシーラさんに自分のことを主張し始めた。自分だけ何も貰えないのは納得いかないのかそれともごねるだけごねるつもりなのかは分からないけど。

「いやそれは加害者が払うやつ。あたしが払うやつじゃねえよ」

「ならシーラさんに胸を馬鹿にされて傷付きました。慰謝料を払ってください」

「ならつてなんだよ。しつこいやつだな……。まあその点に限ってはあたしが悪かったよ。これでいいか？」

シーラさんは片手で何かを弾き、綺麗な弧を描いてイレイナの手の上に着地した。どうやら金貨のようだった。

「一枚だけですか。本当はもっと欲しいところですがいいことにしましょう」

「それじゃあたしは行くぜ」

「あ、その前に写真を一枚いいですか？」

ほうきに乗って出発しようとしていたシーラさん呼び止める。

「先を急いでるんだがな。まあいいぜ。あたしにも一枚くれよ」

「ありがとうございます」

俺とイレイナの間にシーラさんが入り、三人の全身が写るようにカメラの位置を魔法で固定してシャッターを切った。その場で写真を取り出して見てみると皆いい顔をしていた。……後ろの方で籠に囚

われている切り裂き魔含めて。何とも言えない表情をした俺は同じような顔をしていたシーラさんに写真を渡した。

「……じゃあな。縁があればまた会おう」

「はい！」

魔法で籠を持ち上げ、ほうきに乗ったシーラさんは一度俺たちの方へ視線を向けた後、風のような速さで飛び立った。先の言葉通り急いでいたのか彼女の姿は米粒くらいの大きさになっていた。

「これにて一件落着かな」

「そうですね。けれど一つだけ分からないことがあります。何故あなたはあんな恰好をしていたのですか？変装をするだけなら私のように仮面を被るだけでも良かったでしょうに」

なるほど。イレイナは俺が正気なのに怪盗ネコキャットを名乗っていたのか知りたいようだ。隠す理由もないし教えてあげるとしよう。

「それはね、その方が楽しそうだったからだよ」

「……………はい？」

以前までは怪盗ネコキャットとして行動していた自分を恥ずかしいと思っていた俺であったが、最近の良い思い出だったなど思い始めたのだ。

いつもと違う自分というのもなんだかんだで楽しく、機会があればまたやっても良いなと考えていた矢先に今回の事件が起こり、変装する必要があるとされたので絶好の機会だと思った。

だからほとんどノリで怪盗ネコキャットになっていたので、髪を切られて怒っていたイレイナには少し悪いことをしたのかもしれない。もし気を悪くしたのなら謝らないといけないだろう。

「何と言うかその……。あまりストレスを貯め込みすぎないようにしてくださいね？いつでも相談に乗りますから」

……何か勘違いされているのだろうか。俺の答えを聞いたイレイナの顔は優し気だった。

勘違いを解こうとしても、「まあそう言うことにはしておきましょう」と聞く耳を持つてくれなかった。悲しい。

「俺たちも行くか」

「はい」

いつものように俺は地面を蹴って、イレイナはほうきで空を飛んで次の国へと向かっていた。

隣を見る。灰色の長い髪が風で揺れている。綺麗な髪だ。取り戻せてよかったと心から思う。

切り裂き魔は人形作りに情熱を注いでいたから油断していたところも含めて魔女としては強くなかったのかもしれないが、それでも魔女だった。一歩間違えていれば無事では済まなかったかもしれない。俺を鍛えてくれた師匠に感謝だ。

俺が怪盗ネコキャットとして魔女に勝ったのは今回で二回目。一回目の時は俺も相手もおかしくなっていた時のことだったのでどう判定すればいいか分からないが、今回は俺自身の意思と力で魔女に勝てた。そのことを誇ってもいいのではないかと思う。師匠には鼻で笑われるかもしれないけど……。

これからも魔女や魔女並みに強い相手と戦闘になることがあるかもしれない。相手は俺より強いかもしれないが、俺は負けるつもりなどない。そのための修行は今もしているし、今回で自信もついた気がする。

それと怪盗ネコキャットになって活動するのも楽しかった。またやりたいと思つたのをイレイナに話したところ、「やっぱり……」と呟いていた。勘違いを加速させてしまった気がする。

それにしても変な勘違いをするものだ。俺はイレイナと一緒にいるだけでストレスなんて綺麗さっぱりなくなるといふのにさ。

遙かな国の五十三番（前編）

東にある国には大きな犯罪組織が裏で暗躍していた。

武器や麻薬の密売、要人の護衛、暗殺など幅広く活動しており、顧客には国の上層部の人間もいる。

その構成員の多くはならず者だが、組織によって拾われた子どもたちもいた。彼らは名前など付けてもらえず、番号で呼ばれていた。

彼らは組織によって教育され、殺人や密偵のスキルを身につけさせられていた。

当然人には向き不向きがある。こいつは武器の扱いが得意でタフだから切り込み役、あいつは変装するのが上手いから潜入役と適正に合った任務が割り当てられていた。

しかし組織からすれば彼らの命は軽く、身代わりにされたり任務に失敗した時に簡単に切り捨てられてしまっていた。

この国では貧富の差が激しく、貧しさ故に子どもを育てることが出来ないとまだ幼い子たちを道端に捨てる事態が多発しているので組織にとって人員は楽に手に入れることが出来るのだ。

組織の大人たちは子どもたちを拾ったり教育するのはその前に拾った子どもにやらせることで働く量を減らし、自分たちは彼らが達成した任務で得たお金で遊んでいた。

どうせ子どもたちは自分の意思というものを持つことなく死んでいく。それが汚い大人たちの認識だった。

だが稀に任務に失敗することも、囹に使われても死ぬこともない者も出てくる。

今回語られる『五十三番』もその一人である。

○

五十三番は親の顔を知らない。まだ赤ん坊だった頃に捨てられ、組織に拾われ、他の捨て子たちと共に育てられた。

名前など付けてもらえず、五十三番とだけ呼ばれる彼は組織の一員として働くのに必要最低限の知識や戦い方を叩きこまれた。

子どもたちは試験の成績が悪かったり戦闘訓練で無駄な動きをすると年上の教育役に殴られたり蹴られたりするなどの体罰が待っている。何故殴ったり蹴ったりするのかはそれを行っている本人にも分かっていなかった。過去に自分がされ、誰も異を唱えることはなかったからそれが正しいのだと思っていたからだ。

当然まだ幼い子どもにそれは酷というもので、最初は泣き叫んだり怒鳴ったりしたのだが、それは教育役からの体罰の激しさを増させるだけだった。抵抗が無駄だと悟った子どもたちは次第に感情というものを見せなくなってしまう。いや、感情というものを持つとうとしくなくなるというのが正しい。

しかし五十三番は最初から感情を表に出すことはなく、ただ淡々と教育役から与えられた問題を解き、体を動かしていく。成績は優秀、戦闘力もすぐに教育役を超えてみせた。そんな彼のことを見ていた組織の大人が試しにと任務を与えてみた。

その任務は組織の邪魔になる人間の暗殺だった。標的は国を裏から牛耳る組織を潰そうとしている余所者で、特筆すべきこともないただの正義感に燃えた若者である。仲間はおらず、突然いなくなっても探す者はいない。

組織としては成功しても失敗してもどちらでもいい任務であり、五十三番の実力を測るにはうってつけだった。

当時十歳にも満たなかった五十三番は特に何か言うこともなく朝から任務に向かい、昼になる前に帰って来た。

組織の大人たちは怖くなつて逃げだしたのかと思ったが、標的の死体の処理や証拠を残さないようにするために現場で待機していた掃除係——秀でた才能がなかったからこの係に任命された子ども——が彼はあっさり任務を達成したことを伝えてきた。

あまりの手際の良さに大人たちの一人がどんな手段で暗殺したのか尋ねてみると、返って来た答えもまたあっさりとしたものだった。「標的が部屋から出てきたところを胸に一撃入れただけでした」

死体を確認させてもらおうと死体には目立った外傷はなく、苦痛や恐怖で顔が歪んだりもせず、まるで気持ちよく寝ているようだった。

教育係に聞いてみても子どもたちには殺人の仕方は教えているが、こんな殺し方は教えていないと言われた。だから一体どうやって殺したのか本人に聞いてみた。

「ワタシはただ、力を込めて胸を殴っただけ……です」

五十三番は表情を変えることなく答えた。彼はただ事実を述べただけであったが、大人たちには隠し事をしているように見えた。

「嘘をつくな！そんな簡単に人は殺せん！」

そのことに怒った男性が五十三番を殴ろうと顔面に向けて拳を振り下ろそうとした瞬間。

「……………」

五十三番は男性の胸を殴り、殴られた男性の動きは止まった。殴りかかる態勢のまま動かない姿に後ろにいた別の男性は疑問を覚えて回り込んで顔を覗き込んだ。

「ひい！っ、死んでる……………」

先ほどまで怒りで顔を染めていた男性はその顔を穏やかなものにしたまま死んでいた。その光景を周りで見ていた者たちの間にどよめきが起きる。

「……………」

たった今、人を一人殺したというのに五十三番は表情一つ変えることなく周囲の状況など気にすることなくその場を立ち去った。

その夜。組織のボスや幹部たちによる緊急会議が行われていた。内容は五十三番についてである。

「五十三番の処遇についてだが……諸君はどう思う」

組織の長である老人が幹部たちに問う。幹部たちの意見は二つに分かれた。

「あいつは仲間を一人殺しました！いつ我々に牙を向けるか分かったものではありません。即刻処分すべきです！」

「奴の利用価値は極めて高いです！今回のことは不問にすべきかと

！」

簡単に言えば、五十三番を許すか許さないかだ。どちらの言い分も納得できるものであった。

少しの間お互いの意見のメリットとデメリットを出し合っていたが話は平行線のまま続き、部屋が静かになった頃にそれまで静観していた老人が口を開いた。

「どちらの意見も尤もなものだ。だから奴には危険度の高い任務をさせるのはどうだ。そうすれば死ぬ可能性も高いし成功したらしたで美味しいはずだ。反対する者はいるか？……いないようだな。それでは解散」

老人のその一言によって今回の会議は終了を迎えた。

こうして次の日から五十三番には暗殺や警備、囚など死ぬ可能性が高い任務を与えられるようになった。どの任務も基本は単独で行うものとなっており、常人ならば命がいくつあっても足りないようなことばかりだった。

しかし五十三番はそれらすべての任務を無事に達成し続けた。

五十三番が初めて任務を受けてから十年以上が経ち、子どもから大人になった彼には運命の出会いが待っていた。

・○

夜。

五十三番は暗殺任務を終え誰にも見つからないよう黒い髪を靡かせながら屋根の上を跳んで帰っている途中、体に力が入らなくなってしまう屋根の上から落ちてしまった。

「……………」

だがこのくらいで慌てるような男ではなく、音を出さないよう身動き一つ取らなかった。彼は体を休めれば回復するだろうと考えていた。

もしも騒いで誰かに見つかって組織のことがバレたら余計な仕事

が増えてしまう。それは彼にとって最善な行動と言えなかった。幸いなことに落ちた先は藪の中であり、動かなければ見つかることはない。

「誰かいるのかしら？」

墜落した時の音を聞いたのか五十三番がいる藪の近くをうろつく誰かの声が聞こえてきた。

彼は一層息を潜める。しかし体は正直だったようで、彼のお腹の中から音が鳴った。

五十三番が体に力が入らなかった理由は空腹だった。

彼はターゲットを暗殺する機会をずっと探っており、三日間飲まず食わずのままだった。

「こっちの方から何か聞こえたような……」

声と足音が近づいてきて彼の目の前の藪が掻き分けられた。

「見つけた！」

「……………」

元気な声を出して覗くのは長くて和服を着た歳は五十三番よりも一つか二つ下くらいの子供らしい黒い髪の少女。

「ちよっと待っててね！」

そう言い残して少女はどこかへ行ってしまった。

見られたからには彼女を消さなければならぬと思う五十三番であつたが上手く立ち上がることができず、座った体勢のままその場に留まることになった。

「はいこれ」

少ししてから少女は戻ってきて手に持っているものを彼に差し出した。

「……………」

「そんなに警戒しなくても……。ただの握り飯よ。具は入ってないけど」

五十三番は少女の顔を見て悪意がないと判断し、握り飯を受け取って一通りおいを嗅いでから漸く一口食べた。

「……しよっぱいな」

「慣れてないんだからしょうがないでしょ！文句言わないで！」

文句を言いながらも五十三番の食べる手は止まらない。

彼は手に持った握り飯を素早く食べ終わると体に力が戻ってきて立つことができた。

「ちよつと、どこ行くのよ」

「……帰る」

「ご飯食べさせて貰っておいてそのまま帰る気？それは失礼してもんじゃない？」

「……そつちが勝手にしたことだ」

「あ、何その言い草。もう怒ったわ。私の気が済むまで帰さないわよ！」

顔を膨らませた少女が五十三番の服を掴んで離そうとしなかった。

「……少しだけだ」

「本当!?それなら私の話し相手になってよ。暇してたのよねー」

どうしたものかと五十三番は考えたが、これ以上目の前の彼女の気分を害して誰かを呼ばれてしまう可能性があったので大人しく従うことにした。

少女の方は本気で残ってくれるとは思っていなかったので驚き、喜んで。

「そうと決まればこつちよこつち！ほら早く！」

「引っ張るな」

「そういえば自己紹介がまだだったわね。私はヒナタ！あなたは？」

「……五十三番」

五十三番は偽名を名乗るか迷ったが咄嗟にいい名前が浮かぶわけでもなかったので正直に答えることにした。

「五十三番？変な名前ねー。まあいいわ。よろしくね」

○

五十三番がヒナタに引っ張られて向かったのは特別大きいわけで

はないが小さいわけでもないこの国では一般的な民家だった。家に比べて庭がとても広く、離れたところに見える高い壁が四方を囲っていた。

彼女に言われるがままの五十三番は家に入り、彼女の自室の畳の上に座布団を敷いて座らされた。

「さつきは驚いたわ。庭を散歩していたら何かが落ちる音が聞こえたから何事かと思って見に行ったらあなたが藪の中で倒れていたのだからねー」

「そうか」

ヒナタは五十三番に警戒する様子もなく彼の正面に同じように座った。

「それでなんであんなところに倒れていたのかしら？ やっぱりお腹が空いていたから？」

「……まあそうだ。先ほどの握り飯は感謝している」

「あら、さつきは食べたなら何も言わずに帰ろうとしていたけど今は言うのね」

「言う必要性を感じなかったからだ」

「何故？」

「どうせもう会うことはないからだ」

五十三番がヒナタと出会ったのは偶然であり、彼には他人と交流しようなどという考えはないので二度と会うことはないと思っている。もう会わない相手にどう思われようが関係ないというのが彼のスタンスだった。

飯を与えられ、家にまで上がらせてもらった今は多少の感謝を伝えなければならぬのは彼にも分かっていた。

「随分と悲しいことを言ってくれるわね」

「悲しい？ 何故だ？」

「私はね、気軽に喋りができる友人なんていないからこうしてあなたと出会えて嬉しいと思ってるのよ」

だから今日だけで終わらせたくないのよねー、とヒナタは淋しさが混じった笑顔を見せる。その顔を見て五十三番は何も言うことがで

きなかった。

「まあこれは私の我が儘だからあなたは気にしないで帰っていいわよ」

「……もう少しだけ話を聞いてやろう」

「わあ！本当？」

「ああ」

五十三番の一言にヒナタは花が咲いたかのように笑った。

二人は日が昇り始めるまで語り合った。ヒナタが話して五十三番が聞くだけのものだったが両者の顔に不満や退屈は見られなかった。

「あら、もうこんな時間。長い間付き合わせちゃってごめんね」

「別にいい」

「あなたと話すのは楽しかったわ。私が一方的に喋ってるだけだったけど。……またこうして話をしてくれるかしら？」

ヒナタは不安そうな顔で俯いて尋ねた。

五十三番は暫しの沈黙の後答える。

「……さあな」

「！」

先ほどはもう会わないと言っていた彼が言葉を濁した。それがどういう意味なのか分からないヒナタではなかった。

「なら……あれ、いない」

ヒナタが顔を上げた時にはもう五十三番の姿はなかった。

●
ワタシはあの少女——ヒナタと別れてから三十分経たずに組織に帰還した。

任務を達成したことをワタシが報告する必要はない。後処理をする者が勝手に報告してくれるからだ。

だからワタシが遅れて帰ってきたことを気にする者はいない。

「おや、五十三番。今頃帰ってきたのかい？もしかして夜遊びとか？」
「……………」

どうやら一人だけいたようだ。

ワタシと同じくらいの歳に見える茶色の髪の男はまだ暖かい季節だというのに外套と襟巻をして中折れ帽を被っている。

どうでもいい。

「ちよつとちよつと。無視は酷いねえ。オレとあなたの仲じゃないか」

「……お前は誰だ？」

「四十九番だよ。まったく、これで何回目だか……」

ワタシとこの男は何度も話をしているようだが憶えていない。

「お前とくだらない話をする気はない。ワタシは自室に戻る。邪魔をするな」

「つれないねえ。まあオレもこれから任務だから邪魔するつもりはないよ」

四十……何番か忘れたが男は、「じゃあねー」と手を振りながら去っていった。

組織からワタシに与えられた部屋には家具など一つもない。ただ横になって休むことができればいい。

「……………」

目を閉じる。いつもならすぐに眠るのだが、今日に限ってはヒナタとの会話を思い出してしまう。

『私のお父様はこの国の偉い人なのよ』

『そうか』

自分の父親について説明をして何になるのだろうか。分からない。

『あ、信じてないでしょ？』

『……………』

『ちよつと！何か言いなさいよ！』

『何と言えればいい？』

『そんなの自分の思ってることを素直に言えばいいの！さあどっち！！』

その時ヒナタは大声を上げながらワタシの両肩を掴んで揺らして

いた。

『信じてる』

『んー、本当かしら？怪しいわね』

『お前に言われた通りに言っただけだ』

『信じられないわねー。さあ、本音を言いなさい！』

彼女が嘘をついていないのは分かっていたから信じていると言っただけだが何故信じて貰えなかったのか。分からない。

『……………』

『ごめんごめん、ほんの冗談よ。だから拗ねないで』

分からない。この感覚は、初めてだ。



「あーまた来てくれたのね。嬉しいわ！」

「……………」

任務を終えた後の夜。今度は自らの意思でヒナタの家を訪れてしまった。

彼女は縁側に座って庭を退屈そうに眺めていたが、ワタシを見つけて笑顔になった。

「じゃあ今日はどんな話をしようかしら。何がいい？」

「好きにしろ」

「そういう人任せなのは困るわね……………」

「それはお前も同じだ」

「これは一本取られたわね。よし、なら前回と同じで思いついたことから話していきましよう」

それからヒナタはこの前と同じく楽しそうに喋り始めた。

彼女が言っていた通り、頭に浮かんだことから喋っているから既に一度聞いた話をまた聞かされたりもしたがワタシは口を挟むことはしなかった。

「私は毎日ここで何してると思う？」

「知らん」

「もう少し考える素振りを見せなさい！……まあいいわ。私はここで勉強しているのよ」

「勉強だと？」

「そう。私は将来この国をより良い国へと導くためにいろんなことを学んでいる最中なの」

「一人でか？」

この家にはヒナタ以外の姿はなく、彼女以外の人間がいた痕跡も見当たらない。

「ええ。ここにはたくさんのお書物があるからそれを読んで憶えて自分のものにしていくわ」

「分からないところがあつたらどうする。誰かに聞いているのか？」

「答えが出るまで一人で考えてるわ。ここに来れるのはあなたぐらいなものよ」

ヒナタが住んでいるこの家は四方を高い壁に囲まれており、ここに訪れるためにはこの壁を乗り越えなければならない。扉や抜け穴といったものはないため普通であれば誰も中に入ることはできないだろう。ワタシは壁よりも高く跳んで中に入った。

「この国を良い国へと導くと言ったな。それはどういう意味だ？」

「よくぞ聞いてくださいました。今、この国は様々な問題を抱えているわ。それは何でしょう……とあなたに聞いたところで知らんの一言で終わりそうだから聞かないでおきましょう」

「……言う必要があつたのか、それは？」

「ごほん。問題の一部として貧困層の増加や麻薬、賄賂などがあるわ。他にもいっぱい。これらを放置しているとその先にあるのは悪人だけが得をする国になってしまうわ」

国が抱えている問題はワタシにとって関係ないものだ。国がどうなるかだなんて気にしたことは一度もない。

「なんでこの国でそんなことが起こるのか。私はその原因となつていくものをお父様から教えてもらったの。それさえなくなれば後は自然と正しい国になっていくらしいわ」

その原因についてだってそうだ。考えたところでワタシがするこ

とは何も変わらない。

「その原因を排除するために私は頑張っているってわけよ。もしあなたがいいと言ってくれるのであれば、あなたにも手伝って欲しい。……ははは、まだ二回しか会ってないあなたにこんなこと頼むのも変ね」

「……してもいい」

「……え？」

「だから、協力してもいいと言っている」

「へえ。もしかしてあなただって案外面倒見がいい方？」

「知らん。そんなことよりも早くその原因について話せ。時間を無駄に浪費するつもりはない」

正直自分でも不思議に思う。以前のワタシなら誰かに協力を求められても任務じゃないからと断っていたはずだ。なのに何故ヒナタには協力しようと思ったのか。分からない。

国を悪化させる原因よりもワタシの変化の原因を探ろうとしていると、ヒナタが頭を下げてきた。

「ごめんなさい。あなたを揶揄うつもりはなかったけど手伝うと言って嬉しくてつい言ってしまったわ」

「どうでもいい。そんなこと始めから気にしていない」

「ありがとう。それで原因についてなんだけど」

もしかしたらヒナタと話したことが原因なのかもしれない。彼女と話し続けることがワタシを変化させているのかもしれない。組織で習ったことではこの仮説が正しいかは証明できない。

だがこの変化は不快なものではなく、やめる気はしない。これからも時間を見つけてここを訪れるつもりだ。

しかし、彼女の放った言葉は暫くワタシを悩ませることになった。「この国を拠点としている強大な犯罪組織。殺人や詐欺、麻薬販売などをやっている組織が原因であり私の敵よ」

犯罪組織は過去に複数存在していた。今は一つの組織に吸収されたか壊滅させられた。だからこの国に犯罪組織は一つしかない。

それはまさしく、ワタシが所属している組織だ。

「……………」

「どうかしたの？」

ワタシは組織の者だ。組織に拾われ育てられ、恩を感じているわけではないが組織のために働いている。

だがヒナタに協力することは組織に敵対するということだ。組織を裏切ることなど考えたことがなかった。

組織とヒナタ。どちらにつくのが正しいのか分からない。

「おーい。大丈夫？もしかして怖くなっちゃった？」

「…………いや、大丈夫だ。その…………お前に協力するのはいつだ」

「ん？具体的なことは何も決まっていなからまだ何もなくても大丈夫よ。将来的な話ってだけ。でも時が来たら手伝ってね。約束よ」

「…………そうか。ワタシはもう帰る」

「え。あ、ちよつと——」

ヒナタが何か言う前にワタシは立ち去った。

ワタシはこれまで組織にとって正しいことを行ってきた。

組織の敵の暗殺や要人の護衛、抗争の際に一番槍として戦ったりもした。

組織に対する忠誠心はない。上層部に慕っている人間がいるとかでもない。それでもいつ命を失ってもおかしくない任務をこなすのが当たり前となっていた。

それを疑問に思ったことはなかった。今日この時までには。

組織に対して敵対するつもりはヒナタのことを報告するのが組織に所属している者のあるべき姿だ。

しかしそうする気にはなれない。

「おやおや。五十三番じゃないか。こんなところで突っ立って何をしているんだい？」

いつの間にか組織まで戻っていたようだ。

入口の前で立っていたワタシの背後から外套と襟巻をして帽子を身に着けた男が声を掛けてきた。

「ああ…………お前は四十…………二番だったか。少し考え事をしていただけだ」

「オレは四十九番だつて。四十二番は五年前の抗争の時に心臓を刺されて死んだでしょ」

「お前が何番だろうとどうでもいい」

「そうかい。あ、そうだ五十三番。前聞くの忘れてたけどこの恰好どうだ？海外から取り寄せただけどなかなか似合ってるんじゃないか？」

「知らん。鏡でも見ている」

「冷たいねえ……。まあいいさ。それじゃあねー」

やれやれとため息をついてから男は先を歩いて行つた。無駄な時間だった。

その後ワタシは部屋に戻つて寝ることにした。ヒナタと組織のことを考えて眠れないかと思つたが、ワタシの意識はあつさりと落ちた。

・
○

それから五十三番は何度もヒナタの家へ足を運んだ。ヒナタは彼に会う度にいろんなことを教えた。

「魔法使いつて知ってるかしら？」

「知らん」

「まあこの国に魔法使いはいないからね、一応。だから知らなくても仕方ないわよ。昔外から優秀な魔法使いが来たらしいんだけど……いえ、何でもないわ。それで魔法使いつてのはね——」

ある日は彼が知らない知識を披露した。

「あなたってあまり女性から好かれるタイプじゃないわね。無愛想だし。ほら、さつき教えたのやってみて」

「……へいへいへい、そこのお前。これからワタシとお茶でもどうだ」

「めっちゃ棒読みじゃない！表情も変わってないし！台詞も勝手に変えないで。三点」

「本当にこれが本に書いてあったのか？」

「書いてあるわけないじゃない。嘘よ嘘」

「……………」

またある日は真面目な彼を揶揄ったりもした。彼はいつも通り表情を変えることはなかつたが

四方を高い壁に囲まれた家で過ごしているヒナタにとってこの時間は何物にも代えがたい大切な時間であった。永遠にこの時間が続いて欲しいと密かに願った。

だがその願いは叶えられることはない。

遙かな国の五十三番（後編）

「これは……どういうことだ」

五十三番が今日もヒナタと話そうとしたら、彼女の家を囲う高い壁の一部が壊されているのを発見した。何か爆発したかのような跡があり、簡単に人が出入りできる大きさの穴が開いていた。

彼は悪い予感を感じ取る。

「——ッ！」

五十三番が急いで穴を潜ると四方を高い壁で囲まれた土地の真ん中。そこにある家から煙が出ているのが見えた。

「ヒナタ!!」

家まで走って縁側から上がり、ヒナタの部屋の障子を蹴破る。

「ヒナ……タ……」

「う……ん……だれ……?」

火の手が上がる部屋の中に彼女はいた——

——血だらけの状態で。

五十三番は慌ててヒナタを抱きかかえて家を飛び出した。

「ヒナタ! しつかりしろ!」

「うるさい……わね……。だいじょうぶと……言いたいところ……だけど……もう助からない……わ……」

体のいたるところに刺し傷があり、出血量から考えても彼女が助からないのは明白であった。それが分からない五十三番ではない。

だが分かりたくなかった。彼女がこれから死ぬなんて考えたくなかつた。信じたくなかつた。

「待て! そんな……待ってくれ! ワタシはまだお前との約束が果たせてない!!」

「ふふ……気にしないで……あなたはあなたのこと……したいこと……をして……」

「ワタシにしたいことだなんてない……」

五十三番はどうすればいいか分からずに項垂れてしまう。
そんな彼の顔に触れるものがあつた。ヒナタの血だらけの手である。

「いろいろ……言いたいことが……あるけど……最後に一つ……お願いがあるの……」

「なっ、なんだ！教えてくれ！」

彼女の願いなら何でも叶えてみせる。そう思った五十三番に、ヒナタは最も残酷な願いをする。

「私を殺して」

「」

この時生まれて初めて五十三番の頭が真っ白になった。

「ごめん……なさい……酷いことを頼んで……るけど……もう……痛くて……苦しくて……」

「ワタシは……」

「お願い……楽にさせて……」

震える五十三番の腕をヒナタが弱々しく掴む。

このまま何もしなければ彼女は痛みで苦しみながら死ぬだろう。もう助からない彼女の命を奪うことが彼女の助けになる。いつものように、胸に向けて拳を振るえばいい。それを彼は理解していた。

ヒナタを殺したくない。その想いが彼の手を止めていた。人を殺すことに躊躇いが無かつた五十三番が初めて躊躇っているのである。どうするか悩み続けていたが、時間は有限。ヒナタの口から血が噴き出され、五十三番の顔にかかつた。

もう考えることができなかつた。

「あああああああああー！」

右腕に力を込めてヒナタの胸に触れる。

「ありがとう……あなたは……」

彼女は小さく微笑んでから目を閉じた。息もしていない。体も動かない。ヒナタは死んだ。五十三番が殺した。

彼女の最期の言葉を聞く余裕は彼にはなかつた。

「……………」

五十三番はあまりのショックに泣いたり騒いだりするのではなく、ただぼうっとヒナタの亡骸を見つめていた。

彼が今何を考えているのかは誰にも分からない。後悔しているのかもしれないし、ヒナタとの日々を思い返しているのかもしれない。見る人によつては今の二人の状態に心を動かされるのかもしれないが、劇でもないのです。そのような人物は存在しない。

だが、いつまでも二人の時間が続くわけでもなかった。

「ここであつてるよな……。ん？五十三番じゃないか。なんでお前がここにいるんだ？」

「……お前は」

壁の穴から一人の男性が入ってきて五十三番に声を掛けた。

「俺はここの後処理に来たんだが今回は他の奴の任務じゃなかったか？」

「は？」

目の前の男は五十三番が所属している組織の者で、任務を達成した後に証拠となるものを処分する役目であった。

つまりヒナタは排除しようとしていた組織によつて、逆に排除されてしまったことになる。

しかし彼女は高い壁に四方を囲まれた家に住んでおり、外部との関りはなかった。組織に彼女の存在が知られることはなかった筈である。

「まあいいか。そいつが今回の標的だな。後はこつちでやるからお前はもう——」

「触るな！」

ヒナタの亡骸に触れようとした男の胸を五十三番は殴った。

「——は？」

男はその場で倒れ、何が起こったか分からないまま息を引き取った。

「組織がヒナタを……」

五十三番はヒナタの亡骸を抱え上げ、既に燃え尽きてしまった家の庭にある、燃えることなく無事だった木に寄りかからせた。

「……行くか」

そう呟いて彼は歩き始めた。

行き先は、一つ。

・○

そこは、地獄と例えた方がいいだろう。

「なっ——」「どうしたっ——」「お前何をしているのか——」

ここはこの国唯一の犯罪組織。その本拠地。

着物を地に染めた男——五十三番は本拠地にいる人間全ての胸に拳を当てて進む。

「死にたく——」「増援を——」「待っ——」

彼が通った道に立っている者はなし。床に転がる人間はまるで寝ているかのように死んでいた。

あまりの速さと呆気なさに人々は喋り終わる前に死体となっ
ていく。

「……………」

五十三番は誰が死んだか憶えてない。誰を殺したか憶えてない。誰が誰だか分からない。いつも彼を敵対視していた者もいたし、その腕前を高く評価していた者もいた。もしかしたら組織に依頼をしに来た者もいたかもしれない。だけど彼にとって、ここにいる人間は全員敵であるのは間違いなかった。

武器を持った者が立ちふさがるが彼の歩みは止まらない。十数年間一度も失敗することなく無傷で任務を達成してきた彼を止めることができない者などいなかった。

「……で最後か」

組織の本拠地の一番奥。大きな襖の前で五十三番は立ち止まる。

この襖の先には組織の頭がいる。後はそいつを仕留めるだけだった。

襖を開ける。

「お前は……四十五番」

「五十三番、遅かったね。それとオレは四十九番だよ。四十五番は三年前ここから逃げようとしたところを殺されたよ」

他の部屋と比べて豪華な部屋の中には四十九番と、組織の長である老人が事切れて倒れていた。

「これはどういうことだ」

「オレが殺したんだよ。あなたは下つ端どもを片付けてくれたようだしこれで組織は終わり。晴れてオレたちは自由の身さ」

「何故だ」

「それはオレがこんなことした理由かい？それはね、オレたちみたいな子どもをこれ以上増やしたくなかったからなんだ」

四十九番は中折れ帽を触りながら答える。

「この国では毎年多くの子どもが捨てられてしまう。そんな彼らを組織が拾って育て上げて奴隷のように扱き使う。上層部の連中は子どもを消耗品だと思ってたのをオレは許せなかった」

「……………」

「どんな事情があるのかは知らないけどあなたも組織を裏切ったようだね。まさか同じ日にとは驚いた。……どうだい、オレと一緒にこの国を出ない？大丈夫。オレはあなたの味方さ」

四十九番は五十三番の横を通り過ぎ、出口へ向かう。

「待て」

「何か不安なことでもあるのかい？お金なら奪っておいたから暫くは不自由なく暮らせるはずだよ。後はオレに任せて」

「いつまで嘘をついているつもりだ」

四十九番の足が止まる。

「何のことかな」

「ヒナタを殺したのはお前だ」

「ヒナタ……誰のことかな。さっぱりだ」

「くだらない茶番はやめろ。隠すつもりなんか初めからないだろ。その死体を見て分からない馬鹿はいない」

五十三番が言う死体とは組織の頭のことである。

死体は体中を刺されており、大量に出血し、顔は苦しそうな表情を

していた。
ヒナタと同じように。

「オレ的には気付いてくれないのが一番嬉しかったんだけどそうはいかない……か！」

「……………」

四十九番は振り向くのと同時に短刀を三本投げてくる。

五十三番は横へ跳んで避け――

「それは読んでるよ」

既に跳んだ先にも短刀が投げられており、何もしなければ刺さってしまう。

「……………」

だがどんな死地でも無傷で生き延びた五十三番にとつてこれくらいなんてことはなく、短刀を人差し指と中指で挟んで止めた。

「流石といったところだね」

「何故ヒナタを殺した」

「それが任務だったからさ。あなただつてそうでしょ？ 任務だから人を殺す。いつも通りのことさ」

「違う！ 彼女の存在は秘匿されていた！ 任務なんて出るわけがない！」

「ならどこからか情報が漏れたつてことだね」

「なっ……。一体どこから……」

当然五十三番は組織にヒナタのことを話していない。彼女が自分の他の人間と会っていたという話も聞いていない彼に答えは出せなかった。

その様子を見た四十九番はにこりと笑った。

「オレだよ、オレ」

「お前が！」

怒りのままに拳を振るうがひらりと躲かれてしまう。

「おっと危ないねえ。まあ話を聞きなよ。聞きたいでしょ？ 彼女が何故殺されたのか」

「……ああ」

「素直だね。彼女……ヒナタって言ったかな？彼女のことは何も知らなかったよ。あの壁の中にいるのが誰かなんてオレには知る術がなかったからね。組織には五十三番を騙そうとしている敵がいるって報告しただけだよ」

「何故そんなことをした」

ヒナタが殺されなかったら五十三番は未だ組織を裏切る気にはならなかった。それも時間の問題だったのかもしれないが。

「理由……ね。五十三番がなんとなく変わってきていたように感じたからかな」

「……………」

ヒナタと出会ってから自分に変化が起きていたことは五十三番もなんとなく理解していた。

「このままだと五十三番が裏切るかもしれないぞーって言ったらあなたの力を恐れていた上層部の連中はすぐに任務をオレに与えてくれたよ。あの高い壁を爆弾で壊して中に入ってみるとまさかあんな少女がいるとは想像してなかったけど」



「突然何用かしら？」

オレが小型の爆弾で壁を破壊した音を聞きつけたのか、中に建てられていた家から黒い髪の少女が出てきた。

「心当たりがあるんじゃないかな？」

「ないわね。今すぐ帰ってくれば目をつむってあげるわ」

「そんなこと言われても任務があるからね」

「私を殺しに来たのかしら？」

「正解。抵抗してもいいけどオレは強いよ」

オレは懐から短刀を取り出して彼女に見せつけた。これで普通の人なら恐怖するだろう。

「……彼女はその素振りを見せることはなかった。

「……………何をしている？」

「見ての通り、何もしてないわ」

いつもなら凶器を見せることで標的は泣き叫んで命乞いをしてきたり必死に逃げようとするのだが、動じることなくこちらを真っ直ぐ見てくるのは初めてのことだった。

「オレは今から君を殺す。怖くはないのかな？」

「怖くない……と言ったら？になるし殺されるつもりはないわ」

少女が何かを取り出そうとするが、結局手に何も持つことはなかった。

素手の彼女の構えは戦ったことなどない素人のものだと分かった。

「まさかオレに勝てると思ってる？これでも強いんだよ、オレは」

「そんなのやってみないと分からないじゃない。それともその言葉は自分を鼓舞するためのものかしら」

「……へえ。どうやら口だけは達者なようだ」

「ずっと本ばかり読んでた割にはなかなかやるでしょ？」

「とはいえ君を殺すことくらいいけない」

「何を——」

オレは隙だらけだった少女の腹に短刀を突き刺した。

それだけで勝敗はついた。殺されるつもりはないとか言ってたけど随分とあっさり殺されちゃったね。

あとは確実に仕留めるために何度か刺して家の中に放り込んで火を点けた。オレはその場を去って組織に帰還。任務達成の報告をした後に憎たらしい爺を同じように殺したってわけさ。

○

「いつも通り、呆気ない終わりだったよ。……もう一度聞くけどオレと一緒に来ない？」

「……………」

「だんまり……か。仕方ない、あなたと決着をつけることにしよう」

無言のまま拳を構える五十三番に倅い、四十九番も短刀を構える。

「じゃあね五十三番！あなたを超えてオレは——」

勝負は一瞬だった。

短刀を片手に襲い掛かる四十九番に対し、五十三番は最小限の動きで懐に潜り込んでその体に一撃入れた。

「——ああ、駄目だったか」

「……………」

「これから死ぬというのにまったく苦しくない。こんなオレには相応しくない最期だ……。あなたは……。やはり……」

約二十年生きてきたその男は、その罪の重さと釣り合わないくらい呆気ない最期を迎えた。

五十三番は倒れ込んできた体を受け止め、床に横たわらせた。

・
○

組織によって拾われた四十九人目の子ども。彼は物心がついた後に捨てられた。

理由はこの国では珍しくない困窮からのものだった。家族は母親のみ。彼女は父親がいない理由を話してはくれなかったが聞くべきではないことだと幼い彼はなんとなく理解していた。

彼にとつて母親と二人だけの生活は明日を生きていけるか分からないながらも幸せなものであった。

寝るときにいつも母親が読み聞かせてくれた物語。その物語に出てくるどんな逆境にも負けない一騎当千の英雄に彼は憧れた。その想いは母親に捨てられたときも消えることはなかった。

いつか自分も英雄になりたい。そう思ってはいても彼に才能はなかった。あまりにも無力だった。

組織に拾われて教育を受けるも腕力、学力、技術のどれもが他の子どもよりも劣っていた。仮に秀でたものがあるとするならば、死人が出ることも珍しくない教育を生き抜いた生命力だろうか。

その頃には英雄になりたいという願いはどこかへ行ってしまった。いた。

教育を受け始めて数年後。彼にも任務を与えられるようになった。

任務内容は後処理。他の任務の証拠隠滅を行う掃除係であり、彼のように才能がない子どもに与えられる任務であった。

彼は不満を言うことなく組織のために働き続けた。

自分が何のために生きているのか分からなくなってきた頃。彼は光を見た。

いつも通り自分が後処理をする任務に同行することにした彼が目にしたのは自分よりも年下の少年が大の男を何の躊躇いもなく、さも当然かのように一撃で仕留めてみせた。

彼はこちらを見て「後は任せた」とだけ言っただけで立ち去ろうとしていた少年を引き留めていくつか質問をした。

どうやって殺したのか、力を込めて殴っただけだ。

怖くはないのか、全く思わない。

何故そんなに強いのか、知らん。

表情を一切変えることなく答えていく少年を見て彼は思った。

『まるで英雄みたいだ』

当然彼らの行っていることは英雄と呼ばれる者に相応しくない悪事である。だが少しでもそう思ってしまったのなら、もうそう思わずにはいられない。

そして、こうも思った。

『彼の隣に立ちたい』

それからの彼の行動は早かった。

組織に帰って報告を済ませたら外に出て力を付けるために体を動かした。知識を身に着けるためにたくさんの本を読んだ。

毎日毎日苦しい思いをしながらも彼は努力を続けた。その成果はあった。

彼は変わった。細かった体はがっしりとしたものとなり、様々な分野で活躍できる頭脳も手に入れた。飄々とした態度を取るようになって弱みを見せないようにした。

やがて彼は組織において他に並ぶ物なしと言われるようになっていった。成長して青年になった『英雄』がいなければの話ではあつたが。

とはいえ彼にとって組織内の評価などどうでも良いのであった。

『英雄』に勝とうとは思っておらず、いつか組織を裏切つて彼と二人で国を出てどこか遠い国で英雄として名を遺したいと考えていた。

だけどもある日、彼は分かかってしまった。自分の『英雄』が『ただの人間』になつてきていると。

いつもならば夢や願いもなさそうにしていた『英雄』の瞳に楽しさや期待の感情が僅かながらに籠っていた。

彼にとって『英雄』とは多数の人間を助ける存在で、その対象を決めるときに余計な感情が入ってはならない。

彼の中の英雄像は歪んでしまっていた。

だから彼は自分の『英雄』を変えようとしている人間を見つけて始末しようと考え動いた。

その結果が組織の壊滅、自分の死であった。

強い光を見て目がくらんだ愚かな男の結末であった。

だけど彼は——四十九番は最期まで後悔することはなかった。

『英雄』は自分の死体を乗り越えて先に進む。彼の英雄譚の中の一頁として語られるくらいの存在になれただろう。これから先彼は人を助け続けるだろう。だって彼は組織に縛られていなければその力を正義に使うのは分かっているから。

彼の話はここで終わりである。

四十九番にとって五十三番は物語の中に出てくるような立派な『英雄』だった。

どんな時も挫けることなく前に進み続ける勇敢な者。誰にも負けることのない強者。

しかしながら五十三番は最初から『人間』である。

彼の活躍を聞きたびに自室で本に書き込んでいたほど熱心なファンだった四十九番は、そのことを理解することはなかった。

○

「……………」

組織の本拠地を後にした五十三番はおぼつかない足取りでヒナタのところに戻ってきていた。

庭にある木の下に辿り着くと、一人の男性がヒナタの亡骸に傍に座り込んでいた。

「ヒナタ……どうしてこんなことに……」

「お前は……」

男性が五十三番の存在に気付いて振り返る。

「……君は誰だ？ どうしてここにいる？」

「ワタシはヒナタの……」

「ヒナタの……なんだね？」

「……」

ヒナタにとって五十三番はどんな存在だったのだろうか。今まで他人からどう思われているか気にしたことがなかった彼は何と言えればいいか分からなくなって黙ってしまふ。

「……いや、なんでもない」

「ならどうしてこんなところにいるんだ。何か知っているんじゃないのかね！」

「……ああ。彼女を殺した組織は滅んだ」

「！」

「それだけだ」

五十三番は踵を返してその場を立ち去ろうとする。

その姿を見て男性は慌てて声を上げた。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。私はヒナタの父親だ。何があつたか教えてくれ！」

「そうか……ヒナタの……。なら一つだけ教えておこう。ヒナタはこの国を良い国にしたいと言っていた」

五十三番は振り返ることなく答える。その話を聞いて男性は小さく頷いた。

「その話なら私も手紙で知っているが……そうか君が手紙に書いてあつた話し相手だったのだな」

「……彼女の夢を妨げる組織はもうない。ならばそれを叶えるのがお

前の仕事だ」

「ああ。当然、そのつもりさ。だが君はどうするつもりだ？もしよければ私の手伝いをしてくれないか。……失礼、名前を聞いてなかったな」

「……ワタシに名前はない」

「あ、ちよつと待っ——」

その言葉を最後に五十三番は歩き出した。背後から男性が呼び止める声が聞こえてくるが彼は足を止めなかった。

・
○

『五十三番』という名前は組織が付けた番号。親が子に付けるような大事な意味のこもったものではない。ただ順番に付けただけの暖かさを感じない名前である。

組織がなくなった今ではもうこの番号に意味などない。今の彼には名前なんて存在しない。名前の重要性を考える心の余裕もない。

今までは組織からの任務を達成するためだけに生きてきた彼にはもう生きる理由が分からなくなってしまうていた。だからと言って死ぬ理由があるわけでもない。

彼は次に何をしようかとこれからのことについて思いを馳せることはなく、あの時こうすればよかったと過去を後悔することもなく、何も考えることなく今を生きていた。

ヒナタの父親と話した後、彼はすぐに国を出て海を渡った。行先は決めていなかったがとにかく遠くに行きたかった。

数日かけて辿り着いた国で彼は他国からの侵略を防いでくれと助けを求められた。

どうやらその国は豊かな資源を所有しているが兵力に乏しいため攻め入れられたらひとたまりもないので誰でもいいから戦力が欲しいらしい。

それを二つ返事で引き受けた彼は他の兵士や同じような協力者たちと共に戦場へ赴いた。

敵国の兵士の練度はこちらの兵士よりも高く、数も多かった。とてもじゃないが勝てる見込みのない戦争だろう。

だが運がいいことに彼ら協力者たちの実力はとても高かった。彼を始め協力者たちは数の差をもものともせず、敵を屠り仲間を助けていく。

途中で国からやって来た使者が敵国が降伏したことを伝えたことで戦争は終わりを迎えた。

最終的に兵士の数があちらの国よりもこちらの国の方が多くなるという圧倒的な勝利を得た彼らは国へ帰ると盛大に祝われた。

『ありがとう！』『おかげで国は守られた！』『あんたたちは英雄だ！』『英雄！』『英雄！』

英雄と言われた彼ら協力者たちは王から褒美としてその国で一生遊んで暮らせるようにしようと提案した。

多くの協力者たちがその提案を飲んだが、彼は何も受け取らずにその日のうちに国を出た。

彼にとって報酬はいつでもよく、ただ求められたから助けただけだった。

いくつもの国を巡り、何度も助けを求められて助け、称えられた。いくら感謝を伝えられても心にぽっかりと空いた穴が塞がることはなかった。

ある日のこと。あてのない旅を続けた彼は、これから訪れる国の門に書かれていた言葉を一瞥してから中に入った。

そこにはこう書かれていた。

『あなたの願いを叶える国』

願いが叶う三日間（一日目）

人は誰しも願いを持っているものである。

『魔法を使えるようになりたい』『永遠に若い姿のままでもいい』『過去に戻りたい』『周囲からもてはやされたい』『離れ離れになった家族に会いたい』

願いは人の数だけ存在する。完全に同一のものは存在しない。

人は願いを叶えようとするものだ。その過程を見ていけば一人の人生を見ることができらるだろう。

それは一つの物語。また、人の数だけ物語があるとも言える。

今回は、とある国を訪れた三人の男女の願いの物語だ。



いつものように旅をしている俺たちであったが何やら面白そうなものを見つけた。

『『あなたの願いを叶える国』ですか。ふうん……』

「願い。願いかあ……」

平原の真ん中にある国の門に書いてある文字を見て俺たちは自分の願いは何か考えていた。

今の生活に満足している俺はこれといって叶えたい願いはない。別に俺は無欲ってわけではないのだが……。願いがあるとすればもっと強くなりたいとかだろうかね？

「ごめんくださいー」

「イレイナー。置いてかないでー」

願いが決まったのか一足先にイレイナが門を開けたので俺は思考を中断して彼女の後を追って門をくぐった。

そうだな、俺の願いは――

「ここは……」

門の先には不思議な光景が広がっているだろうと思っていた。例えば人が一人もいなかったり既に滅んでいたりだとかそういう日常からはかけ離れたものだ。

だが今俺の目に映っているのは至って平凡な国の光景だった。

大通りを行き交う人々。大声で行われている客の呼び込みや値段交渉。嗜好きの女性たちの立ち話。道を走り回る子どもたち。そこでは誰も彼もが平穩に暮らしていた。

ああ、この光景は見慣れたものだ。何故なら――

「カイ」

背後から名前を呼ばれる。聞き覚えのある声。毎日聞いている声。「そんなところに突っ立ってどうしたんですか。早く荷物持つてください。重いので」

その声の主は中身がパンパンに詰まった大きな袋を持っており、持つだけでも精一杯なのか手が震えていた。左手の薬指には銀色の指輪が嵌められているのが見える。

「ああごめん。今持つよ」

俺は自然とその袋を持っていた。何故こんな袋を持っているかは分からなかったが、彼女を見ると持たずにはいられなかった。

彼女――声の主は灰色の髪をした瑠璃色の瞳の女性だった。ただその雰囲気は俺が知っているものよりも大人びていた。

「よし。それじゃあ帰りますか」

「帰るってどこへ？」

「何言ってるんですかもしかして頭でも打ちました？どこ行ってそりや決まってるでしょう」

さも当然のように彼女は言葉が続ける。

「私たちの家に、ですよ」

俺は言葉を失った。

見慣れた街並みを見渡しながら歩く。やはりというかこの街……いや、国か。俺はこの国を知っている。忘れるはずがない。

「平和国ロベッタ」

「急に何ですか」

口に出すつもりはなかったのだが困惑している俺はつい呟いてしまい、隣にいる彼女の耳に入ったようだ。

「帰って来たんだなって思ってた」

「そうですね。長い長い旅の後。私たちはこの国に帰ってきました。そしてあなたは私に——」

——告白してくれました。

「……そっか」

「なんだか元気がないですねー。もしかして疲れてます?」

「いや俺は元気だし疲れてないよ。少しだけ考え事をしてただけさ」

「ならいいんですけど」

心配そうに顔を覗き込んでくる彼女に俺は目をそらしながら答える。

それ以降は特に会話をすることなく見慣れた道を歩き続け、見たことのない家の前に到着した。

「えーっと鍵は……。はい、開きました。先どうぞ」

扉を開けて先に入るよう促され、言われるがまま家の中に入る。

「立ち止まらないでください邪魔です。さっさとその袋をキッチンまで持って行ってください」

「キッチンってどこ?」

「本当に大丈夫ですか? さっきから変ですよ。はあ……。キッチンはあそこの奥です」

彼女が指さした扉を開ける。そこはダイニングのようで、食事をするためのテーブルと椅子が置いてあり、その奥はキッチンへと続いていた。

荷物を置いてから部屋の中を見回す。壁には俺とイレイナが写った写真が大きな額縁に入れられて飾られていた。他にも旅をしてい

る中で撮った覚えがある写真もあった。

「ほんの少し前のことなのに懐かしいですよ。私もたまにそれを見て思い出に浸ってます」

「いや別にそんなんじゃない——」

「はいはい。昼食は私が作るのでカイは座っててください。あ、手伝いはいりませんから」

間違いを訂正することも手伝いを申し出ることもさせてもらえずに俺は椅子に座らされた。俺が大人しくしているのを確認してから彼女はキッチンの方へ姿を消した。

●
考え事をしていたらそれなりに時間が経っていたのか料理が運ばれてきた。

「昼はシチューにしました」

「美味しそうだね」

「美味しそう、ではなく美味しいんです。味わって食べてください」

「はは、そうだね。いただきます」

ウサギの肉が入ったクリームシチューを一口食べる。どこかで食べたことがある気がするがやはり美味しい。今すぐ感想を伝えるべきなのかもしれないが食べる手が止まることはなかった。

「ごちそうさまでした。美味しかった」

「それは分かってたのでいいんですけど早いですね。私はまだ半分以上入っているのに」

「美味しかったからついつい食べるスピードも上がっちゃったね。さて、俺は先に食器を洗っておくから食べ終わったら持ってきてね」

「はい」

立ち上がり食べ終わった後の食器を持ってキッチンに行って洗い始める。汚れが簡単に落ちるがいい洗剤を使っているのだろうか。

「これもお願いします」

「はいよ。ところでこれから何か予定ってあったりする？」

「ありませんよ。この後は夜になるまでゆっくり本でも読もうかと思っただけです」

「それなら行きたいところがあるから一緒に来てもらってもいいかな？」

「いいですけどどこに行くんですか」

首を傾げる彼女に俺は答えた。

「俺や君の両親のところさ」



まずは彼女の両親に会いに来た。何故こちらが先かという点、単純にこちらの方が近かったからだ。

「あらイレイナにカイ君。近いとは言えよく来てくれたわね。お母さん嬉しいわ」

「イレイナ！何か嫌なことはされてないか!? されてたら我慢せずにすぐ言うんだぞ！」

「大丈夫ですよ。そんなことされてませんしカイはしません。そんなこと言うお父さんは嫌いです」

「どうも」

彼女の両親は俺たちを見るなり家の中に招いてお茶を出してくれた。昔飲んだ時と変わらない味だ。彼女の父親は落ち込んだ。

「それで今日はどうしたのかしら」

「カイが二人に会いたかったらしいですよ」

「あらあら」

「ちよつと！まあ間違いではないんですけど……」

誤解のある言い方に驚くが今は目的を達成することが先だ。

「今日は二人と話がしたくて来ました。話の内容としては俺たち二人についての思い出とかですかね」

「二人の？ いいわねそれ。まずはあなたたち子どもの頃のことから話しましょうか」

「昔のイレイナもそりやもう可愛くてな……」

俺たちは二人と過去のことや現在のことについて話をした。

昔の彼女は友達がいなくて心配だった、今は幸せそうで安心している。きのこが嫌いなのは今も変わっていない。早く孫の顔が見たい……など、だ。

いろんな話をした後、時計をちらりと見て思ってたよりも時間が過ぎていたことに気付いた。

「もうこんな時間ですか。すみません。俺たちはもう行きますね」

「次はカイ君のご両親のところに行くのね？」

「はい」

「ふふ、あなたたちと話せて楽しかったわ。それじゃあまたね」

「……俺も楽しかったです。それでは失礼します」

嘘偽りのない言葉を述べてから俺たちは次の目的地。俺の両親がいるところへ向かった。

家は近所にあるので移動に時間は掛からなかった。久しぶりに俺の家を見たが旅を出る前と変わりはなく、懐かしさが胸を打つ。

扉を前にして立ち止まった俺のことを無視して彼女は扉をノックした。

「ごめんくださいーい」

「はいはいどなた？」

「そう、私です」

「ああイレイナちゃん。今開けるわね……ってカイもいたのね。おかえり」

「……まあねー」

扉を開けて出てきたのは金色の髪と瞳をした女性。俺が知っている姿と比べると少し皺が出てきただろうか。

「父さーん！カイとイレイナちゃんが来たわよー」

「なんだって？お二人ともよく来たね。さあ上がって上がって」

呼ばれて家の奥から現れたのは黒い髪と瞳をした男性。よく見ると黒い髪のいくつかが白くなっていた。

家の中に案内されて俺たちは二人の後を着いて行く。その背中

昔よりも弱々しく見えて寂しさを覚えた。

先ほどと同じように椅子に座ってお茶を飲みながら話を始める。

「急に来るんだからびっくりしたよ。もし僕たちが外出中だったらどうしてたんだい」

「なんとなくいるって分かってたよ」

「親子の絆ってやつかしら？ふふ、それならカイが私たちに会いに来た理由も分かるわよ。私たちとただ話がしたかった。そうでしょ？」

「当たってるけど……」

「ならよかったわ。そうねー何の話からしようかしら」

「せっかくイレイナちゃんもいるんだしイレイナちゃんが知らなそうなカイの話をしようか」

「とても興味があります。シンさん、教えてください」

「……それはやめて欲しいけどなあ」

それからしばらくの間俺の恥ずかしい話や隠していたつもりの話をずっと聞かされた。

驚かされるのが苦手で気絶したことがあるとか、苦いものや辛いものは苦手なのだとか、昔から一途だったとか、たまに違う自分に憧れるときがあったりとか。

話題一つ一つに盛り上がる彼らを見て俺はそっぽ向いてばかりだった。別に不愉快だったからではない。

窓の外を見てばかりだったので時間が過ぎていくのを感じられた。もう夕方になっていた。

「もうそろそろ夕食の時間ね。二人はどうする？ここで食べて行ってもいいけど」

「いや、俺たちはもう行くよ」

「そうか……分かった。カイ」

「何だい？」

椅子から立ち上がった俺に男性が声を掛ける。

「僕たちは君たちを応援しているよ。いつでも、どこでも」

「……ありがとう」

「ありがとうございます。お茶美味しかったです」

「あらお世辞かしら？でも嬉しいわね。また来てちょうだい」

玄関まで見送ってくれた彼らに軽く手を振ってから歩き出す。

「それじゃあ帰りましょうか」

面白い話が聞けてよかったです、と言う彼女に俺は立ち止まり、彼女の方を向いてから告げた。

「いや、もう一か所だけついてきて欲しいところがある」



最後に俺たちが訪れた場所。それは平和国ロベツタから少し離れた場所にある丘。その頂上に生えた一本の木。俺たちの旅の始まりとも言える場所。

俺は木の前でしゃがみ、背中を彼女に向ける。

「さ、おいで」

「えーつと……こうですか。ちよつと恥ずかしいですね」

「なに、誰も見てないさ」

彼女を背に乗せた俺はジャンプして木の枝に乗る。俺たちの体重で枝が折れないように魔法を掛けてあるから問題なし。

俺たちは二人して並んで枝に座った。

ここからは夕日がよく見える。

「綺麗ですね」

「何度見ても綺麗だね」

まさにあの時と同じ夕日だ。カメラを取り出しシャッターを切る。写真を取り出す。うん、しっかり撮れてる。

カメラを仕舞い、静かに口を開く。

「俺は、行くよ」

「……そうですか」

「止めないんだ」

「こうなるって分かってましたから」

……………。

「この世界はきつと俺の記憶と願いから作られた夢のようなもの。」

『イレイナと一緒に暮らしたい』という夢、願ひ。楽しかったし嬉しかった。だけどいつかは夢から覚めないといけない。だから寂しくもあつた」

「はい」

「今日はありがとう。料理を用意してくれたり付き添ってくれたりして」

「当然のことです。私はあなたの妻ですから」

……………

「あなたと一緒に居られるだけで満足でした。けど、あなたは一度も誰の名前を呼びませんでしたね」

「まあ……………ね」

「目を逸らさないください。いいんです。それが正しいんだと思います」

そうしないと、俺は俺の心を守れそうになかった。少しでも彼女たちを本物だと認めてしまうと、俺はここに残ってしまいそうだった。

これはきつと悪魔の仕業だろう。以前訪れた国では悪魔のせいでも既に滅んだ後だった。そこで唯一生き残つてた少女から話を聞いていた俺は、三日以内にここから出ないと死んでしまうことがすぐに分かった。これ以上ここにいることはできないんだ。

「君は…………俺の記憶から作られた幻なんだろう？」

「そうですね。私はあなたが知っている私から作られています」

「そうか…………それはごめん。…………けど俺がここを出て行ったら皆消えるんだと思う。当然君もだ。今君はこうして俺と話をしている。生きていると言つても過言じゃない。けど消えるんだ。死ぬようなものだ。だから…………ごめん」

「謝らないでください。前を向いてください。足を止めないでください。あなたができるのは本物の私と共に歩むことです」

彼女が木の枝から飛び降りたので俺も慌てて飛び降りて彼女を抱えて着地する。

「私たちは元々いなかった存在。だから気にする必要なんてないんですよ」

「……………」

「さあ、行ってください。あなたは——旅人です」

「イレイ——」

思わず彼女の名前を言おうとした俺の唇を彼女の人差し指が止めた。その仕草に少しドキリとしてしまう。

「駄目ですよ。私をその名前で呼んじゃ」

「……………」

「けどじゃありません。うじうじしないでください。確かに私とはここでお別れです。全て消えるでしょう。けどここはあなたの願いから生まれた場所。ならばその願い、頑張つて叶えてください。そうすれば私も少しは救われます」

「……………」

「それにほら。あつちを見てください」

彼女に言われて国がある方を見ると、そこにはたくさんの人が全員手を振っていた。

「カイ君。イレイナをよろしくね」

「君にお義父さんと呼ばれたくはないが、イレイナを悲しませるのだけは許さないからな！」

「僕から言うことはもうないけど元気だね」

「ここじゃない本当の故郷であなたたちを待つてるわ」

彼らを見て俺の視界は涙でぼやけた。

「泣き虫ですね。まったく」

そんな俺に彼女は優しく笑いながらハンカチで涙を拭いてくれた。

彼女を下ろして顔を上げる。

「皆さん！今日はありがとうございました！楽しかったです！俺は幸せになってみせます！そしてまた、今日みたいな一日を過ごします！だから応援してください！」

感謝を、決意を叫び、俺は進む。

さようなら。そしてまたいつか、未来で会えますように。

俺の願いから作られた幻のロベツタから離れれば夢から覚めるだろうと思つて歩き続ける。もう日が落ちて夜になっていた。

「……まだ掛かりそうだな」

「いや、もう終わりだよ」

「——ッ！」

突如聞こえてきた声に、俺は剣を取り出して辺りを警戒する。

「そんなに警戒するな。私は今すぐお前を取って食おうなんて思つちやいない」

ふざけた言葉を吐きながら姿を現したのは、頭から二本のねじれた角を、背中からはコウモリのような羽を生やした俺だった。

「悪魔か」

「そう、悪魔さ。そんなに睨まないでくれよ。んで、私が用意してやった国は面白かったか？」

「まあ面白かったさ」

「その割には出ていくのが早かったな。それでだがこれ以上先に行く」と元の世界に戻るぞ」

「引き留めようとはしないのか」

俺が以前聞いた話だとここに三日以上滞在してしまうと悪魔の養分にされるらしい。悪魔としても養分は欲しいはずだ。

「私は来る者を拒まないし、去る者も追わない。だけどお前には一つやってももらわないといけないことがある」

「俺がそれに素直に従う必要はない」

「お前と一緒に来た魔女。あいつのところに行きたくはないか？」

「……取引か」

俺と同様にイレイナも夢の中にいるだろう。彼女が戻ってこないとは思えないけど万が一の可能性もある。

これから何を言われるか分からないが、この取引に乗らないわけにはいかない。

「分かった。それで俺は何をすればいい？」

「簡単なことさ。お前にはある人間の夢の中に行ってその願いを叶え

てもらいたい」

「何故俺が？」

「私にはできないことだからな」

人の願いを読み取ってそれを形にするだけの力を持っている悪魔ができないことが俺にできると言うのだろうか？不安だ。

「じゃあ早速だが今から行ってもらうぞ」

「ちよ、もつと詳しい情報を——」

「頑張れよ」

具体的に何をすればいいか教えられないまま、悪魔が指をパチンと鳴らすと俺の意識は落ちてしまった。

・○

時は少し遡る。

頂上に木が一本生えた丘の上で一人の女性と悪魔が話をしていた。「どうしてあいつを行かせたんだ？お前らは記憶を基にして作られた本物とほとんど相違ない存在のはずだ。本当は一緒に居たいんだろ？」

人の心が分からない悪魔に女性は答える。

「そりゃ一緒に居たいですよ。離れ離れになんてなりたくありません」

「ならどうして——」

「だからこそ、です」

追求しようとする悪魔の言葉を遮って女性は言葉を続ける。

「はあ？」

「好きな人に生きてほしい。この国にいるみんながそう思ってます。これって変なことですか？」

「……はあ。全く、理解できないな。まあこれについては私の失敗か。お前を作るときに本物のお前の記憶も混ぜるべきじゃなかったなあ」

頭の後ろで手を組む悪魔に女性が笑顔で答える。

「私は感謝してますよ。だって、そのおかげで彼の想いを知ることが

できたんですから」
その笑顔は、とてもとても美しかった。

願いが叶う三日間（二日目）

「くっ……ここは……？」

朝の陽ざしによつて俺は意識を取り戻した。

周囲を見ると、ここは村なのか小さな家がいくつか並んでいた。

「おいおい誰だお前は。ここは私の国だぞ」

何か慌てた様子の黒い髪の毛の和服の男性が現れたが、さつき見た悪魔と同じく角と羽が生えていたので目の前の男性も悪魔だろう。

「悪魔か。俺は頼まれてここに来た。なんでも、俺が願いを叶えなければならぬらしい」

「なんだそりゃ。……いやまあ丁度良いか。ならお前があいつの願いを叶えてくれ」

「あいつ？」

「この先に高い壁があるだろ。その中にいる人間だ」

悪魔が言う通り、彼（彼女？）が指さす方には普通の人じゃ跳び越せないくらい高い壁があった。姿は悪魔が今している姿とほぼ同じだろうが、どんな性格をしているのだろうか。

「それじゃあ気を付けて行って来いよー」

「思ってもないことを」

「まあな」

これ以上悪魔と話す気はない俺は壁をジャンプして飛び越えた。

高い壁の奥には木造の家が一軒建てられているだけだった。庭とみられる場所には木や茂みと言ったものがあるが、目立った建築物はその家だけだった。

玄関と思しき扉の前にさつき見た悪魔に似た男性が座っている。いや、悪魔に似たよ言うよりは悪魔がこの人の姿を取っていたのだろう。

きつとこの人の願いを叶えればいいのか。とりあえず話しかけよう。

「こんにちは。何をしてるんですか？」

「……誰だ」

「俺はカイと言います。あなたの願いを叶えに来ました」
「そうか」

俺の質問を無視して逆に質問してきた男性は俺がここに来た理由を話すと納得がいったようだ。それじゃあ彼の願いはどんなものなのか聞くことにしよう――

瞬間、青い光が俺の体を包んだ。この光は……！

「……確実に一撃入れたと思ったが」

一瞬の隙だった。ほんの一瞬俺が気を抜いた瞬間に目の前の男性はその拳を俺の胸に突き立てたのだ。あまりの速さに反応できなかった。

咄嗟のことではあったが後ろに飛び退いて距離を取った。

「ツ！何をするんですか！」

「ワタシの願いを叶えに来たのではないのか？」

「願いを叶えるのと今の一撃に何の関係が！」

目の前の男性の願いを悪魔から教えてもらっていないオレには何故彼が攻撃してきたのか分からない。

破壊力はなさそうだったがあれは俺を殺しに来ていた一撃だ。まさか俺を殺すことが願いなのだろうか？いや、そこまで恨まれるようなことをした覚えはない。

男性の姿がブレる。今度は警戒していたので俺の懐に飛び込んで来ようとしているのが見えた。もう一度後ろに飛び退いて躲す。

「戦って殺されること。それがワタシの願いだ」

「戦いの果てに死を求める……。そんなことをして何になるんですか！」

「さあな。ワタシには生きる理由がない」

「死ぬ理由もないはずだ」

「いや、死ぬ理由はある。ワタシは人を殺しすぎた。あまりにも」

殺人は罪だ。許されるべきではない重罪だろう。だけど、だからといって簡単に命を投げ出してもいいものなのか。

俺は銃を取り出して発砲する。避けられる。

「二人で死ぬことも考えた。だがワタシは思った。ワタシがヒナタを殺した時に抱いた思い……復讐心というのだろうか。あれをワタシに抱いている者がいるのではないか？誰かに裁いてもらうべきなのではないのか？」

「知ったことか！そんなこと！」

「だからお前を殺す。そのつもりでいけばお前も抵抗せざる負えないはずだ」

なんて身勝手なことを言うんだ。冗談じゃない。こんなことになるだなんて思いもしなかった。

棒を取り出して突き出す。屈んで避けられる。

「だがお前にはワタシを殺す覚悟がないようだ。ならここで死ぬ」

俺の攻撃を避けた勢いで距離を詰めてまた俺の胸に一撃を叩きこもうとしてきた。

「させるかー」

棒から片手を離して男性の右腕を掴んで止める。これで防いだー

——と思ったが一瞬遅れてやって来た左手が俺の胸に叩きつけられる。

「ガッ——」

男性の一撃によって俺の心臓が止まる——

——ことはなかった。

「——ツツ！はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ほう。死なないか」

胸が苦しい。違和感を感じる。死ぬかと思った。呼吸を整えないと。

今の一撃を食らったことで、あの破壊力がない拳でどうやって人を殺してきたのか分かった。

「……ここまで生き延びている者は初めてだ。それにしても先ほどからお前の攻撃には殺意を感じない。まだやる気はないのか？」

「……………」

「返事はなしか。ならそうだな。お前を殺した後はお前の家族や友人と言った身近な人間を全員殺すことにしよう」

「……………は？」

今なんて言った？俺の家族や友人を殺すだと？父さんや母さん、そしてイレイナを…………？

……………そんなこと、させるわけにはいかない。俺は生きてイレイナと一緒にこれからも旅を続けるんだ。なら覚悟を決めるしかない。「どうした。絶望のあまり動けなくなったか？ならばもう終わりにしよう。次はいつもより強めに力を込める。そうすれば今度こそお前を葬れ——」

男性が喋り終わる前。会話をするという意識と俺を殺しにかかるという意識の変わり目の一瞬の隙について俺は彼に向かって飛びかかった。

「甘い。その程度の速さではワタシを殺すことはできない」

彼は俺が何かする前の、自分の射程距離に入った瞬間にまたしても俺の胸へ拳を打ち込んだ。

このままでは今度こそ心臓が止まって死んでしまうだろう。俺が何もしなければの話だが。

「なに!?まさかお前も!」

彼は俺の心臓が止まらないことと俺の左腕が背中側に回されているのを見てすぐに察して驚いたようだ。

「これでっ…どうだあ!」

その隙を逃す俺ではなく、空いた右腕で彼の胸に俺が三度受けた攻撃をそのまま返してやった。

「グッ——」

俺がしたことは一つ。拳から直接魔力を流し込んだだけだ。

魔力は魔法を使うために必要だが、魔力を使うだけなら魔法は必要ない。魔力は様々な形に変わることができるが、形のない状態で相手に流し込めば心臓は止まるのだろう。試したことはなかったが目の前の男性はこの方法で人を殺めてきたのだからそのはずだ。

初めて人を殺すことになる。いつかは来ると思っていたが辛いも

のだ――

「なっ!？」

――俺が殴った男性の胸が青く輝きだした。

・
○

「……よし。これをあなたにあげるわ」

雲一つない快晴の日。五十三番とヒナタはいつものように彼女の家で話をしていた。

ヒナタは何か覚悟を決めた後、五十三番に細長い木の箱を渡した。

「これは？」

「お守りよ」

「お守り? お守りとはこんなに大きなものなのか？」

「そんなものよ! あなたは世間知らずだから知らなかっただけでこんなものなのよ」

ヒナタがお守りだというその箱は五十三番の懐にギリギリ入るくらい大きさであり、傍から見れば彼女が嘘をついているのは明らかだった。

「そうか」

「えーっと、そのー。ちゃんと持っててよね? それと私の前では絶対に開けないでね」

「邪魔になるがまあいいだろう。開けると言ってもどこから開ければいいんだ?」

五十三番の言う通り箱には蓋が無く、開けることができなかつた。試しに振ってみると中からはからからと音が聞こえた。

「あーっ! やめてやめて! そんなことしても開かないから! 乱暴に扱わないで!」

「……分かつた」

何故か顔を赤らめたヒナタが五十三番を止めた。五十三番は表情には出さないが困惑しながらも箱を懐に仕舞った。

「待ってるから」

男性の懐から細長い木箱が飛び出し、俺と男性の間で浮遊していた。

『あーあー。聞こえてるかしら』

「なんだ？」

木箱から女性の声が聞こえる。木箱に魔法が掛けられていたのだろう。けど何のためか？

『これを聞いているということはお守りは効果があったということね。流石私と言ったところかしら』

『あなたには秘密にしていたのだけど実は私は魔法使いなの。あ、勘違いしないで。魔法使いであることを隠していたのはあなたを信用してなかったわけではないわ』

「魔法使い……」

俺も男性も動くことなくその声を聞いていた。きっと邪魔してはいけないことなのだろう。

それにしてもお守りか。俺の指輪と同じようなものか。少し大きすぎる気がするが。

『ただのお守りを作るのであれば別に何でもいいのよ。けどこの木箱をお守りにしたのは理由があるの』

『以前本で読んだのだけれど、女性の魔法使いが自分の杖を入れた箱をお守り代わりとして好きな男性に渡す。そしてお守りに守られた男性が杖を持って女性の下に告白しに来るのよ』

この話は俺も知っている。昔からある魔法使いの女性とそうじゃない男性の恋愛ものだ。ロマンチックな物語なのだが杖を失った女性はその身を守れないから現実的ではないと言われてたりもする。まさかそれを実際に行う女性がいたとは。

『私があなただを好きなのは間違いないわ。それが異性としてなのか話し相手としてなのか分からないの。だからあなたに杖を持ってきて

欲しいのよ』

『あ、無理して私に告白しなくていいからね。私の気持ちを知りたいからという理由でやっただけだから。でも、もしもあなたが告白してきたのなら……。ふふ、どちらにせよ、待ってるわよ。それじゃあね』
女性の声が聞こえなくなったのと同時に木箱が開かれ、中から杖が出てくる。込められた魔法が力を失ったからか重力に沿って落下しそうなになった杖を男性が掴んだ。

「……死ねない理由ができた」

「そうですね。ならもう戦う必要はないですね。ふう、よかつ——」
「いいや、まだだ」

ようやく一息つけると思った俺だったが、男性は止める気などないようだった。

「ヒナタのお守りが無かったらワタシは死んでいただろう。初めてだ。初めて負けた。このまま終わらせたくない。これが悔しいという気持ちだろうか。だから、まだだ」

「でも俺たちが殺し合う理由はもうないですよ」

「なら、そうだな。これもまた初めてだが殺しはなしだ」

「それならまあ……。いいんですかね？」

「ここには戦いに来たわけではないのだが殺し合いにならないならまあいいか。

男性の顔を見る。先ほどまでよりも清々しい顔をしていた。

「お前、名は？」

「カイです。あなたは？」

「五十三番。前はそう呼ばれていた」

「五十三番……。さん？」

「さんはいらん」

「……………」

以前観た演劇の主演の名前が五十三番だった筈だ。まさか本当に実在していたとは。

「どうした？始めるぞ」

「ああはい。それじゃあ……。行きますー！」

木刀を取り出して男性——五十三番に近付いて振り抜くがやはりと言うかあつさり避けられてしまった。

ならばと杖を取り出して魔力の塊をいくつか作って飛ばす。

「そうか。杖はそう使うのか」

五十三番は見様見真似で俺と同じ数の魔力の塊を作って相殺させていた。

「なんのー！」

今度は杖から火を出して五十三番に向かって放つ。

「なるほど。そんなものも出せるのか」

同じく杖から火を出して俺の出した火にぶつけ、混ざり合うように一瞬だけ光を強くしてから弾けて消えた。

ならばと思つて杖を振り、水の柱を三本出現させて操る。以前戦つた魔女は七本操つていたが俺にはこれが限界だった。

「これは少し厄介だな。……三本か」

やはりと言うか、彼は水の柱を同じ数だけ出して自由自在に操り、軌道予測が難しくなるようにくねくねと動かしていた俺の水の柱にぶつけてみせた。俺は何度も練習して三本操れるようになったんだけどなあ……。

「……………」

今度は気付かれないように無言で風魔法で空気の塊を放つ。透明なそれは見ることも避けることもできないはずだ。

「ふん……」

目に見えないはずの空気の塊だったが五十三番は見えているかのようにバツチリのタイミングで避けてみせた。

「お返した」

「まずい！」

「——ッ！」

杖を向けられた瞬間に何をしようとしているのか分かった俺は咄嗟に体を横にずらす。強い風が横切ったのを感じた。まともに当たったら吹き飛んでいた。

このまま素直に魔法を見せ続けても勝てないのは分かっている。

だから俺の全てを使ってでも勝ちに行く！

右手に杖を構え、いつでも魔法を使うことができるのだと牽制をする。五十三番は魔法の知識はない……のだと思う。だから未知の魔法に対して警戒しなければならぬはずだ。そこを突く。

「……………」

「……………」

五十三番は俺と同じように杖を構え、見合っただまま動かない。

どちらも全く動かないこの状況が長く続いているように感じられる。まるで俺以外の時間が止まってしまったのではないだろうか。

「……………」

空いていた左手に銃を取り出して何度か撃つ。殺す気はないのでもちろん急所には当てない。

「うるさいな」

高速で放たれた弾丸に対し五十三番は銃声の感想を呟いてからひらりと避ける。

「想定内だったとは言え銃弾を避けますか。普通無理ですよ」

「このくらいなんてことは——」

彼が瞬きをする瞬間に俺は弓と矢を取り出して射る。目を閉じて開くまでの一瞬に矢は届くし音もほとんどないので反応するのも難しい。全く音がしないというわけではないのでさっきの銃声で大きな音を聞かせ、小さな音を聞き取りにくくしたのだが……。

「これも避けますか……。見てないし聞いてなかったですよ。なんで分かったんですか」

「細かくは言えないが、なんとなく来る気がした。ワタシはそれに従っただけだ」

確かに戦いにおいて勘というのは大切なものだけど、体全体を動かすのではなく狙った右足だけを動かすとは……。勘がいいとかのレベルではなく未来予知と言っても過言ではないのでは。

「さっきのうるさい筒のようなものは中身がどうなっているのか知らないが、弓矢については知っている。触ったことはなかったがいい機会かもしれないな」

五十三番は杖を一振りして俺が使った弓と矢と同じものを魔法で作り出し、俺に向かって射る。

「……流石に俺よりは狙いは定まってないし遅いか」

盾を取り出して矢を防ぐ。これで俺と同じくらいの弓の腕前をしていたら泣いていたかもしれない。

「次は何を見せてくれるんだ」

「楽しそうですね。さっきまでとは大違いだ」

「そうだな。これが楽しいということなのだろう。ワタシはこの時間が長く続けばいいと思っている。そう思わせるのはお前が二人目だ」

「俺としてはさっさと終わりにしたいんですけどね！」

「知らないな」

俺たちは長い間魔法を撃ち合ったり、拳を交えたりしていた。

あまり使わないほうきの上に乗って高所を移動しながら魔法を放つてもみるが、普段の俺のように空中に足場を作って追いかけてきて叩き落とされたりもした。

俺の方が手札は多いはずなのだが、五十三番は一度見せたことを自分のものにして襲い掛かってくる。殺す気じゃないというのもあるが、お互い対応力が高いので相手の攻撃をまともに食らうことはないまま時間が過ぎていった。

「こんなに長時間同じ人物と戦ったのは初めてだ」

「そうですね！もう魔力がなくなりそうなので終わりにしてもらえませんかね！」

どうでもいいことを呟く五十三番に矢を放ちながら返事をする。

俺だつてこんなに長い時間戦つたのは師匠以来だ。

「そうか。なら次で最後にしよう」

五十三番は杖を懐に仕舞い、拳を握る。

「はい」

俺だけ武器を使うのは気が引けたので俺も同じように拳を握る。

ああ、夕日が眩しい。だけど不快感はない。ここまで全力で戦つたのはいつぶりだろうか。俺は戦うのはあまり好きではないが戦闘狂と言われる人の気持ちがあつたかもしれない。

「勝つのは俺（ワタシ）だ！」
全力で駆け出して拳を突き出し、俺たちの腕が交差する。
結果は――

「いやー、いい勝負でしたね。それにしてもちよつと強すぎないですか？俺の持つてる技術をほとんど習得しちゃうし自信がなくなりそうなんですけど」

「……そう言われても困る。お前も強かった。だからその……なんだ。こんなときなんて言えばいいか分からないな……」

「その気持ちだけで十分ですよ。とは言え今回は引き分けで終わりましたけど次はどうなるか……」

家の中で傷付いた体の治療をしながら五十三番と話をしていた。内容はお互いのことについてだ。俺の場合は故郷の話や旅の話、彼の場合はここに来るまでの話。

彼はあの演劇で聞いた通り、海を越えた東の国の組織に幼い頃から所属していたらしく、誰にも教わることなく初めから相手の心臓に魔力を流し込むことができたらしい。武術も魔法も一目見て覚えるその才能が羨ましかったが、そのくらいの才能がないと生き残ることができなかつた境遇を考えると何も言えなかつた。

「お前の話はワタシの知らないことばかりだ。聞いていて飽きない」
「いろんな国を旅してきましたからねー。でもそんな俺でもまだ知らないことはたくさんあるんです。国の文化だったり人だったり景色だったりいろいろです。それらに会うために旅をしていると言ってもいいかもしれませんね」

「……ワタシもお前みたいになれるだろうか」
「旅人にとってことですか？あなたの実力なら全然問題ないですよ」
「いや違う。お前の話の中にあつたように誰かを助けることができるだろうか」

五十三番は今まで人を殺してばかりの人生だった。だからその分

誰かを助けたくなくなったのかも知れない。

「大丈夫ですよ。困っている人を見つけた時、あなたがしたいと思つたことをすればいいんです。少なくとも俺はそうしてきました」

「そんなものなのか」

「そんなものです」

「そうか……」

俺の答えに満足したのか五十三番は黙ってしまった。

人助けをしたいと思う辺り、本来は優しい性格なのだろう。拾われた相手が悪かったただけだ。今まで間違いを犯し続けた分、きつと彼は人を助け続けるのだらう。まあ旅人である俺と、これから旅人になる彼がもう一度出会えるとは限らないからどうなるかは分からないが上手くいくことを願っておこう。

家の中から外を見る。ここに来てからどれくらい時間が経ったのか教えてくれるかのように空は暗くなっていた。

早くイレイナのところに行きたいが今は体を休めたい。ここで寝る許可は五十三番から貰つてるしもう寝ることにしよう。

「俺はもう寝ますけどあなたは？」

「ワタシはもう少しだけ起きていよう」

「そうですか。ならお先におやすみなさーい」

「ああ」

布団の中に入って目を瞑る。疲れは思っていたよりもあつたのかすぐに意識が遠のく。

……目を瞑る直前に五十三番が片手に何かを持って立ち上がったがあれは一体何だったんだろうか。まるで……薄い本のような……。



日が昇り始める前のまだ薄暗い時間。よく寝て疲れが取れた俺はここから出ることにした。そんな俺を五十三番は見送ってくれるようだった。

「あなたとの戦いで俺はまた一つ強くなった気がします。ありがとう

「ごぞいました」

「それを言うのはこちらの方だ。……元気でな」

初めて会った時よりも生気が宿った眼をしている彼は、表情が全然変わらないので気付きにくい。少しだけだが笑ってくれたような気がする。

「はいー」

俺は大きな声で返事をしてから彼に背を向け、歩き出した。

来た時同様に大きな壁を飛び越え、どこが国の出口か分からないが、道を真つ直ぐに進む。

開いている門が見えた。門番はいないので立ち止まることなく門をくぐって国の外に出た。

そこで俺の意識はなくなつた。

○

「……行つたか」

見たことのない服装の青年、カイが壁を飛び越えて行つた。

生きる理由も死ぬ理由も分からなくなつたワタシを……感情のなただの人間だったワタシを人間にしてくれた彼と、その土台を作ってくれていたヒナタには感謝してもしきれない。

「ようやく願いを叶えることができたようだな。まったく、お前みたいな人間は嫌だよ」

「誰だ」

ワタシに似た姿をした何者かが現れた。

「昨日教えただろ？悪魔だよ」

「……………いや、覚えがない」

「マジかよ。確かに返事はなかつたけど聞いてなかつたのか……」

昨日までのワタシは半ば茫然自失だったから目の前の悪魔とやらを見逃していたし聞き逃していたのかもしれない。

「はあ……まあいいか。もう一度言うがここはお前が見たあの看板の通り、願いを叶える国だ。私は悪魔だからな。夢の中ではあるが人間

の願いを叶えるなんて簡単なことさ」

「だがワタシの願いは叶えられていない」

あの看板を見てワタシに恨みがある者が出てきて殺し合いをした末にワタシは殺されるものだと思っていたが、実際はそうはならなかった。

「何を言ってるんだ？お前の願いは叶えられたぞ」

「どういうことだ。ワタシはこの通り五体満足だ。まだ生きている」

「勘違いしているようだがお前の願いは最初から『生きる気力を与えてくれる人に会いたい』だ」

「生きる気力を……」

元々ワタシに生きる気力なんてものはなかった。だけどヒナタと出会ってからは、彼女と話すことがワタシの生きる気力になっていたのだろう。

だけどヒナタを失ってからは生きる気力というものがなくなってしまい、どうすればいいのか分からなくなっていった。

自分のことはよく分からない。だから願いも勘違いしていたのだろうか。

そんなワタシだったがヒナタが遺してくれた言葉と、カイが教えてくれた生き方が生きる気力を与えてくれた。

『ありがとう……あなたは……生きて』

今になってヒナタの最期の言葉を思い出すことができた。この言葉を忘れてはいたが心の奥底に刻み込まれたからワタシの願いは死ぬためのものではなく生きるためのものになったのだ。

「——おい、聞いているか」

「ああ。聞いていなかった」

「なんだよそれ。はあ……。いいか、この国に滞在しているのは三日だけだ。それ以上居るならお前の魂をいたたく。出るのは自由だし出ないのも自由だ。今は二日目だからもう一日だけ居れるからどうするか考えておくんだな」

「そうか。ならもう出ることにしよう」

「お前、話は聞いているけど聞いてないな。……記念に何か一つ、ここで

手に入れた物を外に持ち出していいぞ。元から持っていたその杖は対象外だ」

ここで手に入れた物……カイの武器を魔法で作ったものがいくつもあったな。他にも彼と話をしている時に見せて貰った魔道具なるものを持つて行くのも一つの手だろう。

とはいえ、何を持ち出さかなど悩むことなく初めから決めていた。懐から出したそれを悪魔に見せつける。

「これだな」

「……………人間って理解できないな」

きつと悪魔にはこの素晴らしきは分からないだろうな。残念な種族だ。

「いや今までいろんな人間を見てきた私が言うがお前の頭の方が残念だからな」

何か言っている悪魔は無視してワタシはカイと同じように壁を乗り越えた。目指すは国の外だ。そうすればこの夢から覚めるらしい。

「それにしてもあいつは何者だったんだろな。私が招いたわけじゃないんだが。持っている道具を見るに未来から来た可能性も……。まあ私の手間が省けたしいつか」

・
○

「ということがあった」

「へえ。いい話ですね」

無事に願いを叶える国から出たワタシはカイと話した通り、誰かを助けるための旅をすることにした。ワタシに何ができるかはまだ分からないができることはやろうと決めていた。

……決めていたのだが、あてもなく彷徨っていたワタシは地図なんて持っていなかったのどこに国があるのか知らず、再び彷徨い続けて三日後。ようやくたどり着いた国でワタシは空腹で倒れてしまっ

た。

そんな情けないワタシを拾って食事を振舞ってくれたのが目の前の男だった。ワタシは彼に何か返してあげたかったが金目のものは持っておらず、渡せるようなものはなかったので自分の話をする事にした。

「そうだな。ワタシはその日のことを忘れることはないだろう」

「ところでその願いを叶える国からあなたは何を持ち出したんですか？」

「ふっ、気になるか。なら見せてやろう」

大切なものではあるが命の恩人に見せないわけにはいかないだろうとワタシは懐からそれを取り出して机の上に置いた。

「これは……その……」

「ああ、本だ」

「……表紙の時点で嫌な予感はしてましたが中に女性の裸の絵が描かれていますけど」

カイの話に出てきた彼の師匠が最初に持って来させたという本。ユーノ先生の本だ。

「そうだな」

「何故これを……？」

「似ていたからな。ワタシとヒナタに」

「はあ……」

本に描かれている黒い髪の男女。二人が愛し合っているのを見て胸が苦しくなった。

理由は分かる。きっとワタシはこの本のような人生を歩みたかった、羨望していたのだ。

だけどヒナタはもういない。もう叶えることはできない。だから胸が苦しくなったのだろう。

まあ絵も内容も良かったのでカイが寝た後に楽しませてはもらったが。これは肌身離さず持つておこう。

「趣味趣向は人それぞれですし何を持ち出すかはあなたの自由ですからね……。そういえば今気付きましたが名前を聞いてませんでした

ね」

「む……」

名前……名前か……。五十三番というのは組織にいた時に呼ばれていた大した意味のない番号であるし、そんな過去は捨てようと思っ
ているから二度と名乗るつもりはない。

それに、それにだ。カイと話をしているワタシはある日のヒナタとの会話を思い出した。

『あなた、五十三番って名前だけどちゃんとした名前ってないの？』

『ない。別に名前なんてどうでもいいことだ』

『悲しいこと言うわねー。それなら私が考えてあげるわ！そうね……
ごじゅうさんばん……ごじゅう……』

『別に考えなくてもいい』

彼女はワタシのことを思ってくれていたのだろう。その時のワタシは一人の人間としての意思がなかったからそんな彼女に対して失礼な態度を取っていた。

だから、そのことを謝ることができない代わりに、この名前を名乗ろうと思う。そして――

「ワタシの名前は――」

『決まったわ！あなたの名前は――』

「『ゴウザン』」

ワタシがカイの師匠なのだろうと、話を聞いて確信した。



カイが持っている道具の中にはワタシが知らない技術が使われたものがいくつかが存在していた。

最初は遠い国のものだからこちらの国に流れてこなかっただけなのかと思った。

銃と言われる武器を手に彼は言った。

『銃ですか？俺のは自分で作った特別製ですが銃はいろんな国で作られてますよ。危ないので普通の人が持つのを禁止している国なんかもありますけど。え？いえ、銃は大体の人が知ってると思いますけど……』

どうやら銃は一般的に知られているものだったらしい。引き金を引くだけで高速で弾が発射される武器なんてものを組織が知っていたら何としてでも手に入れるはずだ。だが誰一人として銃を持っていた者はいなかった。

他にも服や紙を見てみてもワタシが知っているものよりも上質なものであるように思えた。高級品なのかも考えたが、こちらもやはり普通なことらしい。

ワタシにとつて普通でないことが、カイにとつては普通だった。彼一人にとつての普通ではなく、皆にとつて普通だった。

未知の武器、未知の技術、そしてワタシと同じ名前の彼の師匠。きっとカイは未来から来たのだと考えてしまうのはおかしなことだろうか。……いや、以前のワタシからすればおかしなことだろう。

遠い未来、ワタシはカイの師匠になる。師匠はとてつもない強さだと彼は自慢げに話していた。

ならばワタシは強くならなければならない。ワタシを救ってくれた彼に恩返しをしたい。こちらはまだ叶えられる。

空腹で倒れてから三日経った。体調は万全。ここに長居する理由もないので旅立つことにした。

「まだ早朝だと言うのに、行ってしまわれるのですね」

「ああ。世話になったな、院長」

お人好しなこの孤児院の院長は自費で子どもたちを養っているらしい。

子どもたちは無愛想なワタシにも笑顔で接してくれた。育て方が良いのだろう。ワタシも彼のような人間に拾われていれば……なんて考えてしまった。

「また来て子どもたちにいろんな話を聞かせてあげてください。あ、でもあの本は見せないでくださいよ。教育に悪い」

「……………分かってる」

ワタシだっておいそれと誰かにこの本を見せるつもりはない。命の恩人である院長だからこそ見せたただけだ。

「それでは良い旅を」

「……………さらばだ」

別れの挨拶を告げ、ワタシの旅は始まった。

●
まずは更なる強さを手に入れるために、カイから教わった過重力で体を自分の重くして生活を送るようにした。

ついでに一人称もワタシから儂にし、話し方も変えた。『ワタシ』と名乗っていた五十三番はもういないのだと自分の意識を変えていくためである。

次に各国を巡って様々な相手と戦った。武術を使う者、拳法を使う者、小細工を使う者。いろんな戦い方を学ぶことができた。中には人を殺すことに特化したものもあつたが使うことは恐らくないだろう。それとカイが言っていた無形流むぎようりゅうとやらの使い手を名乗るようになった。名乗ると言っても大声で主張するようなものではなく、聞かれたら答えるといったものなので有名になることはなかったが知る人は知る流派になった。掟が『初動を悟らるな』と『力は己の為ならず』だけのあるない流派なので知名度は気にしない。

こんな流派に入りたいなんて言つて来た馬鹿者もいた。黒い髪と瞳をした少年だった。その少年を一目見た瞬間理解した。彼がカイの父親なのだと。

シンと名乗った少年は魔法を使うことはできなかったが、その代わり戦闘の才能はあつたので十分強くなることができた。この時初めて人にものを教える難しさを知った。感覚でやっていることを教えるのは大変だ。

戦いについてだけでなく、娯楽についても学んだ。本を読んだり子どもと一緒に遊んだり賭博を試したり。そういつたことをしてみ

ると、心に余裕ができた気がした。

女性が茶に誘ってみたいもしたがやはりと言うかヒナタを超える女性が現れることはなかった。あと何故か犯罪者が多い。

長い旅をしている中でついに、ついにユーノ先生を見つけることができた。まだ本を出し始めたばかりの新人だったが、その完成度は既に高かった。新作が出たら必ず買うようにしている。連絡先も手に入れた。

そしてシンから子どもが生まれたという手紙が届いた。名はカイ。同封してあった写真に写っていたのは父親譲りの黒い髪に、母親譲りの金の瞳をした男の子であった。儂はすぐに会いに行った。

「ほーらカイ。僕の師匠だよー」
「あー」

まだまともに喋ることができないカイを抱かせてもらった。腕の中に納まっている小さな命。布越しに伝わってくるその温かさは彼の心の温かさでもあるのだろうか。この温かさに儂は救われた。

「あら。なんだか臭うわね。もしかして大きい方かしら」
.....

何はともあれ、久しぶりの一方的な再開を果たした儂は暫く平和国ロベツタの近くの国を転々とするようにし、数年後のある日にシンから手紙が再び届いた。

内容はカイを弟子にしてやって欲しいということだった。未来の彼からこのことを聞いていた儂は、シンに承諾の手紙を送るとともに予め母親のエイラに伝えていたものを用意させた。そう、儂が長年懐に入れていたら読める部分がなくなってしまうたユーノ先生の本だ。今は木箱の中に大事に仕舞ってある。

シンが管理しているロベツタの近くの山を貸してもらい、約束の日を待った。

約束の日の早朝。山の入口で気配を消してカイが来るのを待った。そして少ししてから片手に包みを持った彼が現れた。その姿を見た

だけで何故か泣きそうになってしまった。歳なのだろうか。

そして山の中に入ろうとする彼の後ろに素早く移動し、意を決して声を掛けた。

「お主がカイか」

「はい、俺がカイです」

お久初めしまぶりして、儂の馬鹿の弟子の恩人。

願いが叶う三日間（三日目）

カイを置いて先に『願いを叶える国』に入った私でしたが、国の中は不思議なものでした。

どこかで見えたことがあるような建物が並んでおり、色合いや構造が様々な街の様子は私以外誰も歩いていない状況と合わさって不気味でもあります。

この状況をどう思うか遅れてやってくるはずのカイに聞こうと振り返ると、そこには門があるだけで彼の姿はありませんでした。

指輪に魔力を込めて彼の位置を探してみるも反応は無し。つまり彼が今どこにいるか私には分かりません。

「……むむ」

引き返して国の外に出てみるのも手ですが、私の後を追ってカイもこの国に入っているはずです。門なのかこの国全体なのかは今の段階では分かりませんが何か仕掛けがあるのかもしれないかもしれません。それが判明するまでは迂闊に外に出ない方が良い可能性があります。

門はいつでも調べるのでできるのですがまずは国の中を回ってみることにしましょう。

小さな発見も見逃さないようほうきに乗らず、長時間自分の足で歩き回っていましたが発見と言えるようなものは見つかりませんでした。足が棒になりそうです。こんな時背負ってくれそうな幼馴染はいないだなんて……。

ただ、やはりと言いますかこの国にある建物は全て私が訪れたことがある国のものだったのは間違いありません。時計郷ロストルフの時計台やミラロゼさんがいた王宮は分かりやすかったです。それが分かったところで何も解決しませんが。

「しけた顔をしてるな。せつかく私がこの街を作ってやったんだからもっと楽しみな」

ねじれた二本の角を頭に携えており、背中からはコウモリのそれと同じような羽が生えている女性が突然目の前に現れました。角と羽

以外は私そっくりです。

「その口ぶり。この国が何なのか全て知っているみたいですね」

「私の国だからな。なに、警戒しなくてもお前が聞きたいことは全部教えてやるよ」

「随分と話分かるじやないですか。それなら——」

そこで私は目の前の女性——小悪魔な私に様々な疑問を問いかけました。

カイは何処なのか、無事なのか、ここから出ることはできるのか、この国は何なのかなど、思いつく限りのことは聞きました。

「そうだな、一つずつ答えてやるよ。まずここは『あなたの願いを叶える国』だ。お前はお前の願いを、お前の幼馴染はお前の幼馴染の願いを叶えられる国をそれぞれ作ってやってるだけだ。だからお前らは同じ国にいるが別々の国にいると言っているといいだろう」

「ほう」

「それでお前の幼馴染が無事かどうかだが、まあ自殺願望でもない限りは無事だな」

彼にはそんなものありませんし大丈夫そうですね。この話が本当であればですが。

「幼馴染は幼馴染で楽しんでるさ。だからお前も楽しむと良い。だが三日が期限だ。それとこの国から出るには門を通ればいつでも外に出れるぞ」

「む……そうですか」

それなら少しぐらい楽しんでも良いのかもしれないね。ずっと歩き続けていたので小腹が空きましたね……おや、私の手にリングが握られていました。なるほど。

「まあ三日間だけならいいでしょう」

「早速楽しんでもらえたようで何よりだ。それにしても最初に聞くのが幼馴染の安否とはな」

「何が言いたいんですか」

「お前の頭の中を覗かせてもらったが、幼馴染との思い出は輝いているものが多かったぞ。どんだけ好きなんだか」

「うるさいですよ」

「あーはいはい。そんなわけだから、リラックスしていつてくれ給えよ」

小悪魔な私は、むつとなった私に対しそう言って翼を広げて空へと飛んで行ってしまいました。

「むむむ……」

私の願いとは何でしょう。門をくぐる時は『お金が欲しい』とか『美味しいパンが食べたい』とか考えていましたが、どこにもお金は落ちていませんし願えば出てくるパンもそこまで美味しいわけでもありません。

「まあ、いつか」

この国に滞在していれば分かることでしょうし今は願いについては置いて、今日泊まる宿に行きましょう。人はいないのでタダですよタダ。

直感で決めた宿屋に入り、これまた直感で入った部屋のベッドは二人分くらいの大きさのものでした。あ、これかあ……。

少し恥ずかしい記憶を思い出しましたが、広いベッドで快適に眠ることができました。睡眠に重要なのは適度な疲労です。

・
○

二日目になりました。今日も探索を続けることにします。と言っても残っているのはわざと後回しにしていた王宮くらいなんですけどね。

朝食を食べてから王宮へ足を進めました。一応今日も歩いて行きます。見たことのある景色を懐かしみながら進むというのも乙なものです。

「おや」

王宮の入口。私の記憶が正しければそこには木造の扉があった気がしますが今は何もないですね……いえ、よく見たら地面に灰が落ちていました。燃やされてますねこれ。一体誰が……？

「……………」

警戒しながら王宮の中に入りました。

広場には誰もいません。ならばこの奥。玉座の間に誰かがいるかもしれません。なんとなくですが。

不安や恐怖はありますが、意を決して扉を開きました。

私の予想通り扉の先には人がいました。しかも一人ではなく複数。さらに問題なのは――

「おや、新しい私ですか。あなたは安全な私ですか？それとも悪者の私？」

「……………」

閉めました。私がたくさんいました。いくら私が美しくても同一人物が何人もいれば地獄絵図です。迅速に立ち去るべきでしょうか。

「何勝手に逃げようとしてるんですか」

「あの一、少し頭が痛くなってしまったので帰っていいですか？」

「駄目です」

扉の中から出てきたメガネをかけた私に無理やり部屋の中に連れていかれてしまいました。

「皆さん。十七人目の私です」

「十七……」

つまり私以外の私がこの場には十六人いるんですか……。確かに同じ顔をした私がたくさんいますが恰好や雰囲気微妙に異なっていたりしますね。変なものもありますが。

「本来なら新しい私にほかの私を紹介したいところですが、さつきしたばかりで面倒なので後回しにします」

「ええ……」

「早速ですが十七人目の私にも呼び名をつけたいと思います。皆さん、この私にはどのような個性があると思いますか？」

「指輪をしていますね」「指輪以外私のコスプレをしていますね」「無個性に見えますが指輪が特徴的です」「指輪ですね」「無乳の指輪です」「指輪」「指輪で一す」「眼帯ではなく指輪をしていますね」「サヤさん」「消えてなくなりたい」「お外に出たくない」「嫌……」「ハラショー」「う

ぎゅー』『うあー』

指輪のことばかりですね……。何人か心配になる私もいますしどうなってるんでしょうか。

「なるほどなるほど。私も皆さんと同じことを思っておりまして。ということですから、十七番目の私は指輪の私という呼び名にしましうう」

「はあ」

そんな気はしてました。私も同じ呼び名をつけるでしょうし。

「その指輪はどうしたんですか？」

私の中でも一番無個性な、ほかの私よりも私に近い私が手を挙げて聞いてきました。……ややこしいですね。

「どうしたって、カイから貰いました」

「カイ？誰ですか？」

「一緒に旅をしている幼馴染ですよ。もしかしてそっちの私にはいないんですか？」

「私に幼馴染はいませんでしたがほかの私はどうですか？」

「主人公の私と同じくいませんよ」

「同じです」

どうやら私以外の私には幼馴染はいないようでした。カイがいないう旅つてのはちよつと想像できませんね。

それから私はメガネをかけた私……知的な私からほかの私の紹介をしてもらい、それが終わったら今度は質問攻めにありました。

私の幼馴染は男なのか女なのか、どんな人物なのか、出会いはどんな感じだったのか、お金は持っているのか、どうして私みたいな人間と一緒に旅をしているのかなどなど。皆さん滅茶苦茶知りたがっていました。

「はい。私への質問はここまでです。私からも聞きたいことがあります。皆さんは何故ここに集まっているんですか？」

そろそろ恥ずかしいところまで聞かれそうだったので話題を変えらることにしました。

「それはですね——」

私の質問に知的な私が代表で答えてくれました。

どうやらこの国には悪い私が一人数れ込んでいるみたいです。ほかの私に会うなりいきなり攻撃してくるようで、粗暴な私と呼んでいるのとか。命名の仕方がテキトーですねー。

ここにいる主人公の私とハイな私以外の十四人の私はこの王宮に集まって粗暴な私をどうするか話し合っていたそうです。

もしも戦闘になったら数の差で負けることはないでしょうが自身を傷付けるといっはのは確かに気が乗りません。代替案もすぐには思いつきませんしほかの私に丸投げしたいですね。

ほかの私もそうだったのか、知的な私は主人公の私に全て押し付けてました。これは策士。

まあ主人公の私も私なのでただでは転びません。なんと彼女はほかの私たちに街を探索するよう命令してきました。自分は玉座に座って待っているとか言うのですから文句も飛んでいました。私は……面倒ごとをカイに任せることがあるので何も言わないでおきます。

「だったら皆さんで意見を出してください——」

鬱憤の貯まった主人公の私が声を張り上げた時。玉座の間の扉が大きな音を立てながら吹っ飛ばされ、グールの私とゲル状の私が押しつぶされてしまいました。がどちらも普通ではないので無事でした。元々無事だったわけではないんですけどね。

「——ああ、姿を見かけないと思ったら、あなたたち、こんなところでたむろしていたんですね」

犯人は粗暴な私でした。切り裂き魔に髪を切られた時の長さの短い髪の不機嫌そうな私です。

粗暴な私は私たちのことが気に入らないらしく、攻撃を仕掛けてきました。

私たちも反撃を開始し、いろんな私が粗暴な私を捕らえようとしませんが、たった数分で返り討ちにされてしまいました。

残っているのは私と主人公の私でした。

「あなたたちは戦わないんですね。ほかの私がやられているというの

に、呑気に見物ですか」

薄情者、とでも言いたいかなのような彼女の眼はどこかで見たことがあります。忘れられるわけがありません。

主人公の私は粗暴な私の実力を測るために様子見に徹していたようですが私は違います。

「別に、私にはあなたと戦う資格がない。それだけのことです」

「私を馬鹿にしてるんですか？」

「違います」

「魔法をこんなことに使う私とは戦う価値がないと言いたいんですか？」

「違います」

「ならどうして！」

「きつと私も、あなたと同じ体験をしたからです」

彼女の眼は自分の弱さに、愚かさに絶望していたあの時の私と同じ目をしていました。

「私と同じ体験をした？あなたが？平然としているだけの余裕があるあなたが？ふざけないでくだ——」

「時計郷ロストルフ、二丁目殺人鬼、エステルさんの想い、セレナさんへの勘違い、二度目の殺人、無力な私。さて、ふざけていると本当に思いますか？」

「……………」

その時のことを思い出してしまったのか少しだけ顔色を悪くして押し黙ってしまいました。当たり前ですね。

「あなたの気持ちも分かります。ですが、私はもう乗り越えました」

「……………」

「私には、傷付いている時、傍にいてくれる人がいました。もしもその人がいなければ私もあなたのようになっていたかもしれない。自分一人の力で乗り越えたわけじゃない私が何を言っただって、何をしただって今のあなたの心に響くことはないでしょう。だから私にはあなたと戦う資格なんてありません」

「……………」

私を見る目が怖いですねー。まあそれも仕方のないことなんですよけど……。私とあなたでは境遇が違う。私の方が恵まれていた、と言っているようなものですからね。

「頭を空っぽにして戦えば少しは気が晴れますかね。それじゃあ主人公の私。あとは頼みましたよ。主人公らしく私を救ってみてください」

「私今まで蚊帳の外だったんですけど……。主人公交代しません？」
「嫌です」

結局のところ、面倒な私の相手を主人公の私に押し付けただけなんですけどね。

・
○

主人公の私と粗暴な私の実力は、見ていてあくびが出そうになるくらい互角でした。片方の私が魔法を放てば、それを避けたもう片方の私がお返しにと魔法を放っています。

粗暴な私は既に十五人の私を倒し、その上で主人公の私と互角に戦っているので実際は彼女の方が強いのもかもしれませんが、正直言って私の方が強いと思います。

まだ魔女見習いだった私は、カイに一度負けています。それが悔しかった私は次は負けないようにと旅に出てからも修行を続けてるのです。……カイと戦ったのはその時だけなのでまだ修行の成果を発揮できてないんですよね。

二人の私が戦っている間に私はほかの私の救助をすることにしましょうか。二人の戦いをしばらくぼうっと見ていたからほかの私の目が怖くなってる気がしますますが気のせいです。

「んー。先に回収すべきなのは気絶した私たちですかね」

まだ意識のある私は軒並み拘束されただけですし面白いのもう少しこのまま……。ではなく目立った外傷もないので後回しで大丈夫でしょう。あ、睨まれた。おー怖い怖い。

時間を掛けながら全員の私を救出した頃にはうるさかった戦闘音はすっかり聞こえなくなっていました。先ほどまではたまたに瓦礫や魔法が飛んできていましたが迷惑な美少女たちですね。

半壊した国の上をほうきに乗って漂っていると、瓦礫の上で仲良く並んで倒れ込んでいる二人の私を見つけました。

「お二人もお元気そうですね」

「そんなわけではないですよか……」

「……もう指一本も動かさなくらい力を使い果たしました。見て分からないんですか？」

おやおや。不思議なことを言うものですね。

「見てるから言ってるんです。だってあなたたち、すごく嬉しそうな顔をしていますよ」

無事に和解できたようで良かったです。私じゃこんな結果にはなっていないかったでしょうし、主人公の私に任せて正解でしたね。

……でもどうして指を絡めてるんでしょうか……。

○

二人を王宮まで運んだ私を待っていたのは、ほかの私を救出してるときに出会った新しい私たちを含めた皆でパーティーを開いてました。好きな料理にワインなど、皆が好きなものを好きなだけ食べたり飲んだりしています。

「指輪の私が食べているのは……普通のパンですか」

「確かに普通のパンですけど、これは私にとっては特別なパンなんですよ。主人公の私」

「なるほど。もしかして例の幼馴染ですか」

「そんなところですよ」

ほかの私が食べてきた豪華な料理をいくつか食べてみましたが、本物ではないとはいえやはり私にはカイが作ったパンが一番ですね。

ケーキ？あれは誕生日だけと決めているので願うことはしません。特別な日に食べる特別なケーキなので。

主人公の私と別れ、次は誰と話そうかと考えていると、背後から声を掛けられました。

「指輪の私」

「粗暴な……今は短髪の私でしたね。何か用ですか。予想はできてますけど」

「少しだけ聞きたいことが」

「いいですよ」

やはりでしたね。断る理由もないので彼女と話をすることにしましょう。

「ほかの私に聞きました。あなたは幼馴染と一緒に旅をしているようですが、その人があなたを立ち直らせたんですね」

「はい。彼のお陰で今の私があります」

「羨ましいですね。私はいつも一人なので」

「それは違います」

短髪の私はまだ勘違いをしているみたいでした。

「あなたは一人ではありません。あなたにはフラン先生やサヤさん、ほうきさんがいるじゃないですか」

「そう……ですね」

「私は旅人なのでフラン先生やサヤさんといつでも会えるわけではないので仕方ないですが、いつも一緒にいるほうきさんに相談しましたか?」

「……いえ」

「彼女なら喜んで相談に乗ってくれますよ」

「……そうですね。元の世界に戻ったらほうきさんと話してみることがあります。ありがとうございます」

その後、パンを食べながら傍観者に徹していた私たちとも話してみました。やはり彼女たちにも幼馴染はいなかったようです。グールの私やゲル状の私は喋れないので聞くことはできませんでしたがカイと一緒に旅をしているならそんなことにはなっていないと思うのでやはり彼はいないのでしょうか。

この場にいる私の中で唯一幼馴染がいて、一緒に旅をしている。な

んだかそれは――

「皆さん、遊ぶのもいいですけど――ひとつ、私の提案を聞いてはくれませんか」

思考は主人公の私の声によって中断されてしまいました。

何だと思ってみると、彼女の手には日記帳が握られています。

「皆さん、ローブのポケットに日記帳はありますか？」

主人公の私の提案は、同一人物でありながら別々の物語を歩んできた私たちの日記帳を交換して読み合おうということでした。

カイがない私はどんな旅をしているのか詳しく知りたかったので丁度良い機会です。

「……………」

ほかの私の日記帳を読み、私にはカイがいてくれて本当によかったなと思いました。

花の国のことや奴隷の少女のこと、死者の楽園のこと。彼がいなければ悲惨な結末を迎えていた人々がいたことを知りました。

一番ショックを受けたのは雪が降り積もる国の出来事についてでした。ミリーナさん、亡くなってしまっただけ……。

決して短くない時間を共に過ごした姉想いの獣人の少女が、ほかの私とは会うことなくこの世を去ってしまったのは、とても悲しいことです。

私が聞いた話では彼女の命を救ったのは謎の老人とのことでしたので、その人に感謝しなければいけませんね。

悲しい話はここまでにして、他の違いについて考えることにしましょう。

まず私が魔女見習いの時に戦ったのはカイでしたが、ほかの私はフラン先生だったようです。結果は完敗で、大泣きしたのはどこの私も同じなんです。

「むしろ魔女見習い時代とは言え私に勝てるその幼馴染も凄いです」

「それに何か事あるごとにいちやっついてませんか？」

「正直読んでて恥ずかしくなりました」

「こんな男よりサヤさんの方がいいです」

「たくさんお金持ってそうですね」

「よく私に愛想を尽かしませんね」

等々、言いたい放題言ってくれてます。嫉妬ですか？

全員分の日記を読み終えた後、誰かがこれ本にしたら面白くないかと提案しました。

反対する理由はなく、むしろ私も同じことを考えていたので賛成でした。ほかの私も同じだったようです。

本のタイトルの候補は私たちがいろいろ挙げていました。私も何か提案しようかと思いましたが、相応しいものは浮かびませんでした。

多数決の結果、主人公の私のものに決定しました。

『魔女の旅々』と。

・
○

三日目の朝。私を含めた十七人の私が門の前に並んで立っていました。主人公の私や知的な私、短髪の私の姿もありました。

「本当に来るんですか？」

「はい、小悪魔な私の言うことが本当ならですけど」

昨夜。寝ようとしていた私の前に小悪魔な私が現れ、今朝カイがここに来ることを教えてくれました。それなら入れ違いにならないように門の前で待つことにしたのです。

このことをほかの私に話したところ、彼のことを一目見たいという私がかくさんついてきました。

こんなに私がいるのならば、私はある提案をしたところ、この場にはいた全員が承諾してくれました。

「……誰か来ます」

門の外。薄く霧がかった空間からはこちらに向かって歩いてくる人影が見えました。

「ここは……ん？」

出てきたのは黒い髪に金色の瞳をしたスーツ姿の青年。カイです。

二日ぶりに会う彼に飛び出したくなる思いを抑えます。

「あなたがカイさんですね。話は指輪の私から聞いています。あ、私のことは知的なレイナとでもお呼びください」

「はあ……」

メガネをかけた私がカイに自己紹介をしていますが、事態を把握できているのか反応は鈍かったです。

「ここには十七人の私がいいます。この中からあなたと旅をしている指輪の私を見つけ出してみてください」

「うん……？」

「質問は一人につき一つです」

昨日からずっと考えていたことがありました。私がたくさんいる中で、カイは私のことを見つけてくれるのだろうか。

ほかの私にはなるべく私の真似をするように頼んでいます。試しに短髪の私にやってみてもらいましたが、誰一人として当たることはありませんでした。

指輪は外して主人公の私がついています。外すことに少し抵抗がありました。今大事なのは彼に見極めてもらうことでしたので我慢しました。あと主人公の私には指輪は嵌めないように言っておきました。

短髪の私は一目で違うとバレると思うかもしれませんが、私が裏を掻こうとしていると考えられる可能性もあるので並んでもらいました。

「私たちはここに長居する気はないのでお早めに」

「はいはい」

軽く返事をした彼は、主人公の私の前まで行きました。真つ先に彼女のところに行くことは指輪の位置を探ったんでしょね。

「はー」

……彼は右手を差し出しました。私と主人公の私は似ているので間違いやすいのは分かっていました。

主人公の私はその手を取ろうとして――

「指輪。返してもらえないかな」

口を開きました。どうやらカイは指輪を持っているのが私ではないのに気が付いたようでした。

「あ、はい」

彼女はあっさりと言指輪を渡しました。もう少し足掻いてもよかつたのではと思いますが、彼の目には有無を言わせない力強さがありました。

「騙されませんでしたか。そう、彼女は主人公の私と言われる私です。次はあなたが幼馴染だと思う私に指輪を渡してください。もちろん全員に質問してからでも構いませんよ」

「いや、大丈夫」

自信あり気に言った彼は静かに歩き出し、メガネをかけた私の前に立ちました。

「一緒に元の世界に帰ろう、イレイナ」

「……私は知的な私と呼ばれてる私です。ほら、メガネをかけてますよ。間違えてませんか？」

「間違えてない。俺が知っているイレイナは、君だけだ」

彼の答えは――

――正解です。

「どう……して……？」

「どうしてって、俺が君を間違えるわけないでしょ」

毎日一緒にいるんだから、とにこやかに笑いかけてくれました。

知的な私からメガネを借り、彼女の振りをして気付かれないようにしましたが彼には一目でバレてしまっていたみたいです。

「さあ、手を出して」

「……はい」

私が右手を差し出すと彼は中指に指輪を嵌めてくれました。

「よし、行こうか」

「はいー」

メガネを知的な私に返してからカイの右隣に立ち、ほかの私たちに向かって別れを告げました。

「皆さん、協力ありがとうございました」

少しだけ、自分の気持ちに素直になってみようと思います。

私は彼の右腕に抱き着きました。

「ちよ、イレイナ」

「さ、早く行きましょう」

「恥ずかしいんだけど……」

「いいからいいから」

驚く彼の腕を引つ張るように進みながら後ろを見ると、ポカンとした顔の私たちが並んでいました。それを見てクスリと笑います。

柄にもないことをしている自覚はあります。でも仕方ないじゃないですか。

ほかの私にはいない私だけの幼馴染が迎えに来てくれたのに加え、たくさんいる私の中からこの私を迷わず当ててくれた。それが嬉しくて嬉しくて、我慢ができないくらいとっても幸せなんですから。

・
○

目を開くと、視界の半分には青い空とそこを泳ぐ灰色の雲。もう半分には薄緑色の草原が映っていました。

「んん……んん？」

私が横になっているのは理解できましたが、何やら頭に少し硬くて温かみのある感触がしました。

「おはよう、イレイナ」

声が聞こえてきました。その聞きなれた声のする方——上を向きます。

「無事に目が覚めたようでよかったよ」

こちらを覗きこむ金色の瞳と目が合いました。ここでようやく私
が何を枕にしていたのか悟りました。

「膝……」

「ん？ああ、そうそう。俺の方が先に目を覚ましたんだ。隣に君がい
ただけけど何もせず地面に横たわらせておくわけにもいかないから
ね」

「そういうことでしたか」

「俺の膝は硬くて嫌でしょ？言ってくればすぐに退くよ」

「いえ。もう暫く、このまままでお願いします」

「りょーかい。君は硬い枕の方が好みなんだ」

変な勘違いをしていますね。私は何処でも寝られるので枕の硬さ
なんてどうでもいいんですが、それを指摘する気にはなりませんで
した。

「膝枕って女性が男性にするものだと思ってました」

「そうでもないさ。俺だって昔は父さんにしてもらったことがある
よ。もちろん母さんにもね」

両親のことを思い出していたのか、彼は嬉しそうに語っていま
した。

頭が覚醒してきたとはいえ、まだ記憶が曖昧なので日記を読んでき
ることにしましょう。

「……これ」

寝ながら器用に日記帳を取り出そうとローブを漁っていると、日記
帳と一緒に一冊の本が出てきました。

そこに書かれているタイトルと私の名前を見て、全てを思い出しま
した。

『『魔女の旅々』か。いいタイトルだね。これが君の持ち出した物かい
？』

「はい。あなたは何を持ち出したんですか？」

「俺はこれさ」

彼はそう言っ一枚の写真を見せてくれました。

平和国口ベツタや遠くの山と一緒に写っているのは綺麗な夕日。

高いところから撮られたであろうそれは、私にとっても彼にとっても忘れることができない光景です。

「懐かしいですね。これを撮ることがあなたの願いだったんですね。いつもカメラを持ち歩いているあなたらしい願いです」

「んー、そういうわけではないんだけどなあ。まあでもいい思い出にはなったよ」

「そうですか。……私は今からこれを読みますけどあなたも一緒にどうですか?」

本を持ち上げて尋ねます。

「なら俺も読ませてもらうかな。体はそのまま大丈夫だよ」

この本を読まれるのは少しだけ恥ずかしさがありますが、それでも彼にも読んで欲しいと思いました。

あの国に入る際、お金なんかではなく本当は『もしも彼がいなかったらどんな人生を歩んでいたのか知りたい』と願っていたのかもしれない。

幼馴染がいない私たちの話を聞き、改めて彼の大切さを認識しました。

心に深い傷を負った私でさえ一人で旅を続けていたのでほかの私には彼は必要ないのかもしれない。けれど、私には彼が必要で。彼がいないと駄目なんです。彼のことが好きなんです。昔から。

あまり素直になれない私ですが、あくどい手を使ってお金を稼ごうとする私ですが、そのせいで迷惑をかけてしまう私ですが、それでも一緒にいてくれる彼とこれからも一緒にいたい。この想いは私の中から消えることはないでしょう。

私たちはただの旅人です。様々な国を巡って、二人で感想を言い合ったり、何かがあれば協力していく関係です。この旅が終わるまではその関係は変わることはありません。

それでも、前よりも少しだけ、この想いを前面に出しているのかもしれない。いえ、出したいです。

「本を読む前に一つだけいいですか」

「なんだい?」

「今後もよろしくお願いします、カイ」
「こちらこそよろしく、イレイナ」
旅が終わった、その後も。



「この辺りで面白い国ってありますか？」
「そうだなあ。あると言えばある」
「ほう」

俺は今、次に向かう国を決めるために港で釣りをしていた男性に声を掛けていた。幸いなことに彼には心当たりがあるようだった。
「ほら、あの船を見な」

彼が指さしたのは丁度この港に泊まっていた豪華な船だった。その船の外見と同じく、出入りする人の格好も豪華なものばかりだった。きつと金持ちの為の船なのだろう。

「あの船はクラウスレインという国に行くための定期船なんだがな。人気なのか今売ってるチケットは早くても一年後なんだ」

「へー。ならその国に行くには一年待たなきゃ駄目なんですね」
「まあな。それに加えてチケットも高いと来たもんだ。興味はあるが行こうと思ったことはねえ。そんな国さ」
「なるほど」

確かにわざわざ高い金を払ってまで行こうとは思わないし一年待つつもりもない。ならこの国は除外かな。丁度船も出港したし。

「ありがとうございます」

「おうよ、ここは魚が美味いから食ってけよ」

「はいはい」

魚を使った料理か……いいな。今夜はイレイナを誘ってどこかの店で食べることにしようか。

「今のうちにそのことを伝えておくか。さて……と……？」

指輪に魔力を込めてイレイナの位置を探す。すると指輪の返して

きた反応が妙だった。

俺が今いるのは港。つまり陸の端の方というわけだ。海の反対側の陸地にはいろんな店が出ている。海鮮料理を出している店や、パンを売っている店がある。俺はそっちの方にイレイナがいると思ってた。だが指輪からの反応は違った。

イレイナが嵌めている指輪は現在、海の上にあるらしい。しかも今も海の上を移動中。

慌てて顔を上げて反応があつた方角を見ると、港から離れて小さくなつてしまったクラウドスレインという国への定期船が見えた。それ以外の船の姿は確認できなかつた。

「え……ええええええ!!」

つまり……つまりイレイナはあの船に乗っているというわけだ。彼女の方から指輪を通して呼びかけが無かつたので攫われたということはないだろうけど、今ここで離れ離れになったら次に会えるのは一年後だ。

どんな理由があつて俺を置いて行つたのかは知らないけど、このままではいけないのは明らかだつた。

「イレイナああああ!待ってええええ!!」

今回は何か問題ごとが起きて俺を巻き込まないようにするために一人で船に乗り込んでしまったのかもしれない。それだけの厄介ごとの可能性がある。

だからと言ってついて行かない理由にはならない。一緒に旅をするって約束したから、俺は彼女の後を追いかけて始めた。慌てていたから魔法で空中に足場を出すのを忘れて飛び出してしまった。

一人で問題を抱え込むより二人で分け合つた方が良い。二人だから助け合える。大切だから一緒に居たい。

俺とイレイナの旅は続いていく。この旅が終わつた後はどうなるのだろうか。あの国のような生活を送るのか、それとも違う未来が待ち受けるのか。それは誰にも分からない。その時になつて初めてわ

かることの方が多い。

だからそう、俺は頑張れば海の上を走ることができるのだから、今初めて知った。

「うおおおおおっ！」

俺たちがこれから向かう国、クラウドスレインでまたひと騒動あるのだから、それはまた別の話。

幼馴染のマネキンとひと時を

一日目

「喫茶店のテラス席に座っていて欲しい?」

朝。俺が泊っている部屋をイレイナが訪れ、変な頼みごとをしてきた。

「はい。丸一日私が指定する席にいてください。暇ですよね」

「暇ではあるけど……。どうして?」

「ちよつと頼まれごとをされたのであなたにも協力してもらおうかと」

喫茶店のテラス席に座っているだけで協力したことになるとは一体何だろうか。イレイナに詳しく聞こうとしたが、話すほどのことではないらしい。

本当にただ座っているだけでいいらしく、危険なこともないようなので断る理由はなかった。

「んー、分かった。じゃあどこに行けばいい?」

「ありがとうございます。喫茶店の位置は——」

俺はイレイナから喫茶店の位置を教えてもらった。

早速喫茶店に行こうと思ったが、一日中何もせずに座っているだけなのは暇なので何か持って行くことにしよう。

イレイナに準備したら向かうことを伝えると、彼女は「よろしくお願ひします」と言っつて部屋を出て行こうとしたが、途中で足を止めてこちらに振り返った。

「……変なことはしないでくださいね」

「?」

何故か彼女の顔はほんのりと赤かった気がする。



指定された喫茶店の指定された席。テラス席には先客がいた。

「本物……ではないか」

灰色の髪に瑠璃色の瞳。黒い三角帽子とローブを身に着けた、どこかの誰かそつくりのマネキンが座らされていた……………いや、なんか少し違うな…………。

理由は分からないが俺はこのイレイナの姿をしたマネキンの向かいの席に座ればいいらしい。可愛いマネキンに相席してもらえる新しい商売だろうか。需要はあると思う。

「…………ふむ」

マネキンとはいえイレイナが他の男性と一緒にお茶をしている姿は見たくないな。例え彼女に頼まれなくてもこの国にいる間は毎日ここに通うことになっていただろう。

いや、でも俺がここでマネキンとお茶を楽しんでいる間に本物のイレイナが他の男性とお茶をしていたとしたら…………うぐぐ…………。

「……………」
ネガティブな考えはしない方がいいのは分かっているが、ついそつちの方へ思考が行ってしまう。これ以上考えることは止めて今はイレイナを信じてここで一日を過ごそう。

鞆の中から紙とペンを取り出し、新しく作る魔道具について考え始めた。

「まずはどんな機能をつけようか…………うーん…………」

良い案というものはすぐに浮かぶものではない。時間はたっぷりあるわけだから焦らずゆっくり考えていこう。

「お待たせいたしました」

テラス席に来る前に注文しておいたサンドイッチと水が俺の前に置かれた。

「どうも…………ん？」

不思議なことに俺が注文した分に加え、コーヒーがマネキンの前に置かれた。

「これは？」

「毎日こうするよう頼まれております」

なるほど？よく分からないけどこのコーヒーをどうにかする必要はないのだろう。

さてさて、魔道具を考える続きをしよう。
なんかゲロ吐いている少女がいた。大丈夫だろうか。

二日目

宿に戻ってからイレイナにマネキンのことを聞いてみたが「見ての通りです。明日もよろしくお願いします」と言われただけだった。今日も喫茶店のテラス席に座って作業を行う。昨日である程度の機能は考え付いたので、今日はどんな形の魔道具にするかを決めていく。

マネキンの前には今日もコーヒーが置いてある。誰も飲まないまま片付けられてしまうと考えると勿体ない気がするが、だからといって俺は飲めないのです。どうすることもできない。いや、それでも飲むべきだろうか？

うーむ。マネキンの分のコーヒーをどうするかは置いていて、新しいのを頼んで飲めるかどうか挑戦してみるべきかもしれない。

「すみませーん。コーヒーください」

前回飲んだのは何年前だったっけかな。その時はあまりの苦さにちよつとしか飲めなかったのに夜眠れなかった思い出がある。

「お待たせいたしました」

お、来た来た。昔に比べて俺も大人になっているはずだ。それじゃあいただきます。

今日もゲロ吐いている人がいた。なんで今日も吐いているのだろうか。

三日目

「……眠い」

昨日は全然眠れなかった……。コーヒーも二口飲むだけで限界だった……。

寝ようと思ってベッドで横になっても眠れないというのは肉体的だけでなく精神的にも疲れてしまう。徹夜するのとはわけが違う。

とはいえここで居眠りをするつもりはない。時間は有効的に使お

う。

新しい魔道具については設計はほとんど固まり、後は作製していくだけなのでこの喫茶店でできることはない。

魔道具を作ることだけが時間を潰すということではないので、今日は別のことをしようと思う。

俺は紙とペンを取り出した。

『吾輩は怪盗ネコキャットである』……これでいこう」

何をしているかというと、俺が怪盗ネコキャットとして活動した時のことを小説にしようとしていた。

『吾輩が狙うは至高の宝。その姿を一目見ただけで心が奪われる。ああ、我が宝。今は奪われてしまっているが必ず取り戻す』……うーん……」

ちらりとイレイナのマネキンを見る。何物にも代えがたい宝、人、幼馴染。

「はあ……。流石にこれは恥ずかしい……」

誰に読まれても恥ずかしくない文章を考えるのは難しい。大体、怪盗ネコキャットなんてその場のノリでなっているだけなのだから、平常時に書こうとすると時間が掛かってしまう。

「……………」

ふとマネキンの頭を撫でてみる。本物ほどではないが触り心地の良い髪だ。

「おっと」

マネキンに手を叩かれてしまったが指輪の機能によって防がれた。はっはっは、甘い甘い。

「あだっ」

二撃目が頭に来た……しかもさつきよりも勢いよく叩かれた……。

マネキンには何か細工されたような形跡はなかったので、マネキンの腕は魔法で操られたと見るべきだろう。もしかしてどこかから見ている……？

またまた吐いている人がいた。いつも同じ人なんだけど……こわ……。

四日目

イレイナ曰く「マネキンの腕が動いた？あなたが変なことをしたんじゃないんですか？私は知りませんよ」とのことだった。確実に嘘である。

昨日は想定していたよりも書けなかったので今日も小説を書くことにしている。文章を考えるのは難しいけど結構楽しいかもしれない。

「……………」

『今回の舞台は海を越えたはるか遠くの島国。ここでは魔法が使えず、代わりに魔法のような道具に溢れていた』……書き始めはこんなものでいいだろう。

『国に入った途端、吾輩の指輪に込められていた魔力が消えてしまったのを感じた』……ん？そういえば……………」

マネキンの手を取って見てみる。

「指輪をしてない……………」

イレイナの姿をしたマネキンは彼女の姿をそっくりそのままに模したものだ、右手の中指に指輪をしていなかった。なんでこれだけ？

何か意味があるのかとマネキンの両手をじっくり触ったりしてみたが、特に何かあるというわけでもなかった——

「いててっー！」

マネキンの両手が俺の手を握りつぶそうとしてきた。何なんだ一体……………」

とりあえず小説の続きを書くか……………。明日やりたいこともできななさつさとキリの良いところまで終わらせてしまおう。

当然今日も吐いている人がいた。もう慣れた。

五日目

昨日、宿に戻った後イレイナに「マネキンとはいえ女の子の手をペ

タペタと触りすぎるのは良くないと思います」と言われてしまった。確かにその通りかもしれない。

今日はマネキンの指輪を作ろうと思う。俺たちがつけているような魔道具を作るわけではないので喫茶店でもできる作業だ。

ちなみに指輪をつけていない理由を聞いてみてもイレイナは何も答えてくれなかった。

魔法を使えば俺たちと同じ見た目をした指輪を一から作り出すこともできるが、今回は材料を買ってきているのでそれを魔法で加工することにした。

杖を取り出し、魔法で銀色の金属を指輪にしていく。材料があるので時間も魔力もそこまでかからない。

「おや？」
完成した指輪を眺めていると背後から視線を感じた。振り向いていると毎日吐いていた少女が俺を見ていた。

「……………」
いや、俺というよりは俺が作った指輪をじっと見つめていた。こういうアクセサリーに興味があるお年頃というやつだろうか。けどこの指輪はイレイナのマネキンのために作ったものだからどんなに欲しがってもあげるつもりはない。

「やっ」
少女の視線を無視し、マネキンの右手を取り、その中指に指輪を――
ってなんかすぐ抵抗してくるぞ！

今日も動くマネキンは空いていた左手で俺の腕を掴んで止めてくる。結構力を入れてもビクともしない。そんなに嫌だったのか!?!
なんとかマネキンの手から逃れ、この指輪をどうしようかと考える。

イレイナが毎日つけているのとはほぼ同じ指輪だというのに拒否されるとは思ってもいなかった。せつかく作ったのだから捨てるのももったいない。

ならまだこちらを見続けているあの少女にあげるとしよう。そうしよう。

「あの――」

声を掛けようとしたがマネキンに手を掴まれ、止められてしまう。今度は何だと思つて顔を向けるとマネキンは右手ではなく左手を差し出してきていた。もしかして右手ではなく左手に指輪をつけてほしかったのだろうか。

中指に指輪を……また止められた。親指……人差し指……小指……駄目か……。となると残りは薬指。

「……邪魔されない」

これまでの抵抗は何だったかのように大人しく指輪をつけられたマネキン。表情は変わったりはしていないがどこか満足げに見える。

「左手の薬指……か」

以前訪れた国で会つた、俺の願いから生み出されたイレイナも同じ指に指輪をつけていたのを思い出す。

俺とイレイナが結婚して一緒に暮らしているという夢。現実になつてくれればいいなど何度も思う。

だけど、俺たちは旅の最中だ。今の関係を崩さぬよう、この想いは胸に仕舞う。

コップに口をつける。

「……………」

冷たい水が気持ちを切り替えさせてくれる。

よし、今日の作業に取り掛かろう。

「あの……お客様……」

「はい？」

「閉店のお時間ですのでご退出お願いいたします」

水を飲んだ後、気持ちが切り替わるまですつとマネキンを見続けた。いたせいで外はもう暗くなっていた。

……冷たい水だけでは気持ちを切り替わらないのかもしれない。

そういえばいつの間にかこっちを見てた少女がいなくなっていた。用事があるのなら話しかけてくれればよかったのに……。

六日目

相も変わらず喫茶店にいる俺は今日は何をしようかと考えていた。イレイナに頼まれたからずつとこの店にいるのだが、まだこの国を観光しきれしていないので少しだけ時間が惜しいと思う。

ここには有名な観光スポットがあるわけではないし、マネキンとはいえイレイナと一緒にいれるだけで満足……いや、やはり彼女本人がいいな。

とはいえ本人じゃないからこそできることもある。俺は紙とペンを取り出してマネキンの写生を始める。

絵は母さんにいろいろ教えてもらったしそれなりには描ける。

「ただ目の前の光景を描くのではなく自分の想像も乗せて描く……だったかな」

母さんが絵を描くときによく言っていたことだ。

初めて聞いた時は意味がよく分からなかったが、同じ光景をカメラで撮った写真と母さんが描いた絵ではそれぞれ違った印象を受け、理解することができた。

ある程度描き進めてから現実のマネキンと絵の中のマネキンを比較してみる。どちらも同じ印象を受ける。

やはりというか、俺にはまだ母さんのような絵を描くことは難しいようだ。

初日も思ったけどやっぱりこれイレイナ本人とは少し違う部分があるな。あんまりじろじろ見るのは良くないけど胸が――

――背後に誰かの気配。

「おりゃあああー！」

物陰から勢いよく飛び出してきた少女が杖をマネキンに向けて魔法を放ってくる。

俺は立ち上がってマネキンを庇った。

魔法を受けた俺の手に手錠が嵌められる。鎖で指まで拘束するも

のだ。

「つてあああ！なんで邪魔するのよー！」

「なんでつて言われてもねえ……」

マネキンとは言えイレイナの姿をしているんだから危害を加えられるのを黙って見過ごすわけにはいかない。

「まだ邪魔するようなら、例え手錠を嵌められて抵抗できないからつて容赦はしないわよー！」

「……………」

指に力を込めて鎖を壊す。腕に力を込めて手錠を壊す。思っていたより呆気なく壊せた。

「ひえっ……………ななな何よそそそのくらいでビビるわけないじゃないー！」

口は威勢のいい少女であったがその足はがくがくと震えていた。

「それで……………容赦しない……………だったかな？」

「あああああつー！」

威圧するように一步前に出た俺に対し、少女は叫びながら魔力の塊……………と呼ぶには練度が足りない青白い光を放ってきた。

俺はその青白い光を掴み……………そのまま握り潰した。

「え……………ええ……………」

勝てない相手であることを悟ったのか少女はへなへなと座り込んでしまった。戦っていたわけではないが決着はついた。

だが、まだやるべきことは残っている。

「どうしてイレイナを襲ったのか聞かせてもらおうか」

「……………ふんっ！あんたなんかに教えるわけないでしょー！」

「……………」

なら気は進まないけど無理やりにも吐いてもらうしかないか……………。

「そこまです」

「……………イレイナ」

俺が求めているものとは別のものを今にも吐きそうなほど顔を青ざめている少女を脅すために銃を取り出そうとしたところにマネキ

ンでない、本物のイレイナが現れた。

「私からの説明は後にします。今はここに書いてある場所へ行ってください」

「この子は君を狙ってきた。一緒にさせるわけにはいかない」
彼女が何か書かれている紙を渡そうとしてくるが、俺はそれを無視する。

「私が彼女に後れを取るとでも？」

「そうは言っていない！他にも仲間がいるかもしれないじゃないか！」

「落ち着いてください。私を狙っているのは彼女一人です。さっさとこのメモを受け取ってください」

「……………分かった。だけど少しでも危なかったら俺を呼ぶんだ」

「過保護ですか」

渋々イレイナから紙を受け取って喫茶店を後にした。



「それでここに来たというわけか」

「はい」

イレイナから渡された紙は、俺が今いるコーヒーショップまでの道のりと何故かおすすめのパン屋が書かれた地図だった。

パン屋を無視して入ったコーヒーショップの中には店主である男性しかおらず、イレイナからは何も聞かされていなかった俺は店主に事情を説明した。

「君と一緒に旅をしている魔女を襲おうとした子だが、あの子に暗殺するように指示したのは俺——」

——言い切る前に銃を向けた。

「まあそう焦らないで欲しい」

「……………」

「それに、ここで相打ちとなっても誰も幸せにはならないはずだ」

銃を向けたのは俺だけではなかった。

俺が銃を取り出す方が早かった。だが相手に向けたのは全くの同

時だったと言っている。

「あなたが引き金を引くよりも前に俺が撃てばいいだけです」

「なら俺は死ぬ前に君を殺す」

「できないことを言うものではないですよ」

「それは君に言えることではないかな？」

「……何の話ですかね」

やれやれと言った風に店主は肩をすくめる。

「君には無理だ。人を殺す覚悟が出来ていない。昔、俺が殺されそうになった時に比べたら微塵も恐怖なんて感じないな」

「……………」

「覚悟のできていない者が人を殺すとどうなると知っているかい？」

「……………いえ」

「全員がそうとは言わないが、心が壊れる。殺した瞬間の感触や相手の顔、言葉なんかは頭から離れなくなる。四六時中その現象に悩まされ、最終的には罪の意識に押しつぶされてしまう」

「俺がそうなるだけでも？」

旅をしている以上、危険な目に遭うことは承知の上だ。自分たちの身を守るために人を殺めることになることだってあるかもしれない。

そうなった場合俺の心がどうなるかは自分自身でも分からない。考えたくもない。

「可能性の話だよ。娘に年が近い子に人殺しになって欲しくはない」

「それが相打ちになっても俺を殺そうとした人の台詞ですか？」

「銃を突き付けられればそうもなる。万が一娘に危害を加えられても困るからな。それに……………」

「何ですか？」

「いや、何でもない。一先ず今回のことは誤解だったことを理解して欲しい」

「ここまで嘘はついていない……………と思う。信じてもいいかもしれない。」

ようやく銃を下ろした俺は店主に促されるままカウンターの席に座る。

「あの魔女さんに娘のことを任せてある。詳しい話はこれを飲みながらにしよう」

店主がコーヒーをカウンターに置いた。たった今淹れたばかりなのだろう、湯気が立っていきつと美味しいのだろう。

「俺コーヒー飲めません」

「……まだまだ子どもだな」

コーヒーがミルクに取り換えられた。コップを置く力が強かった気がする。ドンツ！とかいつてた。だって苦いの苦手なんだもん。

美味しいミルクを飲みながら店主の話を聞くと、どうやら店主の娘が父親と同じようにスパイの仕事を手伝うようになったが素質が無く、汚れ仕事もやるこの仕事に関わって欲しくないとのこと。

だから追い出したいのだが彼女が納得できるような理由、つまり依頼の失敗が必要だったわけだ。

そこで店主が思いついたのが架空の依頼だった。過去の依頼を使って存在しない人物を作り、その人物を暗殺する依頼を作り上げた。

その人物の外見的特徴がイレイナとそっくりだったのが今回の事件が起きてしまった原因ということらしい。

依頼が書かれたファイルを見せて貰ったが、外見と魔女であること以外、特に経歴の中にある非道の数々はイレイナとは似ても似つかなかった。……いや、俺が止めなかったらやっていたこともあるかもしれない。暗殺依頼を出されるかもと考えると怖いな。

ともかく、今回イレイナが狙われたのは本当に偶然の事故だったことが分かった。

何故この容姿や経歴の魔女をターゲットにしたのかも聞いてみたが、その魔女の暗殺は店主が失敗した依頼の中の一つであり、その時に惚れて今まで忘れることができなかつたらしい。イレイナにはあんまり近付いて欲しくないな……。

「実はもう一つ架空の依頼があつてな。こっちにしようか悩んだんだ」

そう言つて見せて貰ったファイルの中には、黒い髪 of 男性と金の髪

の女性の暗殺依頼が書かれていた。依頼者はどこかの貴族であるようだ。今はもう存在しないのだとか。

この二人は才能にあふれていたらしく、将来を期待されていたのだが、実家に嫌気がさしたのか駆け落ちした。他の家に取り込まれると脅威になるからそうなる前に始末して欲しいというものだ。

「これが俺の二回目の敗北でな。男性の方は君とは比べものにならないくらいの殺気と覚悟を見せてきたんだ。一度敗北を知った俺は強くなっただと思っていたんだが、この時は少し漏らしてしまった」

真顔でそんなこと言われてもどう反応したらいいか困る。

先ほどの魔女の依頼もそうだったが一つ気になる点があった。

「さっきの依頼もそうですけど、この人たちの名前って何ですか？」

どちらの依頼書にも外見的特徴や経歴は書いてあったが、ターゲットとなる人物の名前だけは書かれていなかった。ターゲットの名前が分からなければ、似た外見の人でも本当に目的の人物か分からないのだから店主が依頼を受けた時は名前も書かれていたはずだ。

「俺はターゲットだった者のはいいえ個人情報漏らしたりはしない。他のものは漏らしてもな」

「……………」

汚い話をしないで欲しい。

「説明は以上だ。何か質問はあるか？」

「いえ。ミルクごちそうさまでした。」

「……………一つ聞きたい」

俺は椅子から立ち上がって店を出ようと扉に手を掛けたところで店主が呼び止めてきた。

「何でしょうか」

「人を殺した、またはこれから殺すだろうなって者を見たことはあるか？」

「まあ、はい」

「どんな人物だった？」

「そうですね……………」

「これまでのことを振り返る。旅をして、たくさんの人に出会った。」

身分を超えて愛を育んだ一国の王女。

魔法を使えない人間は人間として扱われない国で、人間と認められようとしていた人たち。

昔、親のいない子どもたちを暮らしていた老人。

犯罪組織に拾われ、善悪の分からないまま大人になり、初めて親しくしてくれた少女から心を貰った男性。

生まれてくる場所が違ったなら、何もなければ幸せになれたであろう彼らは全員、深い絶望を心に抱えていた。

そんな彼らを言葉にするなら――

「誰かを愛し、誰かに愛された人たち……でしたね」

「俺はどうなんだろうな」

「言われるまでもなくあなたも入ってますよ」

「……そうか」

話が終わったことを感じたので、今度こそ店の外に出た。扉が閉まる直前、「ありがとう」という感謝の言葉が聞こえてきた気がした。

○

ユーリイさんを送り出した後、いつもの喫茶店のテラス席でコーヒーを飲んでいると、向かい側に席にカイが座りました。マネキンは別の席に移動させておきました。

「協力ありがとうございました。あなたのお陰でユーリイさんに気付かれずに済みました」

彼女のポンコツぶりを見るに、私のマネキンだけでも問題なかったかもしれないが、成功率は高い方がいいでしょう。

「……………」

目の前で水を飲む彼の顔は不満が隠せていませんでした。

今朝は私の横から離れようとせず、組織から追い出されたユーリイさんと話すのに彼がいると少々ややこしくなってしまうので遠くにいるように言ったのがそんなに気に障ったのでしょうか。

いえ、本当の理由は分かっています。

「今回のこと、あなたに何も説明していなかったことを謝罪するつもりはないですよ」

「それは……」

「別にあなたのことを信頼していないというわけではありません。必要がなかっただけです。ユーレイさんにスパイとしての実力があつたら相談していたかもしれませんが」

彼女の父親から話は聞いていたので何も心配していませんでした。念のためマネキンを身代わりとして用意して喫茶店に配置しようとしたのですが重要なことに気が付いてしまいました。

『マネキンとはいえ私がカイ以外の男性と一日中一緒の席に座ることになってしまう』

嫌です。私が見ている前でそんなことは受け入れられるものではありません。

なので彼に一日中一緒にいてもらうようお願いしました。

そして私はその様子を監視するユーレイさんを監視していましたが、彼が髪や手を触った時はつつい魔法でマネキンの腕を操ってしまいました。

「さて、この国でやることは終わりましたし出発するとしましょう」

「はあ……。分かったよ。ところであのマネキン、何で指輪だけしてなかったんだい？他は完璧だったのに」

さて、何のことでしょうね？

○（余談）

「そういえば絵を描いていましたよね？見せてください」

「はいどうぞ」

カイから手渡された絵を見ます。そこに描かれていたのは誰か？

そう、私（のマネキン）です。

「ふむふむ……」

あのマネキンには指輪の他に一つ仕掛けをしていましたが……なるほど、こつちにしましたか。

「いやー、カイ。あなたも男の子。分かってますよ全部。私には」
実はこのマネキンを作るときに少しだけ、すこーしだけ胸を大きくしました。

マネキンの通りの大きさに描いたら揶揄う。本物の私の大きさに描いたらその時はその時で「私の胸を思い出しながら描くなんて変態さんですねー」なんて言っただけ。そんな悪戯が閃いてしまいました。まさに悪魔的発想……！魔女ですが。

ふふふ、彼の狼狽える姿が目には浮かびま——

「イレイナ。大丈夫、大丈夫だから」
「えっ」

何故か優しげな眼をしたカイが両肩を掴んできました。まるで不安がっている子どもを励ますように。

「俺は大きさが魅力じゃないって分かっているから。自分を偽る必要なんてない」

「いえ、そういうつもりだったわけでは——」

「いいんだイレイナ！何も言わなくても……そう……大丈夫だから……」

何故かカイが泣きそうになってるんですけど。勘違いしてますし話も聞いてくれません。

却って私が惨めな雰囲気になっていることに納得がいきません。これも全部『虚構の魔女』のせいですね許すまじ。